

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第32冊

鹿田遺跡 10

— 第9・11次調査 —

(岡山大学病院病棟新営に伴う発掘調査)

2017年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

鹿田遺跡は岡山大学鹿田キャンパスに広がる遺跡です。第1次調査は1983（昭和58）年度に始まり、その後、34年間に発掘調査は第26次調査まで進んでいます。現在は、ヘリポートを備えた大学病院の病棟をはじめ機能的で美しい建物が次々と整備されていますが、その地下には、弥生時代に始まる集落や古代～中世における藤原摂関家殿下渡領である「鹿田庄」での人びとの営みが眠っています。

本報告書は、岡山大学病院の病棟の建て替えに伴い、1998（平成10）～1990（平成11）年に実施した第9次調査と第11次調査を合わせた発掘調査報告書です。調査面積が4,000㎡を超えた本調査は、報告書刊行までに17年間という長い時間を経ることとなりましたが、このたび、多くの方々のご支援のもとに発掘調査報告書を刊行することができました。

ここでは、鹿田遺跡において二つの新知見を報告しています。一つは弥生時代～古墳時代の集落に伴う水田の存在です。本遺跡が立地する岡山平野では岡山市百間川遺跡群での水田調査が広く知られていますが、それと共通する姿が、当時、海に最も近かった本遺跡でも確認することができました。二つ目は、これまで本遺跡において資料が乏しかった中世後半の屋敷地の様子がわかってきたことです。古代に始まった荘園が、近世に向けてその村落景観を変貌させていく姿を復元する手がかりとなるでしょう。また、中世の石鏝に関する考察からは、同遺跡の地をとりまく当時の盛んな経済活動が示されています。

本報告書刊行に際して、当時の発掘調査を担った方々、そして様々な形で協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げますと同時に、本書が様々な研究の一助になれば幸いです。

今後とも残された報告書刊行に向けて責務を果たして参りたいと存じます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長） 宮田 裕州
副センター長 山本 悦世

目 次

第1章 歴史的・地理的環境 (山本悦世)	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡.....	1
第2節 鹿田遺跡.....	3
1. 構内座標の設定.....	3
2. 遺跡の概要.....	3
第2章 調査に至る経緯と概要 (山本)	9
第1節 調査の経緯と経過.....	9
1. 調査の経緯.....	9
2. 調査体制.....	9
3. 調査経過.....	11
第2節 調査の概要.....	13
第3章 調査の記録	16
第1節 調査地点と層序..... (山本)	16
1. 調査地点の位置.....	16
2. 層序.....	17
3. 地形復元.....	21
第2節 弥生時代～飛鳥時代の遺構・遺物..... (山本)	23
1. 弥生時代後期～古墳時代初頭.....	23
a. 土坑.....	23
b. 水田畦畔と溝.....	25
c. 円形高まりと円形溝群.....	41
2. 古墳時代～飛鳥時代.....	44
a. 水田畦畔.....	44
第3節 中世前半の遺構・遺物..... (山本)	46
1. 平安時代後期.....	46
a. 井戸.....	46
b. 土坑.....	51
c. 池状遺構.....	52
d. 溝.....	60
2. 平安時代末～鎌倉時代.....	74
a. 井戸.....	76
b. 土坑.....	91
c. 墓.....	110
d. 溝.....	115
e. ビット群.....	134
第4節 中世後半の遺構・遺物.....	135
a. 井戸..... (南健太郎・山本)	139
b. 土坑..... (南)	148
c. 溝..... (岩崎志保・南)	149

第5節 近世の遺構・遺物	168
a. 土坑	(南) 168
b. 墓	(南) 176
c. 溝	(岩崎) 177
第6節 包含層ほかの出土遺物	(岩崎・山本) 182
第4章 自然科学的分析	
1. 鹿田遺跡第9次調査墓1出土人骨同定	(高塚浩史) 186
2. 鹿田遺跡第9・11次調査出土木製品樹種同定報告	(能城修一) 188
3. 鹿田遺跡第9・11次調査出土木簡樹種同定報告(池状遺構・溝59)	(財元興寺文化財研究所) 196
4. 鹿田遺跡第9次調査溝45出土編組製品樹種同定報告	(株吉田生物研究所) 198
5. 鹿田遺跡第9次調査墓1出土漆塗り輪分析	(財元興寺文化財研究所) 200
6. 鹿田遺跡第9次調査墓2出土漆製品塗膜構造分析	(株吉田生物研究所) 202
7. 鹿田遺跡出土石鍋の分析	(白石 純) 203
8. 鹿田遺跡第9・11次調査出土種子と種子圧痕	(山口雄治・沖 陽子) 205
9. 鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体	(江川達也) 213
第5章 考察	
1. 中世における石鍋の流通構造-岡山県下における検討から-	(南) 217
2. 鹿田遺跡における弥生時代~古墳時代初頭の水田関連遺構	(山本) 227
3. 鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造	(山本・岩崎) 231
4. 鹿田遺跡第11次調査土坑8の中世土器について	(山本・大久保雅子) 240
第6章 結語	(山本) 245
遺構一覧表	246
写真図版	

挿 図 目 次

第1章	図9 土層断面柱状図の位置	17	
図1 周辺遺跡分布図	2	図10 基本土層柱状図	18
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図11 調査区土層写真	19
第2章	図12 <6~4層>段階の地形復元図	22	
図3 調査開始状況	12	図13 弥生時代~古墳時代初頭遺構全体図	24
図4 調査関連風景	13	図14 土坑1	25
図5 弥生~古墳時代初頭の遺構全体図	14	図15 土坑2	25
図6 平安時代後期の遺構全体図	14	図16 土坑3	25
図7 平安時代末~江戸時代の遺構全体図	14	図17 土坑4	25
第3章	図18 <8層>出土遺物	26	
図8 調査地点位置図	16	図19 弥生時代~古墳時代初頭遺構全体図-東半-	27

図20	畦畔1～3と溝1・2断面	29	図65	溝32出土遺物2	69
図21	畦畔4断面	30	図66	溝32出土遺物3	70
図22	畦畔5断面	30	図67	溝32出土遺物4	71
図23	溝1断面	30	図68	溝33断面	71
図24	溝3 a断面	31	図69	溝34～36断面	72
図25	弥生時代～古墳時代初頭遺構全体図-西半-	32	図70	溝37断面	72
図26	畦畔6～10・溝4～11断面	33	図71	小溝群2-④出土遺物	73
図27	畦畔6 b上の遺物出土状況	34	図72	小溝群4-⑤～⑧	74
図28	畦畔6 b出土遺物	34	図73	平安時代末～鎌倉時代遺構全体図	75
図29	畦畔8～9・11、円形高まり2、溝12～16	37	図74	平安時代末～鎌倉時代遺構全体図-東半-	76
図30	畦畔8 b・c・9 aと溝12断面	38	図75	平安時代末～鎌倉時代遺構全体図-西半-	77
図31	畦畔11と溝13・14断面	38	図76	井戸2・出土遺物	78
図32	溝15断面	40	図77	井戸3	80
図33	溝16断面	40	図78	井戸3出土遺物1-第11次調査-	81
図34	畦畔12と溝17断面	40	図79	井戸3出土遺物2-第25次調査-	82
図35	溝18断面	41	図80	井戸4・出土遺物	84
図36	円形高まり1と溝19	42	図81	井戸5	85
図37	円形溝群・出土遺物	43	図82	井戸6・出土遺物	86
図38	円形高まり2断面	43	図83	井戸7	88
図39	古墳～飛鳥時代遺構全体図	44	図84	井戸7出土遺物	89
図40	畦畔13～16断面	45	図85	井戸8・出土遺物	90
図41	平安時代後期遺構全体図	47	図86	土坑8	92
図42	平安時代後期遺構全体図-東半・西端-	48	図87	土坑8遺物出土状況	93
図43	平安時代後期遺構全体図-西半-	49	図88	土坑8出土遺物1	94
図44	井戸1・出土遺物	50	図89	土坑8出土遺物2	95
図45	土坑5	51	図90	土坑8出土遺物3	96
図46	土坑6	51	図91	土坑8出土遺物4	97
図47	土坑7	52	図92	土坑8出土遺物5	98
図48	池状遺構	53	図93	土坑8出土遺物6	99
図49	池状遺構断面	54	図94	土坑8出土遺物7	100
図50	池状遺構出土遺物1-下層-	55	図95	土坑8出土遺物8	101
図51	池状遺構出土遺物2	56	図96	土坑8出土遺物9	102
図52	池状遺構出土遺物3	57	図97	土坑8出土遺物10	104
図53	池状遺構出土遺物4	58	図98	土坑9・出土遺物	106
図54	池状遺構出土遺物5	59	図99	土坑10	106
図55	溝22・23断面	60	図100	土坑11	107
図56	溝24断面	61	図101	土坑12	108
図57	溝24出土遺物1	62	図102	土坑13	108
図58	溝24出土遺物2	63	図103	土坑14・出土遺物	109
図59	溝25断面・出土遺物	64	図104	土坑15	109
図60	溝27断面	64	図105	墓1	111
図61	溝28断面・出土遺物	65	図106	墓1木材の組合せと鉄器出土状況	112
図62	溝29断面	65	図107	墓1木棺下部の棺台材痕跡と鉄釘出土状況	112
図63	溝32	67	図108	墓1出土遺物1	113
図64	溝32出土遺物1	68	図109	墓1出土遺物2	114

3		
図1	鹿田遺跡第9・11次調査出土木簡の顕微鏡写真①	197
4		
図1	サンプリング箇所	198
図2	顕微鏡写真	199
5		
図1	漆塗り椀塗膜断面	201
図2	漆塗り椀赤色部分のXRFスペクトル	201
6		
図1	塗膜断面	202
図2	漆製品とり上げ状況	202
7		
図1	鹿田遺跡出土石鍋のX線回折図	204
8		
図1	出土種子1	207
図2	出土種子2	208
図3	土器瓦痕写真1	209
図4	土器瓦痕写真2	210
図5	土器瓦痕写真3	211
図6	土器瓦痕写真4	212
9		
図1	イエネコ・イヌ・イヌ属・ウシ	214
図2	ウマ・ニホンジカ	214
図3	ウシ(下顎骨R位)	214
第5章		
1		
図1	中世の石鍋製作所・主な出土遺跡と 鹿田遺跡の位置	217
図2	岡山県下における石鍋・滑石製品(中世)の 出土遺跡	218
図3	把手付石鍋のミニチュア品	219
図4	岡山県下の石鍋・滑石製品(中世)① (鹿田遺跡、百間川原尾島遺跡、津寺遺跡)	220
図5	岡山県下の石鍋・滑石製品(中世)② (中島遺跡・久田堀ノ内遺跡)	221
図6	非滑石製の可能性のある石鍋	221
図7	石鍋の破断面 (鹿田遺跡第9・11次:図4-16)	222
図8	擦切の痕跡(左:鹿田遺跡第5次 図4-12、 右:鹿田遺跡第9・11次 図4-15)	222
図9	罫の除去と擦切状の加工痕	223
図10	外面の煤付着状況	223
2		
図1	弥生時代後期～古墳時代初期の水田関連遺構	228
3		
図1	平安時代後期の遺構配置	232
図2	鹿田遺跡南部における平安時代後期の 屋敷地域	232
図3	平安時代末～鎌倉時代の遺構配置	235
図4	室町時代の遺構配置	236
図5	鹿田遺跡南東部における鎌倉～室町時代の 区画溝配置概念図	237
4		
図1	吉備系土師器椀の口径・器高分布 -鹿田遺跡第9・11次調査地点-	240
図2	吉備系土師器椀の高台程度数分布率 -鹿田遺跡第9・11次調査地点-	240
図3	土師器杯・皿の法量分布 -鹿田遺跡第9・11次調査地点-	241
図4	鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4 出土中世土器法量分布	242
図5	鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4の 吉備系土師器椀法量比較	242
図6	鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4の 土師器杯・皿法量比較	243

表 目 次

第3章		
表1	調査区断面における各層位レベル一覧	19
第4章		
2		
表1	樹種一覧	193
表2	岡山大学構内(鹿田遺跡)第9・11次調査 出土木製品類の樹種	195
4		
表1	岡山県鹿田遺跡出土木製品樹種同定表	198
5		
表1	塗膜断面および顔料分析の結果	200
6		
表1	調査資料	202
表2	漆器の断面観察結果表	202

7		
表1	石鍋の分析結果	204
8		
表1	検出種子一覧	206

表2	種子任意同定結果一覧	208
9		
表1	鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体種名表	214
表2	鹿田第9・11次調査出土動物遺存体属性表	215

図版目次

図版1	弥生～古墳時代遺構全景—東半—
図版2	弥生～古墳時代遺構全景—西半—
図版3	弥生～古墳時代土坑・溝
図版4	弥生～古墳時代畦畔関連遺構(1)
図版5	弥生～古墳時代畦畔関連遺構(2)
図版6	中世前半遺構全景—西部—・井戸(1)
図版7	中世前半の土坑・池状遺構(1)
図版8	中世前半の池状遺構(2)
図版9	中世前半の溝
図版10	中世前半の井戸(2)
図版11	中世前半の井戸(3)
図版12	中世前半の井戸(4)
図版13	中世前半の井戸(5)
図版14	中世前半の井戸(6)
図版15	中世前半の井戸(7)
図版16	中世前半の墓1(1)—木棺痕跡と人骨—
図版17	中世前半の墓1(2)
図版18	中世前半の墓1(3)—遺物出土状況1—
図版19	中世前半の墓1(4)—遺物出土状況2—
図版20	中世前半の墓1(5)—遺物出土状況3—
図版21	中世前半の墓1(6)—完掘状況—
図版22	中世前半の墓2・土坑8(1)
図版23	中世前半の土坑8(2)
図版24	中世前半の土坑・溝(1)

図版25	中世前半の溝(2)
図版26	中世前半の溝(3)
図版27	中世前半の溝(4)
図版28	中世前半の溝(5)
図版29	中世前半の溝(6)
図版30	中世後半の井戸(1)
図版31	中世後半の井戸(2)
図版32	中世後半の井戸(3)
図版33	中世後半の井戸(4)・溝(1)
図版34	中世後半の溝(2)
図版35	近世の土坑(1)
図版36	近世の土坑(2)・溝
図版37	中世前半の井戸出土遺物
図版38	中世前半の土坑8出土遺物(1)
図版39	中世前半の土坑8(2)・池状遺構出土遺物
図版40	中世前半の墓1出土遺物
図版41	中世前半の溝出土遺物
図版42	中世～近世の陶磁器
図版43	中世前半の墨書土器
図版44	中世～近世の木器
図版45	中世の木簡
図版46	石製品・土製品・金属製品
図版47	石器—砥石他—

例言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学病院棟新館に伴って実施した鹿田遺跡第9次・11次調査の発掘調査報告書である。調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。
 - ・第9次調査の発掘調査期間は1998年11月～1999年5月、調査面積は2088㎡である。
 - ・第11次調査の発掘調査期間は1999年8月～1999年12月、調査面積は2020㎡である。
2. 発掘調査は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会・同運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても同運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3. 本書作成に当たっては、以下の諸氏に教示・協力いただいた。また、能城氏・白石氏・江川氏からは玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。
近世陶磁器・備前焼：兼実夫（岡山市教育委員会）、備前焼：伊藤見、黒書の解説：久野修義・今津藤紀・三宅正浩（岡山大学大学院社会科学部研究科）、石材同定：鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）、石調の分析：白石純（岡山理科大学）、木材同定：能城修一（森林総合研究所）、種子同定：沖陽子（岡山大学大学院環境生命科学研究科）、動物遺存体同定：富岡直人・江川達也（岡山理科大学）、鉄器のX線写真：丸山敏則（岡山大学大学院保健学）
4. 発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、調査体制の項で記載する調査研究員・技術補佐員のほか、実測には嘉原倫子が加わった。
5. 報告書作成に当たっての主な担当は以下の通りである。
<遺物>土器・土製品・石器・金属器：(実測・浄書・観察表) 大久保雅子、(実測補助) 西本高美、光本順、木下洋子
土製品：(実測) 大久保・西本、(浄書・観察表) 岩崎志保
写真撮影：南健太郎
<遺構>浄書：山口雄治
なお、遺物の全体整理・遺構下図作成は山本悦世が行った。
6. 本書の執筆分担は目次に示したが、一部本文中に記したことがある。
7. 編集は山本悦世が担当し、山口・岩崎の協力を得た。
8. 発掘調査の概要は「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター年報」16・17に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年度発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した記録・出土遺物は全て本センターで保管している。

凡例

1. 本書で用いる高度値は海抜標高であり、方位は国土座標第V座標系（日本測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は遺構別に番号を付するが、土製品にはT、石器にはS、木器にはW、金属器にはMを付して通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめて、原則、実測図を組み合わせて掲載している。
拓本は、内・外面を掲載する場合は、左側に外面、右側に内面を置く。片面の場合は外面を基本とする。
観察表の表記基準は以下の通りである。
 - ① 胎土は、炭砂：砂粒径0.5mm以下、細砂：0.5～1mm、粗砂：2mm以上
 - ② 法量値は、計測値の差が3mm以下の場合は平均値とし、それを超える場合はその幅を示した。数値は残存が1/6以上、また図上復元可能な場合に記し、他は「-」とした。残存が1/6未満は「-」とした。
4. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMgと表記した。一般的なもの省略している。
5. 巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近くに形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを見島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。また、本遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離をもつが、中世以前には、遺跡の南側近くに瀬戸内海の影響が強く及んでいたことが想定される。

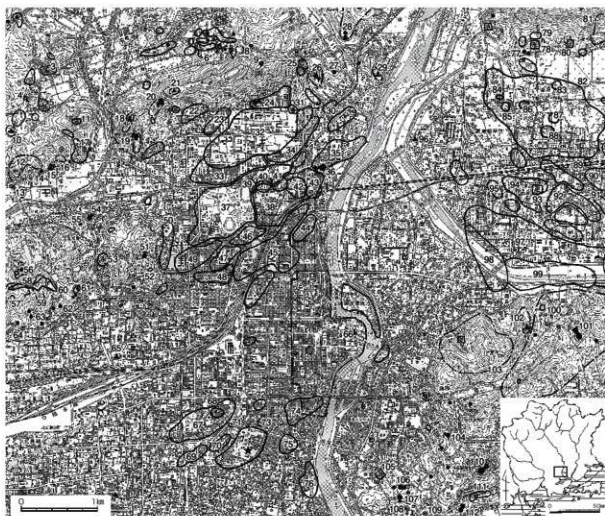
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまで遡り、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ型石器が採集されている¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認される²⁾。こうした人間活動が広がりをみせるのは、縄文時代中期以降である。竪穴住居や貯蔵穴群などが残る中期中葉～後期中葉の津島岡大遺跡³⁾、そして旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁴⁾は、その代表的遺跡である。いずれも丘陵裾付近に形成された集落であるが、これらの遺跡は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代早期（突帯文土器の段階）につながっていく。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡³⁾～津島遺跡周辺⁵⁾あるいは百間川沢田遺跡～原尾島遺跡⁶⁾において水田遺構が調査されている。早期とされる津島江道遺跡の水田時期についての評価は確定していない⁷⁾が、水稲農耕の情報が岡山平野にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確かであろう。

集落では、前期前半は津島遺跡³⁾に限定的であるが、その後、南方遺跡⁸⁾・雄町遺跡⁹⁾・百間川沢田遺跡⁴⁾・原尾島遺跡⁶⁾などが出現する。さらに数が増加していくのは中期後半以降である。中期後半～後期前葉の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、三角州の形成に伴うかのように、前期末葉～中期前半の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡¹⁰⁾そして上伊福九坪遺跡¹¹⁾へと場所が移動し、後期には津島遺跡³⁾や伊福定国前遺跡¹²⁾などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡¹³⁾そして後期には天瀬遺跡¹⁴⁾が加わり、遺跡群のまとまりをみることが出来る。一方、旭川東岸では、雄町遺跡などのように前期から後期に至る継続性の高い遺跡が多いという特徴が指摘されるが、同平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡¹⁵⁾そして後期に同原尾島遺跡⁶⁾へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期にはいと平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれているが、こうした弥生墳丘墓や前方後円（方）墳は、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡のある旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の根尾上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳¹⁶⁾の系列を当てることができる¹⁷⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳¹⁸⁾、金蔵山古墳¹⁹⁾、淡茶臼山古墳²⁰⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡⁵⁾帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模が縮小する傾向が、旭川西岸の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況を見てとれる。



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (弥生～近世) | 31. 朝原鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原西側古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高松山古墳群 | 89. 藤野遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒津御寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若百古墳 (古墳後期) | 90. 乙之島遺跡 (弥生) |
| 4. 上ノ成塚跡 (奈良) | 34. 津島江田遺跡 (縄文～近世) | 63. 乙之島古墳 (古墳後期) | 91. 岡遺跡 (弥生) |
| 5. 矢野城塚寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・岡遺跡 (弥生～平安) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町～近世) | 93. 幡多塚寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 藤森池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 赤尾山遺跡 (弥生～室町) |
| 9. 戸ノ上山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂ヶ塚 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (奈良) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中渡遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (独立岡山病院) | 98. 百間川原尾島遺跡 |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方東蔵遺跡 (弥生～近世) | | |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方壱ノ内遺跡 (弥生～近世) | 71. 敷布池 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川西尾島遺跡 (縄文中期～近世) |
| 14. 若百八幡堂古墳 (古墳) | 44. 弘瀬遺跡 (弥生) | 72. 大供中遺跡 (弥生～室町) | 100. 藤山219号遺跡 (旧石塚) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 73. 敷布池 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳中期) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 松岡遺跡 (弥生～平安) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 明神寺城跡 (戦国) |
| 17. 首尾 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 藤山古墳群 (古墳後期) |
| 18. 高山城 (新+追加) 跡 (室町) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 76. 二日命遺跡 (弥生～近世) | 104. 藤山03号墳 (古墳前期) |
| 19. 七ノ成墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 南橋津遺跡・伊福定因宮遺跡 (弥生～近世) | 77. 曾入塚古墳 (古墳後期) | 105. 綱浜寺 (飛鳥～平安) |
| 20. 都日飯塚墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾封神社南遺跡 (弥生～平安) | 78. 貫田塚寺 (飛鳥～室町) | 106. 綱浜茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 21. 平山山城 (戦国) | | 79. 貫田塚寺堂跡 (奈良) | 107. 藤山09号墳 (古墳前期) |
| 22. 津島福屋遺跡 (古墳～室町) | 51. 津島古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 藤山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 52. 砂林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯辺古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 53. 南津寺 (奈良?) (室町) | 82. 藤田岡村岡遺跡 | 110. 赤茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 25. 津島東3丁目墳・地蔵(弥生・古墳) | 54. 南橋津古墳 (古墳前期) | 83. 北ノ塚遺跡 (弥生～室町) | 111. 赤茶臼山古墳 (弥生～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 55. 十二本木古墳 | 84. 藤田岡村跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山墳 (鎌倉～室町) |
| 27. 不動堂古墳 | 56. 山崎城跡 (室町～江戸) | 85. 藤田岡村堂跡 (南園長) 遺跡 | |
| 28. 前古墳群 (古墳前期・後期) | 57. 矢塚山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 29. 砂見山城跡 (戦国) | 58. 矢塚山西古墳群 (弥生) | 87. ハヤ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 30. 新田遺跡 (弥生他) | 59. 矢塚山東古墳群 (古墳後期) | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

鹿田遺跡内の★が調査地点である。

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁶、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁷、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刷印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²⁸などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺²⁹が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡³⁰。そしてその西約500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³¹が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理学の研究や発掘調査成果から摂関家殿下渡領である鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土³²し、また、南東1kmの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³³。旭川東岸では、百間川遺跡群において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝などの大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが調査されている³⁴。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査あるいは記録を行っている（図2）。この構内座標は、2002年度までは日本測地系による国土座標第V座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸をN-15°-Eに振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとした³⁵。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。

構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC、…AZ、BA、BB…、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…、と付番する。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区…、と呼称する。

2. 遺跡の概要

2016年度までに26次にわたる発掘調査が行われている本遺跡は、弥生時代中期末葉・後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後半～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代に集落が営まれた遺跡である。また、古代～中世では、藤原摂関家殿下渡領鹿田庄の故地とされる。

【土地形成と集落展開】

本遺跡出土土器で最も古く遡る時期は縄文時代中期末であり、それに続くのが弥生時代早期・前期である。い

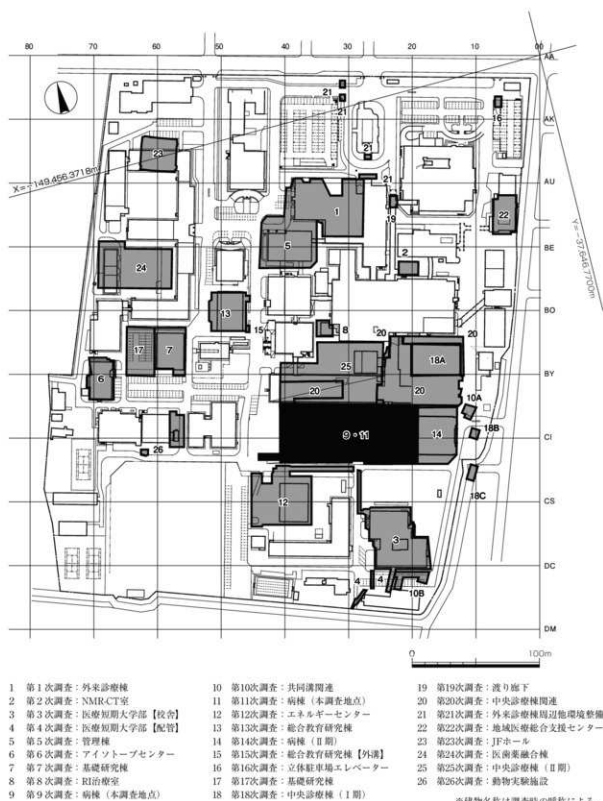


図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3000）

ずれも第1次調査地点で出土している³³。出土点数は各1点で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において陸地が存在した可能性を示唆する。こうした状況から、本遺跡は旭川河口に形成された縄文時代の砂堆をベースにした臨海性の高い集落遺跡と評価される。

その後、近年の調査から、地形面で大きな変化は弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことが分かってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成し(第23次調査地点³⁴)、中期中頃には河道が多量の土砂によって埋没している(第12次調査地点³⁵)。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

最初に集落が形成されたのは第1次調査地点(現在の岡山大学病院外来診療棟)である。弥生時代中期末葉には、このごく限定された範囲に遺構が形成されており、東西50～60m・南北50m程度の比較的小さな居住域が復元される。後期に入ると、居住域は東側(第19次・第22次調査地点³⁶)と南側(第5次・2次・18次調査地点³⁷)に広がり、東西220m・南北100m程度の範囲に拡大する。古墳時代初頭には、東側の広がりは影を潜め、西側(第17次調査地点³⁸)に居住域が展開する。居住域周辺域(第12次・13次・20次調査各地点³⁹)には、土器溜まりの形成が顕著となる。また、南側(第9次・11次・14次調査地点)には後期～古墳時代初頭の水田域が確認されており⁴⁰、同時期には、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。一方、北側(第21次⁴¹・23次調査地点⁴²)の調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側が、深い谷地形あるいは河道が中世段階まで存在したことが明らかとなっている。

このように、弥生時代中期後葉～古墳時代において、鹿田遺跡は旭川西岸部のなかで、北側の遺跡集中域から切り離されて海に突き出したような場所に形成され、沖積作用の影響を受けながら居住域が展開した状況が復元される。

平安時代前期においてもこうした地形に大きな変化は確認できない。遺跡の南側は第1次調査地点と1m程度の比高差を残している。こうした地点が耕作地として利用されるのは中世以降である。

10世紀における集落の中断を経て、集落が改めて成立する平安時代後期(11世紀～12世紀)の集落構造は以前とは全く異なる。現在の地割り方向に沿った方向を示す溝で区切られた屋敷地の集積景観が復元される⁴³。特に、12世紀には、東西方向について1町単位を基にした方形地割りがなされ、敷地北端と南端のやや低い地域には耕作地の広がりが確認される(第16次調査地点ほか)。さらに、鎌倉時代には、溝で区切られた開放的な屋敷地から、大形の溝を屋敷地周辺にめぐらせた閉鎖的屋敷地空間へと変化する⁴⁴。屋敷地の拡大も特徴的である。該期の屋敷地は、溝で区画された敷地に数棟の建物群と井戸の構成が一般的であり、中には墓を有する場合がある。瓦器や東播系の遺物や輸入陶磁器など、各地域からの流通品が数多く出土しており、流通拠点の様相をうかがわせる。瓦や呪符木簡、そして銅銭などは宗教的建物の存在を彷彿とさせる。こうした状況は、殿下渡瀬「鹿田庄」の実態を反映していると考えられる。

鎌倉時代末には、屋敷地の配置は、本地点(第9次・11次・14次調査地点)付近を軸に東西方向に並ぶ傾向を強め16世紀に至る。街道の存在も見え隠れしているようである。江戸時代(17世紀)に入ると、屋敷地から耕作地へと遺跡の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山下町の再編による影響が想定される。ただし、18世紀には第18次調査B地点に船着き場⁴⁵や第18次A地点周辺に屋敷地が存在した可能性があり、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えてきている。

【海との関係】

本遺跡は旭川西岸平野の南端付近で、海に突き出すような地形に立地していることは前述したとおりである。弥生時代～古墳時代には、海との関連を窺わせる製塩土器や土鐘・石錘が数多く出土する。また、四国側の瀬戸内沿岸部や畿内からの搬入土器の存在も注目される。旭川西岸における集落の中で、一定の役割をもつ場所であ

ったと考えられる。

その後も、平安時代前期の橋、そして同時代後期に属する偽備回しの人形頭である猿形木製品³⁰⁾や鎌倉時代末～室町時代初めに属する猿形木製品³¹⁾などは人や物資の盛んな流通を示しており、瓦器や国内外からの陶磁器類・砥石や石鍋など多様な出土品とあわせて、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端を端的に示している。

【藤原摂関家殿下渡領「鹿田庄」成立との関係】

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされている³²⁾。同時期の資料としては、第1次発掘調査地点（岡大病院外来診療棟）付近で確認された建物群や大形井戸（およそ8世紀後半～9世紀代初期）のみであったが、近年集落の西端に位置する第24次調査地点で8世紀後半の井戸が加わった³³⁾。その内部からは絵馬が2枚重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。また、中世における流通拠点の性格も、鹿田庄の性格を考える上で重要である。加えて、近年の調査では、14世紀段階の鳥帽子や16世紀の猿の水漬が出土しており³⁴⁾、本地点の管理者が武士であったことをうかがわせる。

本章第1節・第2節の1については下記既報の文章に一部加筆修正したものである。

高田貴太 2007「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊

注

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 宮田直人 1998「朝庭森貝塚発掘調査概報」加計学術埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969「昭和44年岡山県津島遺跡調査概報」
b 岡山県教育委員会 1970「岡山県津島遺跡調査概報」
c 鳥崎 東ほか 1999「津島遺跡1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書137
d 平井 勝 2000「津島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書151
e 鳥崎 東ほか 2003「津島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書173
f 岡本泰典ほか 2004「津島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書181
g 岡田 博編 1998「北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書125
h 高田恭一郎編 2000「北方地蔵遺跡2 北方鞍ノ内遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書149
i 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
j 柳瀬昭彦 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (7) a 宇加区善編 1999『百間川原尾鳥遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書88
b 平井 勝編 1995『百間川原尾鳥遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書97
- (8) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (9) 前掲註6)a～f文献
- (10) a 岡山市遺跡調査団 1971「南方遺跡発掘調査概報」
b 岡山市遺跡調査団 1981「南方（国立病院）遺跡発掘調査概報」
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981「南方遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書40
d 安川 満編 2016「南方遺跡」岡山市教育委員会
- (11) 高橋 義・正岡陸夫ほか1972「緑町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- (12) 前掲註6)a文献

- 03 a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
 b 正岡隆夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
 c 柳原昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
 d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の尻手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- 04 内藤善史編 1996『総国遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- 05 a 中野雅美 1984『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 14
 b 中野雅美・根本修 1986『上伊福九坪遺跡』岡山県史 考古資料
- 06 前掲註6a～f 文献
- 07 a 杉山一徳編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
 b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
 c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- 08 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- 09 出宮徳尚 1986『天瀬遺跡』岡山県史 考古資料
- 10 高畑知功 1982『百間川釜基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
- 11 前掲註39文献
- 12 宇加臣雅 1990『網浜茶臼山古墳・椽山109号墳の測量調査—古墳の前期古墳群—』『古代古墳』第12集
- 13 松本武彦 1993『岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団』『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 14 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』
- 15 西谷真治・鎌本義昌 1959『金蔵山古墳』食教考古館
- 16 近藤義郎 1986『漆茶臼山古墳』岡山県史 考古資料編
- 17 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- 18 高橋伸二 2005『史跡貫田庵寺跡』岡山市教育委員会
- 19 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- 20 a 中野雅美 1977『古輪における平城宮式瓦について』『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
 b 草原孝典 2002『鹿田庄の設置背景』『新道遺跡』岡山市教育委員会
 c 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 21 南健太郎 2013『鹿田遺跡第24次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2012
- 22 前掲註39文献
- 23 出宮徳尚 1985『岡山県二日市遺跡』『日本考古学年報』35
- 24 岡山県教育委員会 2006『大洪水町遺跡発掘調査現地説明会資料』
- 25 光本 順 2004『日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002
- 26 前掲註39文献
- 27 南健太郎編 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- 28 山本悦世 2001『鹿田遺跡第12次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報 18
- 29 a 野崎寛博 2010『鹿田遺跡第19次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008
 b 岩崎志保 2012『鹿田遺跡第22次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011
- 30 前掲註39文献
- 31 a 松本武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
 c 山本悦世ほか 2008『鹿田遺跡第18次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007
- 32 山本悦世 2008『鹿田遺跡第17次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006
- 33 a 前掲註39文献
 b 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
 c 山本悦世ほか 2011『鹿田遺跡第20次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009
- 34 a 小林智樹 2000『鹿田遺跡第9次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報 16
 b 喜田 敏・岩崎志保 2000『鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報 17
 c 岩崎志保 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- 35 光本 順 2012『鹿田遺跡第21次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010
- 36 前掲註39文献
- 37 a 山本悦世 2007『中世の集落構造と推移—鹿田遺跡の場合—』『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
 b 山本悦世 2015『鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の桑里間遺構』『桑里制・古代都市研究』30 桑里制・古代都市研究会
- 38 前掲註39文献
- 39 光本 順 2013『第18次調査B・C地点』『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- 40 前掲註39文献

歴史的・地理的環境

- 50 山本民世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学橋内遺跡発掘調査報告第23冊
- 52 「鹿田」の初出は1817（弘化4）年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事。「鹿田庄」の初出は1900（昌泰3）年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
- 鈴木景二 2002『備前国鹿田庄・荒野史料と結団』『新道遺跡』
- 53 前掲註52文献
- 54 前掲註52 c 文献
- 岩崎志保 2016『鹿田遺跡第25次調査』『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2014』

第2章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

1998年度に、老朽化の進む医学部附属病院東西病棟にかかる病棟（現岡大病院病棟）の新営が、既存病棟の南側に計画された。同予定地は東西約150m・南北40m程度の範囲であった。鹿田地区では、既に弥生時代～近世の遺跡が広く分布していることがわかっていたが、本工事対象地周辺では発掘調査がなされておらず、同地点の状況を把握するため、1998年10月に試掘・確認調査を実施した¹⁾。その結果、鹿田遺跡の第7次調査地点に近い土層の堆積が確認され、中世～近世の遺構を中心に、時期は弥生時代に遡る可能性が予想されることとなった。

発掘調査は、工事計画と病院業務の関係から、同予定地を東西に分けて2期にわたって行われることとなった。具体的には、1期工事となる西側をまず調査し、建物完成後、2期工事対象地域となる東側の発掘調査を行う計画である。1期工事範囲は、全体計画のなかで約2/3を占める東西85m・南北40mの範囲であった。ところが、発掘調査を開始後、建物計画の一部変更が行われた。当初計画の平面形が東西南北にそれぞれ広がり、さらに南東部分には新たな共同溝部分の設置に伴って、同地点の調査が加わることとなった。追加分を含めると、1期工事対象地域は東西110～125m・南北50m、調査面積は4,000m²を超える広さに拡大した。ただし、既に調査が開始されていたことから、追加部分については進行中の調査が終了後、改めて発掘調査を行うこととなった。その結果、1期工事対象範囲のうち計画変更前の部分を第9次調査、同対象範囲で追加部分を第11次調査とすることとなった。2期工事部分については、1期工事終了まで時間をおいてから、追加部分もあわせて調査を行うこととなり、それが第14次調査である。

第9次調査対象の調査面積は2,088m²である。3名の調査員が担当し、調査期間は約5ヶ月を予定して調査に入った。表土掘削は1998年11月16日から開始した。一方、第11次調査は、第9次調査終了後、1999年8月から開始した。調査面積は約2,020m²で、4～6名の調査員が担当した。

また、調査対象地内に位置する既設共同溝部分の調査については、病院機能を維持する必要性から、第11次調査終了後に撤去し、下部の調査を実施することとした。ただし、同共同溝設置時の工事掘削深度の深さから、井戸などの特に深い遺構の底部を除いては、包含層を含め大半の遺構の消失が予想されたため、調査員1名による立会調査で対応することとした。

2. 調査体制

【第9次調査】

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二茂見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員（調査主任）		助 手	小林 青樹
”		”	山本 悦世
”		”	横田 美香
”		”	岩崎 志保(1999年1月～)
”		”	豊島 直博(1999年3月～)
”		”	喜田 敏(1999年4月～)
調査補助員		技術補佐員	福井 優(1999年4月～)

【第11次調査】

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二度見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員 (調査主任)		助 手	喜田 敏
”		”	山本 悦世
”		”	岩崎 志保
”		”	横田 美香
”		”	豊島 直博(1999年10月18日～)
”		”	小林 青樹 (1999年10月26日～12月7日)
調査補助員		技術補佐員	福井 優

【管理委員会】(発掘調査年度：1998年度～1999年度)

<委員>

学 長	小坂二度見(～1999年6月)	文化科学研究科長	岩間 一雄(1998年度)
学 長	河野伊一郎(1999年6月～)	文化科学研究科長	工藤進思郎(1999年度)
副学長	松畑 熙一(～1999年6月)	自然科学研究科長	岩見 基弘(1998年度)
副学長	佐藤 公行(1999年6月～)	自然科学研究科長	中島 利勝(1999年度)
文学部長	成田 常雄(1998年度)	資源生物科学研究所長	本吉 總男
文学部長	稲田 孝司(1999年度)	附属図書館長	神立 春樹(1998年度)
教育学部長	森川 直	附属図書館長	岩見 基弘(1999年度)
法学部長	石島 弘	医学部附属病院長	荒田 次郎
経済学部長	建部 和弘	歯学部附属病院長	佐藤 隆志
理学部長	佐藤 公行(1998年度)	固体地球研究センター長	久城 育夫(1998年度)
理学部長	山崎比登志(1999年度)	固体地球研究センター長	河野 長(1999年度)
医学部長	産賀 敏彦(1998年度)	医療技術短期大学部長	遠藤 浩(1998年度)
医学部長	難波 正義(1999年度)	医療技術短期大学部長	太田 武夫(1999年度)
歯学部長	松村 智弘	学生部長	伊澤 秀而(～1998年8月)
薬学部長	原山 尚	学生部長	松畑 熙一(1998年8月～)
工学部長	大崎 紘一	事務局長	藤井 武(～1998年6月)
農学部長	内田 仙二(1998年度)	事務局長	諸橋 輝雄(1998年7月～)
農学部長	稲葉 昭次(1999年度)	埋蔵文化財調査研究センター長	
環境理工学部長	河野伊一郎(1998年度)		稲田 孝司
環境理工学部長	阪田 憲次(1999年度)		
<幹事>			
事務局庶務部長	厚谷 彰雄(1998年度)	事務局経理部長	菊池 俊彦(1999年度)
事務局庶務部長	山崎 洋輔(1999年度)	施設部長	遠藤 久男
事務局経理部長	黄揚川英了(1998年度)		

【運営委員会】

<委員>発掘調査年度（1998年度・1999年度）

センター長（文学部教授） 稲田 孝司
 文学部教授 狩野 久（1998年度）
 文学部教授 倉知 克直（1999年度）
 経済学部教授 建部 和広（1998年度）
 理学部教授 柴田 次夫
 医学部教授 村上 宅郎
 農学部教授（調査研究専門委員）

千葉 喬三
 環境理工学部教授 名合 宏之（1999年度）
 文学部助教授（調査研究室長）新納 泉
 施設部長 遠藤 久男

<委員>報告書刊行年度（2016年度）

センター長（事務局長） 宮田 裕州
 副センター長 山本 悦世
 大学院社会文化科学研究科教授 久野 修義
 大学院社会文化科学研究科教授 新納 泉
 大学院環境生命科学研究所教授 沖 陽子
 大学院医歯薬学総合研究科教授 大橋 俊孝
 大学院社会文化科学研究科教授

（調査研究室長） 清家 章
 大学院自然科学研究科
 （調査研究専門委員） 鈴木 茂之
 施設企画部長 松山 忠生

3. 調査経過

第9次調査の造成土除去と調査開始状況（図3）

第9次調査は1998年11月16日から重機による表土掘削を開始し、11月27日に作業を終了した。調査にあたっては、調査区中央付近を南北に走る共同溝を挟んで西側をA区、東側をB区とした。

第11次調査は、第9次調査終了後、3ヶ月の期間を空けて1999年8月から作業を開始した。本調査範囲は第9次調査の追加調査という性格から、同調査域の周囲を取り巻く形で位置する3箇所の調査区に分かれることとなった。そのため、第9次調査A区の北・西・南側を1区、同調査B区の南～東側を2区、B区北側を3区として対応した。表土掘削は、1区を8月9日に開始し、南東部から西へ、そして北へと進め8月20日に終了した。続いて3区は8月31日～9月2日、2区は9月2日～8日に作業を行った。

両調査の調査開始段階には、配管や木造建物関連の基礎などによる攪乱が全体に広がっていた。特に東側のB区では破壊が大きく、高木の根による攪乱の影響で南半部の中世層はほとんど消失し、北半部も建物の基礎による破壊によって調査可能な空間は極めて限定された状態にあった。また、両調査区南端部には、造成土によって埋没した大形の溝や、その他にも広範囲に及ぶ攪乱が存在し、遺構の検出や連続性の解明にとって大きな障害となった。

第9次調査の発掘調査

造成土除去を終了した1998年11月27日から3班体制での発掘調査を開始した。調査範囲が広いため、攪乱状況も考慮して、A区を東西南北に1～4区、B区は南北に1・2区に分けて調査にあたった。A区で東西方向の大形溝と井戸を中心とした近世～中世後半までの調査を12月に終了し、中世前半の遺構検出へと調査を進めた。同時期の遺構は本調査において最も密度の高い状態を呈しており、それに対応するために、1月から4班に増員して調査体制を強化した。特にA区では、近世に引き継がれる大形溝のほか、北半部において屋敷地の存在を示す柱穴・井戸・木棺墓・溝などの遺構が集中的に分布し、南側には池状の遺構を検出することとなった。木棺墓には頭蓋骨などが残存しており、白磁・青磁碗などの副葬品あるいは木棺痕跡の存在から、埋葬方法や構造面の解明に注目して作業を進めた。また、井戸や溝からは木簡を含め多くの遺物が出土し、記録作業も佳境に入った。A区全体が概ね終了したのは3月末である。一方、B区は、3月上旬に中世前半の調査に入り3月末に終了した。

1999年度にはいり、A区では4月中旬～5月上旬に古墳時代から弥生時代の調査を実施した。耕作関連の遺構

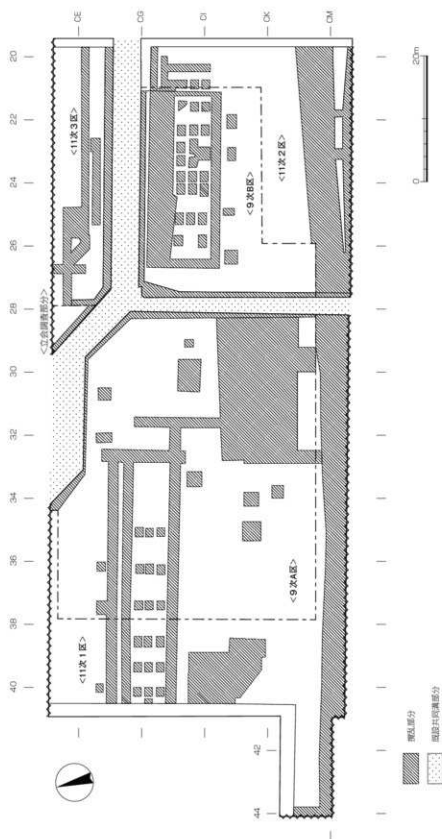


図3 調査開始状況 (縮尺1/600)

が中心となり、特に古墳時代初頭～弥生時代後期では、水田畦畔と同一面で検出された円形遺構の性格について検討を進めた。最後に必要な土層断面を記録し、5月10日に調査を終了した。B区は、A区に先行して4月21日に調査を終了した。

調査体制は、1月の強化以降、さらに3月に1班を増員し5班とし、4月からは調査員1名が加わった。

また、調査期間中、5月6日に鹿田小学校が見学に、4月29日には岡山大学の考古学入門授業を受け入れ、5月1日には現地説明会を開催した。

第11次調査の発掘調査

発掘作業は、1区の南半部で表土掘削が終了した8月19日から開始し、続いて3区を9月6日から、2区は9月9日からそれぞれ発掘作業に入った。1区と2・3区は場所が離れていることから、遺構番号の管理や作業の進行は別々に行う方針で臨んだ。

1区では、9月初旬に近世遺構の調査を終え、続いて10月中旬に中世、11月には古墳～弥生時代の遺構を調査し、12月10日に全ての作業を終了した。一方、2・3区は、10月までに近世遺構の調査を終え、11月に中世、12月に古墳～弥生時代の遺構調査を進めた。12月21日に土層断面の記録をとり、全ての作業を終了した。約4ヶ月間の調査であった。

調査体制は当初4班で開始したが、3区の調査開始にあわせて作業員を増員し、さらに10月からは調査員6名の体制で対応した。



a. 円形高まり b. 現地説明会の様子
図4 調査関連風景

第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代（あるいは飛鳥時代）、平安時代後期～江戸時代そして大正時代までの遺構が確認された。

弥生時代後期～古墳時代初頭（図5）：＜9・8層＞に対応

水田に関連する畦畔・溝の他に、円形高まり2箇所と円形溝群1箇所が検出された。その範囲は調査区全域に広がる。地形の高い位置にあたる北側に、円形高まりや円形溝群が残る。両者は、本来は周囲に溝をもつ円形の高まりとして同一のものと考えられる。溝は畦畔の縁に付随する小規模な溝と、主要な用水路と判断されるものとに分けられる。畦畔は、南北方向の規模の大きい畦畔と小規模な畦畔が確認される。水田は溝と畦畔によって区画され、東西に2面南北に3面が抽出される。こうした遺構の時期は少なくとも二時期が想定される。古くは畦畔上面の遺物から後期前半まで遡り、その終焉は古墳時代初頭と考えられる。

古墳時代（あるいは飛鳥時代）：＜7層＞に対応

調査区の西端部に畦畔の広がりが残る。ただし、調査区の断面では、それ以外の複数の地点で畦畔の高まりを確認しており、本来は全域に広がっていたことが予想される。畦畔の一边は7～10mを測る。所属時期は、水田

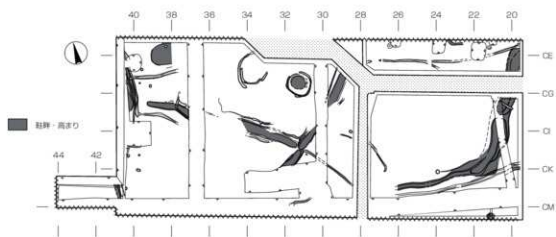


図5 弥生～古墳時代初頭の遺構全体図（縮尺1/1000）

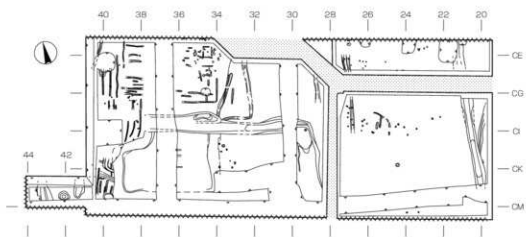


図6 平安時代後期の遺構全体図（縮尺1/1000）

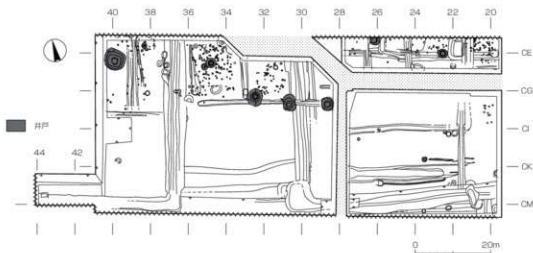


図7 平安時代末～江戸時代の遺構全体図（縮尺1/1000）

遺構の<8層>からの連続性から古墳時代の判断もできるが、鹿田遺跡における遺構存続時期からは、古墳時代初頭で一端集落が断絶したのちに再開される飛鳥時代の可能性も十分に考えられる。

中世前半<平安時代後期> (図6) : <6・5層>に対応

井戸1基、溝16条、土坑3基、池状遺構1基が検出された。池状遺構・溝を中心に12世紀代の遺物が主体をなす。井戸は上部が破壊されていることを考慮すると、後世の遺構に含まれる可能性が高い。柱穴も全体に少なく屋敷地を示す遺構は希薄である。池状遺構は調査区の南半に位置する。その北側あるいは西側には耕作痕と考えられる小規模な溝が数多く形成されている。小溝群は南北方向と東西方向があり、場所によってその方向に違いを見せる。耕作地の区画を示すと理解される。調査区の東端部には真北に近い方向を示す南北方向の溝が走っており、本調査地点の東側に位置する第14次調査地点に広がる屋敷地の西端を区切っている。同溝を境に、その西側には耕作地(畑)が広がっていたと考えられる。

中世前半<平安時代末～鎌倉時代> (図7) : <4b層>に対応

井戸7基、溝17条、木棺墓2基、土坑8基のほか多数の柱穴が検出されており、大形の溝に区切られた屋敷地の広がりが想定される。井戸・柱穴・墓は調査区の北半に集中しており、屋敷地が同範囲に配置されていたと理解される。本地点の東側に位置する14次調査地点には前段階の屋敷地が確認されており、本時期に本地点へ居住域が拡大したことが予想される。屋敷地の区画溝は大形化している。

中世後半<室町時代> (図7) : <4a層>に対応

井戸4基、土坑2基、溝8条のほか多数の柱穴が検出される。その分布は調査域全体に広がるが、大形溝は東西方向にそれぞれ移動しており、敷地の拡大が進行する。井戸の分布は、前段階までの分布域から西への展開が指摘されるとともに、屋敷地の再編が考えられる。ただし、北半に屋敷地が配される点は踏襲されている。また、井戸の時期から15世紀後半で屋敷地は終焉を迎えたことが窺われる。

近世<江戸時代> : <3層>に対応

溝3条・土坑14基・墓1基が検出される。屋敷地廃絶後の時期にあたり、本地点は耕作地へと変化している。

註

- (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2000「医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16

第3章 調査の記録

第1節 調査地点と層序

1. 調査地点の位置

本調査地点は岡山大学鹿田地区のほぼ中央部に位置する（図2）。鹿田地区の構内座標ではCD19区～CM40区とCL41～44区にあたる。岡山大学病院の旧東西病棟の南側である。調査区中央部には地表下3mにおよぶ共同溝のほか、2棟の大形建物を含む大規模な掘削が全体に広がっており、遺構の残存状況は非常に悪い状態であった（図3）。

報告済みの調査地点との位置関係は以下の通りである（図8）。東側には第14次調査地点が接する。北側約180mには第1次・5次調査地点、そして第8次調査地点は80mの距離にある。西側には第6次・7次調査地点が約180mに、南側では第3次調査地点が道路を挟んで約80mにそれぞれ位置する。未報告ではあるが、北側に第18次・20次調査地点が本地点と接して、そして南側では第12次調査地点がやはり道路を挟んで位置する。

本地点北側の第1次調査地点¹周辺は、弥生時代中期以降の集落が形成される鹿田遺跡の中で最も安定した微高地である。それに対して、南側の第3次調査地点³は古くは河道が入るような、やや低い場所にあたる。本地点は、そうした高位部と低位部との境にあたっている。

東隣の第14次調査地点¹⁴では弥生時代の水田関連遺構のほか、11世紀～12世紀前半と13世紀末～16世紀の屋敷地が、西側の第6次・7次調査地点⁶では古墳時代初頭の竪穴住居のほか、12世紀後半～14世紀の屋敷地が報告されている。こうした調査成果の中央に本地点は位置する。

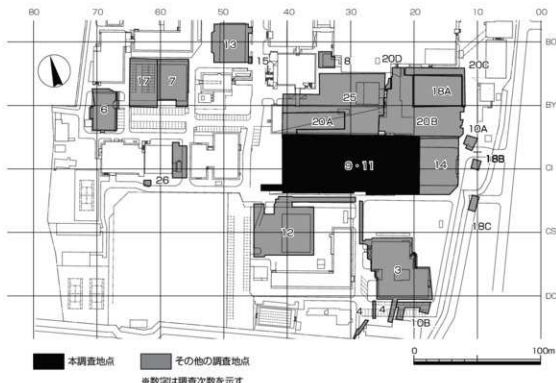


図8 調査地点位置図（縮尺1/3000）

2. 層序

調査経過で述べたように、本調査地点では調査年度を隔てた2回にわたる調査が及んだことに加えて、近現代の破壊が調査区内を大きく分断し調査区内が細分された状態にあったため、調査区の通し断面を記録することはできなかった。ここでは、調査区の外周断面をもとに、柱状図でその概要を報告する(図9～11、表1)。

<1層>：1922年(大正11年)に始まる岡山医科大学建設に伴って形成された造成に始まり、現代に至る造成土である。上面は現地表面の標高2.5m前後を測る。調査区全体が厚さ1m前後で覆われる。

<2層>(近代)：淡灰色砂質土である。一部では青色を帯びる部分もある。既往の調査成果からも、明治～大正期の耕作土と評価される。上面のレベルは標高1.4～1.6mである。上部は造成による加工も影響するが、20cm程度の高低差があり北側が高い。土層の厚さは0.1～0.2mであるが、地形が低い南西部でやや厚い。出土遺物の量はコンテナ2.5箱(28%箱)程度であり、いずれも小片である。

<3層>(近世)：灰(褐)色砂質土を基調とする土層であり、下半に鉄分の沈着が顕著である。上面のレベルは、西端中央付近の一部(標高1.1m)を除くと、概ね標高1.25～1.5mで0.25mの高低差をもつ。土層の厚さは0.1m前後を測り、地形の低い調査区の南～西側で厚さを増す。遺物はコンテナ2箱(28%箱)程度が出土した。備前焼・国産陶磁器類を非常に多く含むが、小形片で占められる。遺構は溝・土坑が検出されている。近世、江戸時代の耕作土と理解される。

<4 a層>(中世後半)：淡緑灰褐色砂質土を基調とする土層である。マンガンが沈着する傾向が強い。土層の厚い部分では2～3層に細分が可能である。上面のレベルは標高1～1.4mであり、0.4m程度の高低差をもつが、最深部の調査区西端の南半(41ラインのCK～CLライン間、標高0.95m)を除くと、その差は0.25mに留まる。最も高い数値を示すのは調査区北端部～東北隅部(表1、北壁～東壁)である。その南縁～西縁にやや下がりながら調査区の北側～東側に高位部(標高1.2～1.4m)を形成する。一方、やや低い数値を示す中間部は調査区南～西側部(標高1～1.15m)である。最も低い低位部(標高約0.95m)は調査区西端の南半(41ラインのCHライン以南)に広がる。全体としては、高位部との比高差は小さい。土層の厚さは0.05～0.15mである。

出土遺物量はコンテナ12箱(28%箱)であり、その多さが際立つ。<3層>に特徴的な国産陶磁器類は激減し、中世～近世初頭の遺物で構成される点で同層とは明らかに異なる。備前焼が多く、大形破片の比率が比較的高い点も特徴である。こうした状況は、本層で検出された室町時代の井戸・溝をはじめとする屋敷地関連遺構の存在とも矛盾しない。一方、出土遺物の中には鎌倉時代(13世紀)に遡る土師器類も多く含まれており、大形破

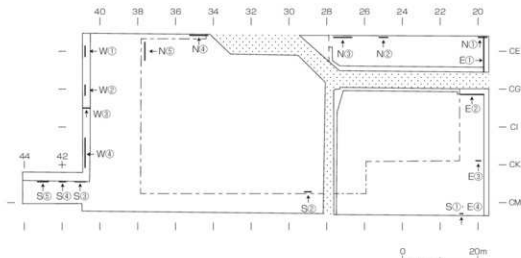
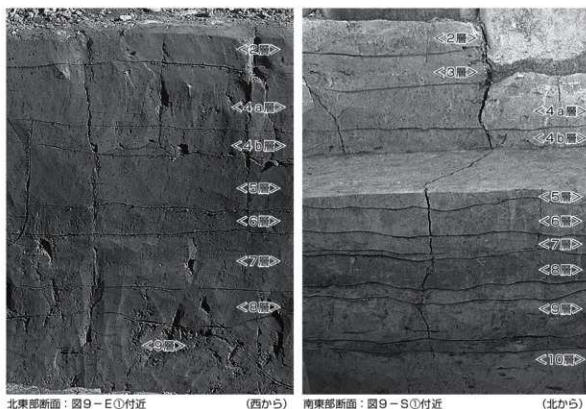


図9 土層断面柱状図の位置(縮尺1/1000)



北東部断面：図9-E①付近

(西から)

南東部断面：図9-S①付近

(北から)

図11 調査区土層写真

表1 調査区断面における各層位レベル一覧 (数字は標高m)

断面 位置	南壁：CL-CN線 東西断面 (東<西)					西壁：E線 南北断面 (南<北)				北壁：CD-CE線間 東西断面 (西<東)				東壁：19~21線間 南北断面 (北<南)				中央東：33線 南北断面 (北<南)		中央西：38線 南北断面	
	東端	中央部	西端	南端	中央部	北端	西半	東半	東端	北端	中央部	南端部	北半部	中央部	北半部						
ライン	CMと CN間	CLと CN間	CKと CL間	CL		CKと CL間	CH	CG	CE	38	34と 35間	27	25	20	20	20と 21間	21	CF- CG	CH- CJ	CG	
	21	29	38	41	43										CE	CGと CH間	CK	CMと CN間			
断面 番号	S①	S②	S③	S④	S⑤	W①	W②	W③	W④	N③	N④	N⑤	N⑥	N⑦	E①	E②	E③	E④			
<2層>				1.4	1.5				1.2+	1.35	1.6	1.35+					1.35				1.35
<3層>				1.25	1.25				1.1	1.3	1.5	1.5		1.45	1.45	1.4	1.25		1.5+		1.5
<4a層>				1.15~ 1.1	1.15~ 1.1	1.1	0.95	0.85+	1	1.22	1.4	1.4	1.4	1.4	1.35	1.4	1.32	1.23	1.25+	1.15~1	1.15
<4b層>		0.95	0.9	0.9	0.9	0.75	0.65~ 0.6	0.7~ 0.75	1.05	1.3~ 1.35	1.35	1.15+	1.28	1.28	1.25	1.2	1.1		1.2+	1.05~ 0.95	0.95
<5層>	0.9	0.9	0.75	E-0.8 ~ W-0.7	0.75~ 0.8	0.7~ 0.65	0.55	0.35~ 0.6	0.92	1.25	1.26	0.97~ 1	1.08~ 1.15	1.18	1.18	1.1	1	0.9	1.15~1	0.9~0.8	0.85
<6層>	0.82	0.85	0.7~ 0.75	E-0.75 ~ W-0.7		0.6~ 0.65	0.45~ 0.35	0.5	0.88	1.2	1.12	0.85~ 0.88	1~ 1.05	1.08	1.05	1	0.95	0.82	1~0.95		0.75
<7層>	0.7	0.7	0.6~0.7	E-0.7 ~ W-0.6	0.6~ 0.7	0.55~ 0.6	0.4~ 0.45	0.4~ 0.45	0.8	0.9	0.9	0.75~ 0.8	0.9	0.98	0.9~ 1	E-0.83 ~ W-0.75	0.7	0.88~ 0.8	0.75~ 0.7		0.7
<8層>	0.58	0.6	0.5~ 0.55	E-0.55 ~ W-0.5	0.5~ 0.55	0.45~ 0.48	0.3	0.3~ 0.35	0.68	0.75	0.83	0.75	0.8	0.8~ 0.85	0.85~ 1	E-0.75 ~ W-0.7	0.58	0.75~ 0.7	0.65		0.65
<9層>	0.5	0.5	0.45	E-0.5 ~ W-0.45	0.5 0.5	0.35	0.25		0.55~ 0.58	0.65	0.75	0.6		0.75	0.7~ 0.8	E-0.75 ~ W-0.6	0.5	0.68~ 0.62	0.6~ 0.55		0.6
<10層>	0.4	0.45	0.3					0.2					0.5		0.5~ 0.65			0.4	0.6~0.5	0.5	

※断面番号は図9に一致する

高
凡例： 低

片が多い点からも、本土層は同時期の屋敷地が形成された<4 b層>を破壊して造成された土層と理解される。その形成時期は<4 b層>との関係から14世紀中頃まで遡る可能性が高い。その後、16世紀末まで、複数回にわたって遺構形成が進んだ状態を示すと考えられる。

<4 b層> (中世前半)： 灰褐色砂質土を基調とする土層である。<4 a層>と類似性を強める地点と褐色を強めて下層に近づく地点が確認される。上面のレベルは標高0.6~1.35mであり、高低差は0.75m程度となる。ただし、<4 a層>と同様に、調査区西端中央部付近の最深部（標高0.6m）を除いた中間部（同0.9m）と高位部との平均の高さを比較すると、その差は0.4m程度となる。地形は<4 a層>とはほぼ共通するが高低差の数値幅は大きく、西側の低さが際立つ。また、西壁の最深部は中間部からさらに0.3m程度落ち込んでおり、明瞭な深み部を形成している。土層の厚さは0.1m前後である。出土遺物量はコンテナ2.5箱（28%／箱）である。量的には<4 a層>に及ばないが、本層形成時間幅を考えると決して少ない量ではない。大形破片が多い点も同層と共通する。その内容は、鎌倉時代の遺物で占められており備前焼の出土比率は低い。本層に属する遺構は、同時代の井戸・溝をはじめとする屋敷地関連遺構であり、包含遺物の時期に対応する。

本層の性格は<4 a層>との共通性を踏まえると、屋敷地形成時の土地造成土と位置づけられる。その時期は平安時代後期（12世紀中葉～後半）に遡り、次の屋敷地再編期に至る14世紀中頃まで、本層において活動が継続したと考えられる。

<5層> (中世前半)： 暗灰褐色粘質土を基調とし、<6層>と類似性が高い土層である。上面のレベルは標高0.55~1.25mであり高低差は0.7mを測る。ただし、高位部（標高1~1.25m）と中間部（同0.8~0.9m）の差は0.3m程度に縮まる。低位部（同0.55~0.7m）は調査区南西部に広がる。その最深部の深みは調査区西端中央部において明瞭であり、中間部からは約0.35mの落ち込みとなる。高位部と低位部の広がりとは<4 b層>と同じ傾向をもつ。土層の厚さは0.05~0.1mである。出土遺物量はコンテナ1箱（28%／箱）程度である。平安時代後期（12世紀）の遺物が占めており、陶磁器は激減する。大形片は少なく、多くは小形片である。遺構は池状遺構のほか耕作に伴う溝が多く検出されており、屋敷地進出前の土層と判断される。

<6層> (中世前半)： 茶褐色粘質土を基調とする層である。上部に白色の砂を薄く被る場合が認められる。上面のレベルは標高0.45~1.2mであり高低差は0.75mを測る。ただし、高位部と中間部（標高0.8~0.9m）の差は0.3m前後である。低位部（同0.45~0.75m）は調査区南西部に広がり、最深部は約0.45mの深みを有す。土層の厚さは0.05~0.2mであり幅を持つ。以上の状態は<5層>と共通する。一方、出土遺物の量は13号ポリ袋1袋程度で極めて少量である。小形片が占めており詳細な時期などは不明確であるが、<5層>の状況と大きな差は見いだせない。遺構は耕作に関する溝が中心である。時期については、本地点の東隣に位置する第14次調査を参考すると、11世紀代に遡る可能性が高い。

<7層> (古墳時代)： 黄灰褐色砂質土を基調とする土層で上下層とは明瞭に分離される。黄白色砂の包含率が高く、鉄分の比着も特徴的である。上面のレベルは標高0.4~1mで高低差は0.6mを測る。高位部と中間部（標高0.7m）の差は0.3mであり、低位部には0.3mの落ち込みが確認される。地形は<6層>と同様である。土層の厚さは0.1~0.15mである。出土遺物の量は13号ポリ袋1袋程度である。<6層>と同様に少量で小形片の状態であるため詳細は不明であるが、弥生時代後期~古墳時代初期の土器片が僅かに確認される。遺構は地形が低い調査区西端部で畦畔が一部で検出された。飛鳥期に下る可能性も残す。

<8層> (弥生時代後期~古墳時代初期)： 暗褐色粘質土を基調とする土層で上下層と明瞭に分離される。地点によって色調の濃淡の違いでa~c層に細分されるが全体に共通性が高い。上面のレベルは標高0.3~0.85mで高低差は0.55mを測るが、中間部（標高0.6m前後）とは0.25m程度の差となる。また、<7層>と同様に低位部（同0.3~0.5m）では0.2m程度の落ち込みが認められる。本層上面に形成された畦畔の高まりによる数値の上昇を考慮すると、北端部が高く南端部~南西部が低い地形の中でも、全体としては比較的平坦な状態が予想される。土

層の厚さは0.05～0.1mである。出土遺物の量は13号ポリ袋1／3弱程度で、いずれも小～細片である。その中には弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が含まれる。調査区全域に畦畔・溝が確認されており、同時期における水田畦畔あるいは耕作土を形成する土層と考えられる。

<9層> (基盤層)： 黄灰色粘質土を基調とする土層である。上層と明瞭に区別される。上面のレベルは標高0.2～0.9mで高低差は0.7mを測るが、高位部(標高0.7～0.9m)と中間部(同0.5～0.6m)との差は0.2～0.3mとなる。一方、低位部(同0.2～0.4m)では、さらに0.3～0.4m落ち込む。こうした状況は<8層>と共通する。土層の厚さは0.05～0.1mである。遺物は13号ポリ袋1／4弱程度が出土したのみである。いずれも細片であるが、弥生時代後期の土器片が確認される。こうした遺物は本層の上面調査に伴うものであり、本来は弥生時代の基盤層と判断される。

<10層> (基盤層)： 灰色シルト層である。調査区南壁では上部に黒色～暗色シルト層が確認される。厚さは0.04m前後であり湿地環境を示す。上面のレベルは標高0.2～0.65mで、高低差は0.45m程度を測る。ただし、標高0.2mを測る西壁中央部の落ち込み部を除くと、高低差は0.2m前後である。南側～西側が低い傾向はあるが、全体的には高低差は少ない。遺物は出土していない。弥生時代の基盤層である。

3. 地形復元

前項の層序の内容を踏まえると、本地点では、弥生時代以降一貫して、北端～東端が高く南～西端が低い地形が東西にのびる状態であったことが復元される。その中で、地形に多少の変化が生じる時期を勘案して、土地利用がなされる前の<10層>段階、弥生時代～古墳時代の<9～7層>段階、中世の<6～4層>段階にまとめて説明する(図12)。

<10層>段階： 人間活動が確認されない段階である。データをとれた地点は少ないが、本来の自然地形を考える上で注目したい。本段階では、西壁中央部(41ラインのCG～CKライン間)付近に最深部(標高0.2m)を有するやや低い部分(同0.4m)が調査区西端～南端に広がる。それ以外の場所は標高0.5～0.6mの高さに収まる。低位部との高低差は0.1～0.2mとなる。こうした状況から、数値の高い調査区北側～東側は、高位部というよりは緩やかな高まり程度のものであったと判断される。

つまり、南西部にやや深い低位部ラインが想定されるが、北から南へ、そして東から西への傾斜傾向を有する緩やかな安定した地形の広がりか東西に走る状態が復元される。

<9～7層>段階： 水田が営まれる弥生時代～古墳時代の段階である。本段階には、高位部と中間部の高低差が0.2～0.3mに広がる。そのため高位部は、特に高い部分が一部に認められる。その広がり、調査区北端(CD～CEライン)周辺から同東端(20ライン)の北半(CHライン以北)周辺におよぶ。そして、高位部でもやや低い広がり、調査区東端の南半(CI～CKライン)付近、そして、調査区中央部(33ラインのCGライン以北)に確認される。

一方、低位部は、<9層>では前段階と同様に、調査区南西端(CLライン以南、41ライン以西)に広がり、その中で、調査区西壁(41ライン)中央部(CG～CLライン)に落ち込みが踏襲される。各層を通して0.2m程度が周囲から下降しており、北西から南東方向の流路状の深みが想定される。その最深部は、<9層>段階では、南壁(CLライン)の西端(43ライン)付近まで広がっており、河道状の規模があった可能性が考えられる。その後、<8層>段階にはその幅を狭めている。

以上のように調査区北端～東端が高く同南端～西端に下がり、特に南西部が低いという地形の中で、調査区の中央部は、北西部(CGライン以北)がやや高い状態を保つ。全体としては緩やかな起伏で安定した状態が復元される。本段階には、特に<8層・9層>上面に大小の畦畔や高まりを残しており、自然地形を踏まえつつ、そうした人為的加工と有機的に結びついた地形が創出されたと考えられる。

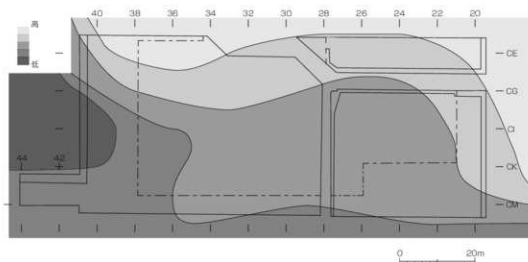


図12 <6～4層>段階の地形復元図（縮尺1/1000）

<6～4層>段階： 耕作地から屋敷地へと変化する中世段階に対応する。北側あるいは東側が高く、西側あるいは南側が低いという基本的な地形は、前段階の状態が踏襲される。その中で、地形の高低差や広がりなどに変化が確認できる（図12）。

高位部と中間部の高低差は、最終段階の<4 a層>を除くと0.3～0.4mを測る。比高差は前段階より大きくなっており、両域が明瞭に分離される状況が予想される。高位部は、調査区北半から東端において範囲を広げ、東端部（20ライン）では、南側のCK～CLライン付近まで広がり、東側の第14次調査地点へと続く。また西に向けては、21～22ライン付近におよぶことが予想される。調査区北端では、CF～CGライン以北で、西端は40ライン付近で姿を消す。北側に回り込んでいくことが予想される。こうした状況を受けて、調査区北西部では急峻な地形の傾斜が生じている。一方、中間的レベルの空間は、調査区南半部を中心に広がりを見せる。北側域から一段低い状態であったと理解される。低位部は調査区南西端部を中心に広がる。最深部は、同西端中央部（CG～CKライン）に確認される。<5層・6層>の段階では、低位部は、その東に向けても広がりをもつことが予想される。一方、<4 b層>段階の低位部域は縮小しており、調査区西端中央部にのみ確認される。さらに<4 a層>段階には最深部も消失して浅い凹み状に変化し、中間部との比高差は0.15m程度となる。高位部と中間部の比高差も0.25mに縮まり、比較的平坦な地形が全体に広がる状態へと変化する。北～東側が高い地形は踏襲されるが、ほとんどの地点が標高1 m以上となる。

<4 a層>の地形は<3層>へと引き継がれる。

以上のように復元される地形は、各層上に形成された各種の遺構群の構築に伴って土地が加工された結果の姿である。自然地形そのものではないが、集落景観を考える上で参考となろう。

註

- (1) 吉留敏敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (2) 山本悦世編 1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- (3) 岩崎志保編 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- (4) a 松下武彦・山本悦世編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
b 山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

第2節 弥生時代～飛鳥時代の遺構・遺物

1. 弥生時代後期～古墳時代初頭

検出層は<9層>と<8層>である。本時期に属する遺構は、<9層>では土坑4基・円形高まり2箇所・円形溝群1箇所・畦畔・溝15条、<8層>では畦畔・溝4条である(図13)。各遺構の時期は、<9層>に属する遺構が弥生時代後期、<8層>に属する遺構は同後期～古墳時代初頭の可能性が高い。<9層>によって形成される畦畔に対応する耕作土は<8層>である場合が多いこと、加えて畦畔の位置が<9層>畦畔と密接な関係を有していることなどから、両畦畔には高い連続性を窺うことができる。

以下、個別遺構の説明に当たっては、<9層>と<8層>をあわせて記載する。

a. 土坑

<9層>上面において、調査区の東北部に土坑1・2、東南部に土坑3が検出された。土坑4は調査区中央部に位置する。検出面は明確ではないが、溝3bと同一面であることや土坑1・3と共通する形状から、本時期の土坑として報告する。いずれも小規模で、埋土にも際立った特徴を見いだせない。また、遺物も出土していないが、検出土層の時期から弥生時代後期の可能性が考えられる。

土坑1(図13・14・19、図版1・3)

構内座標CD21区に位置する。土坑の北半は上部を後世の擾乱で削平されていたため、検出レベルは南側で標高0.78m、北側では同0.62mとなった。そうした状況において、上面は0.77m×0.67mの楕円形、底面は標高0.46mに位置し、径0.3m×0.36mの円形を呈する。深さは0.32mを残す。掘り方は、北側の傾斜が緩やかで底部は南側にやや偏るが、逆台形を基本とする。埋土は三層に分層されるが、淡灰褐色砂質土の1層に対して、暗い色調で粘性をもつ2層と3層は類似性が高い。2層は鉄分や淡灰色粘土ブロックの包含が多く、3層では下層に灰白色細砂の混入が指摘される。

土坑2(図13・15・19、図版1・3)

構内座標CD26区に位置する。土坑の北東部分を擾乱によって消失している。検出レベルは標高0.65mで、短辺は1.34m、長辺は1.1mを残す長楕円形の土坑が復元される。底面は標高0.38mに位置し、深さは0.27mとなり、長辺0.7m、短辺0.47mの長楕円形を呈する。掘り方はすり鉢状を呈する。埋土は二分され、下層に向けて粘性を高める。いずれも鉄分の沈着が顕著である。

土坑3(図13・16・19、図版1・3)

構内座標CK23区に位置する。土坑の南端部は破壊されており上面を確認できない。検出レベルは標高0.62～0.65mで、底面は標高0.35mに位置する。上面は1m×1.05m、底面は直径0.8mの円形を呈する。深さは0.3mで、箱形の掘り方を有する。埋土は三分される。いずれも粘土ブロックを含むが、特に2層に多い。また1層には砂のブロックも認められる。上層から下層に向けて粘性を強め、色調も暗灰色へ変化する。

土坑4(図13・17・25)

調査区のほぼ中央部、CI28地点と同29地点のほぼ中間に位置する。後述する溝3bの北1mの地点において、同一面で検出された。上面は標高0.65m、底面は同0.37m、深さは0.28mを測る。規模は、上面で0.95m×0.75m、下面は0.65m×0.42mで、いずれも楕円形を呈する。掘り方は逆台形を呈する。埋土は上下に二分される。いずれも粘土ブロックを多く含み、灰色を基調とする層である。下層に向けて粘性を強め、色調も暗色へ変化する。上層は鉄分の沈着が顕著である。

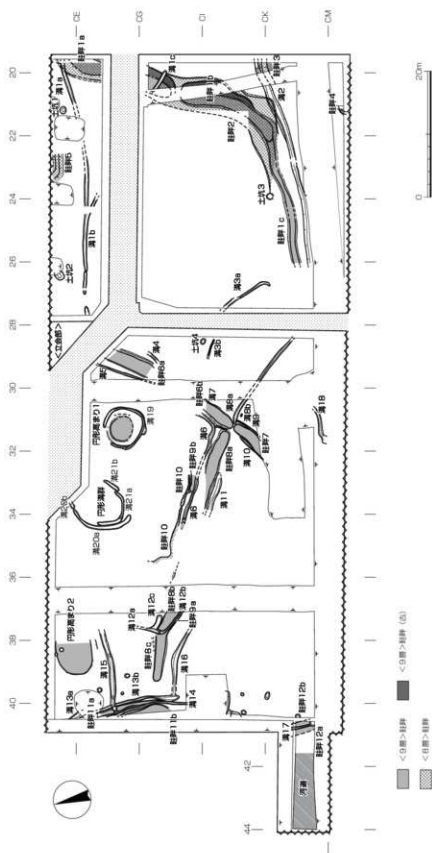
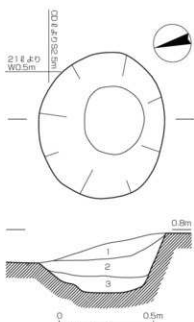
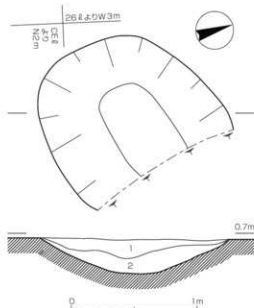


図13 弥生時代～古墳時代初頭遺構全体図 (縮尺1/600)



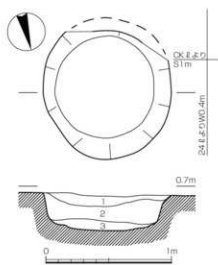
1. 淡灰色砂質土 (Fe)
2. 黒灰色粘質土 (淡灰色粘土ブロック、Fe多)
3. 黒期褐色粘質土 (淡灰色粘土ブロック多、炭、灰白色細砂)

図14 土坑1 (縮尺1/20)



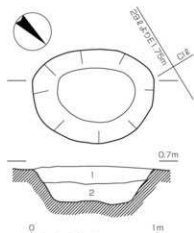
1. 黒期褐色粘質土 (粘土ブロック、Fe多)
2. 淡青色シルト (粘土ブロック、Fe多)

図15 土坑2 (縮尺1/30)



1. 黒期褐色粘質土 (淡灰白色粘土ブロック、砂ブロック)
2. 黒期褐色粘質土 (暗黄白色粘土ブロック多)
3. 黒期褐色シルト (黒期褐色粘土ブロック)

図16 土坑3 (縮尺1/30)



1. 淡灰色粘質土 (白色粘土ブロック過多、Fe多)
2. 暗灰色シルト (褐色粘土ブロック過多)

図17 土坑4 (縮尺1/30)

b. 水田畦畔と溝

畦畔を形成する土層は<9層>と<8層>である。平面的に比較的良好に検出されたのは<9層>を高まりとする畦畔の広がりである。それに対して、<8層>の畦畔は、調査区東側の25ライン以東の他には、調査区中央部の32～36ライン付近の小規模なもののみである。ただし、調査区断面の複数の箇所が高まりが確認されることから、本来は、<9層>畦畔と同様に全域に広がっていたと考えられる。こうした畦畔の上部には<6層>ある

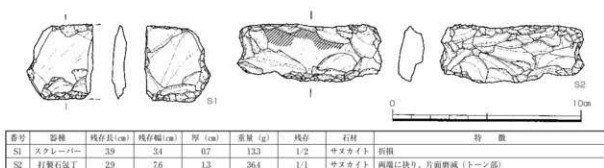


図18 <8層>出土遺物（縮尺1/2）

いは<7層>・<8層>が堆積する。本時期の遺構は、<6層>形成時の土地造成で大きく破壊されているが、それ以前にも畦畔部に削平が及んだと理解される。

<9層>を高まりとする畦畔分布（図13） 調査区全域に残存する。比較的規模の大きい畦畔は南北方向に3列（東から、畦畔1 a・b、同6・7、同11・12）、そして東西方向に1列（東から畦畔1 c、同8）の配置が確認された。CJ31地点付近では、畦畔6～8そして溝8が四方から集まり水口を挟んで交点を形成する。CEライン付近の溝1とCKライン付近の溝2を水田の境に加えると、南北に3面、東西に2面の広がりを見ることができ、東西の畦畔の間隔は東西が44m～55m程度、南北は両溝の距離から35m程度と予想される。本畦畔に伴う耕作土とみられるのは<8層>が中心であるが、一部で<9層>由来の堆積層が確認される。

<8層>を高まりとする畦畔分布（図13） 平面的に検出されたのは南北方向の畦畔2と東西方向の同5・10である。その多くは後世の削平によって消失あるいは上部を失っており、平面的検出は限定的である。ただし、<8層>上面検出の溝の配置あるいは本層対応の畦畔2が<9層>の畦畔1に重複する点などを考慮すると、本来は<9層>畦畔とその分布域を共有していたと考えられる。

一方で、<9層>畦畔とは異なる点も指摘される。畦畔5・10は<9層>畦畔の位置より若干北側よりであり、<8層>に対応する溝15には<9層>の畦畔は確認されていない。

<9～8層>水田の利用時期 <8層>と<9層>の両畦畔の位置は関連性が高く、また<9層>畦畔に対して<8層>がその耕作土として利用されている点などから、両層間には連続的な利用を考慮することができる。時期は出土遺物から、遅くとも弥生時代後期前葉から古墳時代初頭と考えられる。その間、水田面区画の拡大化や水路の付け替えなどの再編があったことが予想される。

出土遺物は、後述する畦畔あるいは円形溝群に伴う遺物のほかに注目されるものとして、石器2点（図18、図版47）があげられる。石包丁とスクレイパーで、いずれも<8層>から出土している。

<8層><9層>に対応する溝 溝の掘削面は<9層>と<8層>上面に求められる。<8層>上面に属する溝は溝1 b・溝1 c・溝5・溝15である。溝3と16は明確な手がかりを得られないが、それ以外は全て<9層>に属する。いずれも水田畦畔と強く関連することは、その位置や形状から明白である。溝から出土する遺物は僅少で小細片であるが、包含層あるいは畦畔に伴う出土遺物から、<9層>に属する溝は弥生時代後期前葉、<8層>に属する溝は古墳時代初頭に下る可能性が高い。

以下、畦畔との関連が強い溝1～18については畦畔とあわせて説明する。

畦畔1～5と溝1～3

畦畔1（図19・20、図版1）

<9層>の高まりで形成される。調査区の26ライン以東に位置する。配置や形状から便宜的にa～cに分ける。

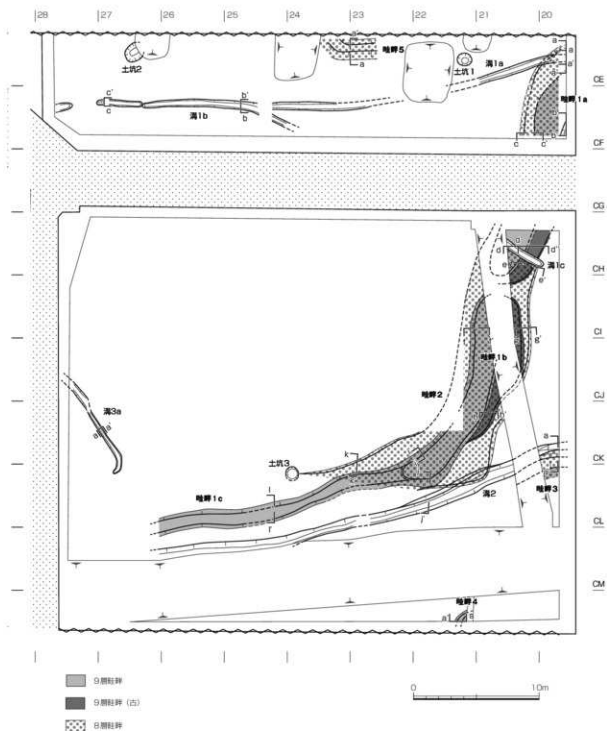


図19 弥生時代～古墳時代初頭遺構全体図-東半- (縮尺1/300)

調査区北東隅から南西方向に走り(畦畔1 a・1 b)、CK22地点付近から西方向に折れ曲がって26ラインまで(畦畔1 c)が検出された。26ライン以西は調査次の違いや攪乱等で確認できない。畦畔1 aと同1 bは、CHライン付近で途切れており、水口を形成した可能性が考えられる。畦畔1 cは同1 bと連続するものの、西への方向転換や規模の縮小という点で違いが指摘される。〈9層〉畦畔の上部には、〈8層〉あるいは〈6層〉が堆積しており、特に時代が断絶する〈6層〉が堆積する畦畔1 a 南半～同1 b部分については、上部削平の大きさを考える必要があろう。また、畦畔1 a・1 bでは、耕作土を示す〈8層〉の下部に、わずかに〈9層〉畦畔の高まりを残す部分が認められる。〈9層〉由来の〈8 d層〉が〈8層〉下部に薄く堆積しており(図20-e・g・h断面)、古段階の畦畔の存在を示す。

畦畔1 a・1 b 新段階: 畦畔1 aの上面の高さは標高0.9m前後、下面は同0.8m前後、高さは0.1m前後が主体をなす。幅は2.2m程度が復元される。畦畔1 bの上面の高さは標高0.85～0.9m、下面は0.75m前後、高さは0.15m前後が中心である。幅は2m程度であるが、南端の屈曲部付近では下面で3mに広がる。畦畔1 aと比較すると、規模は共通しており連続性も高い。ただし、レベルの点では0.05m程度下降する。

畦畔1 a・1 b 古段階: 畦畔1 a 南半から同1 bの部分において〈8層〉耕作土下面において検出される(図20-e・g・h断面)。畦畔形成期に近い段階の畦畔痕跡と理解される。上面は標高0.75～0.8m、下面は同0.7m前後に位置する。残存する高さは0.1m～0.05mと全体的に低い。幅は3～4mが予想される。

畦畔1 c: 上面の高さは、東半で標高0.75m前後を測るが、西端では同0.68mへと下降する。下面も同様に、東側で標高0.65～0.7m、西側では0.6m前後であり、同様の傾向を裏付けする。高さは0.1m前後を測る。幅は上面で1m程度、下面で1.4～1.45mである。耕作土を構成するのは〈8層〉である。古段階の痕跡は確認できないが、本畦畔の幅が畦畔1 a・1 bの1/2程度である点、あるいは〈9層〉対応の溝と1m程度離れている点からして、上層の耕作によって南側が削平された結果の姿と考えることも可能であろう。

畦畔1 について検討すると、北東から南西に向けて下降する傾向が指摘される。畦畔1 aから同1 bでは上面レベルの差は0.05m、そして下面レベルでも数値が下がっており、北から南への緩やか傾斜が示される。さらに、畦畔1 cに向けては、畦畔1 bの南端から畦畔1 c 西端へ約0.2m下降する。こうした状況から、特にCKライン以南そして西に向けての地形の傾斜が大きいことがわかる。これは、北側あるいは東側の高い地形に沿って畦畔が形成されたことを示すものであろう。

畦畔2 (図19・20、図版1)

24ライン以东において、畦畔1の上部に重複する。〈8層〉で形成されるが、上部は〈6層〉によって大きく削平された部分も多い。そのため、畦畔1 a 北半と同1 c 上部のように〈8層〉を高まりとする畦畔(図20-a～e・g・k断面)がある一方で、〈9層〉上に削平が及ぶ部分については、〈8層〉と〈9層〉による高まりとなる(同-e・j断面)場合も確認される。この場合、両層が一つの畦畔を構成したのか、あるいは削平の結果〈9層〉が現れたのかの判断は難しい。

畦畔のレベルは、北端上面が標高0.98m、下面が同0.85～0.9mであるが、南側の上面は標高0.85～0.9m前後、下面は0.75～0.8mまで下降する。高さは0.1～0.07m程度である。幅は、残存状況が悪いため確定できないが、2～4m程度の可能性が求められる。〈9～8層〉の中で最終段階の畦畔であり、時期は古墳時代初頭と判断される。

畦畔3 (図19・20)

CK20地点付近の調査区東壁において確認したのみである。溝2の南側で〈9層〉の高まりが畦畔を構成する。上面は標高0.85～0.88m、下面は同0.68mに位置する。高さは0.2m程度である。畦畔の幅は後世の攪乱によって南側が消失しているため確認できない。〈8層〉が耕作土に対応する。畦畔上には〈6層〉が堆積しており、上部の削平が予想される。上面レベルは近接する畦畔1 bと共通し、下面レベルは同じCKライン以南の畦畔1 cの値に含まれる。畦畔1の新段階と同時性が高い。また、〈8層〉の高まりの畦畔が存在した可能性も考えられる。

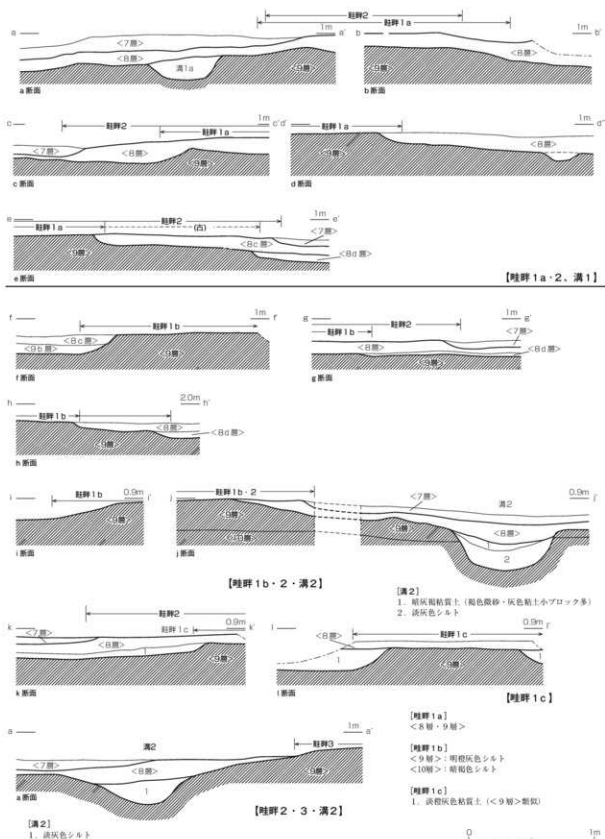


図20 畦畔1～3と溝1・2断面 (縮尺1/30)

畦畔4 (図19・21、図版4)

CM21地点の南側、調査区南端で検出されたが、ほとんどの情報は南壁断面から得ることとなった。概ね東西方向を示す可能性が高い。<9層>の高まりが畦畔を構成する。上面は標高0.63m、下面は西側が同0.53mで東側は同0.6mを測る。西側に<8層>対応の耕作土が堆積しており畦畔1新段階に対応するが、東側には<9層>由来の耕作土が薄く確認されることから古段階の痕跡と理解される。その幅は上面で0.1m下面で0.25m程度の小規模なものである。新段階には本地点から東側が高まりとなっていると考えられる。その高さは0.1m前後である。

畦畔5 (図19・22)

CE23地点の北側、調査区北端付近で検出された。<8層>の高まりで形成されており、畦畔2と同時期と考えられる。平面調査は限定的であったため正確な方向は確定しがたいが、概ね東西方向を示す。上部には<6層>が堆積する。上面は標高約1m、下面は同0.85~0.9mに位置し、高さは0.15m程度を測り、畦畔2と共通した数値を示す。幅は上面で0.45m・下面で1.3m程度である。

以上の畦畔1~5に関連するのが、溝1~3である。

溝1 (図19・20・23、図版1・3)

調査区北東部に位置する。CEライン付近を東西に走る溝として検出したが、土層断面の検討から<8層>と<9層>にそれぞれ属する2条の溝が24~25ライン間以西で重複し、以東においては上層の溝が南東方向へ方向を変えて分離することが判明した。<9層>に対応する溝を溝1a、<8層>に対応する溝を溝1b、そして、溝1bとは離れているが、その延長上に位置する溝を溝1cとして報告する。

溝1a： 検出面は<9層>である。調査区東壁では畦畔1aの北端に接する(図20-a断面)。CE22地点付近以東は北東-南西方向であるが、同以西では東西方向に緩やかに変化する。24ラインから約2m西付近で、溝1bに吸収されて姿を消す。上面は標高0.75~0.85m、底面は同0.63m位置する。深さは約0.2mである。底面は若干平坦面を残す部分もあるが、概ね丸みをもつ碗状を呈する。調査範囲では底面の高低差をほとんど確認できない。埋土は暗灰褐色粘質土で、やや粘性を有する。粘土粒や鉄分の包含が確認される。

溝1b： CE24地点付近以西は東西方向に、そして同地点からは向きを変えて南東方向に伸びて24ラインまでを確認した。西側では、27ライン付近で平面的には途切れる部分があるが、攪乱の存在などを勘案すると、本来は連続していたと考えられる。上面と底面の標高は東側で標高0.8mと0.63m、深さは0.17m、西端では同約0.7mと0.47mで深さ0.23mである。底面レベルは、西に向けて約15mの距離で0.16m下降しており、西への傾斜を示す。

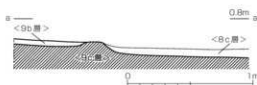


図21 畦畔4断面 (縮尺1/30)

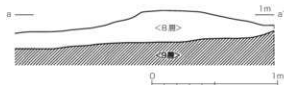


図22 畦畔5断面 (縮尺1/30)

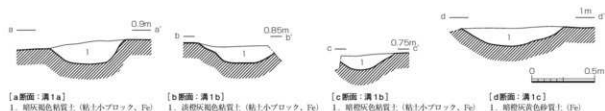


図23 溝1断面 (縮尺1/30)

幅は0.6mを残すが、本来は0.67m程度が推定される。溝1 aよりはやや幅が広い。埋土は、溝1 aと大きな違いは見いだせないが、鉄分の影響によって橙色を帯び、やや明るい色調で粘性をもつ土層である。底部は碗状を呈する。溝1 aとの関係は、その重複位置や規模そして埋土などの共通性から、同じ機能をもつ溝が連続的に利用されたと評価される。共存する畦畔は確認されない。

溝1 c： 溝1 a・1 bとは離れてCG20区で検出された。北西-南東の方向を示し、北西方向の先で溝1 bにつながる位置にあたる。<9層>の畦畔1 aおよび<8層>の畦畔2の上部を切り込む。溝1 bと同じく<8層>に対応する。上面は標高0.92m、底面は同0.78mで、深さは0.14mを測る。上面の幅は0.6mである。底面は碗状を呈す。埋土は暗橙灰黄色の砂質土である点や畦畔上で比較的高い位置にある点は、溝1 a・1 bとやや異なるが、形状面では共通性が高い。溝1 bが東にレベルを上げるとすると矛盾はないかもしれない。

溝2 (図19・20、図版1・3)

CK20地点付近からCL26地点方向に向けて走る。<9層>に対応する溝である。上面は標高0.65mに位置する。碗状を呈する底面のレベルは、調査区東端部では同0.42mで深さ0.23m、中央部では同0.34mで深さ0.31mを測る。北東-南西の方向で西に向けて下降する。幅は0.8～1mであり、本時期においては比較的大きい溝である。埋土は灰色を基調とし、粘性を有する下層とやや褐色を帯びて砂の包含が確認される上層とで構成される。

本溝との位置関係から関連性が予想される畦畔は、本溝の南側に下端が接する畦畔3と、北側に1.5m前後離れて本溝と平行して走る畦畔1 cである。いずれも<9層>の高まりをもつ畦畔であるが、断面観察(図20-j断面、同一溝2のa断面)から、耕作土対応の<8層>が、本溝の上部を覆っているため、直接対応することは考えられない。しかし、水田耕作の継続性を勘案すると、関連性を強く示す位置関係から、前身となる畦畔が存在したことは十分に想定される。本溝と平行する畦畔1 cは、2m程度の幅をもつ畦畔1 bが幅を狭めた状態ともいえる畦畔である。前述したように、上層の形成時に畦畔の南側肩部がカットされた結果、本溝と畦畔間に距離が生じたと理解することも可能であろう。本溝の脇に畦畔1 cの前身となる高まりがあったと考えたい。

また、こうした状態は前述の溝1でも共通しており、同溝とは立地レベルは異なるが、同一方向にある点からも、重要な水田区画ラインとして、地形的に高位部にあたる北側に溝1 a、低い南側に本溝が配されたと評価される。両溝間の距離は33～35mである。

溝3 (図19・24・25)

調査区中央部、CI・CJ26～28区で検出された。北西-南東の方向が想定される。調査区中央に残る共同溝を挟んで、東側を溝3 a・西側を溝3 bとする。<9層>上面で検出したが、<8層>上面まで遡る可能性は残る。平面的にも小規模な溝3 bの情報は乏しいため、溝3 aでその内容を代表することとする。上面は標高0.56m、底面は同0.47m、幅は0.35mを測る。碗状を呈する底面までの深さは0.09mである。埋土は黒褐色粘質土で粘性をもつ。近接する畦畔は確認されないが、溝8と11m程度の間隔で平行する位置関係がみとれる。

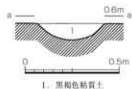


図24 溝3 a断面 (縮尺1/20)

畦畔6と溝4～7

畦畔6 (図25～28、図版2・4)

CF29地点からCJ31地点の位置で検出された。北東から南西に走る。ただし、中央部が攪乱で大きく消失しているため、北側を畦畔6 a・南側を同6 bとして報告する。いずれも<9層>の高まりで形成されている。前者は北に向かって延びていくが、後者は南端部をCJ31地点付近で丸く収束し水口に臨む。いずれも<8層>対応層を耕作土とする。畦畔6 a上部には<6層>が堆積するのに対して同6 bでは<7層>が上部を覆う。

上面は畦畔6 aで標高0.8m、同6 bでは同0.74～0.8mである。下面はいずれも同0.65m前後に位置する。高さ

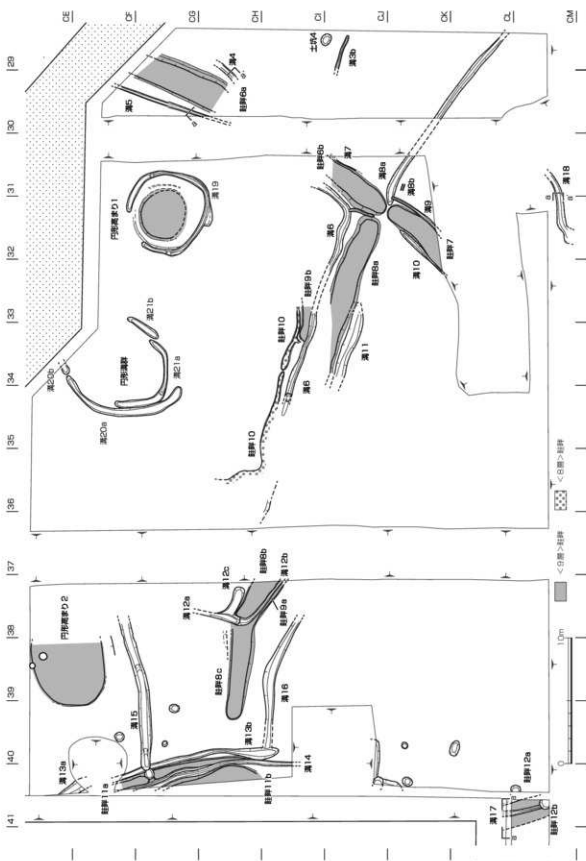


図25 弥生時代～古墳時代初期遺構全体図一西半一(縮尺1/300)

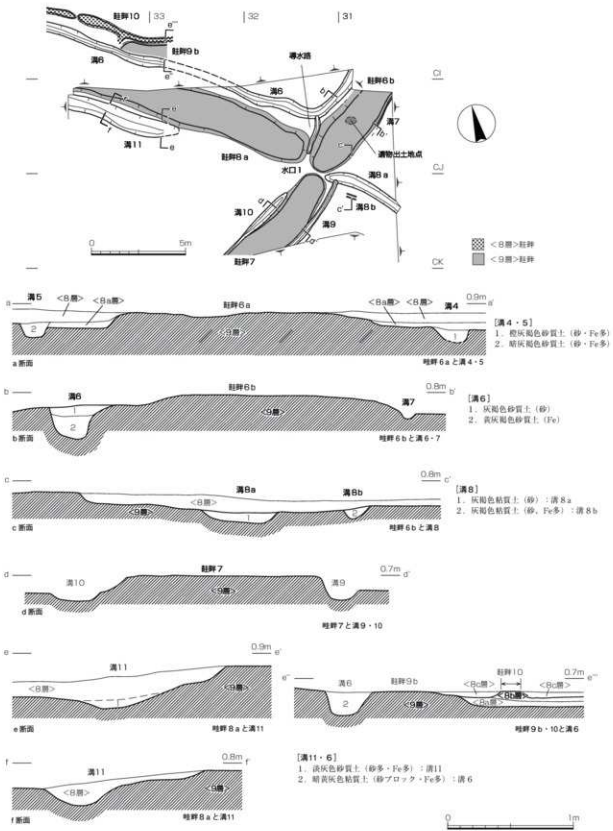


図26 畦畔6～10・溝4～11断面 (縮尺1/200・1/30)

は前者では0.15m、後者では0.15m前後を残す。幅は畦畔6 aで上面2.3m・下面2.9m、同6 bではやや幅を狭めて上面1.6m・下面2.2mを測る。

本畦畔には弥生土器が共存する。畦畔6 bの南端にあたる水口から北へ3mの位置で、大鉢1個体が畦畔上面につぶれた状態で出土した(図27・図28-3)。土器の出土レベルは上部で標高0.9m程度、最下面で同約0.8mである。畦畔部に掘り込みなどの痕跡は確認できないが、その出土状態から畦畔上に何らかの意味をもって置かれたものと推定される。その他に、甕や器台の破片が出土している(図28)。時期は弥生時代後期前葉に属すると考えられ、畦畔使用の一時期を示すものであろう。

畦畔の両脇には、畦畔6 aでは溝4・5、そして同6 bでは溝6・7が検出された。溝の掘削面が<8層>に対応する溝5以外は全て<9層>上面である。こうした畦畔脇の溝と本畦畔が、一連のものであったことは明らかである。

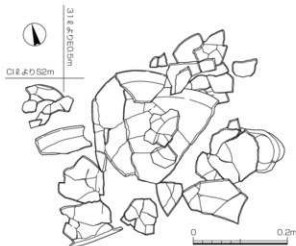
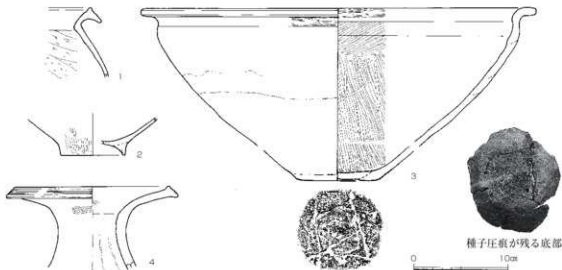


図27 畦畔6 b上の遺物出土状況(縮尺1/8)

溝4(図25・26)

調査区中央北よりに位置する畦畔6 aの東側、CG29区において確認される。平面での検出は困難であり、ほとんど断面観察から情報を得た。溝の上部は耕作土に対応する<8層>で覆われる。上面は標高0.64m前後、底面は同0.5mで、深さは約0.14mを測る。幅は0.4mが想定される。埋土には鉄分が非常に多く沈着し橙色が強い色調を呈する。砂をラミナ状に包含する点も特徴である。畦畔6 a下端とは約0.5m離れているが、本溝が機能した時期に対応する畦畔の東肩部が上層によってカットされた結果と理解される。



番号	器種	法量 (cm)	残存	手法・形態地	胎土	色調・内面/外面			
1	甕	—	—	(口) 横ナデ(外) 縦ハケ目、口縁部沈線4条、唇部に厚線	黒砂・青	橙紅			
2	鉢	—	—	(外) 底ミ字、横溝	黒砂・赤色粒	橙白			
3	鉢	42.0	17.0	8.6	E1.2破片/1	1.3	(内) 底ミ字・底ミ字+(口) 横ナデ・底ミ字/底ナデ、外面沈線、底面内面に種子圧痕2	黒砂	橙紅・赤紅
4	器台	18.2	—	—	1.4	(口) 横ナデ(内) ナデ・縦リ目(外) 縦ハケ目、横溝、口縁部沈線4条	黒砂・赤色粒	赤紅・橙白	

図28 畦畔6 b出土遺物(縮尺1/4)

溝5 (図25・26)

畦畔6 aの西側、CE～CF29区に位置する。北東～南西の方向に走るが、畦畔6 aの方向とは若干異なる。検出面は同畦畔の耕作土に対応する<8層>類似層の上面である。上面は標高0.7m、底面は同0.55mで、深さは0.15mを測る。幅は0.3～0.4mで底面の形態は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土で、ラミナ状に入る砂の包含と鉄分の沈着が顕著な点特徴である。上部には<8層>が堆積する。本来は、畦畔2と同様に<8層>によって形成される畦畔が本溝に接して形成されていた可能性が想定される。

溝6と水口1導水路 (図25・26、図版4・5)

CH32～34区・CI31区で検出された。調査区中央に位置する畦畔6 b・8 aの北側を畦畔に沿って走る。本溝と両畦畔あるいは畦畔9 bとの位置関係には、比較的接した状態がみとれる。北東～南西方向のラインから、CIラインの南1.8m付近ではほぼ直角に曲がり北西に向かう。一部は後世の溝32の重複で破壊される。上面は標高0.7m～0.6m、底面は東側にあたる31～33ラインで標高0.44m～0.4m (図26-b・e断面)へ、さらに西端の34ラインで同0.31mへと下降する。深さは東側で0.26m、西側で0.2mを測るが、畦畔6 b上面からは0.35m、畦畔8 aからは0.4mの深さとなる。溝の幅は検出レベルの高い東側で0.5m、西側では0.38mである。底部形態はU字形～逆台形である。埋土は、東側では灰褐色砂質土を基調に上層では砂の包含が多く、下層では鉄分の沈着の多さから黄色を帯びる。西側ではやや暗い色調となり粘性を強めるが、砂をブロック状に含み鉄分の沈着が顕著である。基本的には東側の下層とつながると考えられる。

本溝の屈曲部には、畦畔6 bと同8 aの間隙部からの小規模な溝が連結する。水口1の導水路と評価される。導水路の下面レベルは、南側の水口1から北に向けて標高約0.58mから同0.5mへと下降する。そして、底面レベルが同0.44mの溝6にとりついており、水口1から溝6に水が流入する状態を呈する。畦畔下面からの深さは、最も深い北端で0.08mである。腕状の断面を呈す。幅は南側で0.23m、北側で0.3mを測り、溝6に向けてやや広がる。

溝7 (図26、図版4)

CI30区において、畦畔6 bの東側に沿って<9層>上面で検出された。上面は標高0.63m、底面は同0.59mに位置する。深さは僅か0.04mで上面の幅約0.1mが示すように、凹み状ともいえる非常に小規模な溝である。平面的にも1.5m程度しか残存しない。底部断面形態は腕状を呈する。埋土は<8層>と分離できない。畦畔6 bの脇をめぐる溝として溝6と対をなす溝である。

溝8 (図25・26、図版4)

畦畔8 aは<9層>上面で、CJ31地点付近からCL28地点方向に向かう状態で検出された。その間、30ラインを挟んで幅3m程度が後世の溝の掘削で消失しており、本溝は北西と南東部に分断される。方向は北西～南東で、畦畔6 bおよび同7と直交しており、北西端部は両畦畔が接する水口1部分で収束する。こうした位置関係から、畦畔6～8と密接な関連を有する溝と理解される。上面の高さは標高0.55m～0.6mである。底面は、西端の水口部でやや高くして標高0.48m、東端部では同0.41mを測るが、その間は概ね同0.45m程度である。北西から南東に向けて緩やかに下降し、その先に位置する溝2 (西端底面レベル：標高0.34m) に向かうと想定される。底面形態は皿状を呈し、深さは0.1～0.15m、溝の幅は0.5m前後である。埋土は灰褐色の粘質土であるが、砂がラミナ状に含まれている点特徴である。

本溝と共存関係にある畦畔は検出できないが、本溝から南に0.53mの地点で溝状の凹み (溝8 b) が、断面観察によって確認される (図26-c断面)。上面は本溝と同一面で標高0.6m、底面は同0.5mで深さは0.1m、幅は0.2mである。埋土は本溝と同じく灰褐色粘質土で砂がラミナ状に含まれる点も共通する。平面で検出されていないため慎重な評価が求められるが、溝8 aと対になって、その間に畦畔が存在した可能性も残る。

畦畔7と溝9・10**畦畔7 (図25・26、図版4)**

<9層>の高まりで形成される。畦畔6bと水口を挟んで南西方向に延びる。北端は丸く収束する。CKラインまで確認されたが、以南は後世の攪乱で消失している。上面は標高0.7m、下面は同0.57m前後に位置し、高さは0.13m前後を測る。幅は上面で1.55m、下面で1.7~1.8mである。下面のレベルは、畦畔6bより約0.08m低く、南方向への下降傾向を示す。耕作土は断面では確認できていないが、周辺の状況から<8層>が対応する可能性が高い。畦畔の両脇に沿って溝9と同10が検出された。その位置関係から本畦畔に付属すると考えられる。

溝9 (図25・26、図版4)

CJ31区で畦畔7の東脇に接して検出された。<9層>上面に対応する。本溝の北端部は溝8と連結した状態を示す。南西方向に走るが、南端は後世の溝で消失している。上面は標高0.58mである。底面は北側の水口付近で同0.54m、南端で同0.5mを測り、やや南へ傾斜する。深さは0.04~0.08m、幅は0.25~0.3mが残る。畦畔7上面からは0.2mの深さである。溝8と比較すると底面高は0.1m程度高く、深さ・幅の数値も全体的に1/2程度で小規模である。<8層>対応層で埋没する。

溝10 (図25・26、図版4)

CJ31区で畦畔7の西脇に接して検出された。畦畔を挟んで溝9と平行し対をなす。水口1から南に約1.5m付近から南西に向けて長さ約3m程度が残存する。後世の削平で多くが消失したことがうかがわれる。上面は標高0.56m、底面は北端部が同0.56mで他は同0.5mである。短い距離ではあるが、南に傾斜すると考えられる。深さは0.06mであるが、畦畔7上面からは0.2mとなる。幅は0.25~0.3mである。埋土は、溝9と同様に<8層>対応層と考えられる。埋土に加えて上下面レベルや規模など、多くの点で溝9と共通しており、一連の溝であったといえよう。

畦畔8~10と溝11~12**畦畔8 (図25・26・29・30、図版2・4)**

<9層>の高まりで形成される。耕作土は<8層>対応層である。畦畔6の南端部から水口を挟んで北西方向に39ライン付近まで伸びる。畦畔6・7とは直交する方向であり、溝8の走行ラインと一致する。東端部は丸く収束する。34~37ライン間は後世の溝によって消失する。また、38ライン付近で溝12によって区切られる。こうした分断状態を勘案して、消失部の東側を畦畔8a、西側を同8b、そして溝12を挟んで38ライン以西を畦畔8cとする。

畦畔8a~8cのレベルを比較すると、全体が東から西側にむけて下降し、加えて、畦畔を挟んで北側と南側で畦畔下面のレベルが0.05m前後の差で南側に低い状態にあることが確認される。具体的に数値を上げると、畦畔8a・8b・8cでは、上面は標高0.7~0.8m・0.6m・0.5m、下面は北側で同0.6m・0.55m・0.4~0.35m、南側で同0.55m・0.5m・0.35mとなる。畦畔幅は、いずれも上面が1.5~1.75m、下面は1.85~2mの範囲に収まる。畦畔高は、東端の畦畔8aで0.2~0.25mを保つが、それ以外は0.1m前後に留まる。

畦畔8a・8bの両脇には溝6・11・12が検出される。いずれの溝も<9層>上面に掘削面が求められる。畦畔の北側に沿ってめぐる溝6は畦畔6bの西脇から西に屈曲して、途中の攪乱部を挟んで溝12c方向に向かう。畦畔の南側では溝11が溝12bにつながる方向を示す。

畦畔9 (図25・26・29・30、図版2・5)

<9層>の高まりで形成される。上部には<8層>が堆積する。畦畔8a・bの両脇を走る溝の脇に形成された小規模な畦畔である。同畦畔の南側を走る溝12bの南脇に位置する畦畔を9a、北側の溝6の北脇に位置する畦畔を9bとする。畦畔9aは畦畔8cから連続的に伸びるが、規模が際だって縮小している点や溝との位置関

係から区別した。

a・b両畦畔のレベルは上面標高約0.6m・下面同0.48mであり、高さは0.1m程度が残る。畦畔幅は、畦畔9 aでは上面0.45m・下面0.75m、畦畔9 bでは同0.2m・同0.4mである。畦畔8の半分以下の規模となる小規模な畦畔であり、溝と水田面の境を区切る高まりとして、その性格は区別されよう。耕作土は<8層>対応層である。

畦畔10 (図25・26、図版2)

<8層>の高まりで形成される。33～35ライン付近に、畦畔9 bの北側に沿ってわずかに残存する。畦畔8とも平行する。西端は北側に折れ曲がる。高まりとして把握できるのは34ライン以東であり、それ以西については北側に向けてのわずかな段が確認されるのみである。上面は標高0.52～0.6m、下面は同0.5～0.55mに位置し、高さは0.02～0.05mである。畦畔の幅は上面で0.15m、下面で0.3～0.4mを測る。耕作土は<8層>に含まれる土層で構成される。畦畔のレベルや規模あるいはその位置などの特徴は畦畔9と共通しており、同様の機能を有する畦畔と評価される。

溝11 (図26、図版2・4・5)

CI33区を中心に畦畔8 aの南側に接して<9層>上面で検出された。上部を<8層>が覆う。東端部は33ライン付近で次第に浅くなり姿を消す。上部削平の影響が考えられる。西端部は34ライン付近で攪乱によって消失するため、残存する長さは約5mである。畦畔8 aを挟んで溝6と対をなす位置関係をもつ。上面は標高0.55～0.62m、底面は同0.46mで深さは0.16～0.09mを残す。畦畔8 a上面からは0.34mの深さである。溝の幅は0.6mを測り、溝6そして溝8と同様に、他の溝に比べると幅広で深い溝として理解される。埋土は<8層>に類似するが、e断面(図26)では淡灰色で砂を含む砂質土で鉄分の沈着も顕著である。

溝12 (図29・30、図版2)

CG37区を中心に畦畔8 b・8 c・9 aと接して<9層>上面で検出された。連続して一体をなす溝であるが、溝の深さ・方向・位置の点でa～cの3箇所に分けられる。溝の幅はそれぞれ異なる。溝12 aは最も底面レベルが低く、溝の方向が北東～南西を示す点で他と区別される。溝12 b・cは同aから南東方向に、畦畔8 bを挟んで平行して走る溝であり、底面レベルは近似する。畦畔8 b上面からの深さは0.15m程度である。

溝12 a部分は北端を攪乱で消失し、長さは約3mが残存する。上面は標高約0.5m、底面は同0.2mで、深さは約0.3mを有する。南端部は溝12 bの底面から段状に約0.3m落ち込

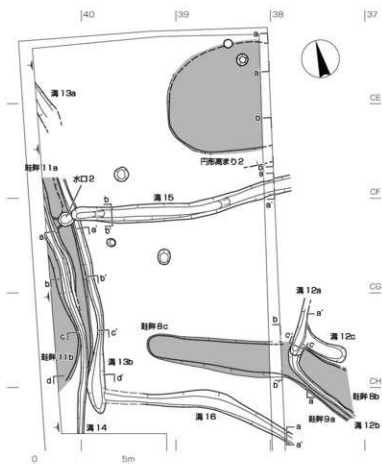


図29 畦畔8～9・11、円形高まり2、溝12～16 (縮尺1/200)

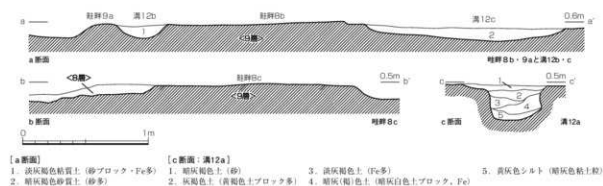


図30 畦畔8b・c・9aと溝12断面 (縮尺1/30)

む。溝の幅は、緩やかに開いた上面は0.65mであるが、掘り込み本体部では0.4mであり、下部に向けてU字形に掘り込まれる (図30-c断面)。埋土は、五層に分層されるが類似性は高い。1層は砂を多く含むが、下部に向けて粘性を強める。最下層の5層は基盤層である<9層>に類似する。3層には鉄分の沈着が顕著である。

溝12bの上面は標高0.6m、底面は同0.47m、深さは0.13mを測る。溝12aの南側で屈曲し南東方向に向かい37ライン付近で後世の溝で破壊される。残存する長さは約4mである。その延長線上には溝11が位置しており、同溝と底面レベルが共通することからも同一溝の可能性が高い。溝の幅は、溝12aにつながる部分が0.4m、そして、屈曲して南東に向かう部分が0.3mを測る。前者が畦畔8bと同8cを南北に区切る溝に、そして後者が畦畔8bの南脇をめぐる溝となる。いずれも畦畔に接した状態を示す。底面形態は碗状を呈する。埋土は溝12aの1層に対応しており、砂がブロック状に多く含まれる。また鉄分の沈着も顕著である。

溝12cの上面は標高0.55m、底面は同0.45m、深さは0.1mを測る。幅は0.7mで、底面形態は浅い皿状を呈する。同12aから南東に分かれて畦畔8bの北側の脇に接して長さ2.5mが検出されたが、その東端部は、底部の上昇とともに上部の削平によって消失した可能性が高い。埋土は砂をラミナ状に含み、溝12bと共通している。

溝の傾斜は、溝12aの低さを考えると、東から西へあるいは南から北への流れが想定できるかもしれない。

畦畔11と溝13~15

畦畔11 (図29・31、図版2・5)

<9層>の高まりで形成される。調査区西端のCF~CHライン付近で検出された。南北方向に走る。上面には<8層>が堆積し、耕作土も<8層>に対応層である。溝14を挟んで、東側を畦畔11a、西側を畦畔11bとする。

畦畔11aは南北約10mが検出された。北端から約2.5mの地点では、幅0.5~0.4m

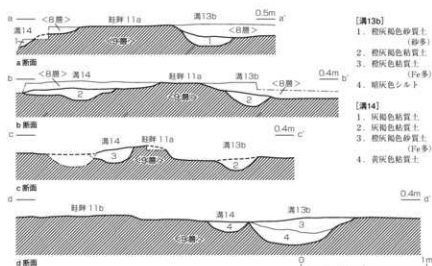


図31 畦畔11と溝13・14断面 (縮尺1/30)

の水口2によって畦畔は東西に二分される。上面は標高0.45mから0.32mへ、下面は同0.38mから0.23mへ、その高さを北から南に向けて下降させる。畦畔の高さは0.1m前後を保っていることを考えると、地形にあわせた変化と理解される。畦畔幅は、北端部が広くて上面0.75m・下面0.9m（図31-a断面）を測るが、南端（同-c断面）では0.3mまで狭まり、その先で姿を消す。これは、本畦畔の両脇を走る溝13と溝14の間隔が狭まり、本畦畔南端付近で接する状態に至ることに起因する。両溝は畦畔と同一面で検出されているが、必ずしも同時性を保証するものではない。特に畦畔の西側を区切る溝14の走行方向はやや東に振れており、畦畔南端を斜めに区切るかの状態を示す。同溝を境に分けた畦畔11aと畦畔11bは、本来は同一畦畔で大畦畔を形成していた可能性も考えられる。

畦畔11bは調査区端部であり、後世の擾乱などで詳細は不明な部分が多い。上面は標高約0.3mに位置する。畦畔の高さは0.04m程度、幅は1m以上が想定される。

溝13（図29・31、図版2・5）

調査区西端部にあたる40ライン付近において、CE～CHラインで検出された。＜9層＞での検出である。北端は調査区外、そして、CEライン付近は擾乱で消失する。その擾乱の北側の溝13aと南の溝13bでは、検出レベルや幅に違いが認められる。両溝は直接つながっていないが、位置的に同一溝と判断している。

北側の溝13aは長さ1.5m程度が検出された。本溝脇に畦畔は確認できなかった。上面は標高約0.5m、底面は同0.4mに位置し、深さは0.1m前後を測る。上面の幅は0.8mである。底面形態は椀状を呈し、埋土は＜8層＞対応層である。

南側の溝13bは畦畔11aの東側に接しており、同畦畔に伴う溝と考えられる。上面は北端部で標高0.38m（図31-a断面）、南半では同0.24m前後（同-c・d断面）、底面は前者では同約0.3m、後者では同0.05m（同-d断面）を測る。深さは概ね0.1m前後であるが、南端部では0.2mを残す。畦畔11上面から底面までは約0.16～0.2m、最も深い南端では0.25mを測る。底面形態は椀状を呈する。埋土は、全体的には＜8層＞との類似性が認められ、灰褐色を基調とし粘性をもつ傾向を有す。ただし、北端部にあたる1層では、砂をラミネ状に含み砂質を強める。また、鉄分の沈着によって橙色を帯びる。底面レベルの低い南端では粘性が高まり灰色のシルトへと変化する。上面の幅は概ね0.4m前後であるが、南端部では0.85mまで広がり、西側に走る溝14と層部を接する。

以上のように、本溝は北から南へと下降している中で、南端部の取東をどのように理解するかが問題である。同端部では深さは0.2mを保っており、上部削平による消失は考えにくい。同位置で本溝と接する溝16の存在に注目することも可能であろう。

溝14（図29・31、図版2・5）

調査区西端部、CF～CIラインにおいて溝13の西側に位置する。同溝との距離は北半では溝の中心間で約1.5mを有すが、南端付近では溝13と接する。南北両端は擾乱によって消失する。本溝の両脇には畦畔11が接する。同畦畔の説明でも述べたが、同畦畔を分割するような状態を呈している。＜9層＞において検出されているが、同畦畔と重複関係にあるとすると＜8層＞に属する可能性も残る。

上面の幅は0.35m前後で、検出レベルは北端部で標高0.38m（図31-a断面）、南端部では同0.25m（同-d断面）である。底面は前者で同0.28m、後者では同0.15mを測る。深さは概ね0.1m前後であるが、畦畔11上面から底面までは約0.15m前後を有する。底面形態は椀状を呈する。埋土は、＜8層＞に類似しており、灰褐色粘質土が中心であるが、南半のc・d断面では鉄分の沈着の影響で橙色を帯びる部分や、底面の低下で灰色を強めた埋土が確認される。以上のように、本溝を構成する諸要素の数値は溝13bと共通する傾向が強く、両溝の関連性の高さをうかがわせる。

溝15と水口2（図29・32、図版2・3）

調査区北西端部にあたるCE～CF38～40区周辺に位置する東西方向の溝である。38ライン付近以東は検出でき

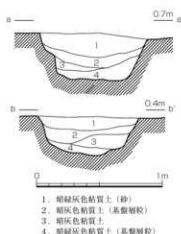


図32 溝15断面 (縮尺1/30)

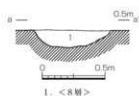


図33 溝16断面 (縮尺1/30)

溝13bとの関係を見ると、両者の切り合い関係は確認できないが、位置的には関連性の高さを窺うことができる。一方で、底面レベルは本溝が0.13m程度高く、一体的とは言いがたい。また、<9層>の畦畔と接する部分がない点は、<8層>上面に属する溝15と共通する。同溝とは南北に10~13m離れて、東西を区切るラインを構成しており、その位置からは関連性を考えることも可能である。<9層>から<8層>へ継続する水田経営のなかで、形成され利用されたとしておきたい。

溝13bとの関係を見ると、両者の切り合い関係は確認できないが、位置的には関連性の高さを窺うことができる。一方で、底面レベルは本溝が0.13m程度高く、一体的とは言いがたい。また、<9層>の畦畔と接する部分がない点は、<8層>上面に属する溝15と共通する。同溝とは南北に10~13m離れて、東西を区切るラインを構成しており、その位置からは関連性を考えることも可能である。<9層>から<8層>へ継続する水田経営のなかで、形成され利用されたとしておきたい。

畦畔12と溝17

畦畔12 (図25・34)

<9層>の高まりで形成される。調査区南西端のCL41地点付近で検出された南北方向の畦畔である。本畦畔の西側には河道に向かう地形の傾斜が確認されており、微高地の西端部付近を区切る位置にあたる。上面には<8層>が堆積しているが、耕作土も<8層>対応層である。畦畔の範囲内を溝17が南北に貫いており、それを境に東側を畦畔12a、西側を同12bとする。

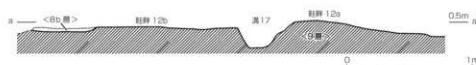


図34 畦畔12と溝17断面 (縮尺1/30)

ない。掘削面は<8層>に求められる。共存する畦畔は確認できない。

上面の高さは東端部が高くして標高0.55~0.6m (a断面)、38~39ライン間より西側ではやや下降して同0.35m~0.38mで安定する。底面は、前者では同0.22m、後者では2箇所で段状の落ち込みを形成しつつ西端部で同0.04m (b断面) に、そして最西端で同0mに至る。上下面ともに西に向けての下降が顕著である。深さは東端で0.35m、西端で0.35~0.38mを測る。溝の幅は上面で0.8~0.85m、底面で約0.6mである。底面形態は箱形を呈する。以上のように、他の溝とは比較的規模が大きく深い溝として区別される。埋土は暗灰色粘質土を基調とする。1層は砂をラミナ状に含む点、そして2層・4層には基盤層がブロック状に含まれる点で、それぞれ分層される。

溝の西端部は、畦畔11の水口2を通して西側の溝14へとつながる。底面の高さは、本溝から水口・溝14に向けて、標高0mから同0.2m、そして同0.25mとなる。本溝側は、水口を挟んで深みが形成されている状態と理解される。こうした遺構の関連性を評価すると、溝15は<8層>に属する可能性が高くなる。

溝16 (図29・33、図版2)

<9層>上面で検出された。調査区西端付近、CH38・39区で畦畔8および同9aの南側に平行して走る。本溝と畦畔の距離は中心軸で2.5m、層部で1~2mの間隔を有す。38ライン以東は検出できていない。西端

畦畔12と溝17

畦畔12 (図25・34)

<9層>の高まりで形成される。調査区南西端のCL41地点付近で検出された南北方向の畦畔である。本畦畔の西側には河道に向かう地形の傾斜が確認されており、微高地の西端部付近を区切る位置にあたる。上面には<8層>が堆積しているが、耕作土も<8層>対応層である。畦畔の範囲内を溝17が南北に貫いており、それを境に東側を畦畔12a、西側を同12bとする。

上面は、畦畔12aが標高0.5m、畦畔12bは同0.45m、下面は、畦畔の東西両側とも標高0.42m前後を示す。畦畔の高さは、こうした上下面レベルの状況を反映して、前者では0.1m強、後者では0.03mとなる。幅は、畦畔12aでは上面0.4m・下面0.6m、同12bでは上面1.1m・下面1.2mである。つまり、溝の東側に細くて高い畦畔12aが、そして西側にやや低くて幅広い畦畔12bという配置を示す。ただし、こうした上面高の差は、後世の削平の影響も考えられるため、溝を挟んで別々の畦畔として機能していたかどうかについてはやや疑問が残る。両畦畔の下面幅を合わせると2mに近い数値となり、周囲に広がる主要畦畔の規模に相当することも考え合わせると、畦畔11と同様に、本来は二分されるものではなく、ある段階に溝で分断された可能性も指摘しておきたい。

溝17 (図25・34)

西側に河道が想定される調査区の南西端付近、CL40区に位置する。<9層>で検出された南北方向の溝である。畦畔12を東西に分ける状態を示す。南北両端は、調査区外へ伸びるため確認できない。

上面は西側で標高0.45m、東側では同0.5m、底面は同0.3mに位置する。長さ4mのみの検出であったため、傾斜方向は確認できない。畦畔12上面からの深さは0.15～0.2mである。底面形態は逆台形を呈する。溝の幅は0.35mである。埋土は<8層>対応層である。

溝18 (図25・35)

調査区中央の南端にあたるCM30～31区に位置する。東西方向からやや北東～南西方向への指向がうかがわれる。隣接する畦畔は確認できない。上部を後世の溝などで大きく削平されており、検出面は標高0.27mまで下がる。<9層>内であるが、本来の掘削面かどうかは検証できない。また、両端部も同様に破壊されており、長さ5m程度が残存するのみである。底面の高さは標高0.15mで深さは0.12mを残す。底面形態は碗状である。溝の幅は0.55mを測る。埋土は淡灰色の砂質土で砂がラミナ状に包含されるほか炭化物も記録されている。

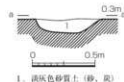


図35 溝18断面 (縮尺1/30)

c. 円形高まりと円形溝群

調査区内の北半部にあたるCGライン以北に、円形高まり2箇所と円形状に複数の溝が集中する箇所を1箇所検出した(図25)。高まりはいずれも<9層>で形成される。円形の平面形が意識されている点と周縁部に溝あるいは溝状の凹み痕跡が確認される点から、残存状況に違いを見せるもの、両者は共通した形態をもつ遺構であったと判断される。その姿を最も良好に残すものが、円形の高まりの周囲に溝をめぐらす円形高まり1である。他の2遺構は、高まり部あるいは溝部を削平された状態と理解されるが、上部を覆う<8層>の存在から、同層形成によって削平されたことは明らかである。これらの遺構は、検出面は共通しているが、最後まで形状を残していたのは円形高まり1の高まり部である。その段階には他の2遺構そして円形高まり1の周縁溝も姿を消していたと考えられる。それ以前における3遺構の同時性あるいは先後関係については、残念ながら検証する手がかりがない。

円形高まり1と溝19 (図36、図版2・5)

調査区北端、CF・CG30・31区に位置する。<9層>で形成される円形高まりを中心に、それを囲むように溝19がめぐるが、北西部の一部では途切れて確認できない。溝の外縁での規模は6.3m×6.7mである。溝の上部には<8層>の堆積が確認されるが、高まり部分は周辺の畦畔と同様に<6層>が上部を削平して堆積する。

高まり部の上面は標高0.85m、下面は同0.6m前後に位置し、その高さは0.25m程度である。規模は下面で4.5m、上面は約3.8mであるが、円形部斜面には<8層>・<7層>の堆積に伴う階段状の断面が確認されており、本来の形態が変形した状態にあることを示す。

周囲をめぐる溝19は<9層>で検出された。標高約0.6mである。幅は0.3～0.55mでばらつきをみせる。底面は、

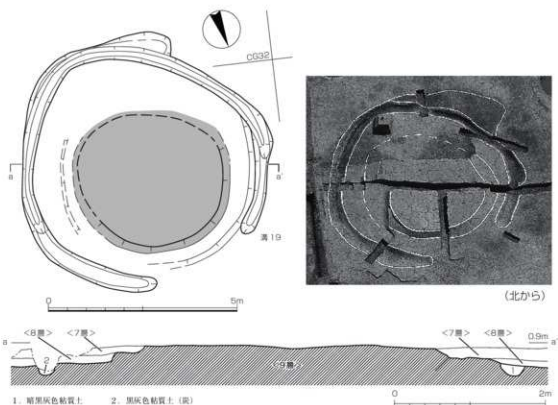


図36 円形高まり1と溝19 (縮尺1/100・1/50)

北半部では標高0.56m、南半部では同0.46m前後に位置する。両数値の違いは、0.1m程度の段形成によって生まれており南側が深い。底面は碗状を呈す。埋土は暗色の強い粘質土である。北半部には炭が多少含まれる。

高まり部と溝との位置関係について、本来の姿を復元してみよう。現状では、溝と高まり部との間に幅0.7m程度の平坦面が広がり、両者は離れた状態にある。しかし、断面の西側の状況を見ると、<9層>の高まりの基底部は溝に接している。僅かではあるが、こうした高まりと溝の関係を積極的に評価すると、高まり部は円形溝の内側に接して、まさに円丘部の縁に溝がめぐり周囲を区切っていた可能性が考えられる。その後、上部に堆積する<8層>形成にともなって溝は廃絶し、高まり部もカットされて縮小され、続く<7層>段階にもそうした行為が継続し、<6層>形成期に姿を消すという過程が想定される。

円形溝群—溝20・21 (図37、図版2・5)

CE・CF33・34区に位置する。調査区北端にあたり、北東部を攪乱などで消失する。<9層>上面で検出された溝20・21で構成される。両溝は半円形にめぐり、溝20が西半を溝21が南半を区切る。西側では外側に溝20、内側に溝21が接した状態が確認される。円形状溝の外縁部は約8mの規模を有す。いずれの溝も底面は丸みをもつ。検出面の高さは、溝20では標高0.6~0.64m、溝21では、溝21aの北側で同0.63mに対して、その東側および溝21bでは同約0.53mとなる。底面の高さは、北~東側に位置する溝20bと溝21bが標高0.5m、西側に位置する溝20aと溝21aの北半部が同0.56mである。全体に東側に向かう傾向が指摘される。溝の深さは0.04~0.07m、幅は、一部で0.5mあるいは0.8mのばらつきをもつが、0.6m程度が中心である。それに対して溝21aの南側では段差が形成されており、底面は標高0.3mまで下がり深さは0.25mに及ぶ。溝の幅も0.27mまで狭まり、他の部分とは際違った違いを示す。このように南側のラインが深く区切られる状態は、前述した円形高まり1と共通する。

溝20の埋土は淡灰色砂質土で砂をラミナ状に多く含む。一方、溝21では暗緑灰色粘質土であり、やや暗く粘性

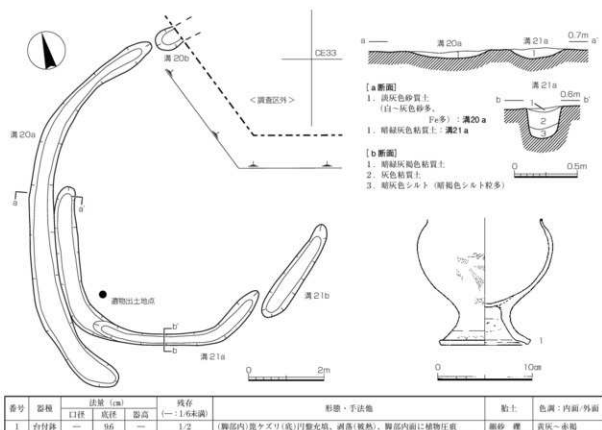


図37 円形溝群・出土遺物 (縮尺1/100・1/30・1/4)

を強める点で溝20とは異なる。深さを増す南面部分では三層に分層され、下層に向けて粘性を強める。こうした埋土の違いは埋没時期の違いを示す可能性も考えられる。他の遺構と照らし合わせると、本来は溝群の中央部に円形の高まりがあった可能性が高いが、全ては<8層>形成のある段階に削平されたと考えられる。

本遺構範囲内では、溝21aの南西隅において遺物が出土した。出土地点は円形溝の内側で、溝の肩から0.3m程度の距離にあたる。台付きの鉢のほかに、未掲載であるが、種子圧痕を残す埴の底部片が含まれる。時期は弥生時代後期前半に属する。

円形高まり2 (図25・29・38、図版2)

CD・CE38区に位置する。38ライン以西に半円形状に<9層>の高まりとして検出された。同ライン以东は不明である。上部には<8層>が堆積する。南北の長さは約5.5m (上面では4.8m) を測る。上面は標高0.58m前後、下面は同0.5mに位置する。この上面レベルは円形溝群の溝検出レベル値に近似する。高さは0.08m程度が残り、立ち上がりの傾斜は緩やかである。南側には溝状の浅い凹みが一部に確認される。下面は標高0.4mを測り、深さは0.1m程度で幅は0.85mである。西側では浅くなり痕跡を確認できない。

こうした状態は、円形高まり部の上部を消失した基底部と周縁溝の本来の姿が崩れた痕跡と評価される。周縁

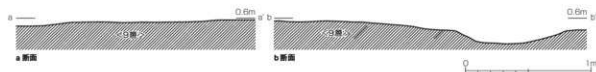


図38 円形高まり2断面 (縮尺1/30)

溝を含めた規模は7.5m程度と推定される。

2. 古墳時代～飛鳥時代

本時期に対応する遺構は<7層>に属するものである。<6層>による上部削平の影響によってその多くが消失しており、検出された遺構は調査区の西端部にあたる38ライン以西で検出された水田畦畔のみである。同地点では地形が西に下降するため、遺構が残存したと考えられる。

a. 水田畦畔

畦畔の分布は、大規模な擾乱や調査区西端という限られた範囲での検出であったため3箇所に分かっているが、本来は一連の広がりと考えられる。ここでは、説明の都合上、CEライン付近を畦畔13、擾乱を挟んで40ラインのCF～CHライン付近を同14、CJ40地点付近を同15、CL41地点付近を同16とする。

畦畔のレベルは、北側から南側へ下降する地形の影響を受けて南に減じる。いずれの畦畔も<7層>の高まりで形成される。上部には<6層>が堆積し、明瞭な耕作土を分離することはできない。

畦畔の配置で特徴的なのは、東西南北の畦畔が田の字状に交わるのではなく、中心ラインに対してT字状にとりつく点である。その水田面の規模は、東西幅では、畦畔13の南向きの畦畔と畦畔14の南北中央畦畔間の7mの数値が得られる。南北幅では、畦畔13の東西中央畦畔と畦畔14の東向きの畦畔間の11.5mが1箇所と、畦畔14の西向き畦畔2条の間隔となる7m、そして畦畔14の西側畦畔と畦畔15の東西畦畔間の9mが、それぞれ手がかりとなろう。

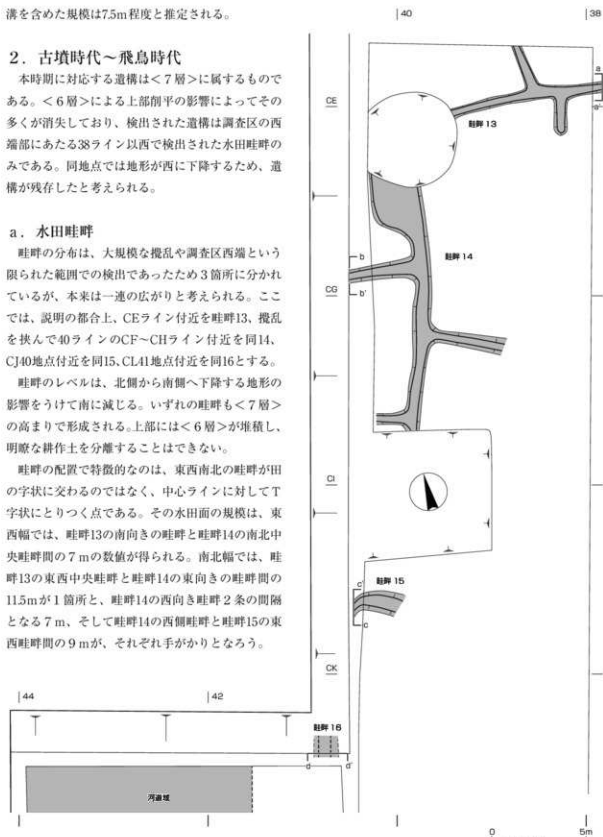


図39 古墳～飛鳥時代遺構全体図 (縮尺1/200)

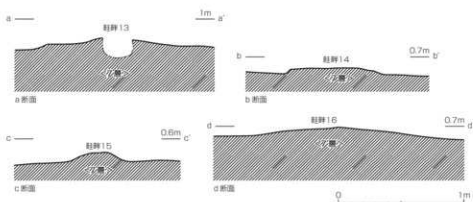


図40 畦畔13～16断面（縮尺1/30）

畦畔の時期は、出土遺物が細片で僅少であるため特定することは困難であるが、<8層>との関係や鹿田遺跡全体での集落の連続性から、古墳時代あるいは飛鳥時代の可能性が考えられる。

畦畔13（図39・40）

調査区の北西端付近、CD・CE38・39区に位置する。東西方向の畦畔に南北両方向に畦畔がそれぞれとりつく。南北方向の2条の畦畔は約1.5m離れてクランク状を呈する。こうした位置関係から東西畦畔が中心軸をなすと考えられる。畦畔の上面は、東端では標高0.75～0.85mであるが、全体には同0.7～0.85mに位置する。高さは0.1～0.03mで東端が最も高い。畦畔の幅は上面で0.3～0.5m、下面では同0.5～0.7mである。

畦畔14（図39・40）

調査区西端、畦畔13の南西部に位置する。40ライン付近を南北方向の畦畔が走り、西側の東西畦畔2条の中央付近に東側の同方向畦畔1条がとりつく。本畦畔と畦畔13は攪乱で分断されているが、その位置関係から、本畦畔の南北畦畔が北側の延長線上で畦畔13の東西畦畔とつながることは明白であり、中心的ラインを構成すると考えられる。畦畔の上下面の高さは標高0.52～0.57mと同0.48～0.53mで、いずれも北側が高い傾向を示す。畦畔13の数値とも整合性をもつ。高さは0.04mが残るのみである。畦畔幅は上面で0.5～0.65m、下面では0.6～1mであるが、北端部では幅を大きく広げて上面2.4m・下面2.9mを測る。畦畔の間隔は、畦畔13との関係から東西方向で約7m、南北方向で約11.5mと約7mの数値が得られる。

畦畔15（図39・40）

調査区西端において、東西方向に1m強が検出されたのみである。CJ40区に位置する。上面は標高0.5m、下面は同0.4～0.42m、高さは0.08～0.1mである。幅は上面で0.3m、下面では0.45mを測る。畦畔14の東西畦畔との距離は約9mである。

畦畔16（図39・40）

調査区南西端付近において確認された。ほぼ南北に走ると予想される。上面は標高0.69m、下面は同0.62m、高さは0.07mを測る。北側の畦畔14・15と比較すると、やや高い地形に変化している。畦畔幅は上面で0.8m、下面では1.2mで、比較的幅広い形状を示す。西側に河道の存在が予想されることから、水田域の西端を区切る畦畔としての評価も可能であるが、それに対して、方向軸に対して斜行断面である可能性、あるいは形状がやや崩れている可能性など、否定的な評価もできる。いずれにしても、現状では情報不足で確定できない。

第3節 中世前半の遺構・遺物

1. 平安時代後期

<5層>と<6層>に属する遺構が含まれる。井戸1基・土坑3基・池状遺構1箇所・溝18条と小規模な溝が集中する小溝群6箇所、そしてピット約50基で構成される(図41~43)。

本時期で特徴的なのは、多数の溝と池状遺構の存在である。それ以外については、土坑は調査区東半に1基と西端部に2基が点々と確認されたのみであり、低位部で検出された井戸1基も時期が下る可能性が高く、希薄な状態を示す。柱穴とみられるピットについても、建物を想定することはできない。こうした状況から、屋敷地空間を窺わせる確実な遺構は見いだせない。

遺構の配置は調査区の東西で様相が異なる。東半部では調査区東端を南北方向に溝が走るが、その西側では調査区中央付近まで小規模な溝と柱穴が点在する程度で、遺構は極めて希薄である。西半部では、ほとんどの遺構は溝であり、調査区南西部に位置し大形の遺構として際立つ池状遺構の北~西側が、それら溝の集中域である。その分布域の中のCE~CG32~36区には柱穴も集中する傾向が強い。建物にまとめることはできないが、小規模な溝と何らかの関係を有する構造物の存在も想定される。ただし、その中には上層に属する柱穴を含む可能性を注意する必要がある。

溝の方向は真北に近いものと鹿田構内座標にはほぼ合致するものを含む。東西南北に走る小規模な溝(以後、小溝とする。)は、その規模や位置関係から耕作に伴う溝の可能性が高いものが多い。また、溝の方向を一にする一定の範囲も明瞭であり、耕作の土地割りを見ることができそうである。

東側に接する第14次調査地点では、本時期の屋敷地の存在が指摘されている。本地点の東端部を南北に区切る溝を境に、本調査地点の多くは耕作地として機能していた状況が窺われる。ただし、同溝に近い調査区の東半部では耕作痕も含めて極めて遺構が希薄な状態を示す。上部削平の影響も考える必要があるが、他の機能をもつ空間であった可能性も含めて、その利用形態には検討の余地を残す。

a. 井戸

井戸1(図41・42・44、図版6・44)

調査区南西端部、CL41・42区に位置する。前段階には西側に河道の広がりがあり、本時期においても西へ下降する場所である。遺構の上部および南端部を後世の溝で消失する。

検出面は<5層>に対応する。上面は標高0.7m、底面は同-0.53mで、深さは1.23mを測る。平面形は円形を呈し、東西幅は3mである。南北幅は南部分の消失で2.2mを残すのみであるが、約2.6m程度の規模が復元される。全体的に直径3m程度の規模といえよう。底面は径0.5m程度の小さな円形を残す。掘り方は、全体的に緩やかな傾斜を有し、上半部が大きく開くY字形の断面形を示す。

埋土は、十層に分層したが、5群にまとめて、1~3層を上層、4~5層を中層、8~9層を下層、10層を最下層、そして6・7層は下層と中層の間層として説明しよう。上層は白色のクサレ礫を含む層で、細砂をブロック状に含み粘性も弱い。下層とは異なる土質を示す。埋没後の流入土的性格が予想される。中層・下層は粘性が強く、木質を多く含む点の特徴である。また炭化物・砂・粘土ブロックも含まれており、人為的な埋め戻し土と理解される。最下層は暗灰色の粘質土で粘土ブロックを含むが、木質・炭化物は含まれない。厚さ5cm程度の非常に薄い層であり、使用段階の堆積の可能性も考えられる。

遺物は、曲物の底板片(図44-W1、図版44)が下層から1点出土している。

所属時期は、時期を示す遺物がほとんど出土していないため明確ではない。検出面からは平安時代後期まで遡

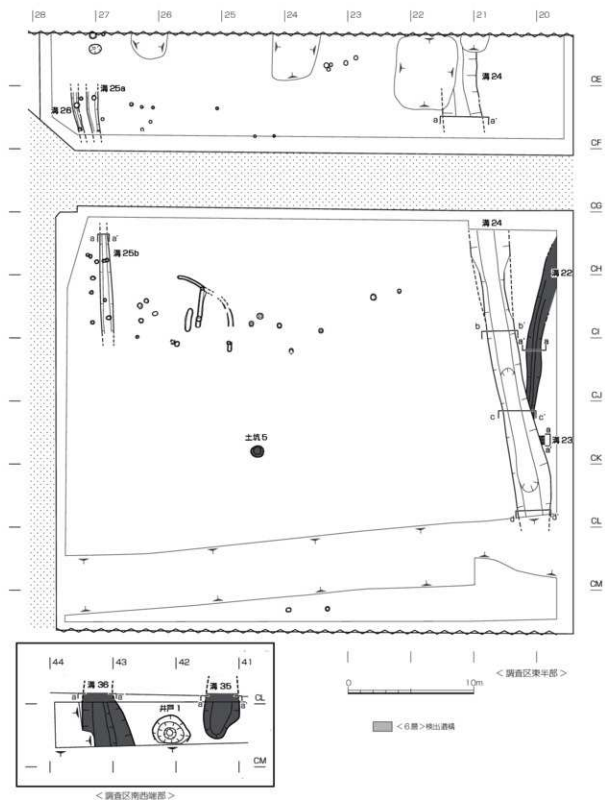


図42 平安時代後期遺構全体図—東半・西端— (縮尺1/300)

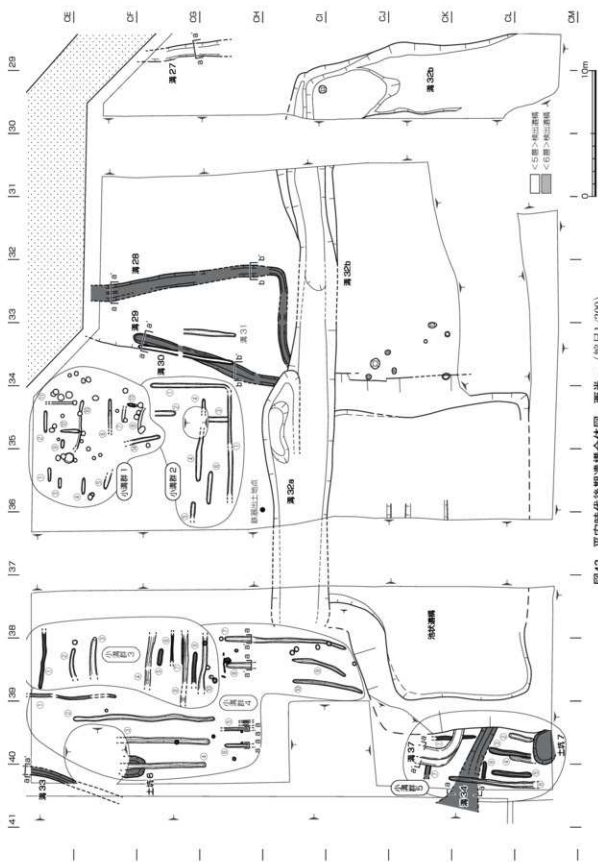
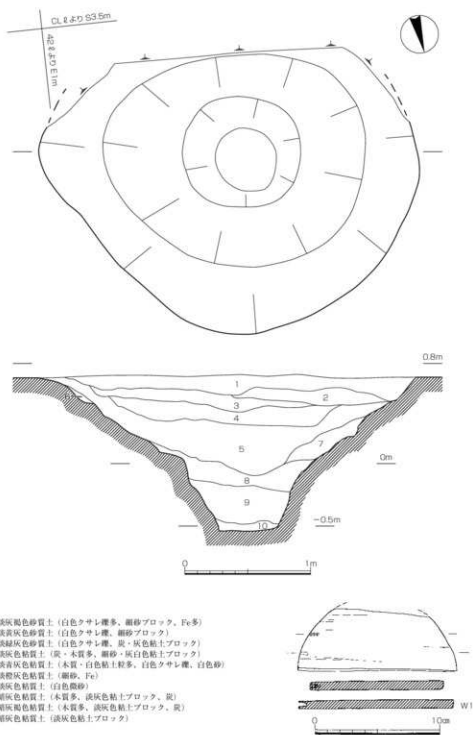


図43 平安時代後期遺構全体図一西半一 (縮尺1/300)



番号	形状	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	素材	本取り	特徴
W1	曲物板瓦	3.4	12.6	0.5-0.75	ヒノキ	縦目	頸縁に(φ0.2-0.3cm)の釘穴2箇所、うち1箇所に本釘残存(φ0.2cm)

図44 井戸1・出土遺物 (縮尺1/30・1/3)

ることになるが、上部が中世溝で削平されている点や中世後半～近世の土坑との形態的な類似性を評価すると、中世後半まで幅を広げて考える必要があろう。

b. 土坑

土坑5 (図42・45、図版7)

調査区東半部、CJ24区に位置する。後世の攪乱で上部が破壊を受けたため、検出面は<6層>あるいは<9層>対応層となった。上面は標高0.83m~0.65m、底面は同0.5mで、深さは0.33mあるいは0.15mを残す。平面形は円形で、上面の規模は直径1m程度、底面は同約0.6mである。掘り方は箱形であり、底面は平坦である。

埋土の状況は以下のようである。1層は粘土ブロックを含み鉄分やマンガンが沈着する。1b層では砂を含むが、1a層との共通性は高い。埋め戻し土と理解される。2層は粘性を強め、包含物は僅少である。遺物は出土していない。

本土坑の時期は、検出面から平安時代後期の可能性を求めることになるが、上部削平も考えると確定的とはいえない。

土坑6 (図43・46、図版7)

調査区西端、CF40地点に位置する。<6層>で検出された。北半部を中世後半の井戸で破壊される。また、<5層>に対応する溝が上部に重複する。

上面は標高0.7m、底面は同0.38m、深さは0.32mを測る。平面形は楕円形が復元される。規模は、短辺で上面1.77m・底面1.15mを測るが、長辺は上面1.35m・底面1mを残すのみである。掘り方は皿状に近いが、底面は緩やかに波打つ状態が記録されている。埋土は二分されるが、いずれも褐色系の砂質土である。上下層の違いあるいは特徴は、下層に砂の割合が多い点や上層に鉄分そして下層では底面にマンガンが顕著に沈着する点あげられる。そうした点が両土層間の色調の違いにもなっている。

遺物は弥生時代後期の壺あるいは甕片が出土しているが、下部には同時期の畦畔と溝が交わる水口部が位置しており、それに伴う遺物の可能性が高い。所属時期は、検出面あるいは遺構の重複関係から、平安時代後期の範囲で捉えておきたい。

土坑7 (図43・47、図版7)

調査区南西端部、CL39区に位置する。南端上部を中世後半の溝で破壊される。<6層>上面で検出された。

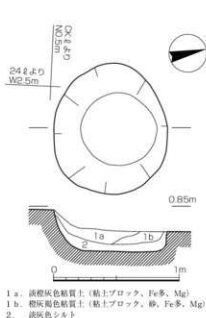


図45 土坑5 (縮尺1/30)

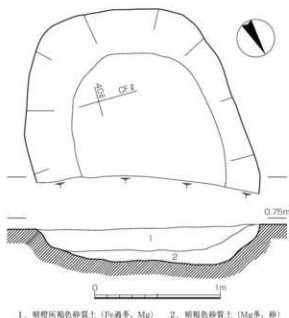


図46 土坑6 (縮尺1/30)

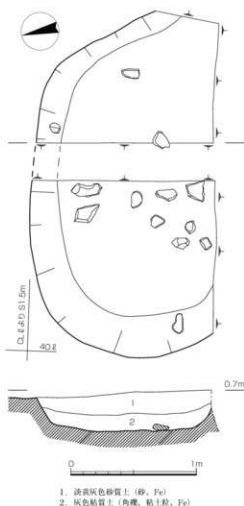


図47 土坑7 (縮尺1/30)

るCJライン(東西軸)付近では、標高0m程度の底部における高まりが断面で確認されており(図49-i断面)、それを境に北半部が浅い状態をなす。具体的に底面の数値を比較すると、北半部では標高-0.1~-0.15m程度、それに対して、南半部は同-0.3~-0.35mを中心とする。さらに、西側の38ライン付近では標高-0.45~-0.5mまで低下する。この深い部分は、平面的には西側に張り出す部分にあたる。

北半部では、本遺構の北端ラインにあたるCIライン付近で、東西方向に溝状あるいは方形の突出部がとりつく。南半部では全く認められない特徴である。西側に向かう溝状の凹みは、標高0.4mの位置で検出される。底面は同0.05m前後で凹凸が顕著である。深さは0.35m程度、上端の幅は2.2m、底面では約1mを測る。この溝状の凹みは、本遺構上面からは約0.4m程度下がった面から掘り込まれている。また、この凹みの南側ではテラス状の平坦面が、本遺構内に一段下がった状態で形成されていたことが予想される(図49-h断面)。さらに同位置は、池の西端ラインが南半部から縮小する位置にあたる点も、本遺構の機能を考える手がかりになるかもしれない。一方、東側への突出部(図48-d断面)は、平面的には標高0.5~0.6mまで下がって検出された。<9層>対応層である。平面形は幅2.2m、長さ3.5mの整然とした長方形を呈する。底面には、やはり凹凸があり、標高0.5mからさらに0.3mへと緩やかに本遺構の深みに向けて下降する。深さは0.1m程度で非常に浅いが、本来は少なくとも0.2m以上はプラスされることが予想される。

掘り方は直線的に下端部に至り、そこから緩やかに底部中央に向けて下降する。また、標高0m付近で段状の

上面は標高0.64~0.7m、底面は同0.37~0.4m、深さは0.3m程度である。平面形は楕円形である。上面の規模は長辺が2.75m、短辺は残存部1.45mで1.7m前後の数値が復元される。掘り方は幅広の逆台形である。底面は広く平坦な面が形成され、0.1~0.2mの角礫が数多く出土した。埋土は上下に二分される。上層はやや砂質を帯びて比較的明るい色調を呈す。下層は粘性を強め灰色が強い。粘土粒や角礫が含まれる。

遺物は須恵器の小片が数点出土するのみで、時期決定は困難である。検出層から平安時代後期の可能性を想定しておきたい。

c. 池状遺構(図41・43・48~54、図版7・8・39・43・45~47)

調査区の西南部、CH~CL34~39区で検出された(図41・43・48)。北端付近は溝32によって上部を削平される。大規模な遺構であるため、南端部は調査区端部で破壊されるほか、随所で擾乱による消失が認められる。

検出層は<5層>に対応するが一部に<9層>まで下がる部分も含まれる。上面は標高0.7~0.8m、底面は同-0.1~-0.5m、深さは0.8~1.3mを測る。平面形は東西幅の異なる長方形が南北に結合した形状であり、L字形をなしている。規模は、最大値を求めると、上面で東西28m・南北21m、底面では同じく22mと17mとなる。CJライン以南の約13mは東西28mの規模を保つが、同ライン以北では、その数値は縮小する。遺構の西端ラインが約7~8m程度東に移動することで東西幅は20m程度となる。以下、CJラインを境に南半部と北半部として報告しよう。

底面の高さは、両域で多少の違いをみせる。両域の境にあたる

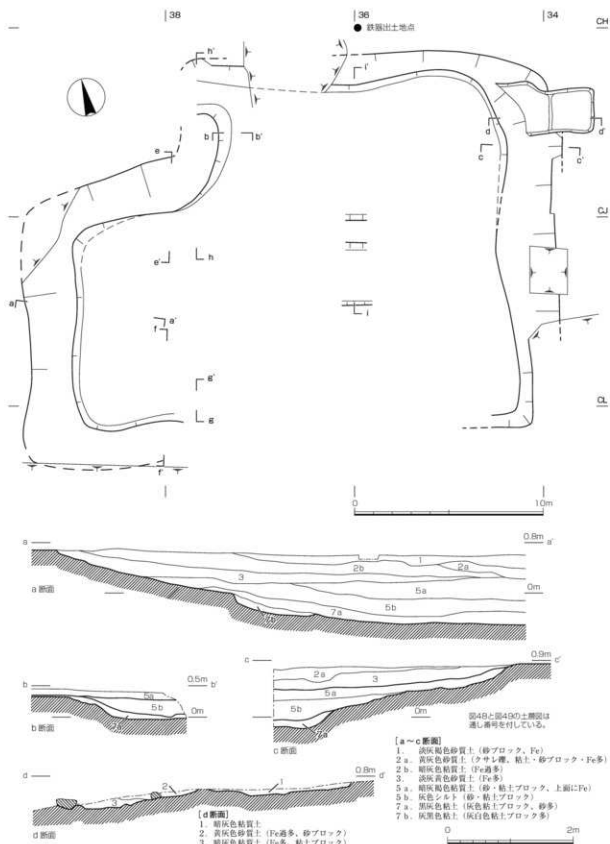


図4B 池状遺構 (縮尺1/200・1/60)

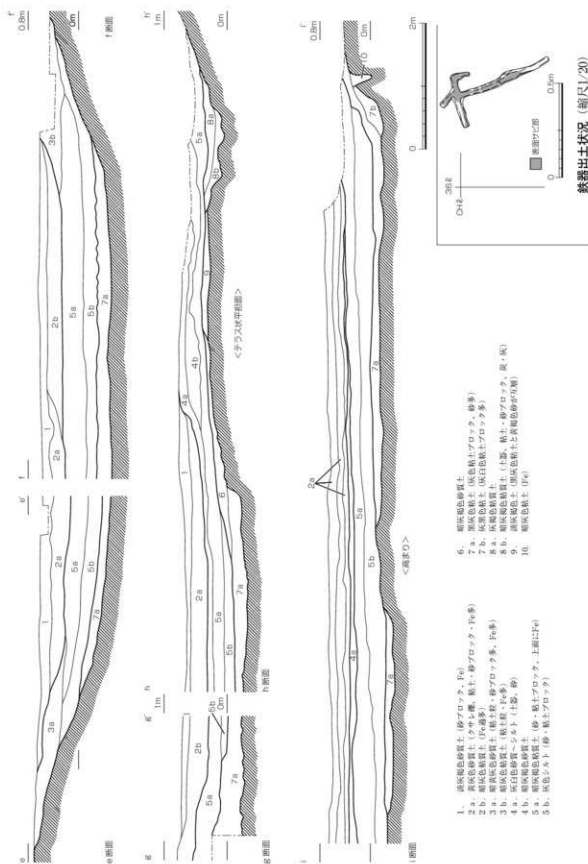


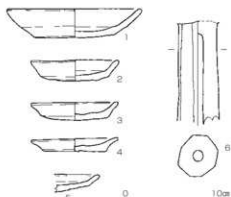
図49 池状遺構断面 (縮尺1/60)

落ち込みを形成する部分も確認される。こうした形態から、本遺構に対して人為的な掘削を想定することとなった。大規模な遺構であるため埋土の分層数は多いが、その中で、内容物などの点で際立つ土層を抽出することはできない。

埋土は十層にまとめられる。a～i断面では各層の対応関係を把握することができたため、1層～10層の通し番号で報告しよう。d断面のみは、他の断面には現れない部分であるため、番号は別に記載する。1～2層は本遺構上部を覆う最終的な堆積土である。特に、上部はやや時間を経た流入土も含んでいることは、上部を広く覆っていることから理解される。砂質が強い堆積土で、鉄分の沈着あるいはクサレ礫や砂などが部分的にブロック状に入る。また、2層は鉄分の沈着などの影響による色調の変化から細分が可能である。3層はやや暗い黄灰色砂質土である。多量の鉄分の沈着が特徴的である。やはり粘土粒・砂がブロック状に含まれる。4層は、北西端部に形成されるテラス状高まりから本遺構の中央部までを覆う土層である。レベルが高い位置では砂質を帯び、遺構の深みまで下降するとシルト質となる。比較的にきめ細かくて汚れが少ない。3層はa・c・e・f断面で、4層はh・i断面で確認されており、両層の補完的關係を示す。本来は同一堆積層と捉えてもよいかもしれない。5層と7層は灰色系の粘性が強い堆積土である。両層の間に位置する6層はテラス状部分から7a層上にかけて堆積する(図49-h断面)。ややレベルが高いため砂質を強めるが、7a層と一連の可能性も残す。7層は最下層の堆積土である。5層よりは古い段階の底部堆積土と考えられる。9層はテラス状高まり上部にのみ堆積する(同-h断面)。北側の溝状凹みに接する位置である。同凹みを埋めるのが8層である。下層(8b層)からは炭や灰が確認されている。10層は杖状痕跡と考えられる(同-i断面)。また、本遺構の北端部では、上面付近で鉄器が検出された(図49)。鋳の進行が激しく実態を把握できなかったが、長さ0.5m程度の大きさが想定される。

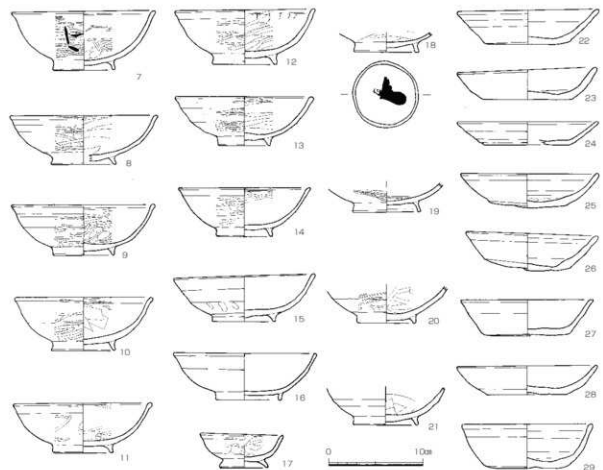
出土した遺物量はコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ リットル)約11箱にのぼり、含まれる遺物の種類は多岐にわたる(図50～54、図版39・43・45～47)。その中では、吉備系土師器碗が3箱、土師器杯・皿が1.5箱、土師器鍋は1箱を占める。それ以外には、土師器壺2個体が5～10cm程度の破片で出土している。須恵器は碗を中心に甕・鉢など、輸入陶磁器は白磁片が多く13片を数えるのに対して青磁片は1片のみである。瓦器・黒色土器も数片のみである。以上のように、吉備系土師器碗と土師器杯・皿以外は、ほとんどが小・細片である。時期が異なる遺物も散見されるが、13～14世紀のものはいずれも小片であり、上層からの混入と判断される。古い時期のものとして八角柱の高杯脚片が最下面から出土している(図50～6)。土器以外では、数点の瓦・土錘4点・砥石1点・石鍋1点・ふいこの羽口3点・加壁、そして木筒を含む木製品8点と獣骨があげられる。いずれも下層の粘土層(5層・7層)に含まれる。特に石鍋や加熱作業を想起させる遺物は注目される。獣骨はほとんどがニホンジカで13点確認されている。その他にはウシの白歯を1点含む(第4章9)。

完形あるいは2/3以上が残存する土器は、吉備系土師器碗3点・土師器杯1点・同皿15点・須恵器碗1点である。皿の比率の高さが際立つ。その他に注目されるのは、種子の圧痕土器と墨書土器である。圧痕土器は吉備系土師器碗2点(図51-8・20)、土師器杯1点(同-22)と皿2点(図52-44・45)があげられる。



番号	種類・器種	法量 (cm)			現存 (1～1.5点未満)	形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	高さ				
1	土師器・碗	14.2	8.4	3.1	3・4	(内)外縁ナテ(裏)内ナテ(外)底ナテ・板目煎、裏面外縁面に並白焼痕	磁砂 赤色粒	赤灰
2	土師器・皿	9.3・9.6	7.1・7.6	2.2	1・1	(内)外縁ナテ(裏)底ナテ・左板目・板目煎、口縁部と外面底面に煎	磁砂 赤色粒	赤灰
3	土師器・皿	9.3	7.1	1.8	2・2	(内)外縁ナテ(裏)底ナテ・左板目・板目煎	磁砂 赤色粒	赤灰
4	土師器・皿	9.1	6.9	1.1～1.6	1・2	(内)外縁ナテ(裏)底ナテ・板目煎、並白、白縁内面に煎の圧痕	磁砂 白色塵多	黄白
5	土師器・杯	—	—	—	—	(内)外縁ナテ(底)底ナテ・左板目・板目煎	磁砂	黄白
6	土師器・高杯	—	—	—	—	断面8割に破片。脚片外径約1cm・内径1cm	磁砂 赤色粒	赤灰

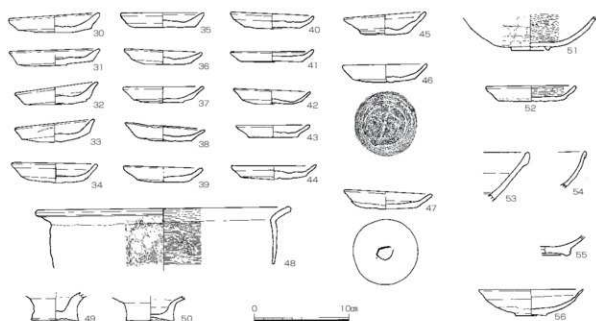
図50 池状遺構出土遺物1—下層—(縮尺1/4)



番号	種類・形種	法量 (cm)			残存 [—:1/6未満]	形態・手法施	胎土	色調・内面/外面
		口径	底径	高さ				
7	土師器・碗	15.1	6.7	6.2	1/1	(内底)オサエ(内)施ミガキ(外)施ミガキ、墨書	陶砂 礫	黄灰
8	土師器・碗	15.6	6.8	5.2	[1]・6底[1]・3	(内)工具ナデ・施ミガキ(外)施ミガキ、内面赤ね焼痕、内外面種子痕6	陶砂 礫	黄白
9	土師器・碗	15.2	6.4	5.4	[1]・2底[1]・1	(内)外)施ミガキ、内外面赤ね焼痕	陶砂 礫	黄白
10	土師器・碗	14.6	6.8	5.7	1/2	(内)工具ナデ(外)施ミガキ(底外)施キリ、内外面焼、内底面赤ね焼痕	陶砂 礫	黄灰
11	土師器・碗	14.9	6.0×6.5	5.1	[1]・3底[1]・1	(内)外)ナデ・施ミガキ(外)ナデ	陶砂 礫	淡黄白
12	土師器・碗	14.9	6.9	3.3~5.9	[1]・2底[1]・1	(内)工具ナデ(外)ナデ・施ミガキ(底外)施キリ、板目煎、口縁部僅	陶砂	黄灰
13	土師器・碗	14.8	5.6	5.3	[1]・3底[1]・1	(内)工具ナデ・一部施ミガキ(外)施ミガキ(底外)板目煎、赤ね焼痕、外面僅	陶砂	淡黄白
14	土師器・碗	14.0	6.0	5.4	[1]・3底[3]・4	(内)外)施ミガキ(底外)ナデ、磨減、内面底面赤ね焼痕	陶砂 礫	淡黄白
15	土師器・碗	15.0	6.8	4.6~5.1	3/4	(内)外)オサエ、磨減	陶砂	黄白
16	土師器・碗	13.2	6.8	4.7~5.5	2/3	(外)オサエ・ナデ(底外)施キリ、磨減剥落、内外底面赤ね焼痕	陶砂 礫	黄白
17	土師器・碗	8.4	5.2	3.6	1/1	(内)工具ナデ(外)施ミガキ、磨減	陶砂	淡黄白
18	土師器・碗	—	7.0	—	1/1	(内)工具ナデ(外)施ミガキ、高内内面焼、内外面焼	陶砂	淡黄白
19	土師器・碗	—	7.3	—	1/1	(内)工具ナデ(外)施ミガキ(底外)ナデ、内外面焼、内面剥落、縁熱	陶砂	黄灰
20	土師器・碗	—	6.1×6.5	—	1/1	(内)工具ナデ(外)施ミガキ、赤ね焼痕、外面種子痕煎	陶砂	黄白
21	土師器・碗	—	6.9	—	1/3	(内)工具ナデ(外)施ミガキ(底外)ナデ、内外面焼	陶砂	赤色粒 黒灰/黄灰
22	土師器・杯	15.0	9.4	3.6	2/2	(内)外)ナデ(底外)施キリ・左回転・板目煎、施キリ、外面焼、底面外側種子痕煎	陶砂	黄灰・黒灰/黄灰
23	土師器・杯	14.8	9.8	3.5	1/2	(内)外)横ナデ(底外)施キリ・左回転・ナデ・板目煎、赤ミ	陶砂	黄灰
24	土師器・杯	15.0	9.0	2.5	1/4	(内)外)横ナデ(底外)施キリ・ナデ	陶砂	赤色粒 黄・黄灰/黄白
25	土師器・杯	14.7	8.0×8.3	3.2~3.8	[1]・2底[1]・1	(内)横ナデ(外)横ナデ(内)オサエ(底外)施キリ・右回転・ナデ・板目煎、赤ミ	陶砂	黄灰
26	土師器・杯	14.1	9.3	2.7~4.3	[1]・2底[1]・1	(内)外)横ナデ(底外)施キリ・左回転・ナデ、底面内面焼	陶砂	赤色粒 黄灰
27	土師器・杯	14.0	9.0×9.5	3.8	[1]・1)底[1]・1	(内)外)横ナデ(底外)施キリ・左回転・ナデ、内外面焼	陶砂	赤色粒 黄灰
28	土師器・杯	14.8	9.4	3.2	[1]・3底[1]・5	(内)外)横ナデ(底外)施キリ・左回転・ナデ・板目煎	陶砂	赤色粒 黄灰・灰白/黄灰
29	土師器・杯	13.9	8.8	4.7	[1]・1)底[1]・5(6)	横ナデ(内)オサエ(底外)施キリ・右回転・ナデ・板目煎、底面赤色状黄灰	陶砂	赤色粒 灰白

図51 池袋遺構出土遺物2 (縮尺1/4)

内外面に1~複数点の種子痕が確認される。墨書は、吉備系土師器碗の外面と高台内に各1点(図51-7・18)、皿の底部外面に1点(図52-同47)、そして須恵器碗底部外面に1点(図53-64)が確認される。判読は困難であるが、皿のものは円を描く記号のようにも見える。また、粘土層中から出土した呪符木簡には、それに関する文字が比較的明瞭に残る(図54-W2、図版41)。下端は切断されているが、符籙を思わせる記号の下に、



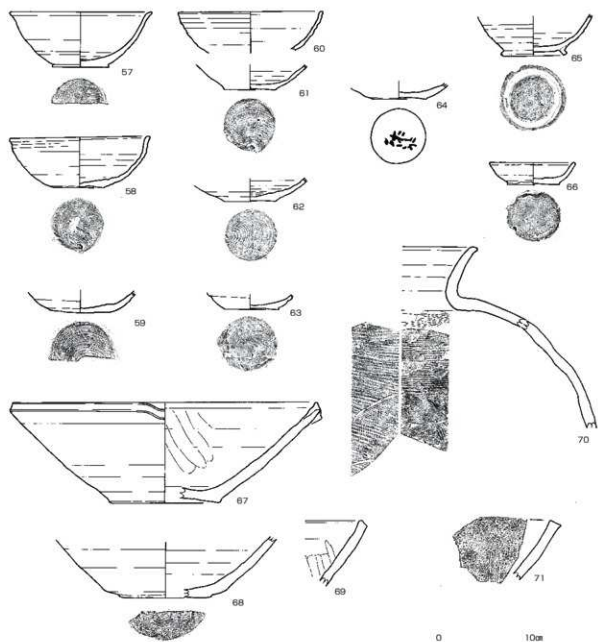
番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—:1/4未満)	形態・手法類	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	高さ				
30	土師器・皿	94×100	75×82	15-21	1/3	(内)外:横ナデ(内)オサエ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌、赤み	陶砂	黄灰
31	土師器・皿	96	75×79	17	1/3	(内)外:横ナデ(内)上具ナデ(底外)鹿ナリ:左回転、内面強、赤み	陶砂	黄灰・黄灰～暗灰緑
32	土師器・皿	89	64	13-23	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ・飯目肌、底部強(赤い)、赤み	陶砂	黄白・黄灰
33	土師器・皿	86	72	15-25	1/3	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ・飯目肌、内外面強、赤み	陶砂	灰緑
34	土師器・皿	91	63×67	13-23	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ・飯目肌、内外面強、赤み	陶砂	灰緑
35	土師器・皿	91	70	15	1/2	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌、内外面強、赤み	陶砂	黄灰～暗灰
36	土師器・皿	84	64	13	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ・飯目肌、底部強、赤み	陶砂	黄白～黄灰
37	土師器・皿	86	63	16	3/5	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌	陶砂	赤色絞
38	土師器・皿	86	56	13	1/1	(内)外:横ナデ(内)ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌、赤み、口縁部強	陶砂	黄白～淡黄白
39	土師器・皿	85	56	17	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:右回転・飯目肌、口縁部上長台形、赤み	陶砂	赤色絞
40	土師器・皿	88	61	13-18	1/2	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:右回転	陶砂	黄白～淡黄白
41	土師器・皿	88	65	12	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ、厚底	陶砂	黄灰
42	土師器・皿	83	64	13-17	4/5	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・ナデ・飯目肌、内外面強、内面強、赤み	陶砂	暗灰緑・灰緑
43	土師器・皿	78	53	13	1/3	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転、底部中央厚形、内外面強	陶砂	赤色絞
44	土師器・皿	90	71	14	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転、内外面強、子面口	陶砂	赤色絞
45	土師器・皿	87	50×59	18-24	4/5	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転、内面強、子面口	陶砂	黄灰～灰緑
46	土師器・皿	91	67	19	1/1	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌、赤み、底部中央高	陶砂	淡黄白
47	土師器・皿	92	67	13-22	4/5	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ:左回転・飯目肌、底部強、赤み	陶砂	淡黄白
48	土師器・壺	27.0	—	—	1/4	(内)横ハケ目(外)オサエ・飯ハケ目(口)オサエ・横ナデ、内外面強	陶砂	黄灰
49	土師器・钵倉	—	5.0	—	1/3	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ、即焼厚い	陶砂	赤色絞
50	土師器・钵倉	—	5.0	—	1/3	(内)外:横ナデ(底外)鹿ナリ、即焼厚く丁寧な作り	陶砂	黄白～黄灰
51	瓦器・椀	—	3.9	—	1/2	(内)腹ミダキ(外)オサエ、外面重ね焼	陶砂	黄灰
52	瓦器・皿	96	72	16	1/2	(内)ナデ・腹ミダキ(外)オサエ、口縁部重ね焼、外面強	陶砂	黄灰
53	白磁・椀	—	—	—	—	足込みに沈淪、内外面施釉・外面下平蓋物、口縁内に軸割れ	精磁	白(軸)白
54	白磁・椀	—	—	—	—	内外面施釉、軸割れ貫入あり	精磁	白(軸)黄灰
55	白磁・椀	—	—	—	—	内外面施釉、外部下蓋物から蓋台露筋、足込みに細かいキズ	精磁	白(軸)白
56	白磁・皿	11.0	3.2	2.8	1/1	足込みに沈淪、内外面施釉、外面下平蓋物、軸は貫く貫入あり	精磁	灰(軸)黄灰

図52 池状遺構出土遺物3 (縮尺1/4)

「急々」の文字があり、本来は「如律令」と続いたことが予想されている⁴⁾。

遺物の出土位置は上層～下層で確認されるが、大形の破片あるいは時期がまとまるものは粘土層からの出土が多い。最下層から出土した遺物も粘土層を中心に出土した遺物と形態的に共通する。上部に重複する溝32との関係を考慮すると、本遺構が機能し放棄されるまでの時期は、12世紀前半～中葉と考えられるが、11世紀代に遡る可能性も残す。そして、平安時代末には完全に上部が埋没したことも遺物から窺うことができる。

本遺構の性格については、滞水状態にあった可能性が高い点で池状の遺構とした。遺物の出土状況から、日常的な活動下において廃棄された遺物が主体を占めると同時に、皿を使用した何らかの儀礼が周囲で行われたことを窺うこともできる。後述するように、周囲に耕作地域が広がるという立地を考えると貯水機能がまず想定され



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法類	粘土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
57	須恵器・碗	14.8	6.0	5.9	口1/4底1/2	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。外面暗褐色自然釉。内面黄緑色。	微砂	暗灰緑/灰
58	須恵器・碗	14.8	5.3	5.1~5.5	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。重ね焼成。口縁部厚皮・肥厚。器壁薄。	微砂	灰白~黒灰
59	須恵器・碗	—	6.6	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。外面。	微砂	灰白
60	須恵器・碗	15.2	—	—	1/2	(内)外:糠ナデ。口縁部広重ね焼成。%58に類似。	微砂	灰白~黒灰
61	須恵器・碗	—	5.5	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。器壁薄。%58と同一器体か。	微砂	灰白
62	須恵器・碗	—	5.5	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。内外面黄緑。	微砂	灰白
63	須恵器・碗	—	5.9	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。	微砂	灰白
64	須恵器・碗	—	5.8	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。底部薄青。	微砂	灰白
65	須恵器・碗	—	7.0	—	1/1	(内)外:糠ナデ(底外)赤ナリ。右回転。底面内面に重ね焼成。	微砂	黒灰
66	須恵器・器蓋	9.0	5.3×5.9	2.4	口1/5底1/1	(内)外:糠ナデ(底)赤ナリ。右回転。口縁部重ね焼成。足込み焼成。	微砂	灰
67	須恵器・控ね鉢	33.0	11.8	10.6	1/3	(内)糠ナデ・ナデ(底外)ナデ。口縁部重ね焼成。底部内面黄緑(使用痕)。	微砂	内黄
68	須恵器・控ね鉢	—	9.8	—	1/4	(内)外:糠ナデ(底)赤ナリ。右回転。黄緑色。	微砂	白色黄
69	須恵器・控ね鉢	—	—	—	—	(内)糠ナデ・ナデ。口縁部に重ね焼成。内面黄緑面黄緑(使用痕)。	微砂	灰白
70	須恵器・変	—	—	—	—	(内)赤ナリ・ハナ目(半)厚き・籠ハナ目長ナデ(口)籠ハナ目・糠ナデ。	微砂	灰
71	輪郭後・ナリ鉢	—	—	—	—	(内)外:糠ナデ。8割1割の節目。内外面自然釉(白)。	微砂	紫灰/紫灰~紫黒

図53 池状遺構出土遺物4 (縮尺1/4)

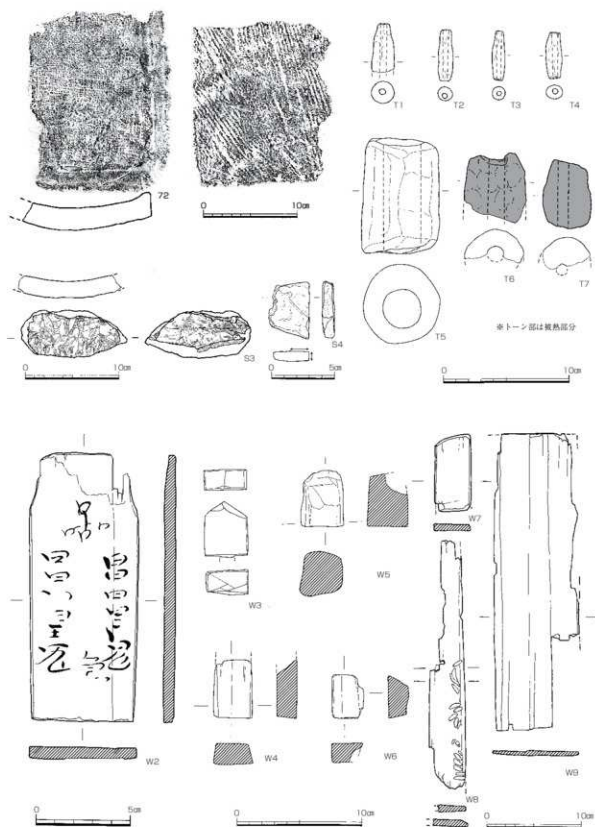


図54 池状遺構出土遺物5 (縮尺1/4・1/3・1/2)

池状遺構 (図54) 出土遺物観察表

番号	種類・部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	残存	形跡・手法		胎土	色調・内面・外面
						(内) 横目明込 (内) 布目痕	彫磨・手法		
W1	瓦葺・平瓦	17	14.5	2.9	—	—	—	細砂	灰・黒灰
T1	土埴	3.8	1.8	1.6	11.8	1/2	ナデ、孔径0.4cm	細砂	黄白・黄白
T2	土埴	4.0	1.2	1.1	5.5	1/1	ナデ、孔径0.4cm	細砂	黒灰
T3	土埴	5.5	3.1	2.1	4.1	1/1	ナデ、孔径0.3cm	細砂	黄灰陶
T4	土埴	2.6	1.3	1.1	4.8	1/1	ナデ、孔径0.4cm	微砂	黄陶
T5	ふいご割口	9.2	6	6.4	294.5	1/1	ナデ、孔径2.6~2.8cm	細砂	黄灰陶
T6	ふいご割口	5.7	4.9	2.6	58.7	—	オオエ、孔径10cm、洞高、縦割	細砂	黄陶
T7	ふいご割口	5.1	3.8	2.8	47.4	—	表面僅付着、縦割	細砂	黄陶・灰
S3	石罫	5.0	11.0	1.7	160.3	—	滑石 (内: 東方向縁物敷(内) 直取り後縁物、内面平滑・光沢、外面は直取りの粒に光沢、裏面に磨痕)	—	—
S4	砥石	4.6	3.1	0.8	17.8	—	一薄破削 流紋岩 2面使用	—	—
W2	部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	石形	特徴	
W2	木簡	14.3	5.6	0.6	—	モト	—	上部部刻削をオット、上端は削い、墨書残存(上部: 背側文字・下部に「日、鬼、吉」の文字)	
W3	突形付角柱状木製品	4.5	3.4	1.8	—	サケツ紙(広義)	割材	上面山形、下面には切り出しの突起(断面兼射、1.1×0.5cm)	
W4	角柱状木製品	4.6	3.1	1.8	—	ヒノキ	割材	上部尖削、他の5面は平削	
W5	角柱状木製品	4.4	3.5	3.5	—	アサマツ	丸木	上部面削り、下部平削	
W6	角柱状木製品	3.4	2.5	1.5	—	ヒノキ	割材	表面と端面の一部尖削、端面は平削	
W7	加工板	8.2	3.8	0.8	—	ヒノキ	板目	上端尖削、下部丸みを付った加工あり	
W8	板材	26.3	3.7	0.7	—	モミ属	板目	穿孔(径0.3cm)1箇所、表面に長筒形の凹み多数(幅4mm・長1~1.5m)	
W9	板材	31.4	8.9	0.6	—	スギ	板目	縦線に捺り1箇所	

ると同時に、地形的に低い場所にあることを勘案すると、地下水位の低下を目指す目的も予想される。

註 (1) 山本悦世・久野修義 2000「岡山・鹿田遺跡」『本間研究』第22号 本間学舎

d. 溝

本時期における中心的遺構である溝は、その規模や配置から、以下の3タイプに大別される。①規模が大きく、単独で調査区全体を区画する溝で、調査区東端を南北に走る溝22・24や同中央部を東西に走る溝32があげられる。②規模はやや小規模であり、単独あるいは2条の溝が平行関係を有する場合もあり、①と同様に空間を区切る性格が予想される。溝25~31と溝33~37が含まれる。③3条以上の小規模な溝が方向をそろえて配されるもので、一部を除いて耕作に関わる可能性が高い。③については、そのまとまりを小溝群1~5として報告する。小溝群1~5は、溝28~31(②タイプ)の西側で、池状遺構の北~西側に配される。

溝22 (図42・55、図版9)

CG~CJ19・20区に位置する。調査区の東端をやや東に傾きながら南北に走る。その角度はN25°Eである。北端部は調査区外に延びて鹿田遺跡第14次調査区につながる。南端部は溝24に破壊され、同溝以西に存在が確認されないことから、南半は同溝に吸収されると理解される。検出面は<6層>上面である。上面は標高約1m、底

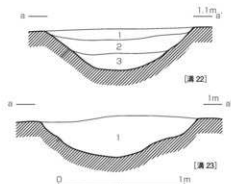


図55 溝22・23断面 (縮尺1/30)

1. 暗灰色砂質土 (細砂多)

2. 暗灰色粘質土 (Fe多)

3. 暗灰色粘質土 (砂)

1. 暗黄色砂質土 (砂)

面は同0.65m前後で、深さは0.35mを測る。掘り方は椀状で底面は緩やかにカーブする。溝の幅は1.2~0.9mである。埋土は3層に分層した。1・2層は褐色を帯びる砂質の土層で1層には砂がブロック状に、そして2層には鉄分の沈着が特徴的である。3層は粘性を強めるが砂の包含も確認される。時期は遺物が出土していないため明確ではないが、検出層を参考すると平安時代後期の可能性が高い。また、東側の第14次調査地点では、同時期(11~12世紀)の屋敷地が報告されており、その敷地の西端を区切る性格が考えられる。

溝23 (図42・55、図版9)

調査区の東端、CJ19区に位置する。溝22の南端付近である。調査区東断面で存在が確認され、平面では長さ約1m程度が調査できたのみである。東西に走ることが予想されるが西端部は溝24に

よって破壊され、それ以上の情報は残っていない。検出面は<6層>上面である。上面は標高0.8~0.9m、底面は同0.58m、深さは0.3mを測る。掘り方は椀状を呈し、底面は緩やかにカーブする。溝の幅は1.25mである。遺物が出土していないので、所属時期を確定することは困難であるが、検出面から平安時代後期の可能性を考えたい。

溝24 (図42・56、図版9・41・46)

調査区の東端部を南北に走る溝である。溝の南端は20ライン、北端は21ラインの付近に位置する。その方向はN5°Eを示しており、鹿田構内座標方向よりは真北に近い。北端は調査区外に延びるが、南端は後世の溝によって破壊され、上部には後世の溝と土坑8が重複する。検出面は<5層>に対応する。溝の北端部周辺(CD・CE21区)は地形が高いため<4層>の調査中にその一部が検出された。上面は北端で標高1.18m・底面同0.55m、南端では上面は同1m・底面同0.4mを測る。南北間で0.15~0.2mの差を示しており、南に向けて下降する。それに対して、深さは0.63~0.65mで安定した数値を示す。掘り方は逆台形である。その立ち上がり角度は、b断面以南は比較的急峻な傾斜であるのに対して、北端のa断面では緩やかになっており、肩部の崩れなどの影響が予想される。上面の幅もそれに合わせて北側では幅3.1mに広がる。南側では同2.3mであり、本来はこの程度の幅であったと考えられる。埋土は全体的に砂あるいは粘土粒をブロック状に含む傾向が強く、鉄分の沈着が顕著である。上半部に砂質土、下半は標高0.7m前後から粘性を強めて粘質土となる。各土層間での違いは少ないが、南端部のd断面に堆積する粘質土層下の砂混じり粘土層(5層)だけは他と異なる。底部レベルが低い位置でもあり、流水の影響を窺わせる。

遺物はコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)4箱程度が出土した。器種構成は、土師器の椀・杯・皿が中心である。吉備系土師

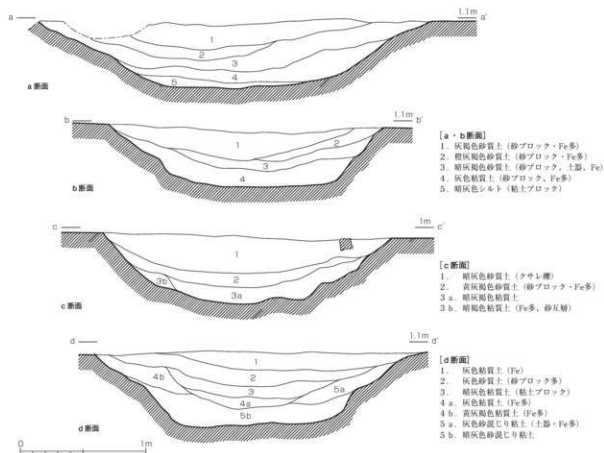
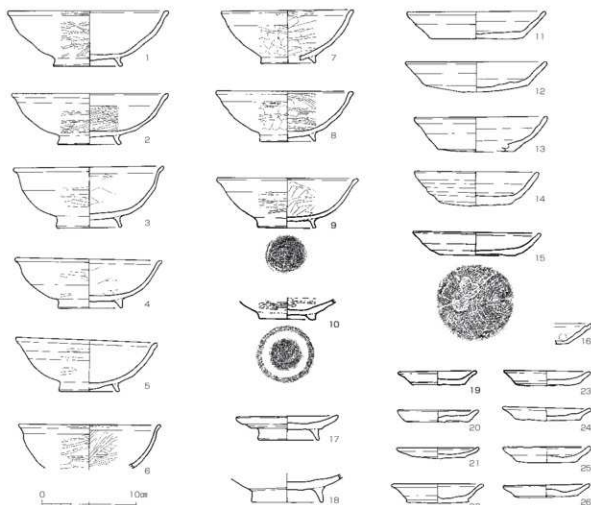
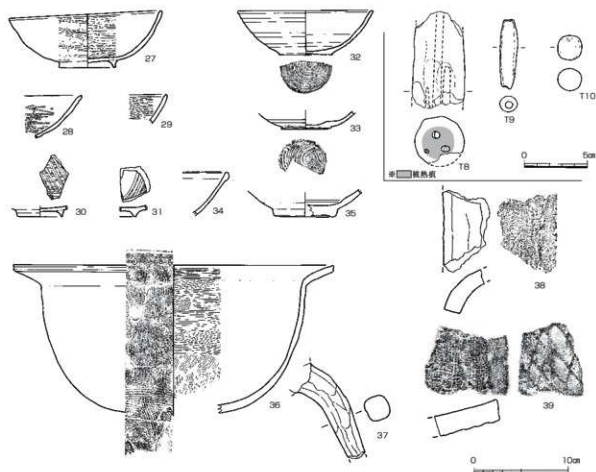


図56 溝24断面(縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	17.1	7.2	5.9	口(-)底1/1	(内)青灰(外)オサエ・施ミガキ, 内面暗褐色(焼熱), 磨滅	微砂	淡黄白
2	土師器・碗	16.6	6.8	5.4	口(-)底1/1	(内)施ミガキ(外)ナデ・施ミガキ, 内面赤ね焼痕	微砂	赤色粘
3	土師器・碗	15.9	4.8	6.4	口(-)底1/1	(内)工高ナデ(外)ナデ・施ミガキ	微砂	淡黄白
4	土師器・碗	15.6	6.6	5	口1/4底1/1	(内)工高ナデ(外)ナデ・施ミガキ, 磨滅	微砂	黄灰
5	土師器・碗	14.8×15.3	6.5	5.1-5.8	1/1	(外)施ミガキ, 磨滅	微砂	淡黄白
6	土師器・碗	15	—	—	1/3	(内)施ミガキ(外)ナデ・施ミガキ, 口縁内面滑, 植物繊維痕	微砂	淡黄白
7	土師器・碗	14	5.8	5.6	1/4	(内)工高ナデ・施ミガキ(外)オサエ・施ミガキ, 内外面赤ね焼痕	微砂	黄灰
8	土師器・碗	14.5	6.0	5.4	口1/4底1/1	(内)(外)オサエ・施ミガキ, 磨滅, 内面赤ね焼痕, 内外面焼熱褐色	微砂	黄灰
9	土師器・碗	15.0	6.2	5.3	口1/2底1/1	(内)施ミガキ(外)ナデ・施ミガキ, 高台内に窪き「×」	微砂	淡黄白
10	土師器・碗	—	6.0	—	1/1	(内)(外)施ミガキ(底外)赤キリ, 内外面焼	微砂	黄灰
11	土師器・杯	14.8	9.8	2.9	口1/2底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ・板目肌, 磨滅	微砂	赤色粘
12	土師器・杯	15	11	3.2	口1/3底1/2	(内)(外)横ナデ(底外)板目肌, 内外面焼, 磨滅	微砂	赤色粘
13	土師器・杯	13.4×14.0	8.3	3.7	口1/3底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ・板目肌, 内外面に窪, 赤み	微砂	赤色粘
14	土師器・杯	13.4	7.8×8.2	3.6	口1/2底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 左回転, 底面に粘土継ぎ	微砂	赤色粘
15	土師器・杯	12.6	8.0	2.4	口(-)底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)赤キリ: 右回転, 磨滅・潤滑	微砂	淡黄白~赤白
16	土師器・杯	—	—	—	—	オサエ, 軟質, 磨滅, 京都系	微砂	淡黄白
17	土師器・付付皿	10.8	6.5	2.6	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ, 外面窪	微砂	黄灰
18	土師器・付付皿	—	7.6	—	2/3	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ, 磨滅	微砂	赤色粘多
19	土師器・皿	8.3	3.5	1.5	口1/4底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 左回転・板目肌	微砂	赤色粘
20	土師器・皿	8.6	6.7	1.3	3/4	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 左回転	微砂	赤色粘
21	土師器・皿	8.8	5.6	1.2	1/3	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 右回転	微砂	赤色粘
22	土師器・皿	9.7	6.6	2.1	口1/4底1/2	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 左回転, 潤滑, 内面焼熱	微砂	赤色粘
23	土師器・皿	9.2	6.8	1.6	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ・板目肌, 磨滅	微砂	赤色粘多
24	土師器・皿	9.5	7.0	1.1~1.6	口1/2底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 右回転, 板目肌, 内外面赤ね焼痕	微砂	赤色粘
25	土師器・皿	9.4	6.7	1.7	1/2	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ, 磨滅	微砂	赤色粘
26	土師器・皿	9.2	6.7	1.1~1.6	1/2	(内)(外)横ナデ(底外)施キリ: 左回転・板目肌, 内外面焼	微砂	灰黒~暗灰黒

図57 溝24出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (=1/64箱)	形態・手法施	胎土	色調：内面/外面	
		口径	底径	器高					
27	瓦器・碗	15.8	6.0×6.1	5.2~6.2	—	(内)ナデ、甍ミガキ(外)オサエ・ナデ、甍ミガキ(底外)ナデ、内外面施磨、内面丸巻肌	磁砂	灰~黒灰	
28	瓦器・碗	—	—	—	—	(内)ナデ、甍ミガキ(外)オサエ・ナデ、甍ミガキ	磁砂	黒灰	
29	瓦器・碗	—	—	—	—	(内)甍ミガキ(外)ナデ、甍ミガキ、輪巻型	磁砂	灰白	
30	瓦器・碗	—	4.8	—	1/4	(内)ナデ(底内)刷文	磁砂	黒灰/刷灰	
31	瓦器・碗	—	—	—	—	(内)ナデ、甍ミガキ、輪巻型	磁砂	黒灰/灰白~刷灰	
32	須恵器・碗	14.4	5.6	4.6	131/6残1/2	(内)(外)横ナデ(底外)糸年号、内外面施	磁砂	灰	
33	須恵器・碗	—	5.2	—	3/4	(内)(外)横ナデ(底外)糸年号	磁砂	灰白	
34	白磁・碗	—	—	—	—	内外面施磨、細かな面筋	磁砂	灰白(輪)流線灰	
35	白磁・碗	—	6.5	—	1/2	内外面施磨、高台内面施、足込みに沈線、高台内面	磁砂	灰白(輪)流線灰	
36	土師器・皿	34.0	—	—	131(=)割1/4	(内)(外)ハケ目、内外面施、内面刷灰褐色(施磨)	磁砂	灰黒/濃灰白	
37	土師器・皿	—	—	—	—	オサエ・ナデ	磁砂	濃灰	
番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	残存	形態・手法施	胎土	色調：内面/外面	
38	須恵器・丸瓦	7.5	5.3	1.5	—	(内)ナデ(外)布目肌	磁砂	灰白~濃灰	
39	土師器・平瓦	7.0	6.8	2.0	—	(内)格子目叩き(外)布目肌	磁砂	灰白~濃灰	
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	形態・手法施	胎土	色調
T8	須口?	7.7	4.0	4.0	122.2	—	中心に貫通孔1箇所(径0.6cm)、脇に本貫通孔2箇所(径0.3~0.6cm)、外面に白色土	磁砂	黄灰(芯)濃灰
T9	土師	5.6	1.4	1.4	10.7	1/1	ナデ、孔径0.35cm	磁砂	黒
T10	土玉	1.9	1.9	1.9	6.8	1/1	ナデ	磁砂	灰黒

図58 溝24出土遺物2 (縮尺1/4・1/3)

器種が1.5箱、土師器杯・皿・台付き皿が1箱、土師器鍋が1/2箱、その他壺・瓦器碗・須恵器・白磁碗・瓦などをあわせて1箱程度を数える。残存の程度が完形~3/4のものは僅少であり、吉備系土師器種、土師器杯・台付き皿が各1点、同皿が2点に留まる。碗は内外面施磨のものが中心を占める。また、1点では高台内に施記号(十字)が確認される(図57~9)。瓦器は輪巻型の小片を含む。須恵器は碗の破片が多い。土製品は土玉・

土鍾のほか、筒状の土製品が1点含まれる(図58-T8)。中心の穿孔1箇所以外に未穿孔の穴が2箇所確認される。性格は不明であるが、被熱痕がある点は何らかの手工業的作業に伴う可能性を示すのかもしれない。

出土遺物から12世紀中葉頃に埋没時期が求められる。機能した時期は平安時代後期、12世紀前半～中頃と想定される。ただし、鎌倉時代の遺物も一定量含まれる。これらは北半部で本溝と重複する後世の溝や土坑8などの上部遺構からの混入品と見なされる。土師器杯(図57-15)も、その時期に含まれると判断される。

本時期には、東側の第14次調査地点が屋敷地となっており、本溝はその西側を区切る重要な溝と考えられる。

溝25 (図42・59)



調査区やや東寄り、27ライン付近を南北に走るが、CF~CGライン部分は共同溝設置によって破壊される。北側を溝25 a、南側を溝25 bとする。両溝は直接つながらないが、位置関係から同一溝と判断した。溝25 aの北半は後世の溝や掘削で消失し、また、CIライン以南では確認できない。検出面は<5層>である。上面の高さは溝25 aで標高0.88m、溝25 bで同1m、底面は前者で同0.8m、後者では同0.92mを測る。南に上昇傾向を示す。深さはいずれも0.08m程度で共通する。溝の幅は、北端(溝25 a)で0.9m、南端(同b)では0.45mである。掘り方は皿状で後者は逆台形を呈しており、北側は形状が崩れ気味である。埋土は灰褐色砂質土で、前者ではやや暗い褐色を示す。砂の包含も多い。出土遺物の量は13号ポリ袋1/2程度で、いずれも小・細片である。吉備系土師器碗、土師器杯・皿のほか瓦器碗・須恵器甕・白磁碗(図59-1)を含むが、本溝の時期は平安時代後期、12世紀代の範疇で考えたい。

番号	種類・器種	口径	口径	高さ	底高	保存	形態・手法集	胎土	色調・内面/外面
1	白磁・碗	—	5.9	—	1.1	1/1	内外面施釉、高台高脚、足込み口縁部・縁口文	陶磁	灰白/胎土灰白

図59 溝25断面・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

溝26 (図42)

調査区やや東寄り、27ラインと28ラインの間付近で検出された。検出面は<5層>である。残存状況は溝25 aと共通する。同溝の西側に平行して南北に走る。両溝間は1.3m、肩部間で0.6mの間隔を保つ。上面の高さは標高0.95m、底面は同0.87m、深さは0.08mを測る。幅は0.4~0.5mである。掘り方は皿状を呈し、埋土は黄灰褐色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。以上の特徴も溝25と共通しており、両溝の関連性の高さを示す。遺物は出土していない。本溝の時期は検出面から平安時代後期、12世紀代に属すると考えられる。

溝27 (図41・43・60)

調査区中央部付近、CF~CG28区において<5層>で検出された。北端は調査区外に延びるが南端は掘削で破壊され、南北方向に長さ約6mが残る。溝25とほぼ平行しており、両溝の中心間で約9mの間隔を保つ。上面は標高0.96~1m、底面は同0.77m、深さは約0.2mを測る。幅は1mで、掘り方断面は皿状を呈する。埋土は上下二層に分層されるが、灰色の砂質土を基本とし共通性は高い。遺物は出土していない。検出面から本溝の時期は平安時代後期、12世紀代と考えられる。

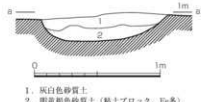


図60 溝27断面(縮尺1/30)

溝28 (図43・61)

調査区中央部北寄りにあたるCE~CG32~33区に位置する。全体としては逆L字形を呈する。調査区北端から南北方向に約15m走り、CHライン付近で西方向に屈曲し約8mが残る。西端部は池状遺構の北東隅にとりつく方向を示すが、溝32で削平されて結合部は消失している。南北軸の方位はN5°Eで溝24と共通する。検出面は<6層>と一部<9層>に

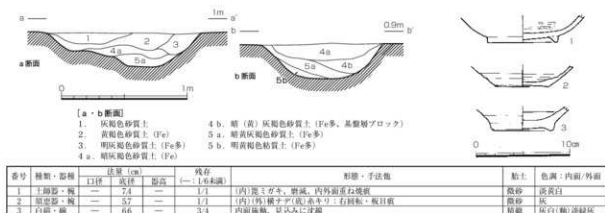


図61 溝28断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

対応する。上面は南北軸部分では標高0.8～0.88mであるが、屈曲部分から西側では同0.6m近くまで下がる。底面の高さは、北端付近が同0.62m、屈曲部付近が同0.53m、西端部で同0.5mを示す。北側が高く、南に向けての勾配が目立つ。さらに西端に向けても緩やかに下降する。溝の幅は、南北方向部で約1.2～0.95m、東西方向部は検出面が低いいため0.63mとなる。掘り方断面は碗状を呈する。埋土は灰褐色あるいは黄褐色の砂質土を基本とし、鉄分の沈着が全体におよぶ。一部に粘性が高まる層も確認されるが、全体に共通性の高い層で構成されている。遺物の出土量は13号ポリ袋1袋程度である。吉備系土師器椀、土師器皿・鍋・甕、須恵器椀、白磁碗などを含む。大半は小・細片である。

本溝の所属時期は平安時代後期である。

溝29 (図43・62)

調査区中央北寄り、CF・CH33区に位置する。北端は掘乱で消失するが、調査区の北側に延びることは平面的にも確認される。南端は、溝28と同様に池状遺構の北東隅に向かうが、溝32 a によって結合部は消失している。南北方向に長さ13m程度が検出された。その方向はN35°Eであり、溝24・28とは異なり溝22に近い。検出面は<6層>である。上面は標高0.88m(北半)～0.73m(南半)、底面は同0.5m～0.48m、深さは0.25～0.38mを測る。幅は、南端部付近で0.75m、北端部で1.2m程度が残る。掘り方は、検出レベルの高い北端部(a断面)では、底部から標高0.7m付近が逆台形を示し、同位置から上方に向けて大きく広がる。その幅は約1.5mが復元される。検出面が低いb断面付近では、上面が標高0.7m程度まで下がるため上半の広がりを失い、幅が狭くなったと理解される。埋土は全体に砂が多く含まれ、各層間に際だつ差は認めがたい。上半部は砂質が強く黄灰色を呈するが、下半に向けては粘性を強め暗灰色へと変化する。

遺物は出土していない。検出層から本溝の時期は平安時代後期と考えられる。

溝30 (図43)

調査区中央北寄り、CF・CG33区に位置する。溝29の上部に重複して長さ約8mが確認された。南北方向の溝であるが、その軸方向はN25°Eであり同溝とは異なる。北端部は同溝と同位置、そして南端はCHラインで取束する。検出面は北半では<5層>、南半は<6層>に対応する。上面の高さは、北半では標高0.98～0.95m、南半では同0.83～0.8m、底面は前者では同0.9m、後者では同0.77～0.7mを測る。全体に南に向けて下降する。深さは、

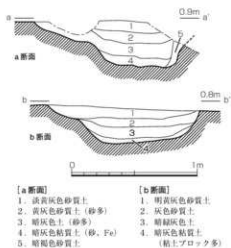


図62 溝29断面 (縮尺1/30)

部分的なばらつきがあるが、0.08m前後におさまる。溝の幅は0.28～0.43mで、掘り方断面形は小さな椀状を呈する。埋土は暗黄灰色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。

遺物は出土していない。本溝の時期は、検出面から平安時代後期と考えられる。

溝31 (図43)

調査区中央北寄り、CF・CG33区に位置する。溝30の東側にほぼ平行して長さ約4mが確認された。方向はN20°Eを示す。両溝の間隔は溝中間で2mである。南端部は同溝と位置をそろえて取束するが、北端部は同溝のほぼ中央部で途切れる。本来は同溝と同様に北に続いた可能性が予想される。検出面は<6層>であるが、本来は<5層>に対応すると評価される。上面は標高0.85～0.8m、底面は同0.8～0.73mを測り、やはり南に向けて下降する。深さは0.07m程度である。溝の幅は0.25～0.5mで、掘り方断面は小さな椀状を呈する。埋土は暗黄灰色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。遺物は出土していない。このように、本溝の特徴は溝30と共通性が極めて高い。平行する位置関係からも対をなす溝と評価される。

本溝の時期は、同溝と同じく平安時代後期に属すると考えられる。

溝32 (図41・43・63～67、図版9・41・47)

調査区中央部に位置し、鍵の手状に調査区を区切る。検出面は<5層>に対応する。CHラインからCIライン間を38ライン付近から29ライン付近まで東西方向に走り、同ライン付近で南に屈曲する。南端はCJライン以南で浅くなりCKライン付近で溝の形態を失う。その間、後世の溝や掘乱によって複数の箇所が破壊される。特に、本溝の西端部にあたる38ライン付近は調査次の境界線であったため、後世の溝62との関係も含め、不明な部分が多く残った。ここでは、38ライン以西で検出されない点や土層の検討から、同ラインから西約1mまでで取束する可能性を考えたい。

断面観察などから、二条の溝の重複が確認されたため、上部溝を溝32a、下部溝を溝32bとして報告する。

溝32a： 34～38ラインにおいて東西方向に走る。溝の北側肩部はCHライン付近に合致する。鹿田座標軸に沿った方向で長さ約20mを確認した。上面の高さは標高0.95～0.8mを測る。底面の高さは同0.5m程度であるが、その東端部では同0.35mまで落ち込む凹みを形成する。深さも西側が浅くて0.25m、東端の深い部分で0.45mを有す。溝の幅は、南側肩部のラインを平面的には確認できていないが、a・b断面(図63)からは2.6m前後が想定される。また、凹み部分では3mに広がるのが窺われる。掘り方は概ね皿状の範疇と考えられる。埋土は全体に砂質で鉄分の沈着が顕著である。1～2層が全体を覆うのに対して、3～5層は東端部の凹み部のみで堆積が確認される。前者は明るい灰褐色砂質土を基本に砂のブロックと鉄分の沈着が認められる。東端部の凹み部分(同a・b断面)では2層対応層に多くの粘土ブロックや炭・土器が認められる。さらに3～4層では炭と土器が集中的に出土する。こうした同地点の特徴は、加熱作業を伴う祭祀的行為の場の痕跡と理解できるかもしれない。

溝32b： 東西方向に走り、東端部で南に屈曲する。西端部は38ライン付近で姿を消す。南端については、CJラインとCMライン間になると浅くて緩やかな凹み状をなしており、溝の形態としては疑問を残す。上面の高さは標高0.95～0.8mであるが、底面の高さは33ラインの東2m付近を境に東西で数値が異なる。同位置以西は標高0.6～0.5mを測るのに対して、以東は同0.35mに下降する。溝の深さも、前者では0.15～0.3m、後者では0.5～0.6mと変化する。さらに、溝の幅でも同位置を境に、前者で3.2m程度、後者で4m前後へと広がる。こうした形状の変化は、溝の屈曲部を中心に顕著に現れており、コーナー部分が深く幅広い形態であったと想定される。掘り方は皿状であるが、深さを増すコーナー周辺では逆台形に変化する。埋土は上下に大別される。淡灰褐色砂質土の1～2層は全体を覆う層であり、溝32aの埋土との共通性が極めて高い。下層を構成する3～4層は、底面が下降するコーナー周辺(図63-d・e断面)にのみ堆積する。灰色系で粘性が強い特徴があり、一段下がった部分を埋める土層群である。

溝32出土遺物 (図64～67)： 遺物はコンテナ(28L/箱)12.5箱分が出土した。取り上げ時に溝aと溝bの区

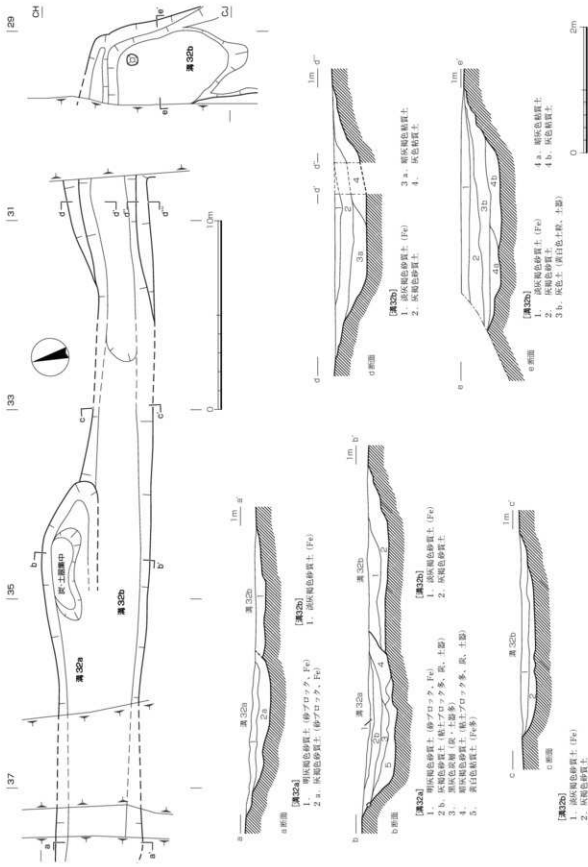
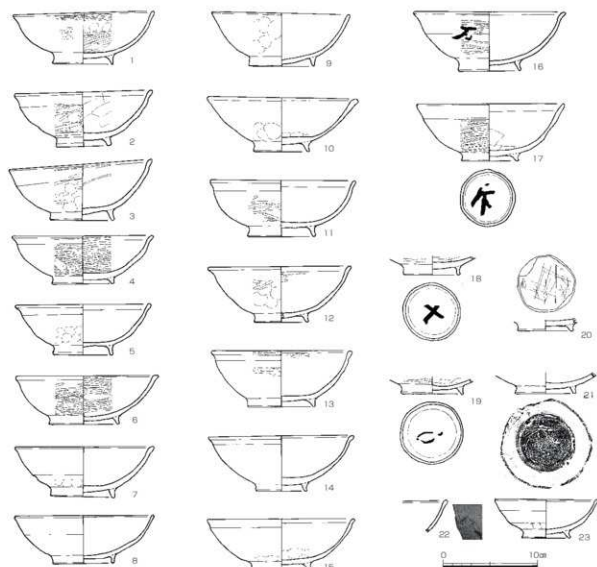
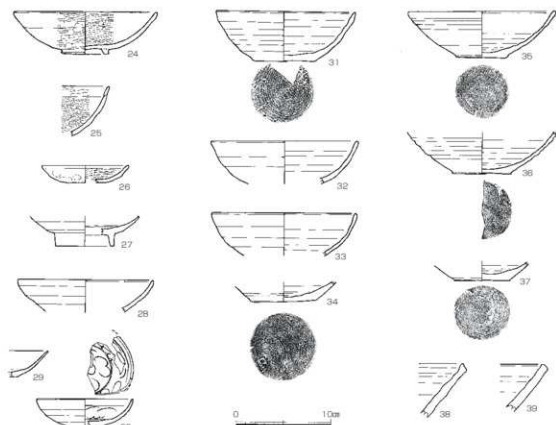


図63 溝32 (縮尺1/200・1/60)



番号	種類・部相	寸法 (cm)			残存 (—:1/4未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口徑	底径	器高				
1	土師器・碗	15.0	6.5	5.2-5.7	□12.3底1/1	(内)オサエ・ナダ・施ミガキ(外)施ミガキ(底外)ナダ, 内外面燻・酒痕	陶砂	赤色粒 黄灰
2	土師器・碗	14.8	6.0	5.9	1/1	(内)工具ナダ(外)施ミガキ(底外)板目痕, 内面重ね焼痕・粒ノ圧痕1	陶砂	燻 淡黄白
3	土師器・碗	15.1	6.8	5.2-6.6	1/3	(内)ナダ・施ミガキ(外)施ミガキ(底外)ナダ, 内外面に重ね焼痕	陶砂	燻 黄白
4	土師器・碗	14.9	6.6	5.1	1/1	(内)施ミガキ(外)施ミガキ, 内面重ね焼痕, 内面種子圧痕1	陶砂	燻 淡黄白
5	土師器・碗	14.4	6.3	5.4	1/1	(底外)板目痕, 内面重ね焼痕, 磨滅	陶砂	燻 淡黄白
6	土師器・碗	15.2	7.3	5.2	□13.4底1/1	(内)(外)ナダ・施ミガキ(底外)ナダ	陶砂	赤色粒 淡黄白
7	土師器・碗	14.7	6.7	5.4	□12.3底1/1	磨滅, 外面燻	陶砂	赤色粒 淡黄白
8	土師器・碗	14.8	6.6	5.1	□12.3底1/2	(底外)ナダ, 内外面重ね焼痕, 磨滅	陶砂	赤色粒 淡黄白
9	土師器・碗	14.7	7.1	5.5-5.9	□11.2底1/4	内外面重ね焼痕, 磨滅	陶砂	燻 淡黄白
10	土師器・碗	16.0	6.0	5.6-5.9	□12.5底1/1	(底外)板目痕・ナダ, 磨滅	陶砂	赤色粒 淡黄白
11	土師器・碗	15.4	7.1	6.0	□11.3底1/1	(内)ナダ(外)ナダ・施ミガキ, 内面・重ね焼痕, 外面燻	陶砂	燻 淡黄白・黄灰
12	土師器・碗	15.1	5.5	5.9	1/3	(内)施ミガキ(外)オサエ・施ミガキ(底外)ナダ, 磨滅	陶砂	燻 淡黄白
13	土師器・碗	15.0	7.1	6.0	□11.3底1/1	(内)(外)ナダ・施ミガキ(底外)板目痕・ナダ, 内外面重ね焼痕, 磨滅	陶砂	燻 淡黄白
14	土師器・碗	15.4	5.4	5.9	□11.6底1/1	(底外)ナダ, 磨滅・剥落・変色(黄熱)	陶砂	燻 淡黄白
15	土師器・碗	15.6	6.4	5.5	□11.6底1/1	(底外)ナダ, 磨滅・剥落	陶砂	燻 淡黄白
16	土師器・碗	16.1	6.6	6.3	1/1	(内)ナダ(外)施ミガキ(底外)ナダ, 磨滅・剥落, 外面磨傷	陶砂	燻 淡黄白
17	土師器・碗	15.7	6.1	6.0	□(—)底1/1	(内)工具ナダ(外)施ミガキ, 外面燻, 高台内磨傷	陶砂	燻 淡黄白・黄灰
18	土師器・碗	—	6.1	—	1/1	(内)工具ナダ(外)ナダ・施ミガキ(底外)ナダ, 高台内磨傷×印	陶砂	燻 黄白
19	土師器・碗	—	6.7	—	1/1	(内)工具ナダ(外)ナダ・施ミガキ(底外)ナダ, 高台内磨傷	陶砂	赤色粒 淡黄白
20	土師器・碗	—	5.9	—	1/1	見込みに磨傷 キ文か?	陶砂	燻 淡黄白
21	土師器・碗	—	6.5	—	1/1	(内)(底外)ナダ, 高台内に連続する圧痕, 内外面重ね焼痕	陶砂	燻 黄白
22	土師器・碗	—	—	—	—	外面に植物圧痕3	陶砂	燻 黄白
23	土師器・碗	10.8	5.2	4.1	□11.5底1/4	(内)(外)ナダ	陶砂	燻 淡黄白

図64 溝32出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)	口径	底径	器高	残存	形態・手法態	胎土	色調・内面/外面
24	瓦器・甕	15.2	5.0	4.5	—	口1/3底1/3	(内)ナデ・施しぎき・裏(外)オサエ・施しぎき(額)(底外)オサエ	陶砂	黒灰
25	瓦器・甕	—	—	—	—	—	(内)施しぎき(外)オサエ・施しぎき・甕底	陶砂	黒灰内
26	瓦器・甕	9.2	7.8	1.9	1/4	—	(内)施しぎき(外)纏ナデ(底外)オサエ	陶砂	淡黄白
27	白磁・甕	—	6.2	—	—	1/4	内外面施釉。高台部施釉。見込み段	精磁	灰白(釉)透明
28	白磁・甕	14.4	—	—	—	1/4	内外面施釉。釉は薄く甕底	精磁	淡黄灰(釉)黄白
29	白磁・甕	—	—	—	—	—	内外面施釉。底面磨削。見込み段	精磁	灰白(釉)白
30	白磁・甕	10.2	3.7	2.9	1/4	—	内外面施釉。貫入あり。見込み段。内面に施釉キ文	精磁	白(釉)黄白
31	黒磁器・甕	15.1	6.6	5.2	口1/3底1/3	—	(内)(外)纏ナデ(底外)赤キリ・右回転・板目肌。口縁部に重ね焼痕	陶砂多	黒灰～黒灰
32	黒磁器・甕	15.6	—	—	—	1/4	(内)(外)纏ナデ。口縁部に重ね焼痕	陶砂	灰白～黒灰
33	黒磁器・甕	15.4	—	—	—	1/4	(内)(外)纏ナデ。口縁部に重ね焼痕	陶砂	灰白～黒灰
34	黒磁器・甕	—	7.1	—	1/3	—	(内)(外)纏ナデ(底外)赤キリ・右回転・板目肌	陶砂	灰白
35	黒磁器・甕	15.6	5.7	5.1	口1/3底1/3	—	(内)(外)纏ナデ(底外)赤キリ・右回転・板目肌。口縁部に重ね焼痕	陶砂	灰白～黒灰
36	黒磁器・甕	—	5.8	—	1/2	—	(内)(外)纏ナデ(底外)赤キリ。口縁部に重ね焼痕	陶砂	灰白
37	黒磁器・甕	—	5.9	—	1/3	—	(内)(外)纏ナデ(底外)赤キリ・右回転・板目肌。軟質。内外面施	陶砂	淡黄白
38	黒磁器・鉢	—	—	—	—	—	(内)(外)纏ナデ。束縛系	陶砂	灰
39	黒磁器・鉢	—	—	—	—	—	(内)(外)纏ナデ。口縁部に重ね焼痕。内面自然釉	陶砂	黒灰～黒灰/灰

図65 溝32出土遺物2 (縮尺1/4)

分がなされていないため溝32として報告する。出土遺物の構成は、吉備系土師器甕6箱、土師器杯・皿1箱、その他の甕・皿(瓦器・輸入陶磁器・須恵器など)1箱、土師器鍋2箱、竈1箱、須恵器甕・鉢など1箱、石器・土製品類ほか0.5箱である。各器種がそろっているが、その中で2/3以上の残存率をもつ遺物は、吉備系土師器甕と杯・皿に限定される。それ以外は全て1/3以下の小～細片である。なお、図66～47の杯は、底部系切りである。小片であり詳細は不明であるが、他地域からの搬入品の可能性が考えられる。

吉備系土師器甕には植物圧痕が残る個体が4点(図64-2・4・21・22)、墨書が確認される個体が4点(図64-16～19)含まれる。図64～22では小破片にも係わらず、外面に3点のイネ科の圧痕を確認することができる。土錘1点、鉄器1点、そして石器では硯1点と砥石4点が出土する。そのほか、焼土・灰壁片が460g程度確認されており、砥石の多さと併せて集落内での手工業生産の面で注目される。硯についても、本時期の本道跡の評価にも係わるものであろう。遺物の時期は平安時代後期、12世紀代を中心としており本道跡の時期を示す。一部鎌

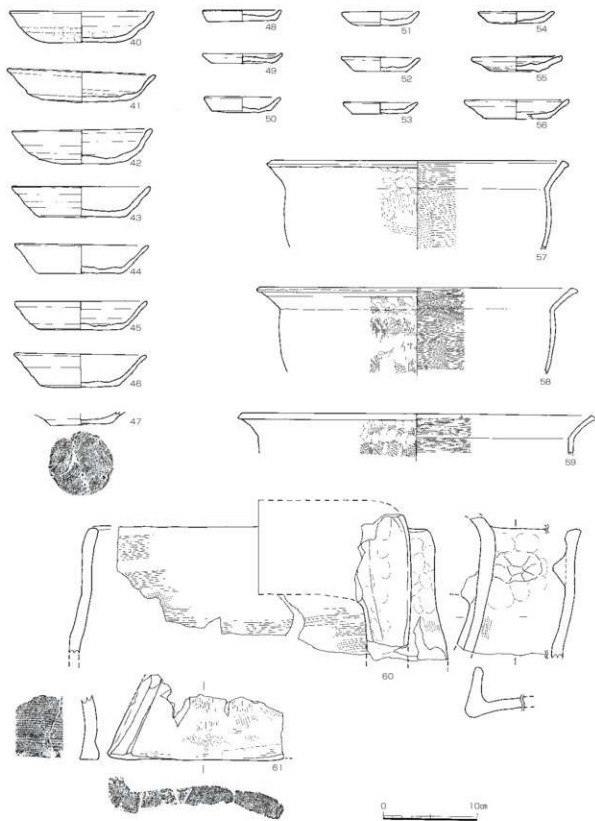
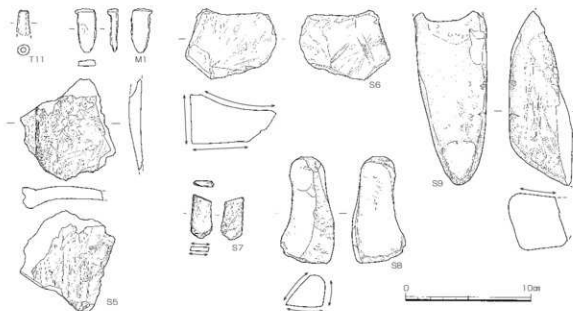


図66 溝32出土遺物3 (縮尺1/4)

溝32 (図66) 出土遺物観察表

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (1/10未満)	形態・手法	胎土	色調(内面/外面)
		口径	底径	器高				
40	土師器・杯	152	77	33	1/1	(内)オサエ・ナデ(底)底ホリ・板目直, 全面滑造・(口縁変色)焼熱	微砂 赤色粘	黄白
41	土師器・杯	134+15.8	110+11.4	28+3.8	1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ・板目直, 内面滑造, 赤焼	微砂	黄白-橙白
42	土師器・杯	148	96	36	1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ・板目直, (口縁変色)焼熱	微砂	赤色粘
43	土師器・杯	148	98	33	1/2	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転, 滑造	微砂	淡橙白
44	土師器・杯	141	93	28	E11-6成1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ・板目直	微砂 赤色粘	淡橙白
45	土師器・杯	140	86	31	1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・ナデ・板目直, (口縁変色)焼熱, 赤焼	微砂	淡橙白
46	土師器・杯	140	83	33-37	2/3	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・ナデ・板目直, 赤焼, 外面凹凸状(変色)焼熱	微砂	橙白
47	土師器・杯	—	66	—	—	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ	微砂	黄白
48	土師器・甕	83	71	32	E11-4成1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ, 赤色粘・滑造・外面変色(焼熱)	微砂	淡橙白
49	土師器・甕	85	64	11	1/3	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ, 変色(焼熱)	微砂	淡黄白
50	土師器・甕	82	64	17	2/3	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ	微砂	淡黄白
51	土師器・甕	82	67	15	1/1	(底)底ホリ・左回転・ナデ, 赤焼, 底面に粘土の継ぎ目, 内外面凹凸状	微砂 赤色粘	淡黄白
52	土師器・甕	84	56	15	1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転	微砂	黄白
53	土師器・甕	80	53	13	E11-4成1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・横ナデ, 滑造	微砂	赤色粘
54	土師器・甕	81	61	13	1/1	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・左回転・ナデ, 赤焼・滑造	微砂	淡黄白
55	土師器・甕	96	56	16	1/1	(底)底ホリ, (口縁変色)焼熱, 上げ底, 外面変色(焼熱か)	微砂	橙白/粗灰
56	土師器・甕	112	72	21	E11-6成1/2	(内)内)横ナデ(底)底ホリ・右回転	微砂 赤色粘	淡橙白/黄白
57	土師器・甕	32.0	—	—	1/4	(内)横ハケ目(外)ハケ目・オサエ, 外面滑	細砂	橙粘/黒粘
58	土師器・甕	34	—	—	1/5	(内)横ハケ目(外)オサエ・横ハケ目, 内外面滑	細砂	粗粘/粗粘
59	土師器・甕	30.0	—	—	1/3	(内)横ナデ(外)横ハケ目 外面滑	細砂	粗粘/粗粘
60	土師器・甕	—	—	—	—	(内)内)ハケ目・ナデ(口)口部(上)オサエ・ナデ, 内面滑	細砂	粗粘/粗粘
61	土師器・甕	—	—	—	—	(内)内)ハケ目・下廻横ハケ目(底)外)外面滑	微砂	粗粘/粗粘



番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	形態・手法	胎土	色調
T11	土師	2.0	1.1	1.0	1.7	1/3	ナデ・オサエ, 孔径0.35cm	微砂	淡褐色
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴		
M1	土師・杯	3.5	1.5	0.8	3.2	1/1	上表面平坦, 裏面に凹く深くなる		
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	石粒		
S5	甕	8.0	7.5	1.7-0.4	690	—	粘板引	(内)内)面方向に傾る, 輪状の使用痕, 両面無数の擦痕, 断面形状, 僅かな	
S6	甕	5.0	7.1	4.2	183	—	高絞引	輪縁以外すべて表面として使用, 縁状のものを経典した遺物有	
S7	甕	3.5	1.7	0.5	35	1/1	高絞引	小形, 表面滑造と下面に粗造	
S8	甕	8.2	4.1	2.5	126.9	1/1	細粒大理石	断面三角形, 砥面4面	
S9	甕	14.1	5.6	5.3	423.4	—	泥質カレンフェルス	先端に砥石, 片面に縦方向の擦痕	

図67 溝32出土遺物4 (縮尺1/3)

倉時代になる遺物も小細片が含まれるが、上部層の流入に伴う混入と判断される。

溝33 (図43・68)

調査区北西隅、CD40区に位置する。南北両端は調査区外へ延びる。調査区の北壁と西壁の断面調査で確認された。上面は<6層>に対応し、標高0.8mを測る。底面の高さは標高0.47m、深さは0.33mである。

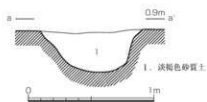


図68 溝33断面 (縮尺1/30)

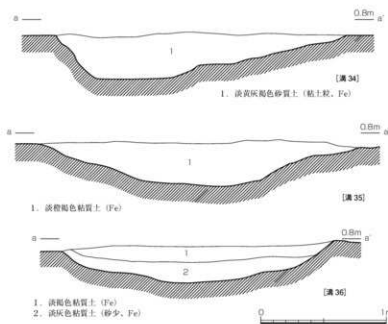


図69 溝34～36断面 (縮尺1/30)

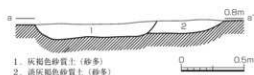


図70 溝37断面 (縮尺1/30)

幅は0.8mで、掘り方は椀状を呈する。埋土は淡褐色砂質土の単一層である。遺物は出土していない。本溝の時期は、検出面から平安時代後期の中で捉えておきたい。

溝34 (図43・69)

<6層>で検出された。調査区南西端付近、CK39・40区に位置する。池状遺構と調査区西壁に挟まれた場所、長さは約3mが残る。溝の方向はN52°Wであるが、溝33とは直交する可能性がある。上面は標高0.75m、底面は同0.34m、深さは約0.4mを測る。溝の幅は約1.3mであり、幅2.3mの数値を示すa断面の位置は、ややカーブする溝を斜めに切る状態にあるため、その数値が高くなったと理解される。埋土は砂質の単一層で粘土粒を多少含む程度である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面や池状遺構との関係から、平安時代後期の中で捉えておきたい。

と理解される。埋土は砂質の単一層で粘土粒を多少含む程度である。遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面や池状遺構との関係から、平安時代後期の中で捉えておきたい。

溝35 (図42・69)

調査区南西端付近、CL41区に位置する。<6層>で検

出された。北側は調査区外へ延びる。調査区内では長さ3.5m程度が残り、南端は収束する。鹿田座標軸に沿った南北方向を示す。上面は標高0.75～0.7m、底面は同0.4m、深さは0.35mを測る。溝の幅は2.5～3mである。掘り方は浅い逆台形を呈し、埋土は鉄分の沈着で橙色を強めた粘質土である。遺物は出土していない。

本遺構の時期は、検出面から平安時代後期の中で捉えておきたい。

溝36 (図42・69)

調査区南西端付近、CL42・43区に位置する。本溝の西側には河道の広がりか想定されており、微高地端部にあたる場所である。<6層>上において、南北方向に長さ5m程度が検出された。南・北両端は調査区外へ延びる。溝35の西側にはほぼ平行しており、両溝の間隔は中心間で約10mである。上面は標高0.8～0.7m、底面は同0.44m前後、深さは0.3mを測る。溝の幅は北端が約2.2m、南端では4mに広がる。掘り方断面は皿状を呈し、埋土は鉄分が沈着する粘質土である。上層が褐色で下層は灰色を強める。遺物は出土していない。以上の諸要素には、溝35との類似点が多く認められ、両溝の関連性を窺うことができよう。

本遺構の時期は、検出面から平安時代後期の中で捉えておきたい。

溝37 (図43・70)

調査区南西端付近、CJ・CK39区に位置する。溝34から北2mの位置である。検出面は<5層>に対応する。平面形はL字状に残るが、北端部は攪乱で消失する。東端部は池状遺構で途切れているが、同遺構で破壊されたのか、あるいは同時性をもつのかは判断がつかぬ。方向も残存長が短いため確定できない。上面の高さは標高0.77m、底面は同0.63m、深さは0.14mが残る。溝の幅は1.5mで、皿状の掘り方を示す。埋土の分層は色調の濃

淡程度であり、いずれも灰褐色系の砂質土で砂を多く含む。遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面から平安時代後期の中で捉えておきたい。

小溝群1～5 (図41・43・71・72)

検出面は<5層>と<6層>である。分布は調査区の北西部～西端部に広がる。溝の方向・分布の位置などから5箇所をまとめられる(図41・43)。37ラインを挟んで、以東を小溝群1・2、以西を小溝群3～5として説明する。前者は、34～36ライン間に分布するが、その中で小溝群1はCFライン以北、同2は同ライン以南に対応する。両群の溝の方向は主に東西方向である。一方、後者に含まれる小溝群3の範囲は、39ラインを西端とし、南端は小溝群2の南端ラインに近い位置にあたる。溝の方向が東西という点でも小溝群1と2との関連性は高い。それに対して、CJラインを境に以北を小溝群4、以南を小溝群5としているが、いずれも南北方向を主体とする点で小溝群1～3とは異なる。小溝群1では溝の分布域とピットの集中域は重複する。ピットは調査区全体で50基程度が調査された中で、約30基が同範囲に含まれる。上部遺構の影響を差し引いても、その多さは否定できない。溝の方向について周辺の溝と比較すると、溝32と平行関係を有するものが大半を占める。

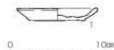
所属時期は確定しがたいが、検出面あるいは小溝群2の出土遺物から平安時代後期の中で捉えておきたい。

小溝群1：CD～CF34・35区に広がる。<5層>で検出された14条の小溝①～⑭で構成される。上面は標高1～1.1m、底面は同1m前後で低くても同0.85mである。深さは0.02～0.06m、幅は0.2～0.25mが中心である。掘り方は碗状を呈し、埋土は黄灰色系の砂質土で鉄分の沈着が顕著である。長さは、2mを超える溝⑥⑩⑪を除くと0.7～1.5m程度で、途切れ途切れの状態を残す。比較的地形の高い場所であることを考慮すると、上部の削平の影響を受けた結果とも考えられる。方向は鹿田構内座標軸に沿う溝が多いが、一部に若干違いを示すものも含まれる。東西方向が10条と南北方向が4条で、後者は東寄りの34区に分布する。小溝の間隔は2～2.5mあるいは約0.8mを測るが、残存長が短いこともあり詳細は不明である。本小溝群周辺には多数の柱穴が分布する特徴を評価すると、本小溝群については、耕作痕だけでなく、何らかの構造物と関連する可能性も残す。

小溝群2：小溝群1の南側、CF・CG34・35区に広がる。6条の小溝①～⑥で構成される。<6層>で検出されたが、周辺遺構との関係から、本来は<5層>に属する可能性が考えられる。上面は標高0.8m前後、底面は同0.72～0.77m(中心は0.74m前後)、深さは0.04～0.08mを測る。溝の幅は0.2～0.4mに収まる。掘り方は碗状を呈し、埋土は暗黄灰色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。残存する長さは8m以上の小溝①から約1mの小溝⑤までばらつきが大きい。その残存状況は小溝群1より良好である。方向は鹿田構内座標軸に合致する。

各溝の配置を確認すると、まず注目されるのが本小溝群2の小溝①である。同溝は小溝群1と小溝群2の分布域の東端と南端を区画する位置に検出される。CG34地点から南に2.5m地点をコーナーとして、北に向けて34ライン上を6.5m延びて取東する。西に向けては、同コーナーから直角に折れ曲がり、攪乱による中断を挟みながら、長さ約8.5mを確認することができる。西端は攪乱で消失する。小溝②と同③は小溝①の西側に平行して南北に走る。その間隔は2.2mあるいは2.7mであり、両溝の南北位置が互い違いになっていることを示す。その分布域は小溝①の範囲を超えては確認されない。こうした位置関係から小溝①～③は有機的な関係をもつ可能性が高い。残る小溝④～⑥は東西方向を示し、小溝④および⑤と小溝⑥との間隔は約1mを測る。

本小溝群は、小溝群1の南に続く位置にあたるが、埋土の色調、溝の残存状況や柱穴分布域外である点、そして溝の配置などに違いをみせる。特に小溝①～③の配置には、空間を区画する意識が認められる。ただし、屋敷地を区画する溝などと比較する



番号	種類・形状	法量 (cm)			残存 (=1.5m未満)	影響・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	部高				
1	土師器・皿	8.5	5.9	8.5	11.2(2)1.1	(内)195(緑ナメ)底)黒キリ：左回転・ナメ	微砂 赤色粘	淡黄白～橙白

図71 小溝群2-④出土遺物(縮尺1/4)

と規模は極めて小規模であり、耕作地での細分機能を考えることができるかもしれない。小溝④からは土師器皿が出土している。

小溝群3：調査区西端部、小溝群1～2の西側に位置する。東西方向に走る小溝群である。CGラインの南1mより北側に分布する。＜5層＞と＜6層＞で検出された10条の小溝①～⑩で構成される。残存する長さは2～7mを測り、全体的に長さが短い東側の小溝群1・2とは明らかに異なる。掘り方は椀状を呈する。埋土は暗灰色粘質土を中心とする。鉄分の沈着はさほど顕著ではない。

本小溝群は、上面・底面の高さによって2群に大別される。高位置にあるのは小溝①～④・⑧・⑩である。特に数値の高い小溝②を除くと、上面の高さは標高0.75～0.86m、底面は同0.67～0.77m、深さは0.08～0.11mを測る。これらの溝の間隔は小溝①～③が約2m、同④・⑧・⑩が3～2mである。一方、検出面の低い小溝⑤～⑦・⑨では、上面の高さは標高0.65～0.7m、底面は同0.6～0.68m、深さは0.02～0.07mを測る。新・旧の二時期を想定することができる。周辺には柱穴などの遺構は検出されておらず、耕作に関する溝の可能性が高い。

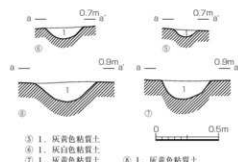


図72 小溝群4—⑤～⑧ (縮尺1/30)

～0.73mを測り、数値の振れ幅は小さい。小溝は約2m間隔で平行して形成される。後者についても、小溝⑦と同⑧では標高0.8mの上面高と同0.55mの底面高の数値は共通しており、その間隔は2m程度である。小溝⑤と同⑥では、上面は標高0.63m前後、底面は同0.55mであり、やはり数値は極めて近似する(図72)。この場合の小溝間隔は1.5mである。いずれも同時性が高いことが想定される。耕作に関する溝の可能性が高い。

小溝群5：調査区南西端部、CJライン以南で池状遺構の西側から溝35の間に分布する。小溝群4の南側に位置する8条の小溝①～⑧で構成される。＜5層＞と＜6層＞で、南北方向と東西方向とが検出された。前者は①～⑥の6条で長いものは6mを超える。後者の小溝は⑦と⑧の2条のみである。長さは1～1.4mで、やや残りが悪い。いずれも上面は標高0.65～0.73m、底面は同0.57～0.64mを測る。深さは0.03～0.1mであるが、中心は0.05m前後である。掘り方は椀状を呈し、埋土は全体的に鉄分を含む点では共通するが、黄灰色砂質土や暗灰色粘質土、そして暗褐色粘質土などが確認されており、ばらつきが指摘される。小溝③と同④、あるいは小溝⑥と同⑧は重複関係が確認されている。耕作に伴う小溝と考えられる。

2. 平安時代末～鎌倉時代

＜4 b層＞に対応する遺構群であり、井戸7基、土坑8基、墓2基、溝17条を含む。ピットについては、＜4 a層＞との分離が明確とは言いがたいが、少なくとも100基を超える。その構成は溝を中心とした＜5層＞と＜6層＞とは大きく異なる。井戸は7基へと急増し、土坑やピットそして墓といった屋敷地の存在を示す遺構が、空間を区切る溝の間に配される。溝の規模は大形化の傾向を示す。耕作地から屋敷地への変化と評価される。溝以外の遺構は、ほとんどが調査区北側にあたるCGライン以北に集中しており(図73)、屋敷地が本調査地点の北側に東西方向に並ぶように配置された可能性を示している。

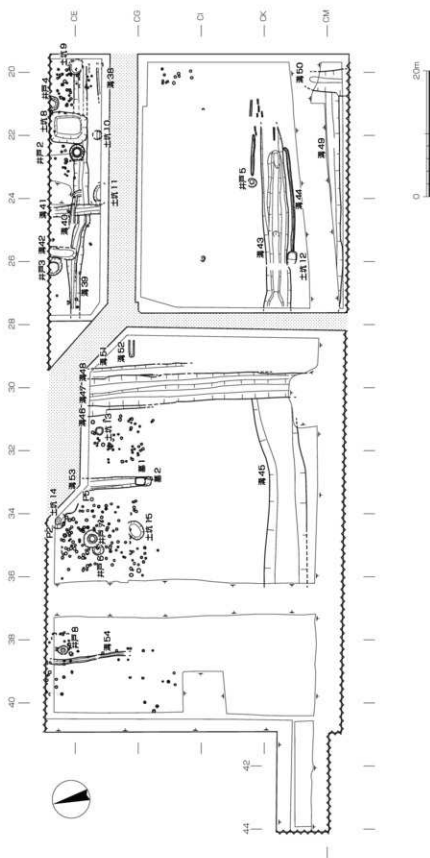


図73 平安時代末～鎌倉時代遺構全体図 (縮尺1/600)

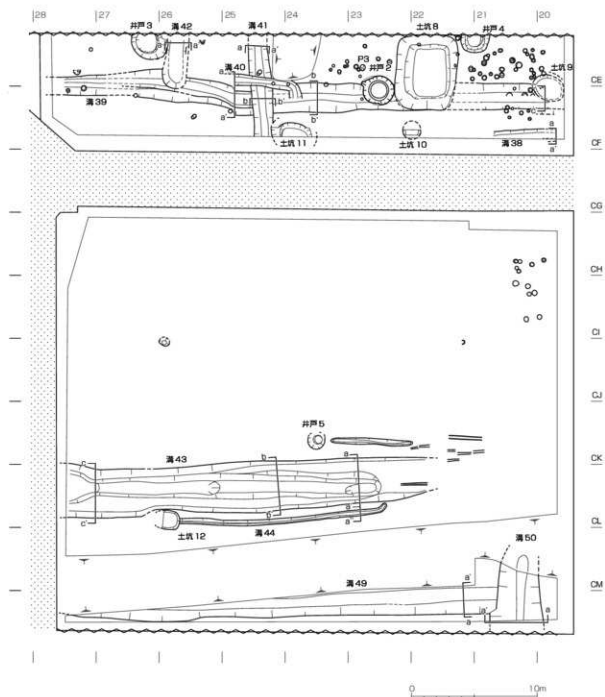


図74 平安時代末～鎌倉時代遺構全体図－東半－（縮尺1/300）

a. 井戸

井戸7基は10m～40mの間隔をもって調査区北側に配される（図73）。出土遺物から導かれる井戸の時期は12世紀後半～13世紀の範囲であり、14世紀代の井戸は確認されない。

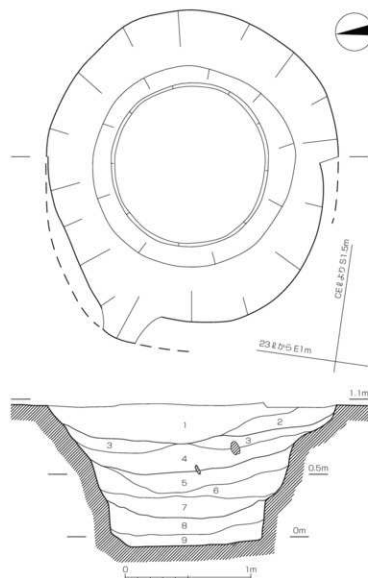
井戸2（図74・76 図版11）

弥生時代以降、比較的高い地形を保つ調査区の東北部、CD・CE22区に位置する。本井戸は溝39と重複関係に



図75 平安時代末～鎌倉時代遺構全体図一西半一 (縮尺1/300)

ある。そのため、先に検出された同溝の掘削の影響によって、井戸の西2/3部分は大きな削平を被ることとなったが、土層の検討から本井戸が上部の遺構と修正された。本来の検出面は<4層>と判断される。上面の高さは標高1.1～1m、底面は同-0.08m、深さは1.18mを測る。周辺の井戸3・4に比べると底面レベルはやや高く、深さは浅い。平面形は東西に軸をもつ楕円形が復元される。その規模は直径が2.3m程度が残るのみであるが、本来は2.3m×2.7m程度となることが予想される。底面は直径1.2mの円形を呈する。掘り方は、底面から0.3m程度垂直に立ち上がった後、上部に向けて開口する。円形で径が大きい底面や、底部からの立ち上がり形状の特徴から、底部に曲物が枠として置かれた可能性も考えられる。全体的な形態の特徴は井戸3・4と共通する。



埋土は九層に細分しているが4群にまとめられる。1～2層は粘性が弱い土層で包含物も少ない。本井戸埋没後の流入土的堆積層であろう。3～4層は粘性を強める。鉄分の沈着が顕著となり、下層に向けて土器や炭化物の包含が確認される。5～7層では灰色の色調や粘性が一層強くなり、粘土がブロック状に多く含まれる点が特徴である。こうした3～7層は本井戸廃棄時における埋め戻しの状況を示す層といえそうである。最下部にあたる8～9

1. 暗灰色土
2. 灰褐色土 (Fe)
3. 黄灰色土 (粗砂, Fe)
4. 淡灰色粘質土 (土器, 炭, 礫, Fe)
5. 暗灰色粘質土 (粘土ブロック多)
6. 黄灰色粘質土 (粘土ブロック多, Fe)
7. 淡灰色粘質土 (灰色土ブロック多)
8. 灰色砂混シルト (有機物多)
9. 黒灰色砂混シルト (有機物・礫多)



番号	種類・部材	法層 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法	粘土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・瓶	—	—	—	(内) 蓮ミガキ(外) ナデ・蓮ミガキ	陶砂	淡黄白	
2	土師器・瓶	—	6.0	—	(内) ナデ・蓮ミガキ(外) ナデ(底外) 高台内底ナリ底	陶砂	黄白	
3	土師器・瓶	—	7.3	—	1/1 棚皿, 内面底面ぬ襷底	陶砂	紫色・黄白	
4	土師器・皿	8.9	7.5	1.2	2/3 (内) (外) 縁ナデ(底) 蓮ナリ; 左縁和・ナデ	陶砂	橙黄	
5	土師器・皿	9.5	—	—	1/4 (内) (外) 縁ナデ(底) ナデ, での字口縁	陶砂	赤色紅	

図76 井戸2・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

層は、灰色のシルト層に砂の包含が際立つ層群であり、多くの有機物の存在も特徴をなす。最下層の9層には大小の円礫が多く含まれており、使用段階における堆積を窺わせる。

出土遺物量は、13号ポリ袋1袋程度である。少量である上、いずれも小～細片であり、本井戸廃棄にあたって意図的に入れられた遺物を見いだすことはできない。その内容は、吉備系土師器碗、土師器杯・皿がほとんどで、僅かに須恵器鉢・白磁碗・土師器鍋・ての字口縁の土師器皿（図76-5）などが含まれる。その特徴から11～12世紀の時期におさまるものが多いが、いずれも本遺構以前の混入物と判断される。また、ニホンジカの側頭骨片等3点が出土しているが、これらも小片であり（第4章9）、同様に埋め土中の混入物であろう。

本井戸の時期は、溝39との重複関係から鎌倉時代前半の範疇でとらえておきたい。

井戸3（図74・77～79、図版10・37）

調査区北端、CD26区に位置する。南側に位置する溝39から北へ3mである。北端部は調査区端の設置欠板でカットされたため、南部分約2/3の調査となった。その後、第25次調査の実施で残り約1/3部分が追加調査されたため、本報告では両調査成果をあわせて報告する。

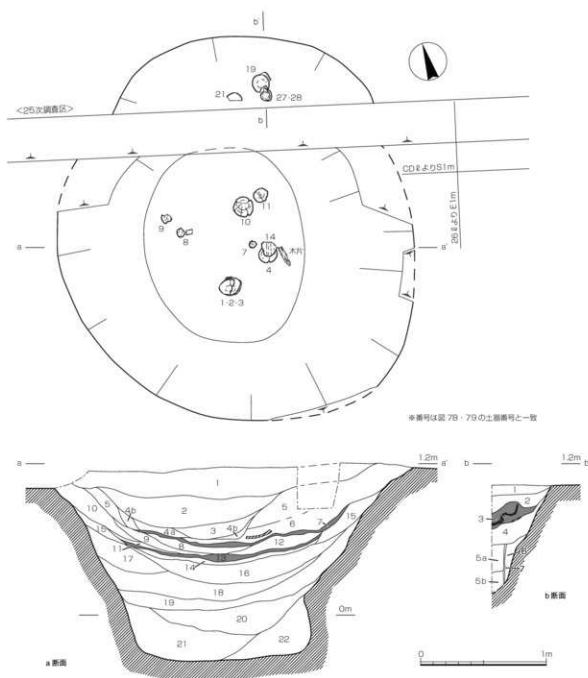
検出面は<4b層>対応と考えられる。上面は標高1.15m、底面は同-0.37m、深さは1.52mを測る。平面形は、北側の第25次調査成果を加えると、東西2.85m・南北3.05mの楕円形、そして底面は1.3m×1.6mの規模が復元される。掘り方は東側と西側のラインに違いが認められるが、東半部の底部付近のオーバーハングラインは壁面崩落が予想されることから、本来は逆台形であったことが予想される。

埋土は、以上の5群に大別される。まずa断面（図77）で説明しよう。1群は1・2層、2群は3～6層、3群は7～15層、4群は16～20層、そして5群は21・22層である。1群はやや砂質を帯びる土層で、特に1層では炭化物・焼土塊・土器の小細片が多く含まれる。こうした特徴は、本遺構上部を覆う土層と類似しており、井戸埋没後の流入土の性格を強く示す。2群を構成する土層は灰褐色系の色調でやや粘性があり、鉄分の沈着が目立つ。上半の3～4層では褐色系の粘質土ブロックを多く含む。一方、6層では、7層（3群）の影響を受けて炭や土器が増加する。3群は炭および灰を多量に含む層群として特に際立つ土層群を構成する。なかでも7層と13層は炭あるいは灰で構成されており、7層では完形あるいはそれに近い土器が集中的に出土する。そして、連続的に堆積する8・9層、それに加えて15層には砂がブロック状に含まれる。こうした砂・炭・灰などを含む層と砂を含む土層の互層堆積は、井戸廃棄に際して焼成作業を伴う儀礼的行為が何度か繰り返された状況と理解される。4群以下は概ね灰色や粘性が強い土層に変化する。その変化には、当然、地下水の影響が大きいが、炭・灰ではなく粘土ブロックを多く含むという点で明らかに3群とは異なる。鉄分の沈着も顕著である。2群との共通性が高く、埋め戻し土と理解される。その中で最上部にあたる15層は、粘性や色調で16層以下とは異なる面をもつが、堆積レベルの違いとして捉えられよう。最下部の5群は砂を混入する粘土層である。粘土ブロックを多く含むが、細砂の割合が高く湧水の影響が予想される。使用段階における壁面崩落時の堆積が考えられる。

第25次調査区のb断面の土層を、以上の土層群に対応付けてみよう。まず、炭層として際立つb断面3層が3群にあたることは明らかである。ここでは非常に厚い堆積を見せる。遺物が集中して出土している点も共通する。その上層である1・2層は流入土的特徴を示しており、1群あるいは2群に、そして下層に向かう4～6層はシルト～粘土を中心に褐色土や粘土ブロックの包含が特徴であり、4群（16～20層）に対応する。その他に、b断面では掘り方下半部において縦方向に土層を区切る粘土のラインが確認されている（図77-b断面7層）。その幅は0.01m程度であり、平面でも標高0.55m付近で検出されている。薄い板状物の存在が予想されるが、詳細は不明である。

遺物は第11次調査個でコンテナ1.5箱（28%箱）、第25次調査個で同1箱の量が出土した。出土層位は、いずれも炭層を中心とする3群を中心とする。それ以外の層と比較すると、3群ではコンテナ1箱に対して1・2群では同0.5箱弱、4群以下では13号ポリ袋1袋程度であり、その差は大きい。質的な面をみると、1・2群はほとん

調査の記録



※番号は図 76・79の土層番号と一致

【a断面】

1. 灰褐色砂質土 (灰、焼土、土器)
2. 暗灰色砂質土
3. 灰褐色土 (黄褐色土ブロック、灰、焼土)
- 4 a. 灰褐色土 (黄褐色土ブロック多、Fe)
- 4 b. 橙褐色土 (黄褐色土ブロック多、Fe)
5. (黄) 灰褐色土 (黄褐色土ブロック少、Fe)
6. 暗灰色土 (灰、焼土、土器、Fe)
7. 黒～灰黒色炭層 (灰、大形土器)
8. 黒褐色粘質土 (灰・砂ブロック多、灰)
9. 暗褐色粘質土 (灰・砂ブロック多、灰)
10. 灰褐色粘質土 (砂・灰多)
11. 暗灰色粘質土 (灰多、灰)
12. 暗灰色粘質土 (灰多、灰)

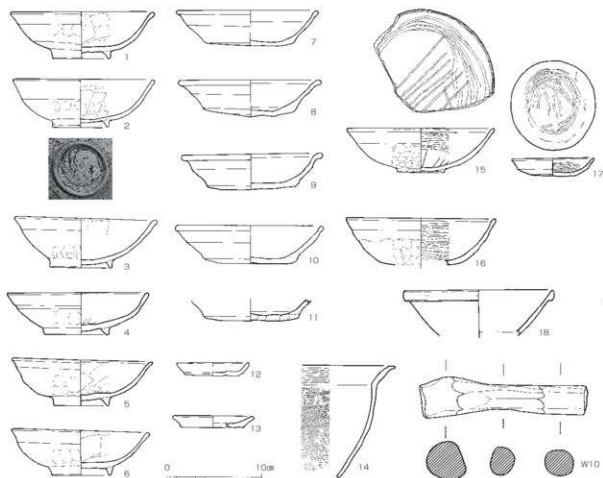
13. 黒色炭層
14. 灰色粘質土 (灰、灰、細砂)
15. (淡) 橙褐色粘質土 (砂ブロック、Fe多)
16. 淡黄灰色シルト (粘土ブロック多、Fe)
17. 橙灰色シルト (粘土ブロック多、Fe過多)
18. 灰色シルト (粘土ブロック、細砂)
19. 淡灰色シルト (粘土ブロック過多)
20. 灰色粘土 (粘土ブロック)
21. 暗灰色細砂混粘土 (粘土ブロック過多)
22. 黒灰色細砂混粘土 (粘土ブロック多)

1層：1～2層、2層：3～6層、3層：7～15層
4層：16～20層、5層：21～22層

【b断面】

1. 暗灰色砂質土 (粘土粒)：a断面1層対応
2. 淡灰色砂～砂質土：a断面2or3層対応
3. 炭層：a断面7～13層対応
4. 淡灰褐色砂質土 (褐色土ブロック)：a断面15層対応
- 5 a. 暗灰色褐色シルト：a断面16～19層対応
- 5 b. 明灰色褐色シルト (灰色粘土ブロック)：a断面16～19層対応
6. 暗灰色粘土 (灰色粘土ブロック)：a断面20層対応
7. 暗灰色褐色シルト

図77 井戸3 (縮尺1/30)



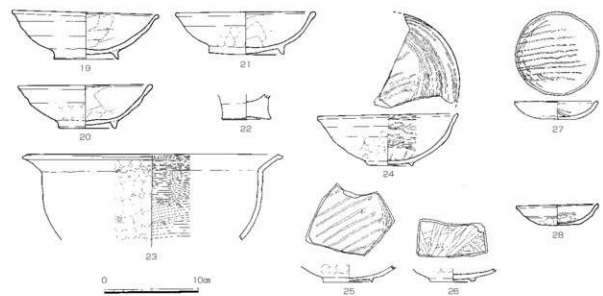
番号	種類・器種	寸法 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法類	胎土	色調・内面・外面
		口径	底径	厚高				
1	土師器・碗	15.3	6.2	4.6-5.0	1/1	(内)オサエ・工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面系ね焼成	陶砂	黄白
2	土師器・碗	15.2	6.0	4.7-5.1	1/1	(内)オサエ・工具ナデ(外)オサエ、高台内底ナリ皿、内外系ね焼成、裏熱	陶砂	黄白
3	土師器・碗	148×152	6.6	5.0-5.5	1/1	(内)オサエ・工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面磨滅	陶砂	黄白
4	土師器・碗	15.0	6.7	4.3-4.9	2/3	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面磨滅	陶砂	黄白・淡黄白・淡黄白
5	土師器・碗	14.5×14.9	5.8	4.9	1/1	(内)オサエ・工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面種子圧痕1	陶砂	黄白
6	土師器・碗	14.7	6.2×6.6	4.3-5.0	3/4	(内)工具ナデ、高台内底ナリ皿、外面布圧痕	陶砂	黄白
7	土師器・杯	15.7	10.1	3.9	3/4	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ・左回転・板目煎、内外面系ね焼成	陶砂	赤色粒 粉白
8	土師器・杯	13.1	9.4	4.4	1/1	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ・左回転・板目煎、磨滅	陶砂	赤色粒 粉白
9	土師器・杯	13.0	9.4	3.9	1/1	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ・板目煎、内面系ね焼成、内外面に煤	陶砂	赤色粒 粉灰
10	土師器・杯	13.2	9.3	3.5-4.0	1/2	(底外)籠ナリ・左回転・板目煎、内面煤、内外面系ね焼成	陶砂	赤色粒 粉灰 粉白
11	土師器・杯	—	10.2	—	1/3	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ・板目煎、底磨滅・上板煎	陶砂	赤色粒 粉白
12	土師器・皿	7.6	5.6×6.0	1.4	1/1	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ・左回転・板目煎、口縁部に系ね焼成	陶砂	黄白
13	土師器・皿	8.6	6.7	1.3	1/2	(内)(外)種子ナデ(底外)籠ナリ、内面煤	陶砂	赤色粒 粉灰
14	土師器・箸	—	—	—	—	(内)(外)ハケ目(口)オサエ・横ナゲ後ハケ目、内外面煤	陶砂	粉灰
15	瓦器・碗?	15.6	3.0	4.7	1/3	(内)ナデ・籠ミギキ(外)オサエ・ナデ、見込みに磨文、内面煤	陶砂	粉灰・黒灰
16	瓦器・碗?	15.8	—	—	1/3	(内)籠ミギキ(底外)オサエ・ナデ、軟質、内外面系ね焼成	陶砂	灰白・粉灰・黒
17	瓦器・皿	8.8×9.4	4.6	1.9	1/1	(内)ナデ・籠ミギキ(外)横ナゲ(底外)オサエ、見込みに磨文	陶砂	灰白・粉灰
18	白磁・碗	16.0	—	—	1/1/4	内外面施釉 外面下平磨削、見込みに沈線	磁磁	灰白/釉灰白
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	器種	本取り	特徴	
W10	木鏝	17.6	4.1-4.2	—	コナラ属アカガシ亜属	芯持ち丸木	両端面平削、中央部を細く加工、根柢れは未確認	

図78 井戸3出土遺物1—第11次調査—(縮尺1/4)

どが小～細片に留まるが、3群では完形品を含む1/2以上の大形破片が数多く含まれる。また、4群以下においても大形破片が出土している。

3群・4群における遺物の出土状況を説明しよう。

3群のなかで、大形の遺物は、炭層であるa断面7層・13層、そしてb断面3層において、中央部に落ち込む



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←1/6未満)	形態・手法他	粘土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
19	土師器・椀	15.5	6.8	4.7-5.2	1/1	(内)工具十字(外)ナダ、内外面に黒色斑点多数、高台に重ね焼痕	黒砂	黄白
20	土師器・椀	14.4	6.2	4.1-4.5	1/2	(内)工具十字(外)オサエ・ナダ、内面に重ね焼痕	黒砂	黄白
21	土師器・椀	14.8	8.0	4.5	1/3	(内)工具十字(外)オサエ・ナダ、内外面重ね焼痕、底部内面黒	黒砂	黄白
22	土師器・脚台	—	5.2	—	3/4	(内)(外)縷子ナダ(底)縷子ナダ、丹塗リ	黒砂	黄白
23	土師器・皿	27.5	—	—	1/3	(内)ハタジ：上平煎 下平煎(外)ハタジ・オサエ、外面焼・内面焼熟	黒砂	黒灰/黄灰
24	瓦器・椀	15.0	5.0	4.9-5.6	1/4	(内)ナダ・縷子ナダ(外)オサエ・ナダ、底部内面に刷文	黒砂	黒灰
25	瓦器・椀	—	5.0×5.5	—	1/1	(内)ナダ・縷子ナダ(外)オサエ・ナダ、底部内面に刷文、高台内に円形の縷子ナダ	黒砂	黒灰
26	瓦器・椀	—	4.9	—	1/2	(内)ナダ・縷子ナダ(外)オサエ・ナダ(底)ナダ、高台縁面は黒で成形	黒砂	黒灰
27	瓦器・皿	8.9	7.2	1.9	1/1	(内)縷子ナダ・縷子ナダ(外)縷子ナダ(底)オサエ・ナダ、足込みに刷文、内面にワグシ	黒砂	黒灰-灰
28	瓦器・皿	8.7	7.0	1.9-2.3	1/1	(内)縷子ナダ・縷子ナダ(底)オサエ・ナダ、西面磨滅	黒砂	黒灰-灰白

図79 井戸3出土遺物2-第25次調査-(縮尺1/4)

ような状態で集中的に出土する(図77、図版10)。遺物はいずれも正位置に置かれる。出土した吉備系土師器椀6点のうち4点(図78-1~3・5、図79-19)は完形品で、2点(図79-4・6)は2/3以上が残存する。その内3点(図78-1~3)は重ねられた状態にあった。土師器杯はやや小片のものも点在するが、1/2以上を残すもの2点(図78-7・10)を含む。また、完形の瓦器皿2点(図79-27・28)が重なって出土している点は注目される。完形の吉備系土師器椀(図79-19)に接する位置である。出土位置が確認できないが、3群以下で出土した可能性が高い完形の遺物として、土師器杯1点(図78-8)・皿1点(同-12)と瓦器皿1点(同-17)があげられる。こうした遺物には、井戸廃棄に際しての儀礼的行為の存在を窺うことができる。また、その構成面、瓦器の皿の比率が高い点も付け加えておこう。その他に、残存率が1/2以下のものでは、土師器脚台・鍋・甕、須恵器、瓦器(いずれも和泉型)、白磁碗など多様な中世土器が含まれる。瓦器は、前述した完形の皿以外にも口径復元が可能な大きさをもつ椀なども含む。

4群からは、瓦器椀(図78-15)が炭層下で出土している。1/3程度の大きさであるが、出土遺物が僅少で小片のなかでは意図的な廃棄を予想することができるかもしれない。その他に、4群あるいは5群からシカの中手骨片が1点出土している。

以上のように、土層の特徴や遺物の出土状況は、特に3群における焼成行為を伴う儀礼的行為を際立たせる。

出土遺物のなかには、土器生産の技術的痕跡を残すものが確認される。粘土成形に係るものとしては、吉備系土師器椀の底部外面の縷子ナダ痕(図78-2)や外面に残る布圧痕(同-6)、そして杯の底部形成を示す粘土紐の痕跡(同-11)である。さらに、吉備系土師器椀の内面に残る種子圧痕(同-5)や瓦器の皿内面の縷子ナダ痕(図79-27)は、土器製作過程における乾燥段階の具体的な様相を探る上でも注目されよう。なお、図79-20・23は第

11次調査の井戸部分から出土した遺物と接合した。

本井戸の時期は、出土遺物から平安時代末、12世紀後半～末に属すると考えられる。

井戸4 (図74・80、図版13・37)

調査区東北端付近、CD20・21区に位置する。井戸3の東側26mの位置で東西に並ぶ。井戸2とは北に4m、東に7.5mの場所である。調査区北端の矢板で北側がカットされるが、本地点の北側で実施された第20次調査では明確に確認されていないことから、本井戸の北端は本調査区外にさほど伸びていないことが予想される。

検出面は<4m層>で、標高1～1.15m、底面は同-0.35m、深さは1.5mを測る。平面形は円形と考えられる。規模は、東西幅で上面は2.2m、底面は1.2mを測る。南北幅については、北端部の消失によって上面は1.3m、底面は0.85mを残すのみであるが、上面で1.9～2m、底面で1.1m程度の規模が復元される。掘り方は、上半部の立ち上がりが消滅しており不明な部分もあるが、概ね段を有す逆台形といえそうである。こうした形態上の特徴は前述の井戸3と共通する。

埋土は5群に大別される。1群は1層、2群は2～4層、3群は5～11層、4群は12～14層、5群は15～17層である。以下に土層説明をするにあたっては、遺物の出土状況を合わせて説明することで堆積環境を復元することとする。

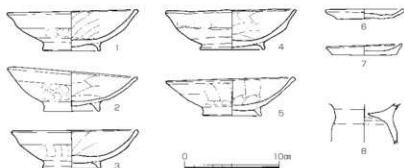
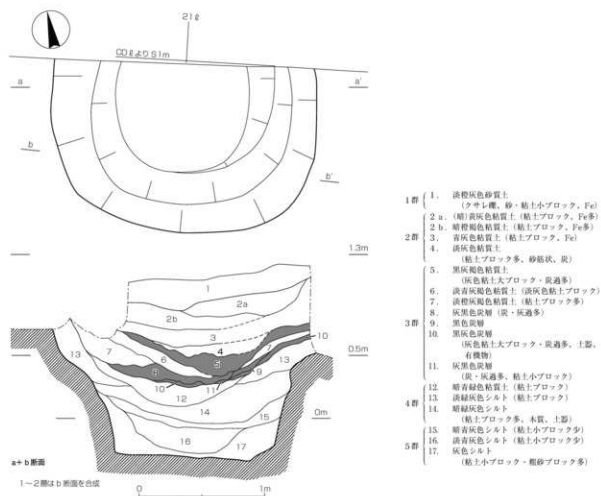
1群は砂質を強めクサレ礫などを含んでおり、以下の土層群とはやや状況が異なっている。井戸埋没後の流入土と評価される。2群は粘土ブロックの包含が特徴的な土層群であり、鉄分の沈着も顕著である。出土遺物は多彩であるが、いずれも小・細片が占める。埋め戻し土と評価される。3群は炭と灰の包含が特徴的な土層とその間に挟まれる土層で構成される。炭層は5層と8～11層である。前者では大形の粘土ブロックがその中に多量に含まれる。後者のなかでは10層が粘土ブロックと土器が混在した状態を示し、その上部には生焼け状態の蕨状の植物遺体の堆積が確認される。炭・灰を含まない6・7層が炭層間に堆積することから、焼成行為は少なくとも2回におよぶことが考えられる。また、完形の吉備系土師器椀1点(図80-4)が炭層から出土しており、複数回にわたる井戸内の焼成行為が儀礼の意味を有している可能性を高める。4群は粘土ブロックの包含が特徴的で、2群と共通した堆積構造を示す。埋め戻し土と考えられる。ただし、出土遺物の状況は大きく異なる。出土量が限定される中で、完形の吉備系土師器椀1点(図80-1)と上部を欠損した皿2点(同-6・7)が4群の最下層にあたる14層中からほぼ同レベル(標高0.11m付近)で出土している。14層は井戸廃棄に際して、最初の埋め戻し段階にあたる層である。同段階に土器を使った儀礼的行為が行われたことが窺われる。最下部に堆積する5群では、包含される粘土ブロックの大きさは小さくても量も極めて少ない点で、他の層群と区別される。また、最下層である17層では粗砂がブロック状に多く含まれる。こうした特徴から、使用段階の堆積を考えておきたい。

以上のように、井戸廃棄に際しての儀礼行為が、少なくとも4群～3群において行われた痕跡を抽出することができる。最初の祭祀行為は4群から確認される。土器を置くことで始まり、下半を埋め戻した段階で3群の形成に移る。井戸内において複数回の焼成と土器を伴う祭祀が行われ、そして、最後に完全に埋め戻された状況が復元される。使用された土器は吉備系土師器椀と皿である。周辺の井戸との関係では、形態面での特徴や炭層群を挟んでの堆積状況など、多くの点で井戸3と共通した様相を示している点を指摘しておきたい。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)2/3箱分が出土した。その内、吉備系土師器椀2点(図80-1・2)において種子圧痕が確認された。その他に、植物資料として、土壌中から出土した種子があげられる。タデ・ヤエムグラなどの雑草以外に、数点のイネとメロン仲間の種子1点が含まれる(第4章8)。イネについては、炭層を形成する炭化物に関連する可能性も考えられる。

本井戸の所属時期は、土器の時期から鎌倉時代前半、13世紀前葉と考えられる。本地点では井戸3に続く時期といえよう。

調査の記録



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (一=1.6未満)	形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	13.9	6.3	3.8-4.3	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内外面重ね焼成、内面種子任意口	陶砂	黄白
2	土師器・碗	13.7	5.8	3.7-4.7	3/4	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼成、外面種子任意、歪み	陶砂	黄白
3	土師器・碗	13.4	6.0	3.7-4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、高台肩部に板目肌、内面重ね焼成	陶砂	黄白
4	土師器・碗	13.8	6.9	3.9-4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、高台肩部板目肌、内外面重ね焼成	陶砂	黄白
5	土師器・碗	14.0	6.2	4.2	III/4底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底)板目肌、内面重ね焼成	陶砂	黄白
6	土師器・皿	8.4	5.9	1.1	III/5底3/4	(内)(外)横ナデ(底)鹿キリ：左回転	陶砂 礫	黄白
7	土師器・皿	7.9	6.8	1.1	2/3	(内)(外)横ナデ(底)鹿キリ：割減	陶砂 赤色粒	褐色
8	土師器・舞台	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、底面に穴・亀裂 焼成中の破損小	陶砂 赤色粒	淡黄白

図80 井戸4・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

井戸5 (図74・81、図版11・12)

調査区南東部、CJ23区に位置する(図74)。井戸2～4の集中域から南へ約27mの位置である。本時期の井戸は、いずれもCFライン以北に位置するなかで、1基のみが単独で南に配されている点には注意が必要であろう。第9次調査区と第11次調査区の境界にあたるため、北側の一部が傾渾などで破壊される。調査途中において遺構の評価が変化したこともあり、土層断面位置は、上部堆積層(図81-a断面)と下部堆積層(同-b断面)で別図となっているが、報告上、合成した図を掲載する。

検出面は<4b層>中に対応し、標高0.95～0.98m、底面は同-0.25m、深さは1.15～1.2mを測る。平面形は円形を呈する。規模は上面で1.35×1.1mが残存しており、直径約1.35mが復元される。底面は直径0.6mである。掘り方は、上半部がやや開く部分が確認されており、概ねY字形と考えられるが逆台形の可能性も残す。

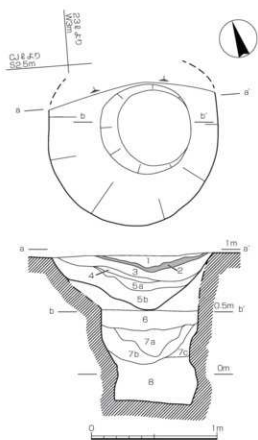
上層の埋土(a断面)は、炭化物や灰が多く含まれる2層を境に、1層と3～5層では様相が異なる。3～5層では、量的差はあっても、灰色あるいは暗灰色の粘土ブロックが何れの層にも多く含まれる点が特徴である。それは1層ではほとんど確認できない。一方、下層(b断面)では、6層と7層との間に色調等の違いが指摘される。7層以下の特徴をなす灰色を基調とし粘性の高い状態は、堆積レベルの相違、つまり地下水との関係が影響していることは明らかであり、本質的な差を示すものではない。包含物に注目すると、粘土ブロックを含まず、小枝などの有機物が多い8層が上層と区別されよう。

以上のように、粘土ブロックの状況から3～7層は井戸廃棄にあたっての一連の埋め戻し土と理解される。それらとは異なる状態の8層は、埋め戻し直前の状況を示しているが、使用段階のものかどうかについて確定することは難しい。

出土遺物はいずれも小～細片で極めて少量である。上層から10号ポリ袋1/3袋程度の量の遺物が出土したのみである。吉備系土師器椀や土師器杯・鍋の小～細片がそれぞれ数点含まれる。それ以外には、焼土の小塊～粒が数点認められる。井戸廃棄に際して、下半部を埋め戻した後、焼成行為が行われた痕跡を2層に見ることができ、こうした焼土塊の存在は、井戸内での焼成というよりは外部での作業で生じた炭などを廃棄した可能性も考えられる。そうした点で、屋敷地内に配される井戸3・4とは区別されるかもしれない。

また下層からは、アネツツラフジ・サカキ・ヤブツルアズキの種子が出土したが、その種類や点数は極めて少ない状態を呈しており、同じく種子が出土した井戸4・7とは大きな違いをみせる点(第4章8)も指摘しておきたい。

所属時期は、検出面から平安時代末～鎌倉時代の範疇と考えられる。



[a断面]

1. 淡灰色粘質土
2. 黒灰色砂質土(灰・灰多、細砂)
3. 赤灰色粘質土(灰色粘土ブロック)
4. 灰褐色粘質土(灰色粘土ブロック多)
- 5 a. 赤褐色砂質土(灰色粘土ブロック多)
- 5 b. 暗褐色砂質土(灰色粘土ブロック多、Mg多)

[b断面]

6. 黄褐色粘質土(灰色粘土ブロック、Fe多)
- 7 a. 黒灰色シルト(黒色・灰色粘土ブロック多)
- 7 b. 黒灰色シルト(黒色・灰色粘土ブロック、Fe)
- 7 c. 灰褐色シルト(粘土ブロック多)
8. 黒灰色シルト(有機物多)

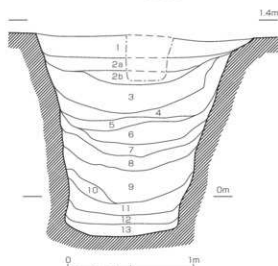
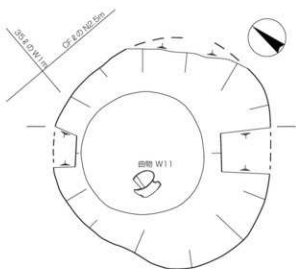
図81 井戸5 (縮尺1/30)

井戸6 (図75・82、図版12・44)

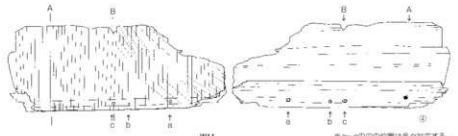
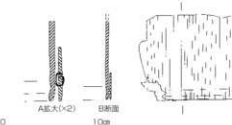
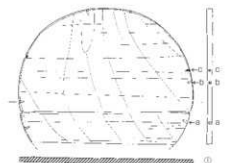
調査区北西部、CE35区に位置する。柱穴の集中域にあたる。井戸7が重複するため北東部を僅かに欠く。

検出面はく4b層である。上面は標高1.3m、底面は同一0.33m、深さは1.63mを測る。平面形は円形を呈し、上面で直径は1.8m~1.75m、底面では同1m~0.95mである。掘り方断面形は逆台形を示す。

理土は十三層に分層しているが、その内容から4群に大別される。1群(1~7層)は灰褐色を基調とする土層群である。色調や粘性で細分されるが、いずれも際立つ包含物を持たない。2群(8・9層)は灰色を基調とし粘性を高める土層であるが、有機物あるいは炭化粒の包含が特徴的である。8層では粘土ブロックも多く含まれており、3群との共通性が指摘される。3群(10~12層)は灰色系で粘性の高い土層で、粘土ブロックを多く含む特徴をもつ。4群(13層)は最も粘性が強い灰色粘土で包含物は認められていない。全



1. 灰褐色砂質土
- 2 a. 灰褐色砂質土
- 2 b. 灰褐色土砂質土 (Fe多)
3. 暗灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 灰褐色粘質土
7. 暗灰色粘質土
8. 暗灰色粘質土 (粘土ブロック・有機物多)
9. 黒灰色シルト (炭化物多)
10. 灰色シルト (粘土ブロック)
11. 黒灰色シルト (粘土ブロック多)
12. 暗灰色シルト (粘土ブロック多)
13. 灰褐色粘土



番号	層位	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	種類	本取り	特徴
W11 曲物	① 底板	18.5	14.3	0.6	セノキ	概目	①: 周縁に沿う箇所の釘穴・うち4箇所に本釘残存・釘穴a-cは3のa-cに対応 ②: あわせ目部分・縦じ度取残存 ③: ケビヤなし・扉の縦じ部で縦じ度取残存 ④: 掘削下部と扉・製鉄の内面下部から5mmの所に底板の圧痕・製鉄と扉に釘穴3箇所 (a-c)・方形で一辺0.3cm)・扉に縦じ度残存
	② 側板	5.5	5.8	0.3			
	③ 扉	2.7	3.5	0.2			
	④ 横板	9	23.4	0.3			
	⑤ 扉	2.8	22.9	0.2			

図82 井戸6・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

体的に儀礼的な痕跡は希薄である。

遺物は木製品の曲物(図82-W11)以外にほとんど出土していない。1群には中世土器の小・細片が僅かに含まれるが、時期的に新しく混入品と判断される。曲物の出土位置は、底面の高さが標高-0.18m、上面は同0mを測る。3群堆積層中でやや傾いた状態で出土した。破片も含め1個体と考えられる。出土時点では、底板と側板は結合した状態であったが、完形品ではなく一部が破損していた。井戸廃棄に際して儀礼的に納められたものか、あるいは使用状態でそのまま埋め戻されたかの判断は難しい。底板には木釘9箇所が確認され、うち4箇所には木釘が残る。その並びは不規則で有り補修の痕跡と理解される。

遺構の重複関係から、本井戸の時期は鎌倉時代、12世紀末～13世紀前半と判断される。

井戸7 (図75・83・84、図版14・37・44)

調査区北西部、CE34区に位置する。井戸6の東隣に一部を重ねて配置される。

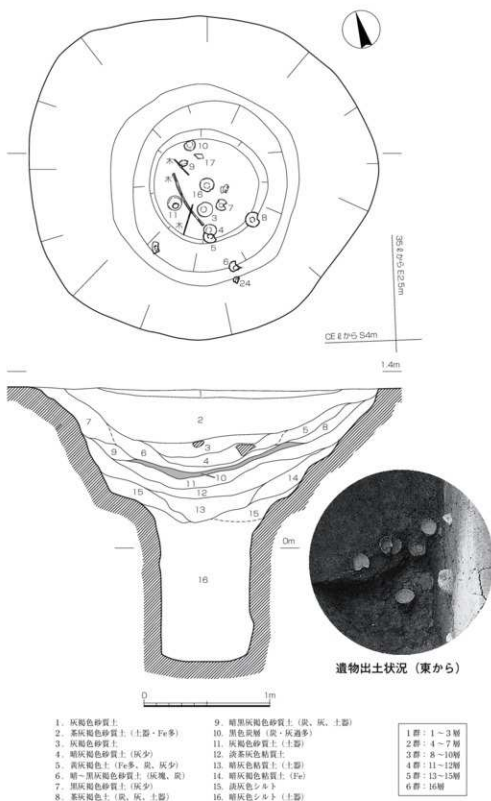
検出面は<4b層>中に対応する。上面の高さは標高1.3～1.25m、底面は同-0.9m、深さは2.15mを測る。他の井戸に比べると、底面レベルの低さが際立つ。ほとんどの井戸が標高0m付近以下に堆積する砂層を0.2～0.3m掘り下げて湧水を得ているのに対して、その深さは群を抜いている。平面形は円形を呈し、上面の直径は2.75m～2.55m、底面と同0.83～0.8mを測る。掘り方断面形は、下半の筒状の掘り方から上方に大きくすり鉢状に開いたY字形を呈する。全体的に非常に深く整った形状の井戸と評価される。

埋土は、上半部のすり鉢状部分と下半の筒状部分で違いをみせる。その境は標高0.2m付近である。全体を、十六層に分層したが、その特徴から6群に大別される。1群(1～3層)は灰褐色を基調とする。2層については土器や鉄分の沈着から分層しているが、1層と合わせて井戸廃棄終了後の凹みを埋めた最終的な流入土の堆積と理解される。2群(4～7層)は灰や炭が少量含まれる土層群である。そのため、1群よりはやや暗い色調を示す。3群(8～10層)は2群より灰・炭の含有量が多い。特に10層は多量の炭・灰が堆積する炭・灰層であり、焼成行為の痕跡と評価される。4群(11～12層)以下は下層に向けて粘性を強める。炭・灰は全く含まれない。5群(13～15層)以下は、粘質土そしてシルトへと変化し色調も灰色が基調となる。包含物は土器以外ほとんど確認できない。6群(16層)は5群以上に暗色・粘性を強める。ただし、調査時に5群下半～6群が崩落したため、土層の詳細な記録はとれていない。これは、標高0.2m付近以下の基盤が砂層であることも影響しており、井戸利用に際しても同様に壁面崩落の危険性が予想される。井戸の掘り方下半に認められる筒状の断面形態からも、何らかの円形の枠が設置された可能性が考えられる。

出土土器の量はコンテナ(28ℓ/箱)2箱程度である。その他に木製品が2点含まれる。

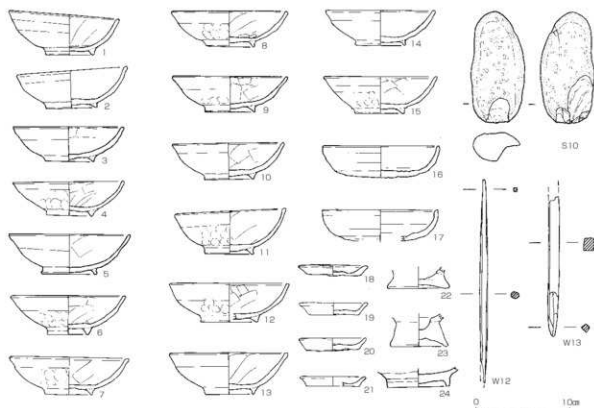
完形に近い遺物が出土するのは、5群の13層と6群中である。13層では、標高0.2～0.4mに吉備系土器碗6点(図84-3～6・8・10)がまとまって出土した。いずれも正位置に置かれ、井戸の中央部に落ち込む状態である。周辺には、同碗がもう1点(同-7)と白磁片1点(同-24)も記録されている。同様に残存率の高いものに限定すると、6群では、標高-0.2～-0.3m付近で同碗と杯が各1点(同-1・16)、また標高-0.5～-0.6m付近で、同碗1点(同-11)が記録されている。いずれも井戸の中央部にあたる位置であり、木製品2点(図84-W12・13)を共伴する。W12は箸であり、W13も先端が尖る製品である点は興味深い。また、完形の碗1点(同-13)が6群の崩落土中から採集されており、5・6群において碗・杯を用いた儀礼的行為が複数回にわたって行われていたことは明らかである。また、石鉢状の石器(同-S10)も6群下層から出土している。1～4群からも遺物は出土しているが、いずれも残存率が1/2以下の破片で種類も多種におよぶ。上層では碗(同-12)、皿(同-20・21)、舞台(同-22・23)などがあげられる。儀礼的行為が想定される5・6群の状況とは異なる様相といえよう。

以上のように、井戸廃棄に伴い、本井戸では焼成行為に土器や木製品が加わる儀礼的行為が行われた状況を指摘しておきたい。



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 灰褐色砂質土 | 9. 暗黒灰褐色砂質土 (炭、灰、土器) |
| 2. 基灰褐色砂質土 (土器・Fe多) | 10. 黒色炭層 (炭・灰過多) |
| 3. 灰褐色砂質土 | 11. 灰褐色砂質土 (土器) |
| 4. 暗灰褐色砂質土 (灰少) | 12. 淡赤灰色粘質土 |
| 5. 黄灰色土 (Fe多・炭、灰少) | 13. 暗灰色粘質土 (土器) |
| 6. 暗~黒灰褐色砂質土 (灰塊、炭) | 14. 暗灰褐色粘質土 (Fe) |
| 7. 黒灰褐色砂質土 (灰少) | 15. 淡灰色シルト |
| 8. 基灰褐色土 (炭、灰、土器) | 16. 暗灰色シルト (土器) |

図83 井戸7 (縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存	形態・手法	胎土	色調：内面/外面	
		口径	底径	器高					
1	土師器-碗	11.9	5.1	3.7-4.8	2/3	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ、口縁高さ高扁平、内外面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
2	土師器-碗	12.3	5.4	3.8-4.4	[口]1枚[1]	(内)ナデ(外)オサエ・ナデ、口、曲線	陶砂	石黄	黄白
3	土師器-碗	11.7	5.1	3.4-3.8	1/1	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ、口縁内直、内外面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
4	土師器-碗	11.9	4.7-5.1	3.1-3.7	1/1	(内)上具ナデ(外)成(外)オサエ・ナデ、内外面直ね焼成、内面種子付(部)	陶砂	石黄	淡黄白
5	土師器-碗	12.9	5.8	4.2	3/4	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面磨滅、底部内面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
6	土師器-碗	12.2	4.4	4.2	2/3	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
7	土師器-碗	12.6	5.0	3.9	[口]2枚[1]	(内)上具ナデ(外)成(外)オサエ・ナデ、東北内面直ね焼成、内面種子付(部)	陶砂	石黄	黄白
8	土師器-碗	12.4	5.2	3.7-4.1	1/1	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ、口縁ナデ(外)オサエ・ナデ、内面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
9	土師器-碗	12.2	5.4	3.8	[口]6枚[1]	(内)上具ナデ(外)成(外)オサエ・ナデ、内面直ね焼成、内面大粒種子付(部)	陶砂	淡黄白	黄白
10	土師器-碗	11.9	5.2	3.8	1/1	(内)上具ナデ・オサエ(外)ナデ(成)成(外)オサエ・ナデ、内外面直ね焼成	陶砂	石黄	黄白
11	土師器-碗	11.8	4.9	4.0-4.9	1/1	(内)上具ナデ(外)成(外)ナデ、内外面直ね焼成、内外面種子付(部)	陶砂	黄	黄白
12	土師器-碗	12.6	5.1	6.1	1/3	(内)上具ナデ(外)オサエ・ナデ(成)オサエ・ナデ、内面直ね焼成	陶砂	淡黄白	黄白
13	土師器-碗	12.5	5.2	4.4	1/1	(内)上具ナデ(外)ナデ(成)オサエ・ナデ、内外面直ね焼成	陶砂	石黄	淡黄白
14	土師器-碗	11.6	5.4	3.7-4.1	1/4	(外)ナデ、内面磨滅	陶砂	赤褐色	黄白
15	土師器-碗	12.1	5.2	3.9	[口]1枚[2]	(内)上具ナデ(外)成(外)ナデ、底部内面に細粒種子・種子付(部)	陶砂	石黄	黄白-緑灰
16	土師器-杯	12.4	7.8	3.4	3/4	(内)外、横ナデ(外)内面に口縁直上(成)成(外)成(外)ナデ；左回転・灰白焼	陶砂	赤褐色	黄灰
17	土師器-杯	12.3	7.8	3.3	1/4	(内)外、横ナデ(外)内面に口縁直上(成)成(外)成(外)ナデ；灰白焼	陶砂	赤褐色	黄灰
18	土師器-杯	7.3	5.6	0.8-1.2	1/1	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；灰白焼、表面に孔・種子付(部)	陶砂	黄	黄白
19	土師器-皿	7.2	5.4	1.3	3/5	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；左回転・灰白焼	陶砂	石黄	黄白
20	土師器-皿	7.2	5.7	1.4	[口]2枚[1]	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；左回転、磨滅	陶砂	淡黄白	黄白
21	土師器-皿	7.0	5.6	1.0	1/3	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ、内面磨滅	陶砂	淡黄白	黄白
22	土師器-鉢付	—	6.6	3.7	1/1	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；左回転	陶砂	赤褐色	黄白
23	土師器-鉢付	—	6.1	3.5	1/1	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；右回転、台面に肉厚	陶砂	赤褐色	黄白
24	土師器-碗	—	6.6	2.0	1/4	(内)外、横ナデ(成)成(外)成(外)ナデ；右回転、台面及び器付焼成	陶砂	淡黄白	淡黄灰白

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	石材	特徴
S10	石碗	11.8	5.6	3.1	289.3	1/1	細粒赤陶質	自然磨滅の遺跡打ち欠

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	形状	本取り	特徴
W12	箸	22.0	0.4-0.8	0.7	スズ	銅材	両端から中央部は断面八角形、下面欠損
W13	先追加した木製品	14.9	1.2	1.3	ヒノキ	銅材	両端から中央部は断面八角形、下面欠損 両側の先端を削りし、互を合せ、上面欠損

図84 井戸7出土遺物 (縮尺1/4)

出土土器で注目されるものとして、内外面にイネを含む種子の圧痕が確認される吉備系土師器碗5点(図84-4・7・9・11・15)と皿1点(同-18)をあけておこう。その他に植物資料として、土壌中から出土した種子があげられる。カタバミ・タデ・エノコログサ、雑草メロンなど様々な種類が含まれる。ニワトコ・ヤマグワ・サルナシ・ヒョウタン・ササゲ属(アズキ類)などの有用植物や栽培種も数多く確認される(第4章8)。

本井戸の時期は、出土遺物から鎌倉時代、13世紀中葉と考えられる。

井戸8 (図75・85、図版15・37)

調査区北西部、CD38区に位置する。井戸6の北西約16mの地点である。

検出層は<4b層>に対応する。上面は標高1m、底面は同-0.1m、深さは1.1mを測る。平面形は、上面は1.75m×1.4mの楕円形、底面は直径0.35mの円形を呈する。全体的にやや小形であるが、特に底面が小さい。そのため、掘り方はY字形の範疇とはいえ、底面がすばまる形が特徴となっている。

埋土は六層に分層される。1層は灰褐色の砂質土で2層に向けて褐色を強める。3層から5層は類似性の高い土層群であるが、下層に向けて暗灰色化が進み粘性もあわせて強くなる。そして、6層は暗灰色のシルトへと変化する。ほとんどの土層で際立つ包含物は確認できないが、6a層には褐色粘土ブロックが含まれる。同時に同

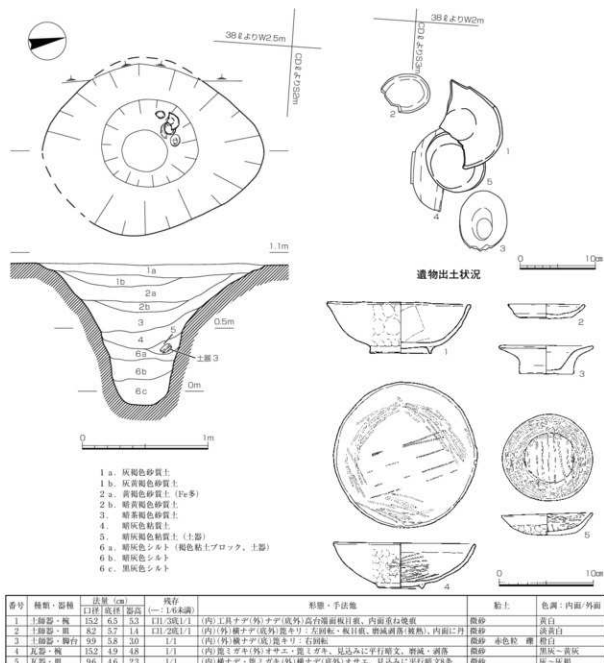


図85 井戸8・出土遺物 (縮尺1/30・1/6・1/4)

層から5層にかけて土器が集的に出土する。

出土遺物の量はコンテナ(28ℓ/箱)1/3程度である。量は多くはないが、残存率の高い遺物が主体をなす。吉備系土師器碗と土師器皿・脚台(図85-1~3)、そして瓦器の碗と皿(同・4・5)の各1点がまとまって出土した。出土位置は中心から北側寄りであり、掘り方に沿って井戸の中心部に向けて落ち込む状態を示す。出土レベルは標高0.2~0.5mである。こうした状況に儀礼的要素を認めることは可能であろう。また、その内の完形品が瓦器2点と土師器脚台1点である点は、通常の吉備系土師器碗や土師器皿主体の儀礼形態とは様相を異にしている。瓦器の優位性が強い点を注目しておきたい。

本井戸の時期は、井戸3とほぼ同時期であり、平安時代末、12世紀後半~末と考えたい。

b. 土坑

土坑8 (図74・86~97、図版22・23・38・39・43)

調査区北東端付近、CD・CE21・22区に位置する。北端部は調査区北端に接する。東端部の上部には溝58a・64が重複する。

検出面は<4b層>である。上面は標高1.23m、底面は同0.2~0.14m、深さは約1.1~1.05mを測る。平面形は隅丸方形で、上面で4.8m×5.8m、底面でも2.5m×3.85mの規模を有する。大形で整然とした方形土坑として他と区別される。掘り方は逆台形の縦溝といえるが、上半部で外側に若干広がるため、立ち上がり部には肩が残る。底面は広くて平坦であるが、やや凹む部分が認められる。

埋土は十七層に分層されるが、その内容から6群に大別される。1群(1~4層)は褐色系の色調を呈し全体的に砂質が強い。炭・焼土・粘土ブロック・褐色土粒・土器片など様々な包含物を有する点が特徴である。2層は炭化物の影響で黒色を強める。ただし、炭層という状態ではなく出土土器も小~細片である。こうした状況から、土坑廃棄後の流入土の性格を考慮する必要がある。その中で、4層については多様な包含物が少ないことから、土坑の埋め戻し最終段階の堆積が予想される。

2群(5~9層)は、炭と細砂を多く含む黒色あるいは暗色強い灰色系の粘質土層群である。特に7層は多量の炭によって炭層を形成する。出土土器も6・7・9a層で多い。3群(10~12層)は灰褐色系の砂質~粘質土で、11層に粘土ブロックがやや多く含まれるが、全体的に包含物は少ない。4群(13~14層)は暗灰色系の土層である。特に13層では炭が多いほか、完形土器が多量に含まれる。一方、14層では砂の比率が高く砂質を強める。5群(15~16層)は粘土と粗砂が混在する土層群である。大形の粘土ブロックあるいは粗砂ブロックが16a層や16b層などで際立つ。鉄分の沈着も多い。6群(17層)は粘土層である暗灰色と灰色の粘土が混在する状態をなす。いずれも埋め戻し土と理解される。

以上のように、2群~6群は人為的に埋め戻された土層群と考えられる。下層から確認すると、炭をほとんど含まず砂と粘土が混在する5群と粘土が混在する6群によって土坑の下半が埋め戻される。続いて、炭を伴う焼成行為の繰り返し、3群を挟んで2群と4群が進められる。そうした焼成行為に加え、4群中で完形土器を多量に使用した儀礼的行為を残すのが13層段階である。その後、炭を伴わない埋め戻しを経て、2群を構成する流入土によって完全に埋没する状況を復元することができる。

本土坑を特徴付けるのは、形態や埋土だけではない。完形の中世土器の大量出土がもう一つの柱をなしている。遺物は13層を中心に、完形の吉備系土師器碗、土師器杯・皿が大量に出土し、それに脚台(脚台付き皿を含める、以下省略)が加わる。その分布は土坑の南西部に偏る。各器種の平面分布に偏在性は認めがたく、全体に均等に配される状態をみせる(図87)。碗については複数個体が重ねられた状態で出土する場合は複数箇所で確認される。その多くが正位置に置かれていることも読み取れる。

出土遺物量は、全体でコンテナ(28ℓ/箱)18箱分である。その中で、吉備系土師器碗は12箱、土師器杯は2



1. 褐色砂質土 (炭・焼土・土器・褐色土粒)
2. 黒褐色砂質土 (炭過多、焼土・土器・褐色土粒多)
3. (順) 褐色砂質土 (炭・焼土・土器多)
4. 黄褐色粘質土 (炭、焼土、土器、粘土ブロック)
5. 褐色粘質土 (炭多、細砂)
6. 黒褐色炭屑 (炭・細砂・土器多、焼土)
7. 黒色炭屑 (炭・細砂過多、土器多、焼土)

8. 褐色粘質土 (炭多、焼土)
- 9 a. 褐色砂質土 (炭・焼土・土器多)
- 9 b. 褐色粘質土 (細砂・炭多)
10. 褐色粘質土 (細砂・炭・粘土ブロック少)
11. 黄褐色砂質土 (粘土ブロック多)
12. 褐色粘質土
13. 褐色粘質土 (炭・交形土器多)

14. 褐色砂質土 (砂多、炭、土器)
15. 褐色粘質土 (粘土ブロック、炭、焼土)
- 16 a. 褐色粘砂 (粘土ブロック多)
- 16 b. 褐色粘土 (粗砂、Fe多、土器)
- 16 c. 褐色粘土 (粗砂、Fe多、土器)
- 16 d. 褐色粘土 (Fe多、土器)
17. 褐色粘土+褐色粘土

図86 土坑8 (縮尺1/40)

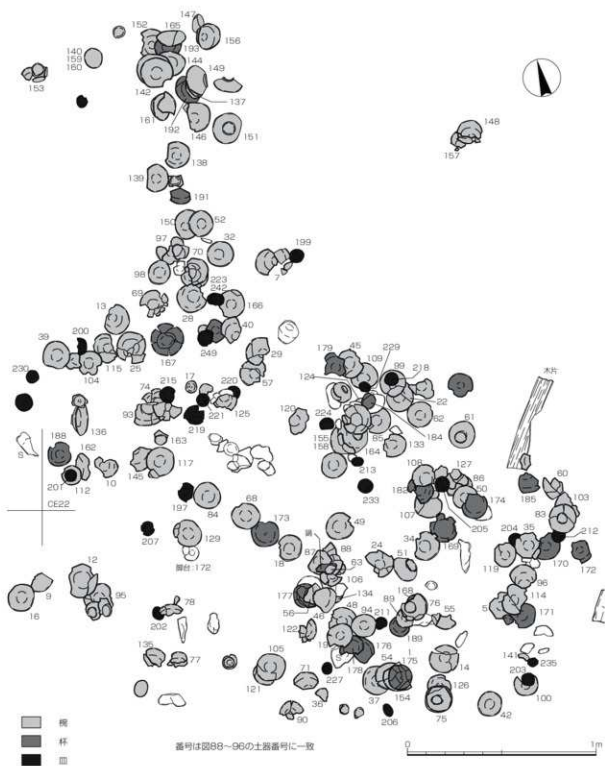
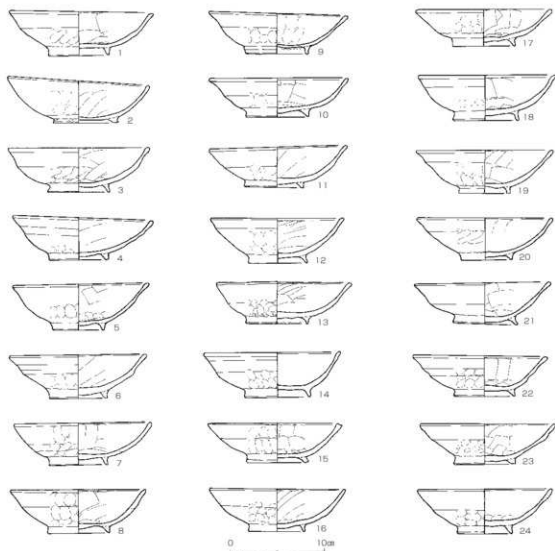


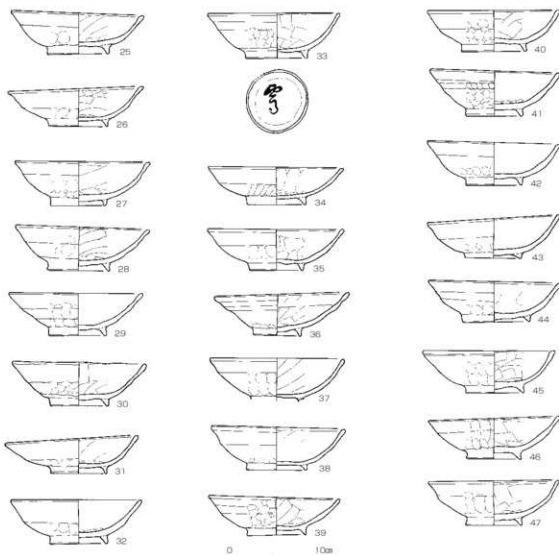
図87 土坑8遺物出土状況（縮尺1/20）

調査の記録



番号	種類・器種	造形 (cm)			口径 (=1.5倍未満)	形状・手法	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土器部・碗	15.1	6.4	4.2-4.8	[12.3]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ(底外)板目肌、内外面重ね焼成	陶砂	黄白
2	土器部・碗	15.0	6.9	4.0-5.0	[12.3]R1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ(底外)板目肌、内外面重ね焼成	陶砂	黄白
3	土器部・碗	14.9	6.6	4.7	[11.2]R1/1	(内)工具ナデ(外)内面オサエ・ナデ(底外)オサエ、内面重ね焼成、唇子年痕	陶砂	黄白
4	土器部・碗	14.8	6.3	4.1-4.8	[11.2]R2/3	(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、内面に重ね焼成	陶砂	黄白
5	土器部・碗	14.4×14.8	5.5	4.8	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ、器壁に磨修痕	陶砂	赤色粒 黄白
6	土器部・碗	14.6	6.2	4.6	[13.5]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼成	陶砂	黄白
7	土器部・碗	14.1×15.0	6.3	4.5	[13.6]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、器壁に磨修痕、重ね焼成	陶砂	赤色粒 黄白
8	土器部・碗	14.3×14.7	6.7	4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目肌、内面に唇子年痕	陶砂	黄白 淡黄白
9	土器部・碗	14.5	6.7	4.0-4.5	[12.3]R1/1	(内)オサエ・ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ	陶砂	赤色粒 淡黄白
10	土器部・碗	14.5	6.6	4.0-4.4	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目肌、内面重ね焼成	陶砂	黄白 黄灰
11	土器部・碗	14.5	6.2×6.4	4.8	[11.2]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目肌	陶砂	赤色粒 黄白
12	土器部・碗	14.5	6.3	4.7	1/1	(内)工具ナデ(外)底内(底外)オサエ、内面重ね焼成、磨修痕に年痕	陶砂	黄白
13	土器部・碗	14.5	6.5	4.4	[14.5]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、内面重ね焼成	陶砂	淡黄白
14	土器部・碗	14.5	7.1	4.4-4.8	1/1	(外)オサエ、磨滅、口縁磨部磨穿	陶砂	黄白
15	土器部・碗	14.2×14.7	6.7	4.2	1/1	(内)工具ナデ・オサエ(外)磨滅工具(底)板目肌(底)重ね焼成、重ね焼成	陶砂	黄灰-淡黄白
16	土器部・碗	14.4	6.0	4.0-4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ、内外面重ね焼成	陶砂	黄白
17	土器部・碗	14.4	6.8	3.9	[12.5]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼成	陶砂	赤色粒 淡黄白
18	土器部・碗	14.4	6.9	4.8	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面重ね焼成	陶砂	黄白-淡黄白
19	土器部・碗	14.0×14.8	5.4	4.4-4.8	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、重ね焼成、内面に磨修痕	陶砂	淡黄白
20	土器部・碗	14.4	5.4	4.5	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(外)底外(外)オサエ、磨滅、内面重ね焼成、器壁薄い	陶砂	淡黄白
21	土器部・碗	14.4	6.7	3.8-4.5	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内外面重ね焼成、内面に唇子年痕	陶砂	黄白
22	土器部・碗	14.4	6.5	3.9-4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)底外(外)ナデ・板目肌、内外面重ね焼成	陶砂	黄白
23	土器部・碗	14.4	6.4	4.4	[13.4]R1/1	(内)工具ナデ(底外)板目肌、高台磨部板目肌、重ね焼成	陶砂	黄白
24	土器部・碗	14.3	5.9	4.7	[11.2]R1/1	(内)ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ、磨滅、内面重ね焼成	陶砂	淡黄白-灰白

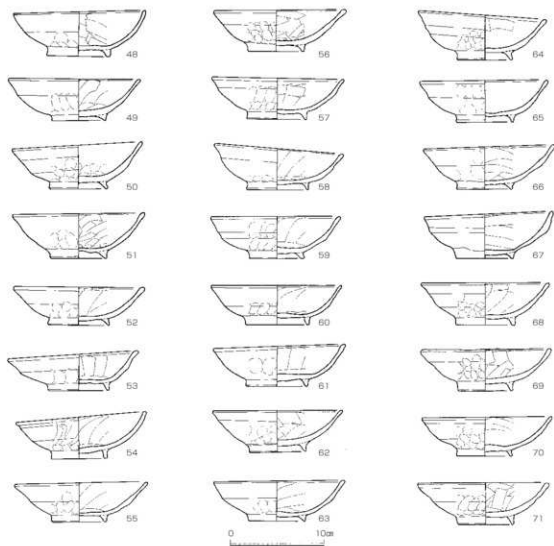
図88 土坑8出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←:1/6未満)	形態・手法集	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
25	土師器・碗	14.3	6.5	3.5~4.9	[I]5-6底2.3	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 内外面重ね焼痕, 歪み	陶砂	黄白
26	土師器・碗	14.3	6.3	3.8~4.3	[I]3-4底1.7	(内)工具ナデ(外)ナデ, 内外面重ね焼痕, 浅い, 歪み	陶砂	淡黄白
27	土師器・碗	14.3	6.0	4.7	[I]1.2底1.7	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 内外面重ね焼痕	陶砂	黄白
28	土師器・碗	14.2	6.5	4.6	[I]2.3底1.7	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 内面重ね焼痕	陶砂	淡黄白
29	土師器・碗	14.2	6.0	4.6	[I]1.2底1.7	(外)ナデ(底外)ナデ, 摩滅, 重ね焼痕, 口縁内に補修痕, 内面植物繊維痕	陶砂	黄白
30	土師器・碗	14.2	6.2	4.7	[I]3-4底2.3	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 内外面重ね焼痕	陶砂	黄白
31	土師器・碗	14.2	6.0	3.2~4.1	[I]1.3底1.7	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 高台肩部板目痕, 内外面重ね焼痕	陶砂	黄白
32	土師器・碗	14.2	6.1	4.7	1/1	(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 摩滅, 口縁部に補修痕, 内面保	陶砂	淡黄白
33	土師器・碗	14.0×14.4	6.7	4.6	[I]1.2底1.7	(内)工具ナデ(外)ナデまたは器ナズリ, 高台内に器蓋	陶砂	黄白
34	土師器・碗	13.9×14.3	6.2×6.6	3.7~4.2	1/1	(内)オサエ・ナデ(外)オサエ・ナデ, 内面重ね焼痕	陶砂	黄白/淡黄白
35	土師器・碗	14.1	5.6×6.0	4.2	[I]1.2底1.7	(内)オサエ・ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 内外面重ね焼痕	陶砂	淡黄白
36	土師器・碗	14.1	5.3	4.0~4.8	[I]1.2底1.7	(内)工具ナデ(外)ナデ, 内外面磨滅	陶砂	黄白
37	土師器・碗	14.0×14.2	—	—	1/1	(内)工具ナデ (外)底外オサエ・ナデ, 重ね焼痕, 外面植物繊維痕	陶砂	黄白
38	土師器・碗	14.1	6.2	4.6	[I]1.2底1.7	(内)工具ナデ(外)ナデ(底外)オサエ, 内外面に黄灰藍色(焼痕)	陶砂	赤色橙 淡黄白
39	土師器・碗	14.1	6.4	3.7~4.3	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ, 砂粒の委散残存(外)オサエ, 内面重ね焼痕	陶砂	赤色橙 黄白
40	土師器・碗	14.0	6.8	4.4	[I]1.3底1.7	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目痕	陶砂	黄白
41	土師器・碗	13.8×14.2	6.2	4.5~5.1	1/1	(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 磨滅	陶砂	淡黄白
42	土師器・碗	14.0	5.9×6.4	4.5	1/1	(外)オサエ, 磨滅	陶砂	淡黄白
43	土師器・碗	14.0	6.1	3.7~4.7	[I]1.2底1.7	(外)オサエ, 磨滅, 歪み, 内面種子圧痕2, 植物繊維痕	陶砂	赤色橙 黄白
44	土師器・碗	14.0	7.1	4.0~4.6	1/1	(外)オサエ(底)ナデ, 磨滅, 重ね焼痕	陶砂	黄白~淡黄白
45	土師器・碗	14.0	6.1×6.3	4.2~4.6	[I]3-4底1.7	(内)工具ナデ(外)オサエ(底外)板目痕, 重ね焼痕・板目痕, 種子圧痕	陶砂	淡黄白
46	土師器・碗	13.7×14.2	6.1	3.8~4.7	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 内面重ね焼痕, 口縁の一部変色	陶砂	黄白
47	土師器・碗	13.7×14.2	6.1	4.2~4.8	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 内外面重ね焼痕	陶砂	黄白

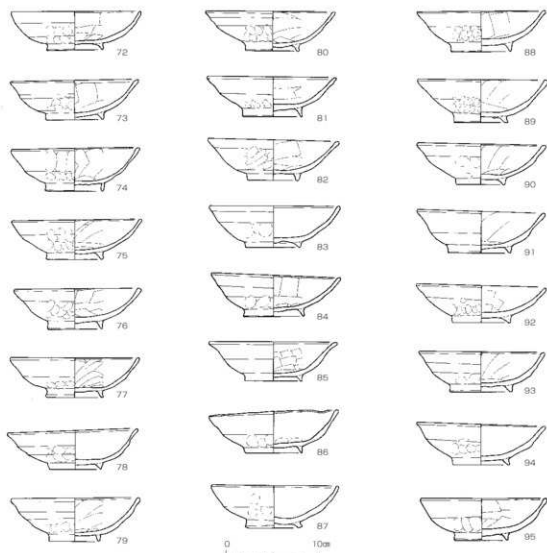
図89 土坑8出土遺物2 (縮尺1/4)

調査の記録



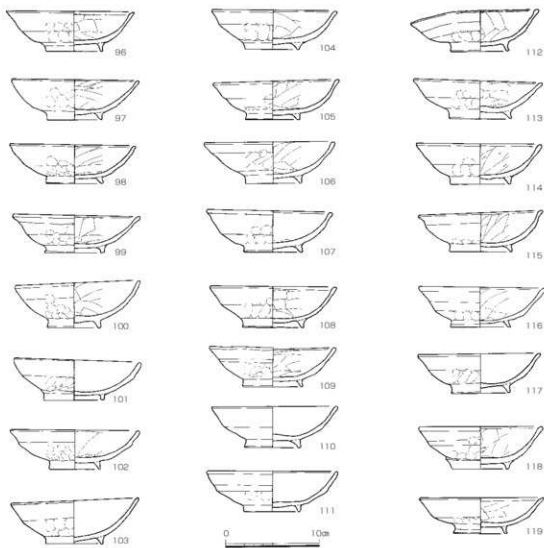
番号	種類・形制	径長 (cm)			残存 [=1/6未満]	形制・手法集	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
48	土師器・碗	138×144	69	50	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、磨滅、重ね焼成、植物繊維痕	陶砂・糠	黄白～淡黄白
49	土師器・碗	139	59	43	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目痕、重ね焼成、外面種子付痕	陶砂・多塵	黄白
50	土師器・碗	139	63	42-5.0	1/1	(内)1号)オサエ・ナデ(底外)ナデ、重ね焼成、内面植物繊維痕	陶砂・糠	淡黄白～黄白
51	土師器・碗	139	61	44-5.2	1/1	(底外)オサエ、器表に細かな亀裂、内面に種子付痕	陶砂・糠	淡黄白
52	土師器・碗	139	65	39	1/1	(内)工具ナデ・施ミガキ(外)オサエ・ナデ(底外)板目痕、重ね焼成	陶砂	黄白～黄白
53	土師器・碗	139	64	33-4.3	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目痕・オサエ、赤み	陶砂	黄白
54	土師器・碗	139	58×6.2	39-4.9	1/1	(内)工具ナデ(外)連続する器ナデ(口)横ナデ 凹線状、重ね焼成、赤み	陶砂	黄白
55	土師器・碗	139	59	38-4.3	[14.5取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内外面植物繊維痕	陶砂	黄白
56	土師器・碗	139	61	41-4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼成	陶砂	黄白
57	土師器・碗	139	61×6.3	37-4.2	[13-4取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、内外面に重ね焼成	陶砂	赤色灰
58	土師器・碗	139	65	38-4.9	[13-4取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、内外面重ね焼成	陶砂	淡黄白～黄白
59	土師器・碗	139	57	41-4.7	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼成	陶砂	赤色灰
60	土師器・碗	138	70	39-4.5	[11-4取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ(底外)オサエ、板目痕	陶砂	淡黄白
61	土師器・碗	136×140	65	40-4.6	1/1	(内)工具ナデ(底外)板目痕、重ね焼成、高台内底、内面植物繊維痕	陶砂・糠	黄白
62	土師器・碗	138	62	42-4.8	1/1	(内)工具ナデ(外)底外)ナデ、外面に種子付痕1、編織痕	陶砂	黄白
63	土師器・碗	138	58×6.2	38-4.2	[12-3取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、外面重ね焼成	陶砂	黄白
64	土師器・碗	138	58	43-5.2	[11-2取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、磨滅、赤み	陶砂・糠	黄白
65	土師器・碗	138	60	44	[12-3取]1/1	(外)オサエ、磨滅	陶砂	淡黄白
66	土師器・碗	136×140	59	39-4.7	[17-8取]1/1	(内)工具ナデ(外)底外)ナデ、内外面に重ね焼成、赤み	陶砂	黄白～黄灰褐
67	土師器・碗	138	58×6.2	42-5.0	[13-4取]1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、磨滅、赤み、高台は中心から平らる	陶砂	黄白
68	土師器・碗	138	62	42-4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)底外)オサエ、重ね焼成、内面に種子付痕	陶砂・糠	黄白
69	土師器・碗	138	59	45	[12-3取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目痕、内面重ね焼成	陶砂	黄白
70	土師器・碗	135×139	60	39-4.4	[12-3取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)高台隆部に板目痕、重ね焼成	陶砂	淡黄白
71	土師器・碗	138	59	44	[13取]1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、口縁部内面焼成	陶砂	黄白

図90 土坑8出土遺物3 (縮尺1/4)



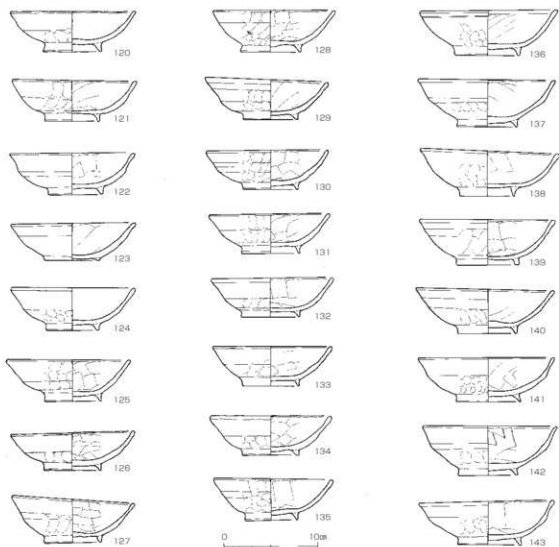
番号	種類・形状	法量 (cm)			残存 [—:1/4未満]	形態・手法	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	底高				
72	土師器・碗	13.7	6.0	4.1	1/1(2取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内外面に重ね焼痕、内面に植物繊維痕	陶砂	黄白
73	土師器・碗	13.5×13.9	6.2	3.5~4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼痕、赤土	陶砂	黄白
74	土師器・碗	13.7	6.3	4.5	1/2	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、重ね焼痕、内外面に塵	陶砂	黄白
75	土師器・碗	13.5×13.9	6.0	4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼痕	陶砂 糠	黄白
76	土師器・碗	13.4×14.0	5.6×6.1	4.2~4.6	1/4(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目肌	陶砂	黄白
77	土師器・碗	13.7	6.4	4.2	1/1(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面重ね焼痕	陶砂	黄白~灰白
78	土師器・碗	13.5×13.9	5.7	3.8~4.2	1/1(7取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)ナデ、重ね焼痕、外面植物痕	陶砂	黄白
79	土師器・碗	13.7	5.6	4.6	1/2(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)重ね焼痕、外面に種子付痕1、植物繊維痕	陶砂	黄白~黄灰
80	土師器・碗	13.7	5.8	4.2	1/2(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目肌、重ね焼痕、種子付痕1	陶砂	黄白
81	土師器・碗	13.7	6.3	4.2	2/3	(内)工具ナデ(外)底外)ナデ、内外面に重ね焼痕	陶砂	黄白
82	土師器・碗	13.7	5.2×5.6	4.0~4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)胎土ナデ、割減、内面種子付痕1	陶砂 糠	黄白
83	土師器・碗	13.7	5.8	4.4	1/1	(内)ナデ(外)オサエ、外面割減、口縁重ね焼痕	陶砂 糠	黄白
84	土師器・碗	13.3×14.0	6.5	3.9~4.8	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ、外面割減	陶砂 赤色粒	淡黄白
85	土師器・碗	13.7	5.8×6.2	3.8~4.2	1/1	(内)工具ナデ、外面亀裂状、内外面重ね焼痕	陶砂	黄白/黄白~黄灰
86	土師器・碗	13.4×13.8	6.0×6.4	3.7~4.5	1/1	(内)ナデ(外)オサエ・ナデ(底内)オサエ(底外)板目肌、割減	陶砂 糠	淡黄白~黄灰
87	土師器・碗	13.6	6.0	4.3~4.7	1/1(2取1/1)	(底外)ナデ、高台部部に板目肌、割減、重ね焼痕、種子付痕1	陶砂	黄白
88	土師器・碗	13.6	6.5	4.0~4.4	1/2(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ、内面に種子付痕1	陶砂 糠	黄白
89	土師器・碗	13.4×13.8	5.5×6.1	4.2~4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面重ね焼痕	陶砂	黄白
90	土師器・碗	13.6	5.3	3.3	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面重ね焼痕	陶砂 糠	黄白
91	土師器・碗	13.6	6.6	3.8~4.6	1/1(2取1/1)	(内)工具ナデ(外)ナデ、内外面重ね焼痕	陶砂	黄白~淡黄白
92	土師器・碗	13.6	6.1	3.7~4.1	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ(底外)高台部部板目肌、割減	陶砂 糠	黄灰
93	土師器・碗	13.3×13.8	6.6	4.2~4.7	1/2(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)ナデ・底外)オサエ(底外)ナデ、重ね焼痕、種子付痕1	陶砂	黄白
94	土師器・碗	13.6	6.0	4.0~4.7	1/1	(外)オサエ・ナデ、割減、内面重ね焼痕	陶砂	黄白~淡黄白
95	土師器・碗	13.5	5.3×6.0	4.5	1/2(3取1/1)	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、種子付痕多数(イ本底)13	陶砂 赤色粒	黄白

図91 土坑8出土遺物4 (縮尺1/4)



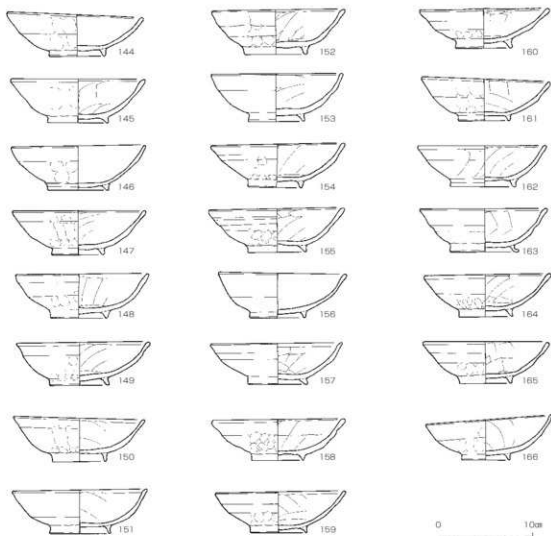
番号	種類・形制	法量 (cm)			残存 (=1/16未満)	形製・手法集	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
96	土師器・碗	13.5	6.1	4.4	[I2-5]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)ナナ、外面調整盤	陶砂 産	黄白
97	土師器・碗	13.5	5.9	4.3	[I1-3]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)ナナ、内面重ね焼	陶砂 産	淡黄白
98	土師器・碗	13.5	6.2	3.7-4.2	1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)高台端部板目煎、重ね焼	陶砂 産	黄白
99	土師器・碗	13.5	6.4	3.7-4.1	1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)オサエ、重ね焼	陶砂 赤色粒 産	黄白
100	土師器・碗	13.5	5.8	4.4-5.0	[I1-2]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ	陶砂 産	淡黄白
101	土師器・碗	13.5	6.4	4.0	[I1-2]R1/1	(底外)高台端部板目煎、磨滅	陶砂 産	黄白
102	土師器・碗	13.3×13.7	5.4	4.4	[I1-1]R1/4	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底内)オサエ	陶砂 産	黄灰
103	土師器・碗	13.5	6.1	4.3-4.8	[I2-3]R1/1	(外)オサエ、磨滅	陶砂 産	淡黄白
104	土師器・碗	13.5	5.8	4.1	[I2-3]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)オサエ、重ね焼	陶砂 産	黄白
105	土師器・碗	13.5	5.9	3.4-4.7	1/1	(内)工具ナナ(外)ナナ(底外)高台端部に板目煎、重ね焼	陶砂 産	黄白
106	土師器・碗	13.1×13.8	6.0	4.0-4.5	[I4-5]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ	陶砂 産	黄白
107	土師器・碗	13.2×13.6	6.2	4.1-4.5	1/1	(内)ナナ(外)オサエ・ナナ(底内)オサエ、磨滅、重ね焼	陶砂 産	黄白
108	土師器・碗	13.1	6.4	4.4	[I1-4]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)板目煎、内面重ね焼	陶砂 産	黄白
109	土師器・碗	13.2×13.6	6.4	3.8-4.3	[I5-6]R1/1	(内)工具ナナ(外)ナナ・高台端部工具ナナ、重ね焼	陶砂 産	黄白
110	土師器・碗	13.4	5.9	4.4	1/1	(内)工具ナナ(外)底外ナナ	陶砂 産	黄白
111	土師器・碗	13.0×13.8	5.7×6.1	4.3	[I1-2]R1/1	(外)ナナ(底外)高台端部板目煎、内面磨滅、外面に亀裂	陶砂 産	黄白~黄灰
112	土師器・碗	13.0×13.7	5.9	3.2-4.3	1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)オサエ、片口縁、重ね焼	陶砂 産	黄白~黄灰
113	土師器・碗	13.1×13.6	6.6	3.8-4.4	1/1	(内)工具ナナ(外)底内オサエ、内外面調整、外面補修痕	陶砂 産	黄白
114	土師器・碗	13.0×13.6	6.3	4.2	[I2-3]R1/1	(内)匚ナナ(外)底外オサエ、外面は調整盤	陶砂 産	黄白
115	土師器・碗	13.3	6.7	3.7-4.7	[I2-3]R1/1	(底外)板目煎、縄目煎・オサエ、重ね焼、外面種子付痕	陶砂 産	黄白
116	土師器・碗	13.1-13.5	6.5	4.2	[I6-7]R1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナナ(底外)オサエ、内面重ね焼	陶砂 産	黄白
117	土師器・碗	13.3	6.3	4.1	1/1	(内)ナナ(外)オサエ・ナナ、内外面重ね焼	陶砂 産	黄白
118	土師器・碗	13.3	6.1	4.2-4.6	[I5-6]R1/2	重ね焼、口縁端部2箇所補修痕、内面種子付痕	陶砂 産	黄白
119	土師器・碗	13.2	5.6×6.0	3.5-4.2	1/1	(底外)ナナ、重ね焼、磨滅、外面種子付痕	陶砂 産	黄白

図92 土坑8出土遺物5 (縮尺1/4)



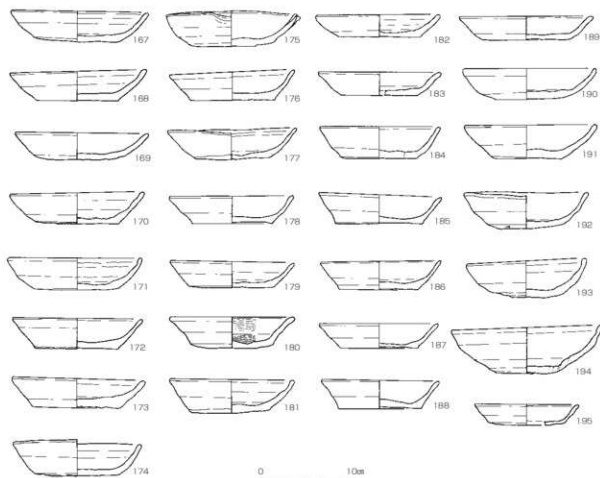
番号	種類・形種	法量 (cm)			発見 (一)1664(裏)	形態・手法集	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
120	土師器・碗	13.2	6.3	4.2	E11-2R1.1	(外)オサエ、磨減	磁砂	灰白
121	土師器・碗	13.2	5.8	4.4	E11-2R3.4	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ、外面に種子圧痕1	磁砂	灰白
122	土師器・碗	13.2	5.8	4.4	E11-3R1.4	(内)工具ナテ、底面ナテ(外)ナテ、内面重ね焼痕	磁砂	淡灰白
123	土師器・碗	13.2	5.9	3.9	E11-2R1.1	(内)工具ナテ、磨減、内面重ね焼痕	磁砂	淡灰白
124	土師器・碗	13.1	5.6	4.0~4.6	E11-4R5.6	(外)オサエ、磨減	磁砂	赤色粘 黄白~橙白
125	土師器・碗	13.1	5.8×6.2	4.1~5.0	E15-6R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)ナテ、外面重ね焼痕	磁砂	赤色粘 灰白
126	土師器・碗	13.1	6.1	3.6~4.2	1/1	(内)工具ナテ、底面ハナ目(外)オサエ・ナテ、重ね焼痕	磁砂	灰白
127	土師器・碗	13.1	6.1	4.0~5.1	E11-2R2.2	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)板目痕、重ね焼痕	磁砂	淡橙白
128	土師器・碗	13.1	6.3	4.4	1/1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ、重ね焼痕、磨減、外面に種子圧痕1	磁砂	灰白
129	土師器・碗	13.0	5.9	3.7~4.5	1/1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)ナテ、重ね焼痕、高台づれる	磁砂	橙 灰白
130	土師器・碗	13.0	5.8	4.2	E15-6R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ、内面亀裂、内面重ね焼痕	磁砂	灰白
131	土師器・碗	12.9	6.2	4.3	E12-3R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ、内面重ね焼痕	磁砂	黄白~淡橙白
132	土師器・碗	12.9	6.1	4.1	1/1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ、内外面重ね焼痕	磁砂	灰白
133	土師器・碗	12.9	6.1	4.2	E13-4R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)板目痕、内面亀裂、重ね焼痕	磁砂	淡灰白
134	土師器・碗	12.8	5.9	4.2	E11-2R1.1	(底外)ナテ、重ね焼痕、内面種子圧痕1	磁砂	黄白~橙白
135	土師器・碗	12.6	5.7	3.6~4.5	E11-3R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ、内面亀裂、内外面重ね焼痕	磁砂	灰白
136	土師器・碗	14.7	7.0	4.2~4.8	1/1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)板目痕、磨減	磁砂	橙 灰白
137	土師器・碗	14.6	6.5	4.6	1/1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)板目痕、磨減、重ね焼痕	磁砂	淡橙白
138	土師器・碗	14.2×14.8	5.8	4.5~5.2	E12-3R1.1	(内)工具ナテ(外)ナテ、磨減	磁砂	淡灰白
139	土師器・碗	14.2×14.8	6.6	4.4~4.9	E12-3R1.1	(内)工具ナテ(外)オサエ・ナテ(底外)板目痕、内面重ね焼痕	磁砂	灰白
140	土師器・碗	14.0×14.8	6.1	4.2~5.2	1/1	磨減、重ね焼痕、内外面に種子圧痕2	磁砂	橙白
141	土師器・碗	14.4	6.7	4.4~4.8	E14-5R1.1	(外)工具によるオサエ(底外)板目痕、内外面種子圧痕1・線維痕	磁砂	白色斑点 黄灰
142	土師器・碗	14.3	6.2	4.7~5.2	1/1	(底外)板目痕、重ね焼痕、内面種子圧痕1	磁砂	橙 灰白
143	土師器・碗	14.3	6.3×6.7	4.2~4.8	E11-2R1.1	重ね焼痕、内面種子圧痕1、口縁部に傷	磁砂	橙 灰白

図93 土坑8出土遺物6 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (一:1.6未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
144	土師器・碗	14.3	6.0	4.0~4.8	1/1	(外)オサエ・ナデ	磁砂	黄白
145	土師器・碗	14.2	6.1×6.5	4.6	□1/4底1/1	(底外)オサエ, 内外面重ね焼痕, 外面に亀裂	磁砂 礫	淡黄白
146	土師器・碗	14.2	6.6	4.7	□2/3底1/1	(底外)オサエ, 磨滅, 外面重ね焼痕, 種子付痕(貫通)	磁砂	黄白
147	土師器・碗	14.2	5.7	4.3~4.7	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 磨滅, 内面重ね焼痕	磁砂 赤色粒	黄白
148	土師器・碗	14.1	6.0	4.7	□2/3底1/1	内外面重ね焼痕, 内面に種子付痕2	磁砂 礫	黄白
149	土師器・碗	14.1	5.9×6.3	4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 内面重ね焼痕	磁砂	淡黄白
150	土師器・碗	14.1	5.8	4.2~4.8	□2/3底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ, 重ね焼痕	磁砂	黄白
151	土師器・碗	14.1	6.6	4.1~4.9	□2/3底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ, 内外面重ね焼痕	磁砂 礫	黄白~黄白
152	土師器・碗	14.1	6.6	4.6	□3/4底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ, 重ね焼痕	磁砂	黄白
153	土師器・碗	14.0	5.9	4.8~5.4	□1/2底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ, 磨滅, 内外面重ね焼痕	磁砂	淡黄白
154	土師器・碗	13.7×14.2	6.0	3.9~4.8	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 口縁部破砕痕	磁砂 礫	黄白
155	土師器・碗	13.5×14.3	5.7×6.3	4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 磨滅	磁砂	淡黄白
156	土師器・碗	13.9	3.8×6.2	4.8	□1/2底1/1	磨滅, 内外面重ね焼痕, 内外面種子付痕4	磁砂	淡黄白~淡黄白
157	土師器・碗	13.8	6.4	4.3~4.7	□1/2底1/1	(底外)板目敷, 内外面重ね焼痕, 外面縦破砕痕	磁砂 礫	黄白
158	土師器・碗	13.6×14.0	5.7	4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 磨滅, 内面重ね焼痕	磁砂	淡黄白
159	土師器・碗	13.6	5.7	4.1~4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)ナデ, 内面重ね焼痕	磁砂	淡黄白
160	土師器・碗	13.7	6.1	4.2~4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ(底外)ナデ, 磨滅, 内外面重ね焼痕	磁砂	淡黄白
161	土師器・碗	13.7	5.6	4.0~4.7	□1.5底1/1	(底外)オサエ, 内外面重ね焼痕	磁砂	黄白
162	土師器・碗	13.6	6.9	4.2	□1/2底1/1	(底外)オサエ, 内面種子付痕1	磁砂	黄白
163	土師器・碗	13.5	7.3	4.6	□1.6底1/2	(内)工具ナデ(外)ナデ(底外)オサエ, 内面重ね焼痕	磁砂	黄白
164	土師器・碗	13.4	5.6×6.0	4.5	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目敷, 重ね焼痕	磁砂	黄白
165	土師器・碗	13.4	5.7	4.0~4.6	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)板目敷, 重ね焼痕	磁砂 礫	黄白
166	土師器・碗	13.4	5.3	3.8~4.8	□2/3底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底外)オサエ, 重ね焼痕	磁砂 礫	黄白

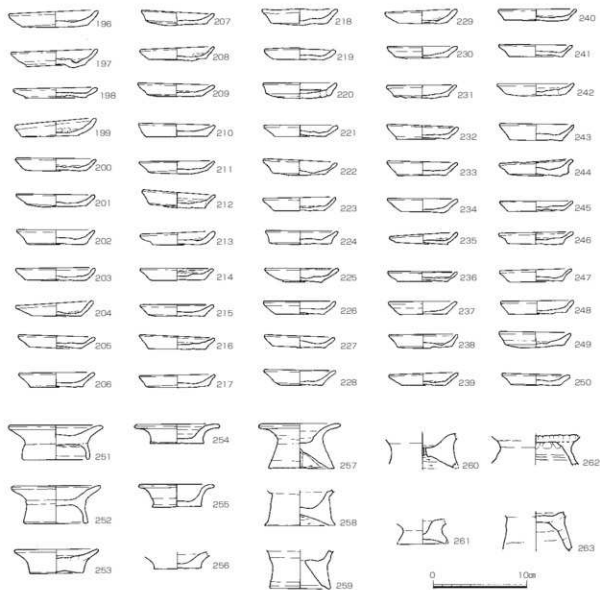
図94 土坑8出土遺物7 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (-:1/6未満)	形制・手法施	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
167	土師器・杯	11.3	9.4	3.1~3.8	1/1	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅。内面に粘土継ぎの凹凸	磁砂	赤色粒 黄白
168	土師器・杯	14.0×14.4	8.5	2.9~3.3	1/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 淡黄白
169	土師器・杯	14.1	9.0×9.6	2.8~3.3	1/1	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。外面磨。内面着色	磁砂	赤色粒 黄陶
170	土師器・杯	14.1	8.9	3.0~3.5	1/2	(内) (外) 縁ナナリ(底内) ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 淡黄白
171	土師器・杯	14.0	9.0	3.1~3.2	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 淡黄白
172	土師器・杯	13.8	8.9	3.2	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 黄白
173	土師器・杯	13.9	9.1×9.5	2.8~3.3	1/5	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 淡黄陶一磨陶
174	土師器・杯	13.6	9.0×9.6	3.4~3.9	1/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 黄白
175	土師器・杯	13.3×13.8	9.2	3.2~3.8	1/5	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。片口。足込みに木貫圧痕(2.0×0.5cm)	磁砂	赤色粒 黄白
176	土師器・杯	13.4	8.9	2.7~3.2	1/2	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 淡黄白一磨陶
177	土師器・杯	13.2×13.7	7.9	3.1~3.6	1/5	(内) (外) 縁ナナリ(底内) ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 淡黄白
178	土師器・杯	13.3	8.6	2.8	1/4	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 淡黄白
179	土師器・杯	13.3	8.9	2.4~3.0	1/1	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅。底面10mm程度の凹凸	磁砂	赤色粒 淡黄陶
180	土師器・杯	13.2	8.8	3.1	1/4	(内) 縁ナナリ(外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・ナナリ。磨	磁砂	赤色粒 黄灰~黄陶
181	土師器・杯	13.1	8.0×8.5	3.4~3.8	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。粘土継ぎ	磁砂	赤色粒 淡黄白
182	土師器・杯	13.0	8.8	3.1~2.5	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 黄白一磨
183	土師器・杯	13.0	8.0	2.5	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/板目直	磁砂	赤色粒 黄陶
184	土師器・杯	12.8×13.2	8.2	3.4	1/5	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅。外面に種子压痕1・植物繊維痕	磁砂	赤色粒 黄灰/淡黄白
185	土師器・杯	13.0	9.2	2.8~3.2	1/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/磨滅。前唇・底・焼痕	磁砂	赤色粒 黄白
186	土師器・杯	12.7	8.4	3.0	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 淡黄白
187	土師器・杯	12.6	8.2	2.6	1/1	(底外) 寛平リ/左回転・板目直。内面に種子压痕1。重ね焼痕	磁砂	赤色粒 黄白
188	土師器・杯	12.2×12.6	8.8	2.6~3.2	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 黄白
189	土師器・杯	14.2	9.2	2.5	1/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/板目直。磨滅	磁砂	赤色粒 黄白/黄灰一黄白
190	土師器・杯	13.9	7.6	3.0~3.6	2/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/板目直	磁砂	赤色粒 黄白
191	土師器・杯	13.3×14.0	7.2×8.0	3.0~3.7	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/右回転・板目直。歩込	磁砂	赤色粒 黄白
192	土師器・杯	13.1×13.9	6.0×6.6	3.3~4.1	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・ナナリ。重ね焼痕	磁砂	赤色粒 黄白
193	土師器・杯	12.6	7.9	3.4~3.8	1/5	(内) (外) 縁ナナリ(底内) ナナリ(底外) 寛平リ/左回転・板目直	磁砂	赤色粒 黄白
194	土師器・杯	15.9	6.7	5.1	1/1	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/板目直。板目直	磁砂	赤色粒 黄白
195	土師器・杯	11.0	8.0	2.2	1/3	(内) (外) 縁ナナリ(底外) 寛平リ/板目直。内面に種子压痕1	磁砂	黄灰

図95 土坑8出土遺物8 (縮尺1/4)

調査の記録



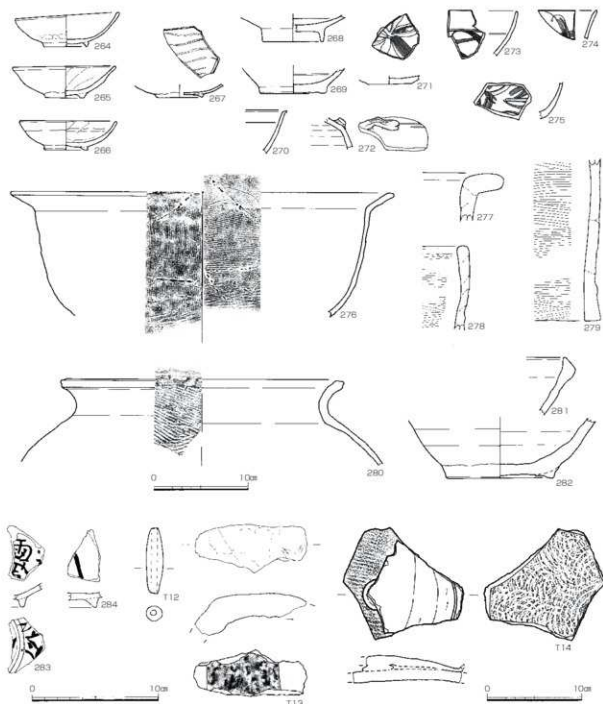
番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (→:1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調・内面・外面
		口径	口径	器高				
196	土師器・甕	9.3	7.0	1.3~1.8	125-6底1/1	(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、磨滅、底面粘土粘着	陶砂	淡褐色
197	土師器・甕	9.2	6.5	1.4~1.9	132-3底1/1	(底内) オサエ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、底面外周変色・傷	陶砂	淡褐色
198	土師器・甕	8.7	6.5	1.1	131-2底1/1	(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、内外面赤褐色	陶砂	黄白
199	土師器・甕	8.6	6.4×7.5	1.4~2.0	132-3底1/1	(底内) オサエ(底外) 甕キリ・板目直、底面粘土粘着	陶砂	黄緑・赤色粒
200	土師器・甕	8.4	6.5×6.9	1.2	132-3底5/6	(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、底面内面粘土粘着	陶砂	黄白
201	土師器・甕	8.3	6.3	1.1~1.6	1/1	(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、磨滅	陶砂	黄白~黄白/黄白~灰褐
202	土師器・甕	8.3	6.6	1.7	1/1	(内) 外・横ナデ(底外) 甕キリ; 左回転、焼熱、磨滅	陶砂	赤色粒
203	土師器・甕	8.3	6.4	1.0~1.4	132-3底1/1	(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、内面赤褐色	陶砂	赤色粒
204	土師器・甕	8.1	4.8×5.3	1.0~1.6	1/1	(底内) オサエ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、底面粘土粘着	陶砂	淡黄白~灰
205	土師器・甕	8.1	5.6	1.3	1/1	(内) 外・横ナデ(底外) 甕キリ; 左回転	陶砂	黄白
206	土師器・甕	8.1	5.7	1.5	134-5底1/1	(内) 外・横ナデ(底内) ナデ(底外) 甕キリ; 左回転	陶砂	黄
207	土師器・甕	7.8×8.2	6.5	1.0~1.6	132-3底1/1	(底内) ナデ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、磨滅、焼熱	陶砂	黄灰
208	土師器・甕	8.0	6.2	1.0~1.6	1/1	(内) 外・横ナデ(底内) オサエ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直	陶砂	黄緑
209	土師器・甕	8.0	5.9×6.0	1.3	133-4底1/1	(内) 外・横ナデ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、ナデ	陶砂	黄灰
210	土師器・甕	8.0	6.4	1.4	1/1	(内) 外・横ナデ(底外) 甕キリ; 左回転・板目直、底ナデ	陶砂	黄白~黄
211	土師器・甕	7.9	6.4	1.3	133-4底1/1	(内) 外・横ナデ(底外) 甕キリ、磨滅	陶砂	黄白~黄白/黄白~黄緑

図96 土坑8出土遺物9 (縮尺1/4)

土坑 8 (図96) 出土遺物観察表

番号	種類・器様	法量 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調:内面/外面	
		口径	底径	器高					
212	土師器・甕	7.9	6.2	1.6	1/3	Ⅱ-6底1/1	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	黄白~橙黄
213	土師器・甕	7.9	5.6	1.3	5/6		(内)外・横ナデ(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
214	土師器・甕	7.9	5.7	1.3	1/1		(底)外・底ナデ・左回転・板目直・底ナデ・左回転	陶砂	黄白
215	土師器・甕	7.9	6.0~6.4	1.3	1/2	Ⅱ-2底1/1	(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	淡黄白~黄白
216	土師器・甕	7.9	6.0	1.4	1/1		(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
217	土師器・甕	7.9	6.5	1.3	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直・板目直	陶砂	黄白
218	土師器・甕	7.9	5.5~6.0	1.2~1.7	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
219	土師器・甕	7.8	5.4	1.0~1.5	1/1		(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
220	土師器・甕	7.8	6.5~7.0	1.6	1/1	Ⅱ-2底1/1	(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	橙黄
221	土師器・甕	7.8	5.4	1.0~1.4	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	黄
222	土師器・甕	7.8	5.7	1.3~1.7	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	黄白
223	土師器・甕	7.7	5.4	1.3	1/1		(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	赤色粒
224	土師器・甕	7.7	6.5	1.4	1/1		(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	橙黄
225	土師器・甕	7.7	4.5	1.4	1/3	Ⅱ-4底1/1	(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	淡黄白
226	土師器・甕	7.7	5.1	1.3	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	赤色粒
227	土師器・甕	7.6	5.8	1.0~1.7	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
228	土師器・甕	7.6	5.0	1.2~1.7	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	黄白
229	土師器・甕	7.6	5.2	1.0~1.6	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・オサエ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
230	土師器・甕	7.5	5.6	1.3	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	橙黄
231	土師器・甕	7.4	5.9	1.0~1.5	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
232	土師器・甕	7.4	5.3	1.2~1.6	1/3	Ⅱ-6底1/1	(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
233	土師器・甕	7.4	5.1	1.6	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
234	土師器・甕	7.4	4.6	1.4	1/3	Ⅱ-4底1/1	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	赤色粒
235	土師器・甕	7.0~7.7	4.8~5.5	0.6~1.3	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	淡黄白
236	土師器・甕	7.3	5.2	1.0	1/1		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	黄
237	土師器・甕	7.3	5.0	1.3	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白~黄白
238	土師器・甕	7.3	5.8	1.5	1/1		(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
239	土師器・甕	7.2	4.5	1.3	1/3	Ⅱ-6底1/1	(底)内・オサエ・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	淡黄白~黄白
240	土師器・甕	7.2	6.7	1.3	1/2	Ⅱ-3底1/1	(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	赤色粒
241	土師器・甕	8.0	5.9	1.3	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	赤色粒
242	土師器・甕	8.0	6.4	1.3	2/3		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	淡黄
243	土師器・甕	7.9	5.6	1.7	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
244	土師器・甕	7.9	5.8~6.3	1.1~1.8	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・ナデ・板目直	陶砂	淡黄白~黄白
245	土師器・甕	7.9	5.7~6.0	0.9~1.5	1/3	Ⅱ-5底1/1	(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白
246	土師器・甕	7.8	5.9	1.3	1/3	Ⅱ-4底1/1	(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	淡黄白
247	土師器・甕	7.7	5.5	1.3	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
248	土師器・甕	7.7	6.2	1.4	3/4		(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄白~黄白
249	土師器・甕	7.3~7.7	6.3	1.3~1.8	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・左回転	陶砂	淡黄白
250	土師器・甕	7.2	5.4~5.8	1.3	2/3		(底)内・ナデ(底)外・底ナデ・左回転・板目直	陶砂	黄
251	土師器・台付甕	9.9	7.2	3.6~3.7	1/1		(内)外・横ナデ(胎台)内・板目直	陶砂	赤色粒
252	土師器・台付甕	9.4	6.8	4.0	1/2		(内)外・横ナデ(底)内・ナデ	陶砂	赤色粒
253	土師器・台付甕	8.8	7.6	2.5	1/3	Ⅱ-2底1/1	(内)外・横ナデ(胎台)外・底ナデ・板目直	陶砂	橙黄
254	土師器・甕	9.0	5.6	2.0	1/3	Ⅱ-6底1/4	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・板目直	陶砂	赤色粒
255	土師器・甕	8.0	5.6	2.4	1/3	Ⅱ-3底1/1	(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・板目直	陶砂	淡黄白
256	土師器・甕	—	4.9	—	1/1		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ・板目直	陶砂	黄白
257	土師器・甕	8.6	6.7~7.3	4.9	1/1		(内)外・横ナデ(胎台)内・板目直	陶砂	赤色粒
258	土師器・甕	—	6.4	—	1/4		(胎台)内・板目直	陶砂	黄白
259	土師器・甕	—	6.3	—	1/2		(胎台)内・底ナデ	陶砂	黄
260	土師器・甕	—	—	—	—		(胎台)内・底ナデ	陶砂	黄
261	土師器・甕	—	—	—	—		(内)外・横ナデ(底)外・底ナデ	陶砂	淡黄白
262	土師器・甕	—	—	—	—		(胎台)内・オサエ	陶砂	赤色粒
263	土師器・甕	—	—	—	—		(内)外・横ナデ	陶砂	淡黄白

箱、同皿は2箱を数える。この3器種で全体の約90%弱を占める。さらに、個体の1/3以上が残るものは碗では12箱中9箱、杯・皿は各2箱中1.5箱にのぼる。個体数を数えると、100~70%を残すものは、碗では約250点中の170点、杯は約30点中29点、皿は約80点中45点である。このように、吉備系土師器碗と土師器杯・皿の際立つ量的偏在性に加え、残存率の高さも極めて高い状態を確認できる。この3器種間では碗と皿の比率が高い。皿と杯



番号	種類・器種	法量 (cm)		残存 — (1/4未満)	形態・手法他	粘土	色調：内面/外面
		口径	底径				
264	土師器・碗	12.0	4.7	27~33	[11]2底1/1 (内)オキエ、割滅、底部下縁に輪線状	陶砂	黄褐色・橙灰褐色
265	土師器・碗	10.9	4.0×4.4	32	[12]2底1/1 (内)工具ナズ(外)ナズ、高台部	陶砂	黄白
266	土師器・碗	10.3	4.6	28~33	[12]2底1/1 (内)工具ナズ(外)ナズ、輪線	陶砂	黄灰・黄灰
267	瓦器・碗	—	5.0	—	1/3 (内)内ナズ、見込みに帯文	陶砂	灰白
268	白磁・碗	—	6.4	—	2/3 (内)内ナズナズリ、内外面施釉、高台露筋、見込みに沈線、内面磨滅	精磁	灰白(輪)淡緑灰
269	白磁・碗	—	6.8	—	1/3 (外)内ナズナズリ(或外)露筋し高台、内面施釉、外面施釉、見込みに沈線	精磁	灰白(輪)淡緑灰
270	白磁・碗	—	—	—	(内)内ナズナズリ、内外面施釉、内面沈線花	精磁	白(輪)淡緑灰
271	白磁・皿	—	4.6	—	1/4 内外面施釉、底部落筋、貫入あり、見込みに帯文	陶砂	黄白(輪)黄
272	白磁・四耳壺	—	—	—	(内)横ナズ(外)内ナズナズリ、内外面施釉、肩部に沈線1条	精磁	灰白(輪)淡緑灰

図97 土坑8出土遺物10 (縮尺1/4・1/3)

土坑8 (図97) 出土遺物観察表

番号	種類・器種	径長 (cm)			残存 寸(1/6未満)	形態・手法他	粘土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
273	吉備・椀	—	—	—	—	(外)笠ケズリ、内外面施釉、内面障目・施焼き文、外面障目文	焼磁	灰(輪)緑灰
274	吉備・椀	—	—	—	—	内外面施釉、内面障目・施焼き文	焼磁	灰(輪)緑灰
275	吉備・椀	—	—	—	—	内外面施釉、内面障目・施焼き文	焼磁	灰(輪)緑灰
276	土師器・甕	40.6	—	—	1/2	(内)横ハケ目(外)オサエ・縦ハケ目・斜めハケ目(靑)、外面施釉	陶砂	橙白/橙灰
277	土師器・甕	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、被熱	陶砂	赤褐
278	土師器・甕	—	—	—	—	(内)横ハケ目(外)ナデ・オサエ、内外面施釉	陶砂	橙褐-黒褐
279	土師器・甕	—	—	—	—	(内)横ハケ目(外)オサエ・ナデ、内面施釉	陶砂	赤褐
280	須恵器・甕	300	—	—	1/4	(口)横ナデ(外)平形底、内面施釉、被熱、束縋系	陶砂	黒灰
281	須恵器・甕(内)	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、束縋系	陶砂	多灰
282	須恵器・甕(内)	—	110×115	—	1/1	(内)(外)横ナデ(底)ナデ、内面底面施釉	陶砂	灰、黒灰
283	土師器・椀	—	—	—	—	内外面に用漆	陶砂	淡黄白
284	土師器・椀	—	—	—	—	用漆	陶砂	淡黄白

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	形態・手法他	粘土	色調
T13	印	3.8	8.9	2.1	52.9	—	(外)オサエ、縦く屈曲し内側には無数のワラ圧痕	陶砂	橙白
T14	須恵器杯蓋と甕	11.9	12.7	2.7	294.5	—	須恵器杯蓋と甕の外面施釉(赤内/黄緑)内(外)は同心円と平行タテキ、自然熱	陶砂	灰

の出土点数を比較すると25対1の割合となる。これらに対して、脚台の出土量は1/3箱程度で出土点数は少数となるが、通常における出土数の少なさから考えると、残存率の高さや器形の多様性もあわせて際立つ存在と評価される。

その他の器種は土師器鍋・甕が1箱弱、輸入陶磁器や須恵器など(図97)が1/2箱程度で、いずれも小～細片で残存率は極めて低い。以上のように、吉備系土師器椀・杯・皿・脚台は他の出土遺物とは明瞭に区別されており、本土坑の廃棄に際して重要な役割を果たす遺物であったことは明白である。そこには、大量の土器を使った儀礼的行為が復元される。

吉備系土師器椀、土師器皿・杯で注目される点は、圧痕土器の多さと墨書土器の存在である。圧痕土器は全部で43個体を数える。同椀では38個体で、その内訳は繊維状の圧痕土器14個体と種子の圧痕土器27個体である。その内、両者が確認される椀3個体を含む。杯では3個体で種子圧痕が3点と繊維圧痕1点(図95-184・187・195)、皿では2個体で種子圧痕が確認される(図96-215・245)。土器1個体に残る圧痕数は1点～複数点であり、椀ではイネ・メヒシバ・タラノキ・キツネノボタンが確認されている(第4章-8)。全体にイネ科の比率が高い。付着位置やその状況から土器製作過程の一端を窺うことができる可能性があらう。墨書は吉備系土師器椀3点で確認される。判読することは困難であるが、1点は「雨」の形が明瞭である(図97-283)。もう1点は冠部分が「雨」あるいは「西」であり、「雨」であり、「零」あるいは「粟」とも読める(図89-33)。雨乞いあるいは火に係わる文字であり、具体的祭祀行為の様子を考える上で参考にならう。

以上の遺物ほかに、ウシとウマの白歯が各1点出土している(第4章9)。意識的に入れられたかどうかの判断は難しいが、種類や部位の点で儀礼的な要素も考えられるため注意しておきたい。

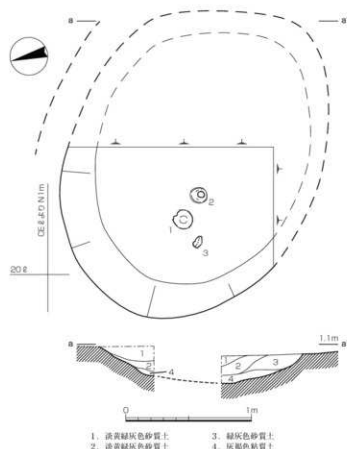
本土坑の所属時期は鎌倉時代初頭、12世紀末～13世紀前葉と考えられる。

本土坑より古い時期、あるいは時期が確定できない遺物の中で、如壁状の遺物と古代の須恵器が注目される。須恵器は8世紀代の須恵器杯蓋片と甕片が溶解して付着した状態を呈している(図97-T14)。いずれも外面が付着しており、製品として流通したとは考えられない。如壁状の遺物の内面には薬圧痕が残り、橙白色の被熱痕を残す(同-T13)。また、上層では焼土塊あるいは如壁の破片が含まれる。いずれも混入品であるが、通常の集落遺跡では考えにくい遺物である。これまでも、本調査地点の東側に近接する第18次調査地点で11世紀代の井戸の埋土から焼土が多く出土しており、鹿田遺跡における平安時代の手工業生産を考える手がかりになる資料である。

また、本土坑埋没後の時期に属する遺物も少数含まれる。その中で、完形に近い吉備系土師器椀3点(図97-264～266)が土器群に含まれているが、これらは後世の柱穴が重複していた可能性が高い。それ以外は概ね小～細片であり、上層を中心に出土していることから埋没後の流入と判断される。

土坑9 (図74・98 図版24)

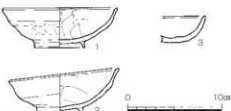
調査区北東端、CE20地点付近に位置する。東半は調査区外に当たり、南部分も個溝によって破壊されたため、残存部は全体の1/3程度である。



検出面は<4 b層>に求められる。上面の標高は1.02m、底面は同0.78m、深さは0.24m測る。平面形は、残存する1.7×1.3m程度の形状に加え、本調査区の東側に続く第14次調査地点の西壁断面を参考にすると、2.5m×1.2m程度の楕円形が予想される。底面部は1.5m×0.8mを残すのみである。掘り方は不明瞭であるが、皿状と考えられる。埋土は黄灰色の砂質土を基調とする。

出土遺物の量は13号ポリ袋に1/2程度で、完形品2点(図98-1・2)を含む吉備系土師器碗が主体をなす。そのほかに、土師器杯(同-3)や皿あるいは瓦器碗1点が確認されるがいずれも小片である。

土坑の時期は、鎌倉時代、13世紀中葉と考えられる。



番号	種類・器種	法量 (cm)		残存	形態・手法集	粘土	色調: 内面/外面
1	土師器・碗	口径	底径	器高	(内)工具ナデ(外)オウエ・ナデ(底外)板目煎、焼熟	磁砂	黄灰/黄白
2	土師器・碗	11.9	4.9	3.4~4.6	(内)工具ナデ(外)オウエ・ナデ、内面重凸板煎	磁砂	黄白
3	土師器・杯	—	—	2.7	(内)(外)横ナデ(底外)板目煎、焼熟	磁砂	赤色粘

図98 土坑9・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

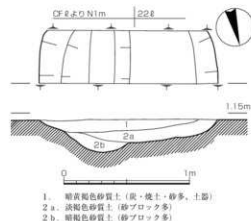


図99 土坑10(縮尺1/30)

土坑10 (図74・99)

調査区北東部、CE22地点から南3.5mに位置する。土坑8の南側である。南・北両端部が個溝や掘乱によって破壊され、残存部は中央部の1/3程度である。

検出面は<5層>であるが、出土遺物などから本来は<4 b層>に対応すると判断される。上面は標高1.1m、底面は同0.84m、深さは0.26mを測る。平面形は、東西幅が1.58m、南北は0.4mが残る。本来の形状は不明瞭であるが、本地点以上に南北に延びる痕跡がないことから、直径1.6m程度の円形あるいは楕円形の可能性が高いと考えられる。標高0.9m付近に平坦な面を有し、東寄り部分で底面に落ち込む状態から、掘

り方は二段掘りで見なされる。底面は直径0.5m程度で椀状をなす。埋土は三層に分層したが、いずれも砂を包含する褐色系砂質土である。1層では上半に炭が、そして下半に焼土が多い傾向をもつ。

遺物は1層から、吉備系土師器碗、土師器皿・鍋の小・細片が10点程度出土しているのみである。

本土坑の時期は、出土遺物からは鎌倉時代、13世紀後半頃と想定される。

土坑11 (図74・100)

調査区北東部、CE23・24区において24ラインが土坑内を走る位置にあたる。側溝あるいは攪乱によって南半および北～東端部を消失する。西側に位置する溝41の上部に重複する。

検出面は<4 b層>に対応する。上面は標高約1.2m、底面は同0.4m、深さは0.8mを測る。平面は東西3.15m、南北1.15mが残存する。本来の形状復元は困難であるが、東西方向は3.5m程度が予想され、隅丸方形の可能性が考えられる。底面は東西2mを測る。南北方向は0.7mを残すのみである。掘り方は逆台形であるが、底面近くには0.2m程度の段が残る。また底面には凹凸が確認される。

埋土は、1群(1～4層)と2群(5～7層)に大別される。1群は褐色系の砂質土層であり、クサレ礫や砂あるいは土器の小～細片を含む。2群は灰色系の粘質土で粗砂を多く含む。その中で5層は粘土ブロックを多く含む点が特徴をなす。下層の6・7層では粗砂の包含がブロック状あるいはラミナ状に確認される。また、1群の水平に堆積する傾向とは異なり、2群における各層の境界ラインは凹凸が顕著で土坑廃棄時に一気に埋め戻された状況を窺うことができる。

遺物は13号ポリ袋1.5袋程度の量が出土した。吉備系土師器碗、土師器杯・皿・鍋・竈など一般的な中世土器を含む。いずれも小～細片である。その中には、焼土の小塊が3点確認されている。

本土坑の時期は、出土遺物から鎌倉時代後半、13世紀末～14世紀初頭と考えられる。

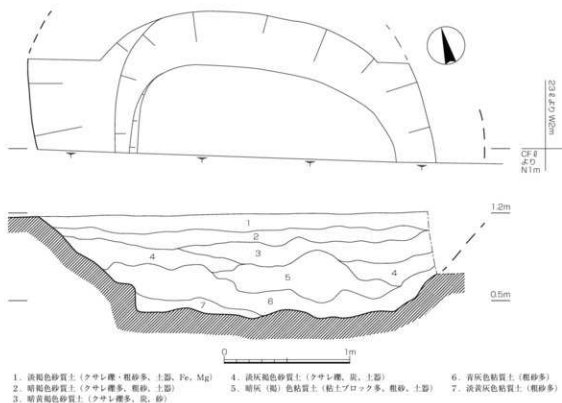


図100 土坑11 (縮尺1/30)

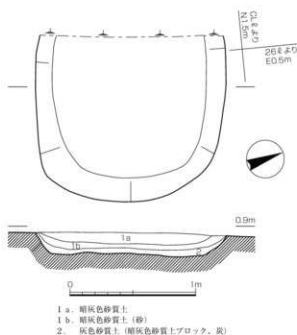


図101 土坑12 (縮尺1/30)

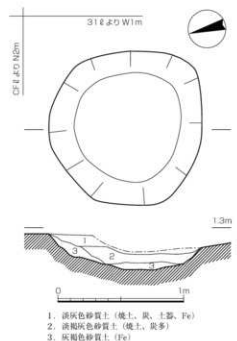


図102 土坑13 (縮尺1/30)

径は0.4mである。掘り方は二段掘りで、下半は碗状を呈する。埋土は上下に二分されるが、いずれも灰褐色砂質土であり類似性が高い。

出土遺物量は、13号ボリ袋1/2程度である。吉備系土師器碗、土師器杯・皿の中世土器片が含まれるほか、釘状の鉄器が2点出土した(図103-M2・3)。

本土坑の時期は、出土遺物から鎌倉時代、13世紀中葉と考えられる。

土坑12 (図74・101、図版24)

調査区南東部、CL26地点付近に位置する。西端部は第11次調査区と第9次調査区の境にあたる。後者の範囲では確認されていないことから、その消失部分は比較的小さいと考えられる。また、溝43・44の上部に重複する。検出面は<4b層>に対応する。上面は標高約0.85m、底面は同0.66m、深さは約0.2mを測る。平面形は隅丸方形が予想される。平面規模は、南北方向では上面が1.5m、底面は1.2mである。東西方向では、上面で1.3m、底面で1.12mを残しており、上面で1.6m程度が推定される。掘り方は皿状で、広く平坦な底面を有す。

埋土は三分しているが、いずれも灰色をベースにした砂質土で各層間に大きな差は認められないが1層は砂が下半に多く含まれる点と2層は炭粒が多い点が特徴である。遺物は出土していない。

本土坑の時期は、遺構の重複関係から鎌倉時代の範囲で考えておきたい。

土坑13 (図75・102)

調査区中央北半、CE31区に位置する。上部の一部は掘乱によって削平を受ける。検出面は<4b層>で、上面は標高1.26m(削平部分では同1.15m)を測る。底面は同0.97mで深さは約0.3mである。ほぼ円形を呈し、その規模は上面で直径1.2m、底面で同0.85mである。掘り方は緩やかな碗状を呈する。埋土は三分される。最下層の3層は比較的汚れの少ない層である。1・2層は炭・焼土を含む。

出土遺物は、13号ボリ袋1/3程度でほとんどが吉備系土師器碗などの中世土器の小～細片である。

本土坑の時期は、出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

土坑14 (図75・103)

調査区中央部付近の北端、CD34区に位置する。調査区北端にあたるため、北～東部分が側溝あるいは掘乱によって大きく破壊される。検出面は<4b層>で、上面は標高1.3m、底面は同0.7m、深さは0.6mを測る。平面形は円形と考えられる。その規模は、上面で1.8m×1.9mを残す。破壊を受けていない底面の直

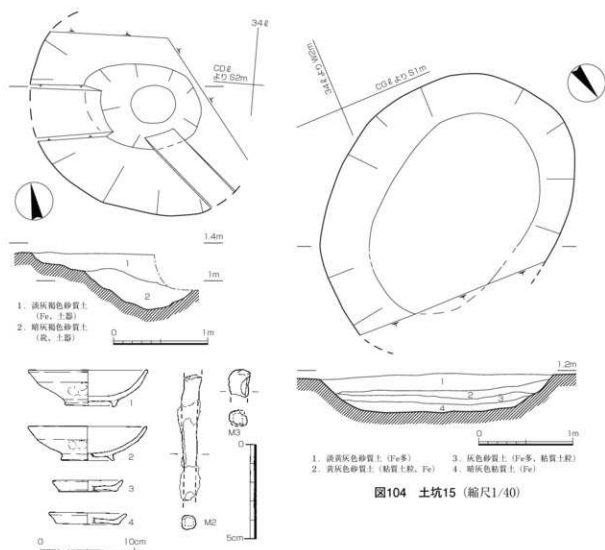


図104 土坑15 (縮尺1/40)

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (口)・2底/1	形態・手法他	胎土	色調・内面/外面
		口径	口径	器高				
1	土師器・碗	12.8	5.5	2.7	11/2底/1	(内)オサエ・ナサ(底外)オサエ, 内外面重ね焼成	陶砂	淡黄白
2	土師器・碗	13.0	5.6	3.6	2/3	(内)オサエ・ナサ(底外)オサエ, 内面重ね焼成, 内面僅・焼熱	陶砂	暗黄灰・黄灰
3	土師器・皿	7.4	6.2	1.2	1/3	(内)外)横ナサ(底内)オサエ(底)飽ホリ:左回転, 割成	陶砂	淡黄白
4	土師器・皿	8.3	6.8	1.2	1/3	(内)外)横ナサ(底内)オサエ(底)飽ホリ:左回転	陶砂	淡黄白

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴
M2	鉄釘	1.5	1.1	0.8	1.5	—	断面片
M3	鉄釘	6.7	1.2	1.1	9.3	—	上下端欠損

図103 土坑14・出土遺物 (縮尺1/40・1/4)

土坑15 (図75・104、図版24)

調査区北西部、CF・CG34区に位置する。土坑14の南約12mである。調査時の掘削で北東部が破壊される。

検出面は<4 b層>で、上面は標高1.1~1.15m、底面は同0.75m、深さは0.4mを測る。平面形は楕円形と考えられる。その規模は上面で3.15m×2.37m、底面では2.25×1.5mである。掘り方は皿状を呈し、大形で浅い土坑といえる。埋土は四分しているが、いずれも類似性は高い。全体に鉄分が沈着し、2・3層には粘質土粒が含まれる。最下層の4層は粘性を高める。いずれも水平堆積の傾向が強い。

遺物は出土していないため、本土坑の時期の確定は困難であるが、検出面から鎌倉時代と考えておきたい。

c. 墓

調査区中央部で、2基が隣接して検出された。

墓1 (図75・105～109、図版16～21・40)

調査区中央北寄りのCG33地点に位置する。溝53の先端部内に重複する。本遺構の一部は調査時の断ち割りで消失している。墓域内に木棺を安置した墓である。

検出面はく4b層>である。上面は標高1m程度、底面は同0.8m、深さは約0.2mを測る。墓域の平面形は隅丸方形を呈し、その規模は、上面で1.56m×1.19m、底面では1.35m×1.02mである。掘り方は箱形である。

木棺構造 (図105・106)： 内部に置かれた木棺の形態は、棺材を示す粘土痕跡 (図105-9層) から、外寸で1.17m×0.9m～0.95m、内寸では約1.02m×0.8mを測る長方形の組み合わせ木棺が復元される。その構造は、四隅に残る粘土痕跡などから、小口板が側板を挟みこむ状態であったと考えられる。木棺の南西隅では南側の小口板と西側の側板の接合部が明瞭に残っており、その接合は単純ではないことがわかる。側板と小口板材の端部は加工され、鍵の手状に組み合わせる状態が確認される (図106)。さらに、西側の側板部では、その外側に異なる板材痕跡が平面で検出されており、もう1枚の側板が木棺を外側から補強するかのようであてがわれた状態が看取される。その板材は、内側の側板より長く小口板端部までを覆うことから、側板2枚と小口板1枚が互い違いに組み合わせる状態であった可能性が高い。こうした二重構造については、南側の小口板部でも2枚の可能性が考えられる (図105-c断面) が、平面的には確認できないため判断は難しい。一方、北側の小口板については明確な二重構造の痕跡は抽出できない。東側の側板については、平面調査ではその可能性を考えさせる2列の痕跡が検出されたが、断面観察から1枚の板が内側に傾いた可能性も考えられるため確定はできない。

次に、木棺の底板と蓋板について検討してみよう。木棺の底板 (図105-8層) は標高0.83m前後に位置することが断面で確認される。小口板・側板 (同-9層) との関係は、南側の小口部断面 (同-c断面) などから、底板上に側板などが立ち上がる状態が看取される。ただし一部の断面では、側板材下端付近のえぐり部に差し込まれた状態にあった可能性も認められることから、その状態が確定的とは言いがたい。底板上面 (8層上面) には頭蓋骨をはじめとする人骨が残されるほか、漆痕跡とみられる赤色を保つ木質が点在しており、平面的にその広がりが確認される。一方、蓋材の痕跡 (図105-6層) は、平面調査においては、特に墓の北半部で板状の木質として残存しており、人骨を覆う状態を呈していた。またa断面観察 (図105) では、西の側板上から中央に向けて落ち込んだ状態が明瞭に観察された。棺内への流入土 (同-7層) が僅かであることから、埋葬後、比較的早い段階に蓋の中央部が落ち込んだと理解される。また、蓋材痕跡層下面にも赤漆の痕跡を残す木質が確認されており、前述した底板痕跡を示す8層上面の漆とともに、棺の内面は漆塗りであった可能性が想定される。

棺材 (図105)： 棺材の厚さは、平・断面観察から0.05m前後と考えられる (9a・9b層)。また、西側の側板には方形の粘土が食い込んだ状態で記録されている。検出レベルは側板の上半部に当たっているが、その機能は不明である。

小口板と側板の固定 (図106)： 側板および小口板を固定したと考えられる鉄釘が、3箇所のコーナー部分で出土した。特に南西隅では側板2枚を留める釘1本 (M9) と、側板と小口板を留める釘1本が確認される。いずれも水平方向で出土した。北東隅・南東隅においても水平方向で出土する鉄釘が認められる (M13ほか)。こうした鉄釘の出土レベルは標高0.95m前後に集中する。その高さは小口板の上半部の高さにあたる (図105-c断面)。出土位置・レベルなどの点で他の鉄釘とは明瞭に区別される。これらの釘が小口板と側板を固定したことは明らかであろう。

底板・蓋板の固定 (図106)： 底板を固定したと考えられる鉄釘が、南側の小口板から側板部の下部に3箇所で出土している (M10・11他)。いずれも垂直に立った状態である。出土レベルは標高0.84～0.85mで底板レベルと近似する数値を示す。蓋板の固定に係わる可能性がある鉄釘は、北東部の側板と小口板上の2箇所において、

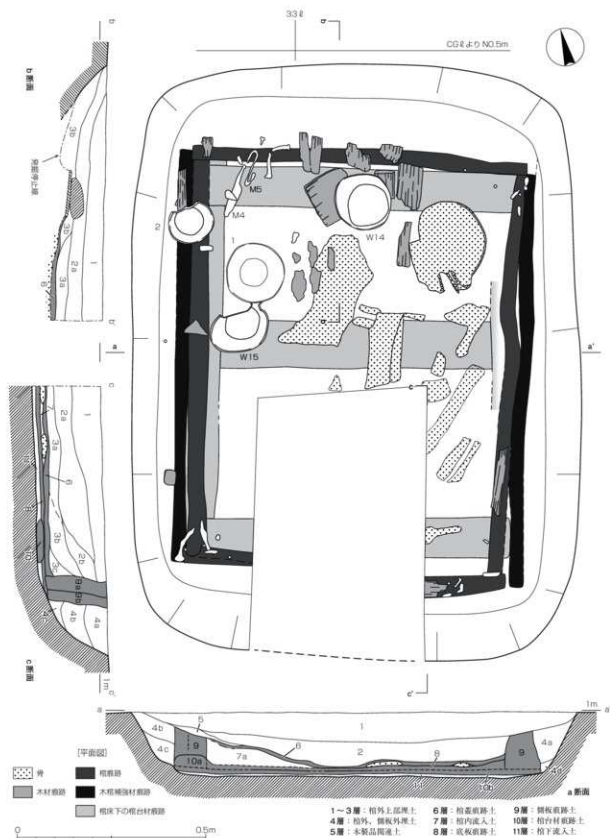


図105 墓1 (縮尺1/10)

図105の土層注記

- [a 断面]
1. 灰褐色砂質土 (炭・焼土)
 2. 褐色砂質土 (炭・焼土)
 - 4 a. 灰褐色砂質土 (炭・焼土)
 - 4 b. 灰褐色砂質土
 - 4 c. 淡灰褐色砂質土 (Fe)
 - 4 d. 灰褐色砂質土
 5. 灰色粘土 (木質)
 6. 暗灰色粘土 (土・下面に木質)
 - 7 a. 灰褐色粘土
 8. 灰褐色粘土
 9. 褐色砂質土
 - 10 a. 灰色粘土 (一部上面に木質)
 - 10 b. 灰色粘土
 11. 黄灰色砂質土
- [b・c 断面]
1. 淡(黄)灰色砂質土
 - 2 a. 淡灰褐色砂質土 (砂, Fe)
 - 2 b. 淡黄灰色砂質土 (炭, Fe)
 - 3 a. 淡黄灰色砂質土 (炭, Fe)
 - 3 b. 灰(褐)色砂質土
 - 3 c. 灰褐色粘土
 - 4 a. 淡灰褐色砂質土 (Fe)
 - 4 b. 黄灰色砂質土 (Fe)
 - 4 c. 灰褐色砂質土
 6. 灰色粘土
(灰褐色粘土ブロック、下面に赤色木質層)
 7. 灰褐色粘土 (灰褐色粘土ブロック、骨)
 8. 灰褐色粘土 (上面に赤色木質層)
 - 9 a. 灰褐色粘土
 - 9 b. 黄灰色粘土
 10. 灰色粘土
 11. 淡黄灰色砂質土

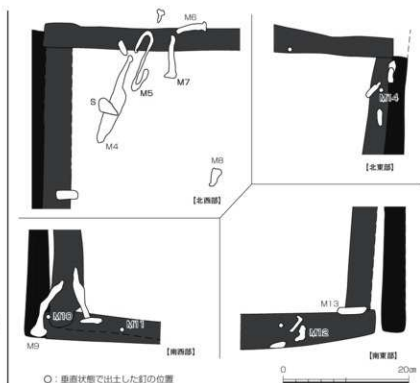


図106 墓1木材の組合せと鉄器出土状況 (縮尺1/6)

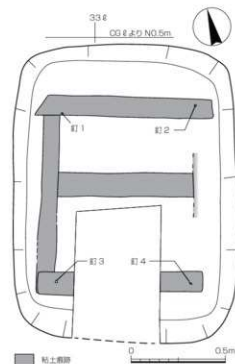


図107 墓1木棺下部の棺台材痕跡と鉄釘出土状況 (縮尺1/20)

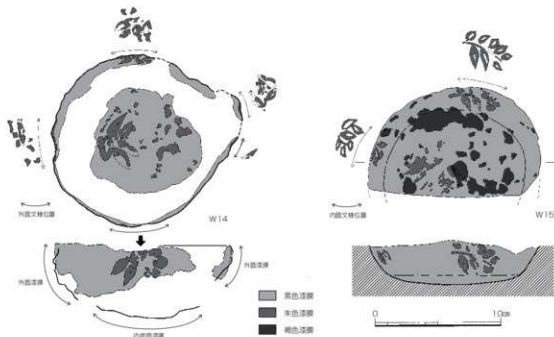
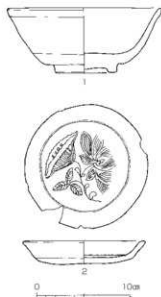
やはり垂直に立った状態で出土した (M14ほか)。出土レベルは標高0.9m前後を測る。床面には到達しない高い数値であり、蓋板を棺本体に固定したものと理解される。

棺台構造(図107)： 内部施設の特徴として注目されるのが、木棺下部に設置された棺台状の木組み構造物である。木棺底板にあたる8層除去後に、粘土化した板状痕跡が墓壇底面から検出された(図107)。その幅は0.1~0.12m程度であり、厚さは中央部の東西粘土帯で0.005m、東西・南北の断面観察では0.01m程度が観察される(図105-10・10b層)。こうした数値は、材の大きさを考える手がかりとなろう。東西方向に3列と南北方向に2列が確認される。いずれも灰色粘土であるが、前者は黒色をややおびており、後者と区別できる。東西列は断面(同-10層・10b層)でも比較的明瞭に確認される。その間隔は中心間で0.4mと0.5mである。一方、南北列は木棺の側板と重なる位置にあたる(図105)。その影響もあり東側の列は、断面あるいは平面でも捉えにくい。この5枚の板材痕跡の配置からは、下部に空間を持つように井桁状に組み上げられていた可能性を窺うことができる。詳細を説明しよう。

東西方向の3列の板材痕跡の上面レベルに注目したい。南北両端の2列が標高0.85m~0.88mを測るのに対して、中央部列は

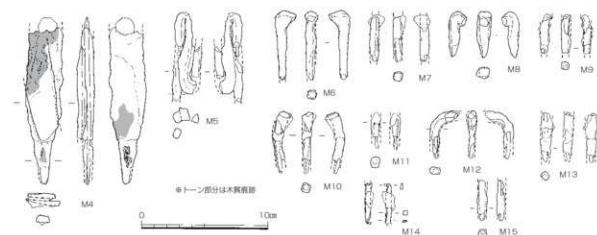
同標高0.82～0.83mで一段低い状態を示す。さらに、南北方向の板材痕跡の位置で姿を消している。この状態は、南北両端の東西方向の板材が、南北方向の板材上に重ねられるのに対して、中央部の東西方向の板材のみは南北方向の板材の下部に位置していたことを窺わせる。つまり、東西方向の板材が墓壇底部中央に直接置かれ、東西両端上に南北方向の板材、そして、その上に北側と南側とに東西方向の板材が置かれるという状況が復元される。こうした棺台の設置によって、木棺の下部に一定の空間が構成されていたことが、断面に残る墓壇底部の流入土(同-c断面11層)からも理解される。

棺台材の固定(図107): 最下部に置かれた東西列中央板材を除く東西2列の材の上面では、材が重複する北東・南東・南西・北西の各コーナーにおいて各1点の鉄釘(図107-釘1~4)が垂直状態で出土した。出土レベルは標高0.86～0.88mである。この数値は棺底板に伴う鉄釘よりも高い点には疑問が生じるが、その背景には棺台と木棺の位置関係が関係すると考えられる。前述したように、木棺の長さは棺台よりも長い。そのため木棺の南北両端は棺台からはみ出た状態にあったことは、平面調査や土層観察から判明している。棺台からはみ出た南側の小口部では、底板が棺台下の空間に落ち込んだ可能性は高い。そのために、低いレベルで棺底板に伴う鉄釘が出土したのではないだろうか。このように棺台は四隅で縦横の枠材を固定した状態が復元



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存	形態・手法施	胎土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高				
1	青磁・碗	16.4	6.7	6.8	1/1	内外面施釉。高台内高輪。高台端部一部彫刻。使用前多(見込みの輪郭減・内外面磨かいかき)	紫緑	灰(輪)・緑灰
2	白磁・皿	13.0	4.9	2.5	1/1	内外面施釉。底部外面彫刻。見込みに沈線・寛縁き草花文	粉白	灰白(輪)・淡緑灰
番号	器種	径 (cm)	器高 (cm)	特徴				
W14	漆椀	14.5	4.0	漆跡のみ残存(W14は内底面と外面の一部・W15は内面のみ)。黒い地塗りに赤漆で彩色。赤彩の文様は内外面の4箇所に花卉等の植物文様が残存。W14では内面底面にも赤漆の文様が残存。				
W15	漆椀	13.0	3.0					

図108 墓1出土遺物1 (縮尺1/4・1/3)



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴
M4	鉄釘・刀子	132	刃身298.06	刃身12.903	327	先端欠損	2本の刀子が重複
M5	S字状鉄製品	7.1	2.1	1.2	92	—	断面方形の鉄棒をS字状に折り曲げている。または釘3本が頭により重なった断面方形
M6	鉄釘	5.5	頭1.7×0.6	頭1.0×0.6	48	下端欠損	断面方形
M7	鉄釘	3.7	1.2	1.0	28	下端欠損	断面方形
M8	鉄釘	3.6	頭1.0×0.9	頭1.3×0.8	50	1/1	上端屈曲。断面方形。下端に向けて漸く尖る
M9	鉄釘	3.1	1.0	0.8	16	下端欠損	上端屈曲。断面方形
M10	鉄釘	4.8	頭1.1×0.6	頭1.2×0.9	29	下端欠損	断面方形
M11	鉄釘	2.9	0.8	0.7	10	両端欠損	断面方形
M12	鉄釘	1.9	0.9	0.8	22	下端欠損	断面方形
M13	鉄釘	3.9	1.1	0.8	21	上下端欠損	断面方形
M14	鉄釘	3.2	1.0	0.7	10	両端欠損	断面方形。両端は折り曲げられており屈曲部分は扁平
M15	鉄釘	3.2	0.8	0.6	12	上端欠損	断面方形

図109 墓1出土遺物2 (縮尺1/3)

される。木棺をのせた場合、墓塚底面から木棺との間に数cmの空間が確保されたことは確かである。さらに、棺台構成材間にも空間が形成されており、防湿面で入念な対応がなされていることを窺わせる。

遺物出土状況 (図105・106) : 木棺床面には人骨が比較的良好に残っていた。頭蓋骨の出土レベルは下面で標高0.86m、上面では同0.9mに位置する。棺の北東部隅に頭部を南東方向にかしげりするような状態で出土した。かなり窮屈な状態が予想される。棺の大きさや人骨の配置から東向きに屈葬が復元される。埋葬に際して置かれた遺物は、碗・皿類4点と鉄製品数点である (図108-1・2、W14・15、図109-M4・5)。出土位置は棺の北西部で頭部位置の後ろ側にある。ほとんどの遺物の出土レベルは標高0.9m前後に集中する。同レベルは、頭蓋骨上面あるいは棺蓋関連の鉄釘出土レベルと一致する。棺蓋上 (図105-6層上) に遺物がまとめて置かれたことを示している。漆碗2点のうち1点 (図108-W14) は頭蓋骨のすぐ後ろの位置で、そしてもう1点の漆碗と青磁碗1点 (同-W15・1) は西側板寄りの位置で棺蓋上部から少し下にめり込む状態で、そして白磁皿1点 (同-2) は西側板の上部でそれぞれ出土した。白磁皿の出土レベルは若干高く標高0.97mを測る。西側の側板上のレベルである。また、鉄器群は少なくとも刀子2点と不明鉄器1点 (図109-M4・5) が確認される。刀子2点は鋸で一体化して出土したが、刃部の向きをそろえて重ねて納められていたことがX線撮影でも明確に確認された (図版40)。青磁碗は龍泉窯産であり内面には使用痕が残る。また漆碗2点は漆膜のみの残存であったが、いずれも地漆の上に朱漆で花柄文様か内外面に描かれており (第4章2)、黒地赤絵が鮮やかである。

埋土の状況 (図105) : 棺材などの構造物関連層を除くと、埋土は棺材下部の薄い堆積層である11層、棺内流入土である7層、棺安置後の埋め戻し土である1~4層にまとめられる。全体的には黄色を帯びる灰褐色あるいは灰色の砂質土を基本とする。その中で7層はやや粘性を帯び、1~4層は鉄分の沈着が多く炭・砂が多少含まれるが、いずれも堅立つものではない。全体に汚れは少なく、丁寧に埋められた状態と評価される。

墓の特徴 : 本墓は、非常に入念なつくりをみせる木棺や複雑な構造をもつ棺台の設置、あるいは輸入陶磁器

と漆器のみで構成される埋納品の質の高さ、さらに丁寧な埋納を示す埋土の状況など、埋葬にあたって特別な扱いがなされたことが窺われる。被葬者については、人骨の分析から熟年層の人物であることが判明している（第4章1）。性別は不明であるが、集落において中心となる人物像を描くことができる。

本墓の所属時期は、輸入陶磁器の年代観からは13世紀前半も視野に入るが、青磁碗の使用痕の形態や、埋土上層から出土する中世土器の小破片に13世紀末～14世紀初頭の遺物が含まれることを踏まえると、鎌倉時代後半、13世紀後半～末頃と判断される。

墓2（図75・110、図版22）

調査区中央北寄り、CG32・33区に位置する。墓1の南側に続いて検出された。同墓と同様に溝53の南端部内に重複する。四方は側溝や擾乱で破壊されているため、残存部は僅かで不明な部分が多い。

検出面は<4b層>に求められる。上面は標高約1.1m、底面は同0.93m、深さは0.17mを残す。平面規模は底面で長辺0.84m・短辺0.45mが確認されたのみで、平面形も隅丸方形が予想されるが明確ではない。埋土は1層で構成される。同層中からは骨・漆被膜・鉄器片が出土した。骨は床面からは0.1m程度上部において長さ0.2m程度が残る。原位置は保たれていないが、人骨である（第4章1）。その下部に漆の被膜の広がりが確認された。朱漆の碗の可能性が高い（第4章3）。2層は床面直上に薄く堆積する灰黑色粘質土で、木棺底板の可能性が考えられる。底面では鉄釘が垂直に立った状態で出土している。

出土遺物が限定的で時期決定は困難であるが、墓1および溝53との位置関係から、本墓は鎌倉時代、13世紀中葉～後半に属すると判断される。

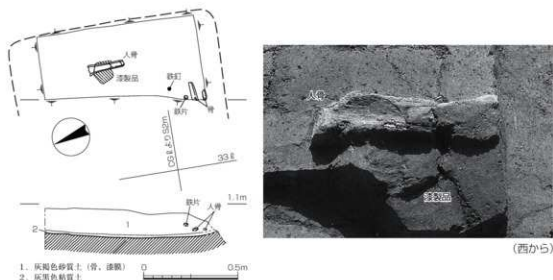


図110 墓2（縮尺1/20）

d. 溝

溝38（図74・111）

調査区北東部、CE20区においてCFライン付近を東西に走る。第14次調査溝12につながる位置にあたる。南～西側および上半部を擾乱で消失する。検出面は<6層>で、上面は標高0.96mである。ただし、上部削平を受けていること、一部断面において<4b層>にあたる標高1.25mまで堆積土が確認されることから、本来は<4b層>に対応すると判断した。ただし、その軸方向は約N80°Wであり、本層検出溝と<5層>溝の中間にあたる角度を示す点は、前代の溝との関係も考えさせられる。

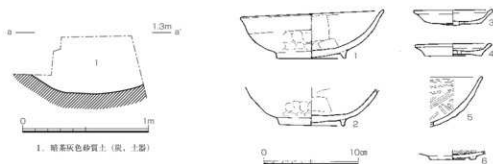


図111 溝38断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

検出された長さは2m弱程度で残存状態も悪く、幅なども含めた詳細は不明である。最も残りの良い東端部分で、底面は標高0.82mに位置することを確認し、深さは0.43mまで想定することができる。掘り方断面形は碗状を呈し、埋土は暗茶灰色砂質土で土器片のほかに炭を多少含む程度で際だった特徴は見いだせない。

出土遺物の量は13号ポリ袋に1/2程度である。その中で比較的高率の残存率の高いものは、吉備系土師器碗1点と土師器皿2点である(図111-1・3・4)。前者は全体の1/2程度、後者は完形あるいは3/4程度を残す。皿2点の底面には各1箇所小さな穿孔が確認される。溝廃棄における何らかの行為に伴う可能性があるかもしれない。その他に瓦器碗(同・5)・土師器鍋・白磁碗・須恵器碗なども含まれるがいずれも小〜細片である。

本溝の時期は平安時代末頃、12世紀後半〜末と捉えられる。

溝39 (図73・74・112・113、図版24・25)

調査区北東部、20ラインから28ライン間においてCEライン上を東西に走る。溝38の北側にあたり、溝の中心間で3.5mの距離を保つ。その方向は、N75°Wであり鹿田構内座標軸に合致している。東に向けては、第14次調査溝11につながる。西に向けては、28ライン以西では確認されない。

検出面はく4bノ層である。上面は標高1~1.25m、底面は東端が同0.75m、西端で同0.5mを測り、西に向けて強い傾斜が形成されている。深さは、底面が高い位置にある東端では約0.3mであるが、中央部以西では0.5~0.6mを保つ。幅は2.4~2.5mで一定している。掘り方断面形は、保存状態の良い中央部断面(a断面)では二段掘りの連台形状であるが、それ以外の場所では碗状あるいは皿状を呈する。

埋土は四層に分層される。1~3層は砂質土で砂を含む点の特徴である。2・3層では砂はラミナ状の構造を示し下層に向けてその割合を高める。流水の影響を受けていると考えられる。それに対して最下層である4層は、暗灰色粘質土で砂を含まず粘土粒を多く含む点や、b断面付近から西に向けて底部が下降する部分にのみ堆積する点が上層とは異なる。4層が最下部を埋めた後、傾斜が緩やかになった状態で溝を埋めたのが2~3層と考えられる。3層下面は標高0.75m前後であり、西端で同0.65mへと下がる。1層は埋没後の流入土的性格をもつと考えられる。

出土遺物の量はコンテナ(28リ/箱)1箱程度である。吉備系土師器碗、土師器杯・皿を中心に土師器鍋・甕、瓦器碗、輸入陶磁器などを含むが、ほとんどが小〜細片である。その中で、溝の東端部で出土した吉備系土師器碗3点(図113-1~3)は、3/4以上が残る個体であり、意識的に入れられた可能性をもつ。その他に、緑色片岩の板石(同・S11)が出土している。なお、須恵器捏ね鉢片(図113-4)は上部遺構由来の混入品と考えら

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存	形態・手法	胎土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高	[=1:1.64測]			
1	土師器・碗	15.0	7.2	4.6~5.1	1/2或1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ(底)板目煎、重ね焼ね、内外面煤、被焼	陶砂	淡黄白~粉白
2	土師器・碗	—	6.8	—	1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内外面煤	陶砂	黄白~暗黄
3	土師器・皿	8.4	6.0	1.6	1/1	(内)外縁ナデ(底)籠キリ、煤、外面重ね焼ね、磨滅、底面穿孔	陶砂	淡黄白~暗灰
4	土師器・皿	8.1	6.0	1.2	3/4	(内)外縁ナデ(底)籠キリ; 左側縁・板目煎、底面穿孔	陶砂	淡黄白
5	瓦器・碗	—	—	—	—	(内)ナデ・籠ミガキ(外)オサエ	陶砂	灰・暗灰
6	瓦器・碗	—	1.8	—	1/2	(内)籠ミガキ	陶砂	灰・暗灰

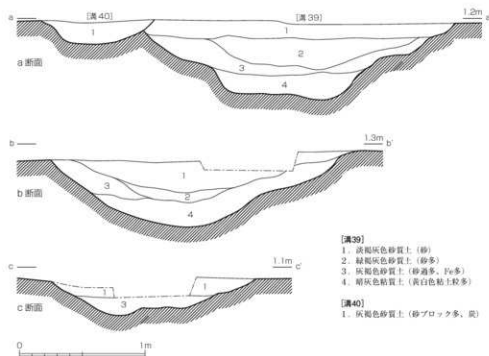
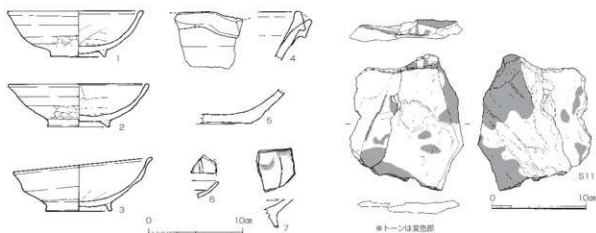


図112 溝39・40断面 (縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←:1/6未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面	
		口径	底径	器高					
1	土師器・碗	144	5.8	4.9	□3/4底1/2	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 外面僅、内外面重ね焼成	細砂	淡黄白/黄灰	
2	土師器・碗	149	6.6	4.4~4.8	□3/4底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 内外面重ね焼成、焼熟、内面僅	微砂	黄白	
3	土師器・碗	146	7.0	4.2~5.7	□3/4底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、磨減、内面重ね焼成、焼熟、赤み	微砂	黄白	
4	閉室器・段ね鉢	—	—	—	—	(内)柄ノコナデ、片口、僅	微砂	灰	
5	閉室器・段ね鉢	—	—	—	—	(内)ナデ(外)横ナデ(底)赤キリ、内外面滑落・僅	細砂	灰	
6	青磁・皿	—	—	—	—	内外面施釉、見込みに髷点模文	粗砂	灰(輪)緑灰	
7	白磁・碗	—	—	—	—	内外面施釉、高台彫筋、見込みに髷目文	粗砂	灰白(輪)淡緑灰	
S11	片岩板石	14.5	12.0	1.6	246.6	—	緑色片岩	混合資料、一部暗褐色に着色	特徴

図113 溝39出土遺物 (縮尺1/4)

れる。

本溝の埋没時期は、出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭、12世紀末頃と考えられる。

溝40 (図74・112、図版24・25)

調査区北東部、CE24地点付近で検出された。本溝は同地点で南に屈曲して姿を消す。西に向けてはCEラインに沿って約5m、南に向けては24ラインに沿って約1mが確認される。溝39の北端ライン上に重複し、さらに同溝を南北に横切る状態を呈する。両端部は攪乱等で消失する。

検出面は<4b層>である。上面は標高1.18m、底面は同1m、深さは0.18mを測る。幅は約0.9mで、掘り方断面は碗状を呈する。埋土は灰褐色の砂質土で砂ブロックを含む。

出土遺物は僅かであり、その量は13号ポリ袋1/8程度である。吉備系土師器碗を中心に土師器杯・皿、瓦器、須恵器碗、瓦などを含むが、いずれも小～細片である。その中には無高台碗の破片が含まれている。

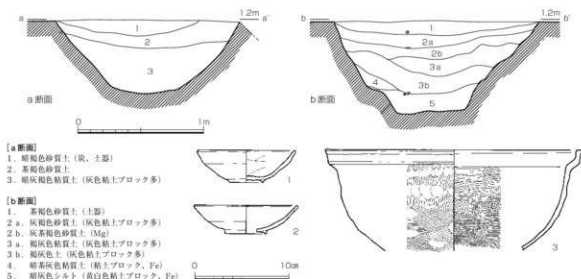
溝の時期は、出土遺物から鎌倉時代末、14世紀前半と考えられる。

溝41 (図74・114、図版25)

調査区北東部、CD・CE24区において、24ラインの西1.5～2mの位置を南北に走る。溝39上部を横切ると同時に、本溝上部には溝40が重複する。南北両端は調査区外あるいは攪乱で消失して確認できない。

検出面は<4b層>である。上面の高さは標高約1.2m程度で、底面は北端で同0.61m (a断面)、南側で同0.45m (b断面)を測る。南に向けて、5mの間で約0.15mの下降を示す。深さは北端で約0.6m、南側で約0.7m、幅は1.6～1.45mである。掘り方断面は逆台形を呈する。埋土は、a断面では1～3層、b断面では1～5層に分層され、各層は対応関係をもつ。1層は砂質土で炭や土器の細片が混入しており、埋没後の最終段階の凹みに溜まった流入土と判断される。2～5層は、粘土ブロックが多く確認される点で1層とは区別される。埋め戻し土と考えられる。粘性を強める3～5層のなかで4・5層はa断面の底面より低いb断面の下部に確認される。同層によって深い部分が埋まった後、3層以上が形成されたと考えられる。

遺物はコンテナ (28%箱) 1.5箱分が出土している。吉備系土師器碗 (図114-1・2)、土師器杯・皿が中心



番号	種類・器種	法層 (cm)			残存 (←1/6未満)	形状・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	10.4	3.5	3.4	□(←)底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面壁、外面垂石焼痕	細砂	黄灰
2	土師器・碗	11.0	4.4	3.0	1/2	(内)(外)ナデ、内外面垂石焼痕	細砂	淡黄白～黄白
3	瓦器・湯	27.6	—	—	1/2	(内)(外)ハケ目・オヤシ、内外面壁	細砂	暗褐～暗黒

図114 溝41断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

をなし、その他に瓦質鍋(同・3)・須恵器・瓦器・輸入陶磁器を数点含むが、いずれも小～細片である。残存の度合いは瓦質鍋で1/2程度、椀では1/3以下であり、意図的な様相は取返されにくい。古い時期の遺物も含むが、複数の溝の重複を考えると混入品と判断される。

本溝の時期は、出土遺物および溝の重複関係から、鎌倉時代後半、13世紀末～14世紀前半の可能性が高い。

溝42 (図74・115、図版25・47)

調査区北東部、CD・CE25区において、26ラインの東側に沿って南北方向に4mが検出された。北端は調査区外へ延びる。溝41の西側にはほぼ平行する。溝の中心間で6.5mの距離にあたる。溝39上に重複し一部を破壊する。

検出面は<4 b層>である。上面の高さは標高1.25～1.12m、底面は北端で同0.9m、南端で同0.8mを測り、南に向けて下降して収束する。溝の幅は1.3m、深さは0.3～0.45mで、南に向けて深くなる。掘り方断面は皿状を呈す。埋土は砂をラミナ状に含む灰褐色系の粘質土が全体を占める。上面には砂質土の堆積が薄く確認されるが、流入土と理解される。

遺物は吉備系土師器椀、土師器皿・鍋、須恵器、瓦器などの小～細片が13号ポリ袋1/8程度出土している。その中に砥石1点が含まれる(図115～S12)。

本溝の時期は、出土遺物あるいは遺構の重複関係から、鎌倉時代後半、13世紀末～14世紀前半の可能性が高い。

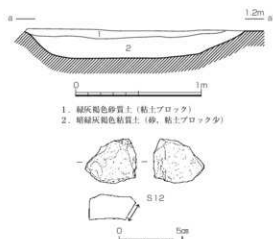


図115 溝42断面・出土遺物(縮尺1/30・1/3)

溝43 (図74・116、図版25・41・46)

調査区東南部、CK22～27区においてCKラインに沿って東西方向に走る。東端は22ライン付近で浅くなり姿を消す。西端は27ラインの西2m付近で擾乱による破壊を受ける。

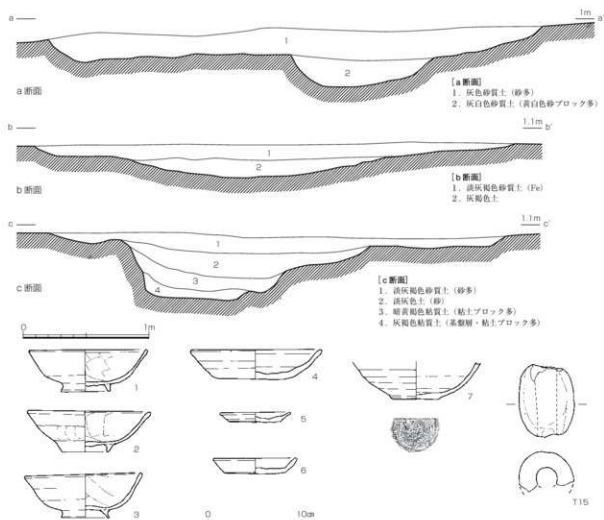
検出面は<4 b層>と考えられる。上面の高さは標高1.05～0.95mで東端部が上昇する。底面の高さは同0.7～0.5mであるが、中央部が同0.7mで高く東西両端に下降して西端が同0.5m、東端が同0.55mとなる。深さも、両端は0.5m程度を保つが、中央部では0.2mまで浅くなる状態が確認される。掘り方断面は二段の形状を示すが、深い部分では逆台形、浅い部分では皿状へと変化して安定しない。溝の幅は、上面では3.9～3.6mと広いが、溝形態をなす部分では幅1～2mとなる。

埋土は標高0.7m付近を境に上・下層に大別される。上層はa断面1層とそれに対応するb・c断面の1・2層、下層はa断面2層とそれに対応するc断面3・4層である(図116)。全体に灰色系の砂質土で、両端の深い部分では砂を多く含む傾向が認められる。上層であるb・c断面1層は厚さ0.1～0.2mで掘り方上段を埋めており、幅広い凹み部を埋める流入土の性格が想定される。下層は、東西両端の深い部分にのみ堆積する。粘土あるいは砂のブロックを含む土層であるが、東端部(a断面)では砂質が強く、西端部(c断面)では粘性を強める。こうした特徴から本溝は水路とは考えにくく、下層の溝状部分も不安定な形状であり評価は難しい。上層については、緩やかな地形の凹み状態にあったと考えられる。

遺物は13号ポリ袋1袋程度が出土している。吉備系土師器椀、土師器杯・皿を中心に土師器鍋・瓦器・須恵器・輸入陶磁器など多様な器種を含むが、ほとんどは小～細片で時期幅を有す。その中で吉備系土師器椀3点と土師

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	石材	用途
S12	砥石	3.5	4.0	2.0	29.8	—	流紋岩	磨練使用

調査の記録



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調: 内面/外面
		口径	口径	器高				
1	土師器・甕	125	5.3	4.4	1/1	(内) 工具ナデ(外) ナデ, 内外面重ね焼痕	微砂 赤色粒	淡橙白
2	土師器・甕	131	5.0	4.3	1/1	(内) 工具ナデ(外) オウエ・ナデ	微砂 礫	黄白
3	土師器・甕	126	5.0	4.0~5.0	1/1	(内) 工具ナデ(外) ナデ, 内面重ね焼痕, 赤み	微砂 赤色粒	淡橙白
4	土師器・杯	139	8.6	3.2	[1]/3底1/1	(底) 横ナデ(外) 左回転・重圧痕, 焼痕, 内面底面に積層痕	微砂 赤色粒	橙白
5	土師器・皿	7.4	5.7	1.6	1/2	(内) (外) 横ナデ(底) 底ナデ(外) 左回転, 焼痕	細砂	黄白
6	土師器・皿	8.8	6.3	1.6	1/1	(内) (外) 横ナデ(底) 底ナデ(外) 左回転, 内外面重ね焼痕, 器表薄く剥離	微砂 赤色粒	橙~黄白
7	土師器・甕	—	5.0	—	2/3	(内) (外) 横ナデ(底) 底ナデ(外) 右回転	微砂	灰

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	形態・手法施	胎土	色調
T15	土師	7.4	5.9	1.8	1961	1/3	ナデ, 孔径2.3cm	細砂 赤色粒	淡橙白

図116 溝43断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

器皿1点(図116-1~3・6)は完成品であり他とは区別される。その他に、大形の土師が1点(同-T15)含まれる。また、種類は不明であるが、哺乳類の白歯が1点出土している(第4章9)。

本溝の時期は、出土遺物の状態から鎌倉時代、13世紀中葉頃が考えられる。なお、14世紀初頭の小さな破片も一定量含まれているが、これらは上部のたむき部分に堆積する流入土に伴うものと判断され、同時期に完全に埋没したことを示す。

溝44 (図74・117)

調査区東南部、CK22~25区においてCLラインに沿って東西に走る。溝43の南側に隣接し、同溝との間隔は0.5m程度である。西端は後世の遺構や掘削で破壊される。東端は北側に小さく折れ曲がり取束する。

検出面は<4 b層>と判断される。上面の高さは標高1.05m、底面は同0.91m、深さは0.14mを測る。溝の傾斜は確認できない。溝の幅は0.45mであり小規模な溝である。掘り方断面は椀状を呈する。埋土は灰褐色土であるが、鉄分の沈着が顕著なため、その影響で橙色を強める。

遺物は吉備系土師器椀の高台や土師器皿・須恵器甕の小〜細片が数点出土するのみである。13世紀代の遺物の可能性が高いが時期の特定は難しい。本溝の時期は鎌倉時代の範疇で捉えておきたい。

溝45 (図75・118・119、図版26・41・46)

調査区中央の南側、CJ30・31区、CK・CL31〜35区に位置する。北端ラインはCKラインを走り、32ライン以東でやや方向を北に振る。東側に位置する溝43と同一ライン上となる。東端部は、溝46〜48との切り合いによって31ライン付近で姿を消す。西端部は、36ライン付近において中世後半の溝59 aで破壊される。

検出面は<4 b層>に対応し、上面の高さは標高1.05〜0.8mを測る。底面は西端部で標高0.15m、中央部〜東端部で同約0〜0.1mとなり、東に向けて緩やかに下降する傾向が認められる。深さは0.9〜1mである。掘り方断面は逆台形が本来の姿と考えられる。東端部(図118-c断面)では二段掘りの状態にも見えるが、これは上半部の崩れなどの影響が予想される。溝の幅は西側で5〜5.7m、東側では6.3mまで広がりを見せる。幅約5〜6m・深さ0.9mの大溝と評価される。

埋土は四層に分層されるが、全体に粘性が強い傾向をもち各層間に際立つ違いは認められない。1・2層は流入土の可能性が考えられる。下半の3・4層はシルトあるいは粘土となり、最下層の4層では黒色を強める状況から滞水状態にあったことが予想される。2・3層では鉄分の沈着が顕著である。

遺物はコンテナ(287L/箱)2箱程度の量が出土した。その内訳は、吉備系土師器椀と土師器杯・皿が1箱、土師器鍋・甕、備前焼すり鉢・壺、亀山焼・東播系鉢などの須恵器、輸入陶磁器などを合わせて1箱である。ただし、完形の土師器皿1点(図119-5)を除くと、出土量が多いが小〜細片で摩滅が進んでいるものが大半を占める。所属時期幅も広く、12世紀後半〜14世紀を示しており、本溝以前の古い遺物や埋没後の流入土に伴う遺物が

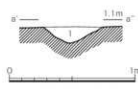


図117 溝44 (縮尺1/30)

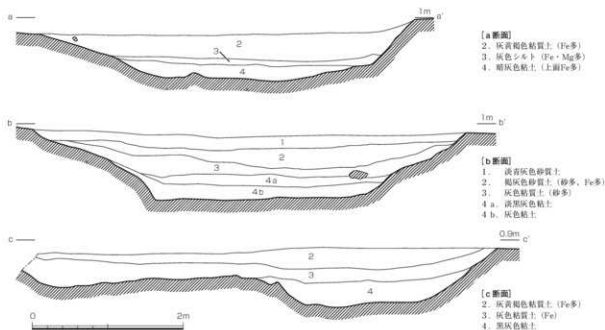
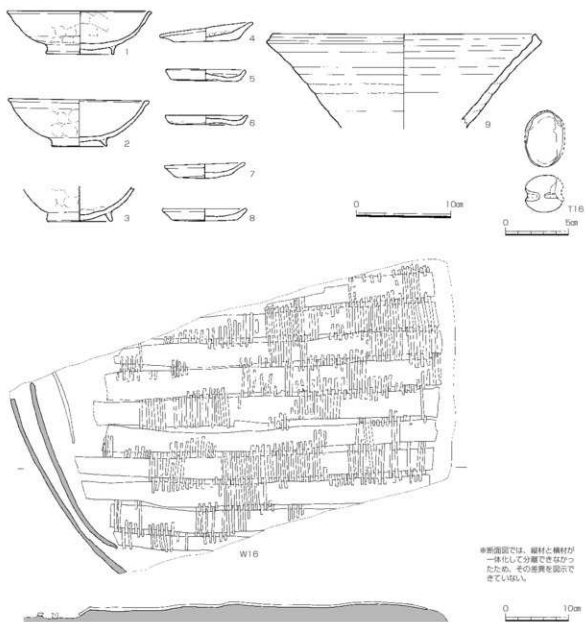


図118 溝45断面 (縮尺1/50)

調査の記録



*断面図では、素材と糊材が
一体化して分離できなかった
ため、その差異を指示で
きていない。

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法	胎土	色調: 内面/外面	
		口径	底径	器高					
1	土師器・碗	15.2	7.1	4.8	□11.3底1/1	(内) 工具ナデ(外) オサエ・ナデ、内面重ね焼痕、積熟、漆ム	微砂 輝	黄灰	
2	土師器・碗	14.9	5.9	5.1	□11.2底1/1	(内) 磨滅(外) オサエ・ナデ、内面重ね焼痕、内外面に煤	微砂	淡黄白・暗灰緑	
3	土師器・碗	—	6.8	—	1/1	(内) (外) 磨滅(底外) 高台貼付け後横ナデ、内面重ね焼痕	微砂	淡黄白・淡黄白	
4	土師器・皿	9.8	7.4	1.9	1/2	(内) (外) 横ナデ(底内) オサエ(底外) 匙キリ: 左回転・板目直、内外面煤、磨滅、漆漬	微砂	橙灰	
5	土師器・皿	8.4	7.3	1.3	1/1	(内) (外) 横ナデ(底外) 匙キリ: 左回転 上げ底、内外面煤	微砂	淡黄白	
6	土師器・皿	8.7	7.7	1.1	1/3	(内) (外) 横ナデ(底内) オサエ(底外) 匙キリ: 左回転・板目直、外面煤	微砂	黄白	
7	土師器・皿	8.5	6.0	1.5	□11-底1/1	(内) (外) 横ナデ(底外) 匙キリ: 左回転・板目直 外面煤	微砂	赤色粒 黄白~淡黄白	
8	土師器・皿	9	7	1.3	1/2	(内) (外) 横ナデ(底内) ナデ(底外) 匙キリ: 左回転・ナデ・板目直	微砂	黄白	
9	須恵器・沓ね鉢	27.6	—	—	1/4	(内) (外) 横ナデ、口縁部重ね焼痕	細砂 輝	灰~黒灰	
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	形態・手法	胎土	色調
T16	土師	4.4	3.0	2.9	45.5	5/6	ナデ、両側縁に漆	微砂	黄灰緑
番号	器種	法量 (cm)	器種	特徴					
W16	ギム	縦~底部: 長67cm 底部: 長54cm	素材: 針葉樹・樹皮 糊材: イネ科タケ葉粉 線・彫孔材	木取り	図は伏せられた状態、底部から屈曲して立ち上がり丸木材2本一組の縁に坐る。底部から立ち上りの本体部は、幅32~35cmの縦材10列に幅0.5cmの横材を隔み込む。				

図119 溝45出土遺物 (縮尺1/4・1/3・1/6)

含まれていることが窺われる。全般的に意図的に入れられた遺物とは考えにくい。土器以外では土錘1点(図119-T16)のほか、溝の底部に伏せられた状態で出土したザル(同-W16)があげられる。出土状況のまま取り上げて、現在は保存処理を施している(第4章7)。堆積土層の特徴から想定される一定量の水の溜水状態を勘案すると、こうした資料は漁撈に関連する可能性を考えることもできよう。溝の機能を考える上で注目される。また、イヌの上腕骨が出土したことも付け加えておきたい(第4章10)。

本溝の時期は、出土遺物から平安時代末頃に機能を消失し、その後、上部の凹み部が完全に埋没するのが鎌倉時代と理解される。また、詳細は後述するが、本溝の東端を破壊する形で南北の位置にある溝47と重複する位置の底面レベルを比較すると、本溝は標高0m前後で溝47は同-0.1mであり、本溝が東に下降することと矛盾しない。両溝の時期は異なるが、溝46~48の下部に古い溝の存在を仮定すると、本溝と共に土地区画の溝を想定することも可能であるが、情報が乏しいためここでは保留しておきたい。

溝46~48(図75・120~124、図版27~28・42)

調査区中央部、30ラインを南北方向(N10°E)に走る。北端は調査区外に延びる。南端は近世・近代の溝によって破壊される。周辺遺構との関係では、溝45の上部に本溝が重複し、逆に井戸10・溝59dが本溝上部に重複する。溝は3回にわたって構築されており(溝46~48)、各溝は連続的に重複関係を示す。調査にあたっては、各溝を平面的に分層して調査することは十分にできていないため、ここではその一部をまとめて報告する。

溝46: 溝47・48が上部に重複して本溝の大部分は破壊されているが、その位置関係から上部溝へと受け継がれた溝であることは明らかである。本溝の情報が得られるのはd断面付近のみである。

検出面は、溝47・48上面とは一層を挟んだ下部層にあたる。<5層>の可能性も残すが明確ではない。溝の時期や同溝群との関連性から<4 b層>対応として報告しておきたい。上面の高さは標高0.9m、底面は同0.15m、深さは0.75mを測る。幅は約4.9mが残っており規模の大きさを示す。掘り方断面は全体的には上方に大きく開く上部と逆台形に落ち込む下部で構成される。埋土を上層(1~3層)と下層(4・5層)に大別して説明しよう(d断面)。上層は砂質土であり3層に向けて褐色を強める。砂を多く含む傾向が強い。下層は灰色系の粘質土で5層は暗い色調に変化する。砂以外に際立つ包含物は確認されていない。各層間の類似性は高い。

溝47: 溝46の中央部に重複するが、溝48に東側の立ち上がり部分を破壊される。検出面は<4 b層>で、上面の高さは標高1.29~1.04mである。底面の高さは北端部で同0.05m(a断面位置)、南側(d断面位置)では-0.1mまで下降し、北から南に向けて傾斜する。深さは1.25m程度であり、本溝群の中で最も深い規模を有す。掘り方断面は、南側では逆台形を呈するが、北側に向けて底部は丸みを示し(a断面)。一部では底部近くに段を形成する部分(b断面)も生じている。溝の幅は、逆台形断面付近では2.2m、北側では3mを残すが、本来は北側で4.5m、南側で3.2m程度の規模が復元される。下層の溝46と同様に大形の溝形態が階襲されると同時に、その規模は深さの面で拡大している。

埋土は1~7層に分層しているが四群に大別される。全体的には灰褐色あるいは灰色を基調とした埋土である。砂質が強い1群(1層)・2群(2・3層)から下層に向けて粘性を強め、最下層の4群(5~7層)では粘土層となる。その間、砂の包含や鉄分の沈着の差はあるものの、特に際立つ層を抽出することはできない。全体に類似性が高い層群である。最上部にあたる1層は、本溝から溝48にかけて上部を覆っており、両溝埋没後に生じた凹み部分に流入した堆積土と理解される。ただし、c断面の1層では本溝上りのみの堆積が確認されており、他地点の1層より古い時期の堆積であった可能性が考えられる。

溝48: 溝47の東側肩の上に重複する。同溝との距離は中心間で約1.5mの距離を保つ。検出面は<4 b層>で、上面の高さは標高1.25~1.1mである。底面の高さは、北半が低くて標高0.4~0.49m前後に位置するのに対して、南側では同0.55mとなり一段高い状態を示す(d断面)。北から南に一貫して傾斜する溝47とは異なる。溝の深さは北側で0.8m、南側で0.55m、幅は前者で3.4m、後者で2.7mを測る。掘り方断面は逆台形を呈し、底面の幅

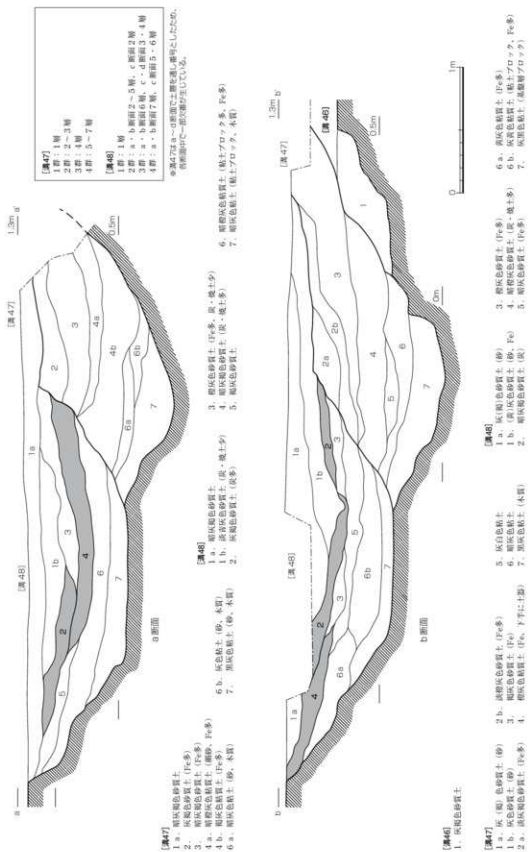


図120 溝46～48断面1 (縮尺1/30)

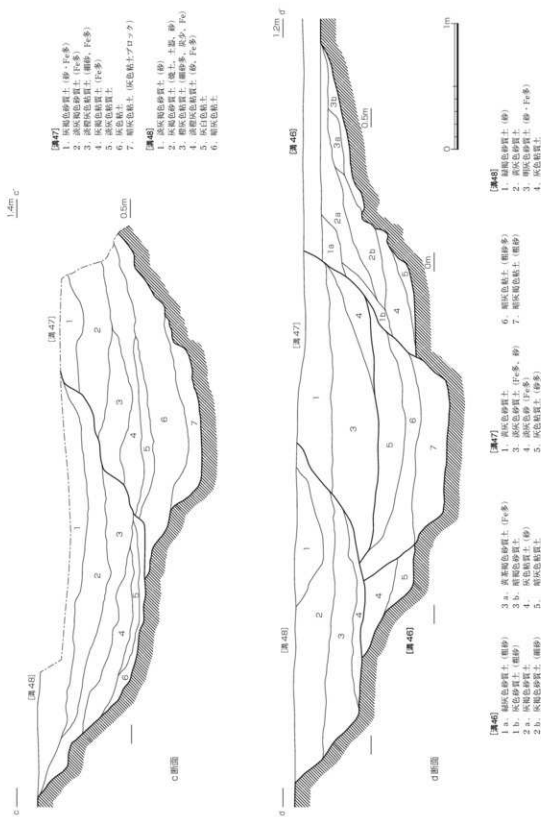
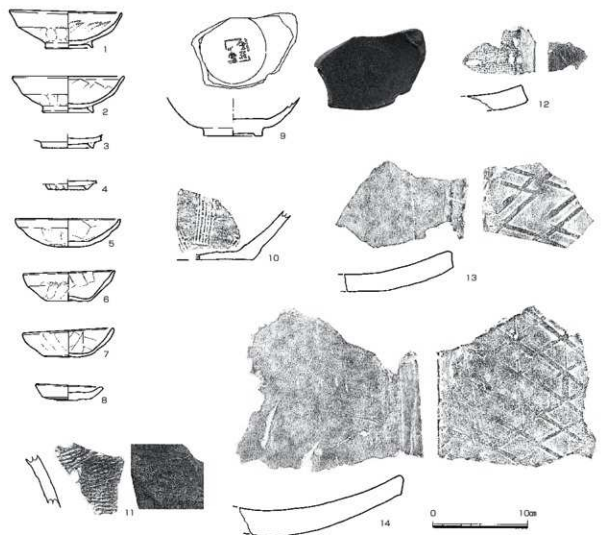


図121 溝46～48断面2 (縮尺1/30)



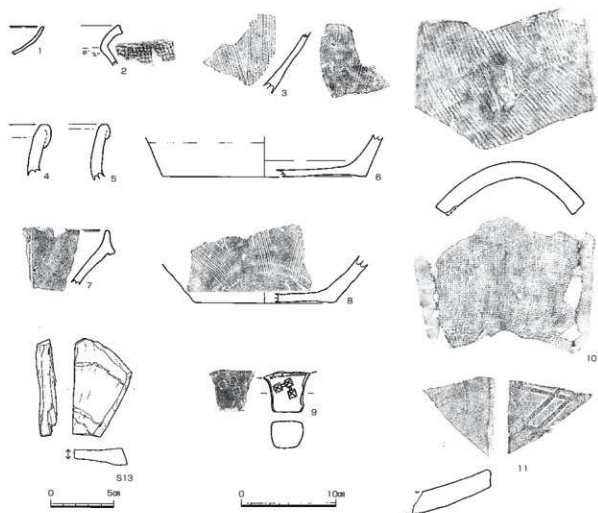
番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形状・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	11.9	5.0	3.6~4.9	1/2	(内)工具ナデ(底外)底ホリ・板目肌、内外面茶ね焼肌、内面煤、外面施物織織肌	陶砂	黄白~黄緑
2	土師器・碗	11.8	3.9	5.4	[口~]底[1]	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面煤・茶ね焼肌、底外面施物織織肌	陶砂	黄白
3	土師器・碗	—	3.3	—	1/1	(内)ナデ(底外)ナデ、内面茶ね焼肌・煤	陶砂	黄灰・黄白
4	土師器・碗	—	4.3	—	1/1	(内)ナデ(底外)板目肌、磨成	陶砂	黄白
5	土師器・碗	11.1	4.6	3.0	1/3	(内)外)工具ナデ(底外)オサエ、底面亀裂	陶砂	黄灰
6	土師器・碗	9.7	4.8	2.9~3.3	1/1	(内)工具ナデ(外)ハケ目・ナデ(底外)オサエ・ナデ、茶ね焼肌	陶砂	淡黄白
7	土師器・碗	9.7	5.0	2.8	1/2	(内)外)工具ナデ(底外)オサエ・ナデ、内外面煤	陶砂	黄灰
8	土師器・碗	7.2	3.5	1.4~1.8	1/2	(内)外)横ナデ(底外)底ホリ、外面焼熱	陶砂	黄灰・灰緑
9	青磁・碗	—	6.2	—	1/1	内外面施物 高台内露筋、見込みに文字印彫「金玉堂」、貫入あり	磁磁	灰(輪)緑灰
10	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)横ナデ(外)ナデ(底内)オサエ、6条1面の脚目、内面磨成	陶砂	灰~赤灰面/赤灰
11	須恵器・葉	—	—	—	—	(内)底ナデ(外)格子目印8、外面に格子目印	陶砂	灰

番号	種類・器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	残存 (—:1/6未満)	形状・手法他	胎土	色調:内面/外面
13	須恵質・平瓦	9.0	11.5	2.0	—	(内)格子目明き(外)板目肌、軟質	陶砂	灰
14	須恵質・平瓦	17.0	17.3	2.7	—	(内)格子目明き(外)板目肌、軟質	陶砂	黄白~灰白/灰白

図122 溝47出土遺物1 (縮尺1/4)

は1 m前後である。溝47の形態の特徴は踏襲されているが、底面は0.5~0.6m高くなっており、溝46に近い形状である。

埋土は四群に大別される。各断面の土層番号の対応関係は、a断面とb断面(以下北半とする)、そしてc断面とd断面(以下、南半とする)がそれぞれ対応する。1群(1層)は全体を通じて堆積するが、溝47の上部埋土



番号	種類・器種	寸法 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	—	—	—	—	(外)オサエ、磨減	微砂	黄白
2	須恵器・甕	—	—	—	—	(内)ハケ目(外)オサエ・胴部格子目叩き、内外面剥落、亀山焼	細砂 礫	灰白~橙灰
3	須恵器・すり鉢	—	—	—	—	(内)ナデ(外)オサエ・ハケ目・ナデ、10筋程の跡目、軟質、亀山焼	細砂	黒灰/橙灰
4	埴曲焼・壺	—	—	—	—	(内)ノ(外)横ナデ、自然釉(白~黒)	微砂	黒赤灰/黒赤釉
5	埴曲焼・壺	—	—	—	—	(内)ノ(外)横ナデ、自然釉(緑灰~白)	微砂	灰
6	埴曲焼・甕	—	21.6	1/4	—	(外)上長ナデ(底)ナデ、内外面自然釉(白~黒)	微砂	赤黒
7	埴曲焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)ノ(外)横ナデ、重ね焼成	細砂 礫	黒赤釉
8	埴曲焼・すり鉢	—	15.0	1/4	—	(内)ノ(外)横ナデ(底)オサエ・ナデ、11筋1組の跡目、底部自然釉(白)	細砂	橙灰~黒赤釉
9	瓦葺・火鉢脚	—	—	—	—	類円・楕円、接合面に刻み	微砂	黒灰

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	残存 (—:1/6未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
11	須恵器・平瓦	8.0	8.4	2.2	—	(内)格子目叩き(外)布目直、軟質	細砂	赤色粒

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	石材	特徴
SI3	砥石	7.8	4.8	1.5	61.8	—	流紋岩	磨面1面のみ使用

図123 溝48出土遺物(縮尺1/4・1/3)

と分離が困難な部分が多く、両溝埋没後の凹み部分に堆積した流入土と理解される。2群は、北半(2~5層)では炭化物や焼土を含む点で他の層とは異なる。一方、南半(c断面2層)では砂を多く含む。炭は確認されない。2群が明瞭に堆積する北半において加熱行為が想定される。1・2群は砂質が強いが、3群以下は粘性を強める。3群(北半:6層、南半:3・4層)は粘土ブロックを含む粘質土を基本とするが、南端のd断面3層では砂を多く含む砂質を強め、底面に鉄分の沈着が顕著である。4群(北半:7層、南半:c断面5・6層)は灰

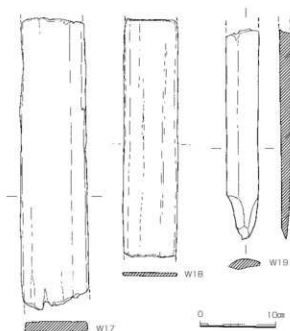
色系の粘土で、北に向けて粘土ブロックを含む。ただし、南側のd断面では堆積が確認されない。一段低い北平にのみ4群が形成されているためである。

溝46～48の出土遺物と溝の時期 (図122～124)：出土遺物の量はコンテナ (28%箱) 2.5箱程度である。吉備系土師器碗、土師器杯・皿・鍋・甕、中須恵器類、備前焼、輸入陶磁器、瓦など多器種が含まれるが小～細片がほとんどであり、鎌倉時代後半～末の時期に収まる。各溝の出土量の内訳は、溝47と溝48が各1箱、溝46を含む複数溝の量が0.5箱である。その他に、溝48から砥石が1点 (図123)、溝47から木製品が3点 (図124) が出土している。また、哺乳類動物の骨片が1点確認される (第4章10)。

植物圧痕が吉備系土師器碗2点 (図122-1・2) と須恵器瓦1点 (同-11) に確認される。前者は植物繊維痕であり、後者は種子圧痕である。また、溝47・48では瓦の出土比率が高い点も指摘しておきたい。

各溝の時期は、溝46については明確な共存遺物を特定できないため時期の決定は難しいが、溝の重複関係から、鎌倉時代後半でも古い段階としておきたい。また、溝47・48出土の吉備系土師器碗は、13世紀後半 (図122-1～3) と14世紀初頭～中葉 (同-4～7、図123-1) が認められ、溝47は13世紀後半～14世紀前半、溝48は14世紀代の遺物が中心をなす。一部の混入も考慮すると、溝47は13世紀後半～14世紀初頭、溝48は14世紀前半に時期が求められる。

本溝群の時期は鎌倉時代後半～末で、13世紀後半には形成され14世紀前半まで、少なくとも2回にわたって改修され利用されたのち、14世紀中頃には完全に埋没して放棄されたと考えられる。



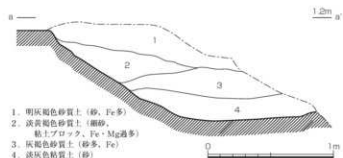
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	樹種	本取り	特徴
W17	板目	35.7	8.8	1.5	セゾク	溝材	両端欠損
W18	板目	31.6	7.2	0.5	スギ	板目	両端欠損
W19	瓦	29.0	4.5	1.4	文字	板目	上端と片面欠損

図124 溝47出土遺物2 (縮尺1/5)

溝49 (図74・125～127、図版41・43・44)

調査区南東端部、CM20～27区においてCMラインに沿って東西に走る。方向はN78°Eである。上部を溝50あるいは中世後半の溝59cで破壊され、南半部のごく一部が残存するのみである。

検出面は<4 b層>に対応し、上面は標高1.2～1mに位置する。最も破壊が少ない東部 (a断面) では、底面は標高0.6～0.4m、深さは0.75m、幅は2.15mを残しており、本来は3m以上の幅が復元される。掘り方断面形は逆台形が予想される。



1. 明灰色砂質土 (砂、Fe多)
2. 淡黄褐色砂質土 (細砂、粘土ブロック、Fe・Mg過多)
3. 灰褐色砂質土 (砂多、Fe)
4. 淡灰色粘質土 (砂)

図125 溝49断面 (縮尺1/30)

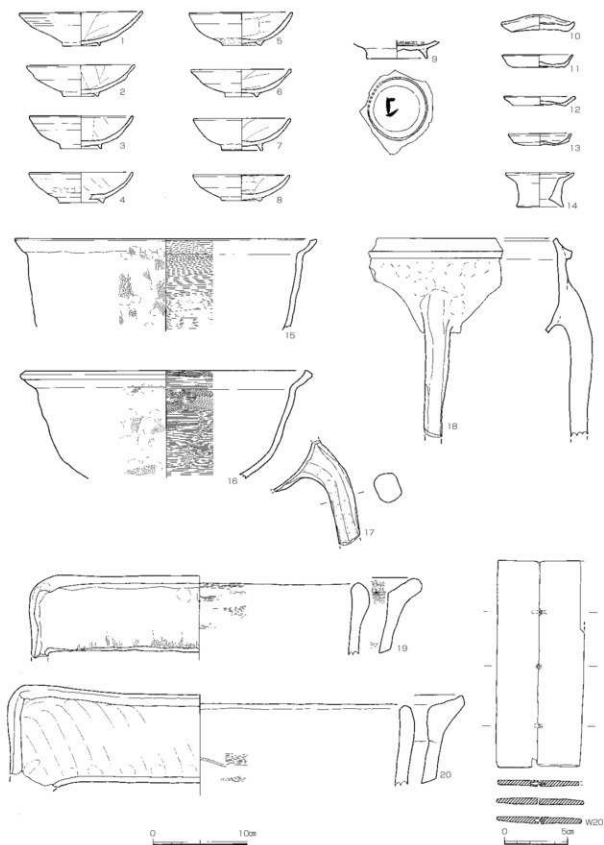


図126 溝49出土遺物1 (縮尺1/4・1/3)

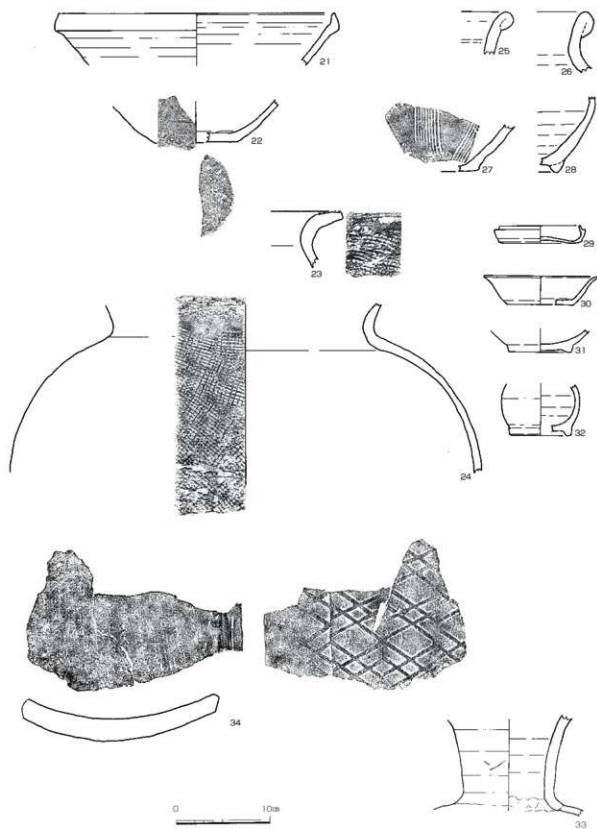


図127 溝49出土遺物2 (縮尺1/4)

溝49 (図126・127) 出土遺物観察表

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (=1:6未測)	形態・手法他	胎土	色調・内面/外面
		口徑	底径	器高				
1	土師器・碗	13	40	36	E1/3残1/4	(内)工具ナデ(外)ナデ、内外面重ね焼痕	陶砂 産	黄白-淡緑白
2	土師器・碗	11.4	38	33	E1(-)残1/4	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、内面焼	陶砂	黄白
3	土師器・碗	11	44	31-36	E1/4残1/4	(内)工具ナデ(外)ナデ(底外)板目煎、内外面重ね焼痕	陶砂	黄白
4	土師器・碗	11	28	32	1/4	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ、外面重ね焼痕、口縁部焼	陶砂	黄白
5	土師器・碗	10.9	42	35	E1/2残3/4	(内)工具ナデ(外)ナデ(底外)板目煎、外直重ね焼痕	陶砂	黄白
6	土師器・碗	10.6	34	29	E1(-)残2/3	(内)工具ナデ(外)ナデ	陶砂	黄白
7	土師器・碗	10.2	44	34	E1/5残1/4	(内)工具ナデ(外)ナデ	陶砂 産	淡黄白
8	土師器・碗	10.2	42	27.5	E1(-)残1/4	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面重ね焼痕、高台跡	陶砂	黄白
9	土師器・碗	—	65	—	1/1	(内)ナデ・瓦ミガキ、高台内に墨書「上」、重ね焼痕	陶砂	黄白
10	土師器・皿	7.7	6.0	10-15	1/1	(底外)篋ナデ・左回転、口縁部焼、内面底面に種子圧痕	陶砂 赤色粒	黄灰
11	土師器・皿	7.9	5.4	1.4	1/2	(内)(外)横ナデ(底外)篋ナデ・右回転、内外面重ね焼痕	陶砂	淡黄白-灰
12	土師器・皿	7.4	5.6	1.0	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篋ナデ・左回転・板目煎、全面焼痕	陶砂	黄灰
13	土師器・皿	6.6	6.0	1.3	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篋ナデ・左回転、割線	陶砂	産
14	土師器・聯合	7.2	5.0	3.6	E1/6残1/4	(内)ナデ(外)横ナデ(底外)篋ナデ	陶砂	産
15	土師器・蓋	32.0	—	—	1/3	(内)籠ハケ目煎・割(外)籠ハケ目(煎)、内外面焼	陶砂	産
16	土師器・蓋	31.0	—	—	1/4	(内)ハケ目(煎・割)(外)ハケ目(煎)・オサエ、内外面焼	陶砂 赤色粒	黄灰-暗褐
17	土師器・蓋	—	—	—	—	(内)(外)ハケ目(脚部)オサエ・ナデ、内外面焼	陶砂	黄灰
18	瓦質・皿	—	—	—	—	(内)横ナデ(外)オサエ・ナデ(脚部)オサエ・ナデ、内外面焼	陶砂	黒灰
19	土師器・壺	—	—	—	—	(内)ハケ目・ナデ(外)ハケ目、内外面焼、葉口片	陶砂 雲母	暗緑黄/黒灰
20	土師器・壺	—	—	—	—	(内)ハケ目・ナデ(外)ナデ、内外面焼、葉口片	陶砂	産
21	須恵器・付丸鉢	30.2	—	—	1/4	(内)(外)横ナデ、口縁部に重ね焼痕、内面焼、葉口片	陶砂	灰
22	須恵器・付丸鉢	—	8.6	—	1/3	(内)(外)横ナデ(底外)篋ナデ・内面焼、外面底面足守	陶砂	灰
23	須恵器・壺	—	—	—	—	(内)ハケ目・横ナデ(外)横ナデ(外)ハケ目(煎)、内外面焼、割線、亀山焼	陶砂 産	黄灰
24	須恵器・壺	—	—	—	—	(外)横ナデ(外)横ナデ(外)ハケ目(煎)、内外面焼、割線、亀山焼	陶砂	灰-黄灰
25	須恵器・壺	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、口縁部重ね焼痕	陶砂	灰
26	須恵器・壺	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、唇部淡状自然釉(白)	陶砂	暗紫灰
27	須恵器・すり鉢	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ(底外)ナデ、9条1組の跡目、外面焼	陶砂	暗赤黄/暗褐
28	須恵器・壺	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ(底外)ナデ、内面淡状自然釉(白)	陶砂	灰-暗灰/赤灰
29	青白磁・合子	8.6	8.8	1.9	1/4	(外)篋ナデ・内面施釉・外面露胎、底面中流、唇部下縁に段	磁砂	白(釉)淡青緑
30	白磁・皿	12	7	3	1/3	内外面施釉・口縁を、釉い貫入、足跡み付着	磁砂	淡灰白(釉)白
31	白磁・壺	—	6.6	—	1/2	内外面施釉・高台跡	磁砂	黄白(釉)淡緑灰
32	白磁・壺	—	6.6	—	1/3	外面施釉・内面露胎、高台施部露胎・目砂付着	磁砂	淡灰(白(釉)淡緑灰)
33	須恵器・壺	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、内外面淡状自然釉(白)、唇部露胎	陶砂	灰

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	残存 (=1:6未測)	形態・手法他	胎土	色調・内面/外面
34	須恵質・平瓦	15.8	20.7	2.3	—	(内)格子目印(外)布目煎、軟質	陶砂	灰

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	網橋	本取目	特 徴
W20	板状木製品	16.6	7.0	0.6	スズ	板目	薄板2枚を本釘でつなぐ、両面の2箇所に本釘残存、合わせ目中央に約0.3cmの穿孔

埋土は四層に分層される。最下部の4層は粘性を強める点で砂質の強い上層とはやや異なるが、砂を含む点で共通する。上層に向けて鉄分の沈着が顕著であるが、全体的には類似性の高い堆積が指摘される。

出土遺物の量はコンテナ (28ℓ/箱) 5箱分である。内訳は、吉備系土師器碗と土師器皿を中心に輸入陶磁器碗・皿・合子などの小形器種、土師器壺、そして土師器鍋と瓦質羽釜類が各1箱、備前焼・亀山焼等の須恵器が2箱である。輸入陶磁器の器種の豊かさ、あるいは大形の器種の割合とその残存率の高さが特徴的である。

土師器皿(図126-10)には内面底面に種子圧痕が1箇所確認される。また、溝の時期とは異なる12世紀代の吉備系土師器碗(同-9)では高台内に墨書が確認される。判読は困難であるが「上」に似た文字が読み取れる。平安時代前期に遡る可能性のある須恵器壺(図127-33)にも頸部外面に記号状の線刻が残る。

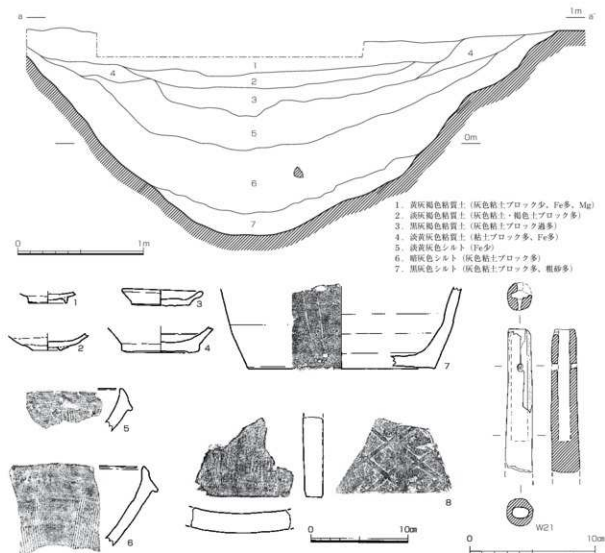
土器以外に木製品1点と獣骨が出土している。木器は2枚の板を木釘で留めた製品であるが、機能は不明である(図126-W20)。また、獣骨は可能性を含めウシは計3点、ウマ1点(検骨)が確認される(第4章9)。

本溝の時期は、出土遺物から鎌倉時代後半～末、13世紀末～14世紀前半と判断される。同時期は前述した溝46～48の時期と重複している。同溝群との結合部分は後世の溝59c・dによる破壊で確認することはできないが、両者の位置関係から本溝は溝46～48の南端部につながる東西溝と位置付けられる。特に溝48とは底面レベルが共通しており、同一溝にあたる可能性が高い。また、東に向けては第14次調査地点の溝16につながる位置となるが、同溝の底面レベルは標高-0.05～-0.18mであり、本溝とは一致しない。数値が合致するのは、溝47である。よって、第14次調査地点で本溝に対応する溝は同地点溝16の上部割部分に含まれ、消失したと理解される。溝46～48との関係や後世の溝への連続性などから土地を区画する重要な溝であると評価される。

溝50 (図74・128、図版29)

調査区南東コーナー、CL・CM20区において20ラインに沿って検出された。南に向けては調査区外に延びるが、溝の北端は調査区南端から約6mで取東する。北半部は後世の溝で上部を破壊される。

検出面は<4b層>に対応する。上面は標高0.9m、底面は同-0.7mを測り、深さは1.6mにおよぶ。溝の幅は4.2mを残すが、本来は約4.4mが復元される。大規模で深い溝である。掘り方断面は椀状で底部は丸みを有する。



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←1/6未満)	形態・手法他	粘土	色調:内面/外面
		口径	口径	器高				
1	土師器・椀	—	4.0	—	1/1	(内)工員ナデ	陶砂	黄白
2	土師器・椀	—	3.0	—	1/1	(内)1段ナデ	陶砂	黄白
3	土師器・皿	8.3	6.0	1.7	1/3.4底1/1	(内)外:横ナデ(底)蓋キリ;左回転・板目直, 内外面並ね焼成	陶砂 赤色粒	黄白-一般
4	白磁・甕	—	8.0	—	2/3	(内)外:地ケズリ, 内面施釉, 貫入あり, 外面磨粒, 見込みに沈積	粘粒	黄白(粘)黄
5	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)外:横ナデ, 5割1厘の跡目	陶砂	赤褐
6	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)外:横ナデ, 10割1厘の跡目, 片口跡, 外面焼	陶砂	暗赤褐
7	備前焼・壺	—	19.2	—	1/4	(底)ナデ, 内面底面自然釉(灰), 外面陶屑・刺突痕	陶砂	黒・暗赤褐-一般
8	銅土器・平瓦	7.5	10.2	2.0	—	(内)格子目印キ(外)赤目直	粘土	色調:内面/外面 陶砂 灰白
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	銅質	木取り	特 徴	
W21	筒状木製品	11.4	2.0	2.1	アモマツ	瓦本	フケット状の穴(深3.9cm・径1.4×1.0cm)の傾面に穿孔(径0.6-0.3cm), フケット内に黒色付着物	

図128 溝50断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4・1/3)

埋土の上半は灰褐色系の色調を示す粘質土、下半は灰色系のシルトである。七層に分層されるが、2～7層は粘土ブロックを多く含み高い類似性を示す。廃棄時の埋め戻し土と考えられる。ただし、最下層の7層には粗砂も多く含まれていることから、使用時の流水の影響を想起させる。一方、1層には粘土ブロックは少なく、流入土の可能性が考えられる。また、掘り方の西側斜面において、ウシの下顎骨が出土した。比較的良好な保存状態を保っており、意図的な行為に伴う可能性が指摘される。

出土遺物の量は13号ポリ袋1/2袋程度である。吉備系土師器碗、土師器皿・鍋、瓦貫羽釜、備前焼、須恵器、瓦などを含むが、いずれも小～細片である。埋め戻し土に混入した遺物と考えられる。その他に木器が1点出土している。頭部にソケット状の加工がなされており、本来はその部分に鉄器が差し込まれ、釘で固定された可能性が考えられる。何らかの柄の部分であろうか。獣骨は、前述したウシの資料を含めて6点（ウシ3点、ウマ1点、不明2点）が確認される（第4章9）。ウシ3点は、下顎骨のほか2点は下顎第3臼歯であり、一連の資料と捉えられるかもしれない。ウマの資料は脛骨である。

本溝の時期は、出土遺物から鎌倉時代末、14世紀前半～中頃と考えられる。本溝の西側に検出される溝49とは直交する位置関係を示すが、切り合いを確認することはできない。出土遺物の時期が重複しており、少なくともある時期における同時性を考えることは可能であろう。

溝51（図75・129）

調査区中央部北寄り、CE～CH29区において南北方向（N10°E）に走る溝である。30ライン上に位置する溝48の東側に沿って検出された。同溝によって西側の肩部が破壊される。北端は調査区外へ延びるが、南端はCHラインから南に2m付近において攪乱で破壊される。それより南でも検出はされない。

検出面は<4b層>である。上面は標高1.15m、底面は同0.85m、深さは0.3mを測る。幅は1.9mを残すが、本来は2.1m程度が復元される。掘り方断面は皿状である。埋土は灰褐色系の色調で砂質の強い土層である。鉄分の沈着と砂の包含が認められるが、最下層は特に顕著である。土層はいずれも類似性が高い。

出土遺物は極めて少量であり、小～細片約50片を数える程度である。吉備系土師器碗30片のほかは、土師器皿・鍋・甕、須恵器碗などが数点含まれるが、いずれも埋め土の混入遺物と判断される。

本溝の時期は、出土遺物および溝46～48との重複関係から、平安時代末～鎌倉時代前半のなかで捉えられる。

溝52（図75・130）

調査区中央部北寄り、CF28区において東西方向を示す。溝51の東側から約1m離れた地点から東に向けて約3mを検出した。それより東側については、大規模な攪乱内となり確認できない。溝51とは直交する方向を示す。

検出面は<4b層>である。上面は標高1.3m前後、底面は同1.1m、深さは0.15mを測る。幅は0.82mであり、比較的小規模な溝である。掘り方断面は碗状を呈する。埋土は灰褐色の砂質土で包含物は認められない。

出土遺物は極めて少量で小～細片の吉備系土師器碗・土師器鍋片5片のみである。碗の高台から13世紀代の可能性がある。

本溝の時期は鎌倉時代と考えられる。

溝53（図75・131、図版29）

調査区中央部北寄り、CE～CG32～33区において33ライン上に南北に走る。北側は調査区外へ延びるが、南端部はCGラインの南約2m付近

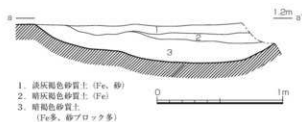


図129 溝51断面（縮尺1/30）

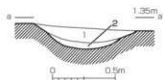


図130 溝52断面（縮尺1/30）

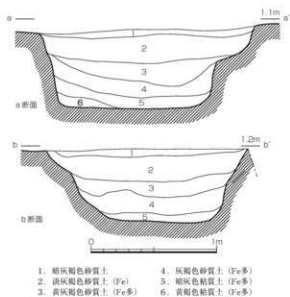
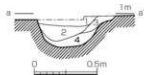


図131 溝53断面 (縮尺1/30)



1. 淡灰色砂質土 (クサレ層多, 砂)
2. 淡灰色砂質土 (Fe多, 砂・粘土ブロック)
3. 淡黄褐色砂質土 (粘土ブロック, 砂, Fe)
4. 暗灰色粘質土 (粘土ブロック, 上部Fe多)

図132 溝54断面 (縮尺1/30)

で収束しており、調査区内で約10mの長さが確認された。南端部には墓1と同2が重複する。

検出面は<4 b層>で、上面は標高1.15～1mを測る。底面は北端で同0.4m、南端は同0.6mであり、北に向けて傾斜する。深さは約0.6m前後、幅は1.6～1.7mである。掘り方断面は箱形に近い逆台形を呈する。埋土は六層に分層したが、いずれも灰褐色砂質土を基本にする類似性の高い土層である。鉄分の沈着も多い。

出土遺物の量は少量で11号ポリ袋1袋程度である。吉備系土師器椀、土師器杯・皿・甕、須恵器、輸入陶磁器などの小～細片が含まれる。いずれも埋め土に伴う混入と理解される。

本溝の時期は、出土遺物および重複する墓1・2との関係から、鎌倉時代の範疇で捉えておきたい。

本溝と重複する墓1との配置を改めて確認すると、溝の南端部に同墓が本溝と幅を同じくする状態で構築されている。また、出土遺物が乏しいため詳細な時期は決めたいが、両者間には相前後するような連続的時期が想定されることから、何らかの関連を有する可能性が考えられる。本調査地点の周辺では、第3次調査地点でも、屋敷地端部を区切る溝内に墓が検出されている。本溝と墓1の関係はこうした例に共通する点で注意しておきたい。

溝54 (図75・132, 図版29)

調査区北西部、CD～CF38区において南北方向に走る。北に向けては調査区外へ延びることが予想される。南に向けてはCFラインから南約3m付近までを検出した。南端部は側溝で消失する。長さは約12mである。

検出面は<4 b層>である。上面は標高約1～0.86mを測り、幅は0.65m前後である。底面は北端で同0.74m、南端は同0.67mで、南に向けて傾斜する。深さは中央部で0.25mを残す。掘り方断面は椀状を呈する。埋土は下層に向けて灰色を強める。四層に分層しているが全体に粘土ブロックを包含し、1層以外は鉄分の沈着が多い。いずれも類似性の高い土層で、溝の廃棄に伴う埋め土を構成する。

遺物は出土していないため、本溝の時期は不明であるが、検出層位から鎌倉時代と考えられる。

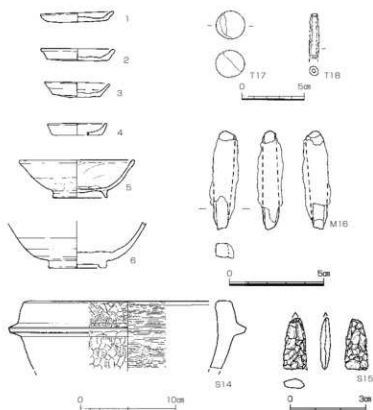
e. ビット群

<4 b層>で検出された柱穴は<4 a層>との分離が明瞭でない部分もあり、正確な数値はあげられない。ただし、その分布域を、調査区北東部に当たるCEライン付近以北の20～23ラインの範囲、そして、調査区中央部の北半にあるCGライン以北で30～39ラインの範囲の2箇所に求めることは可能である。それ以外では、極めて少ない状態が看取される。建物にまともなものは抽出できないが、溝に区切られた空間において井戸の分布域と重複していることから、屋敷地の建物を構成したものを含んでいることは明らかであろう。

大半のビットでは遺物はほとんど出土しない。出土した場合も小～細片であり埋土の混入遺物と評価される。その中で、P1～4 (図74・75)では1/2以上を残す土師器が出土した。P1とP2では土師器皿が各1点 (図

133-1・2)、P3では皿2点である(同-3・4)。P4では吉備系土師器碗に青磁碗が加わる(同-5・6)。こうした状況から、皿あるいは碗が意識的に入れられた可能性が高い。鎌倉時代を中心に、屋敷地を形成する建物が、長期間にわたって存在したことを窺わせる。

それ以外に注目される遺物としては、比較的大形の滑石製石鍋(同-S14、図版46)、土錘・土玉・鉄釘、そして石鎌があげられる(同-T17・18、M16、S15)。特に石鍋は中世における流通あるいは鹿田遺跡の評価を考える上でも重要であろう。ただし、これらの石製品・土製品・鉄器の時期は、ピットが<4 a層>に属する可能性も残すため確定できない。石鎌は弥生時代後期に遡ると考えられる。



番号	遺構	地区	種類・器種	法尺 (cm)			残存	形態・手法施	胎土	色調	
				口径	底径	器高	(←1/6未満)			内面・外面	
1	P1	CG34	土師器・皿	7.5	6.4	1.0	1/1	(内)外縁ナデ(底)寛キリ; 左回転	磁砂 赤色粒	黄白-橙白	
2	P2	CD34	土師器・皿	7.8	6.6	1.3	3/6	(内)外縁ナデ(底)寛キリ; 左回転, 縦熟	磁砂 赤色粒	暗灰陶	
3	P3	CD22	土師器・皿	6.9	5.0	1.6	3/4	(内)外縁ナデ(底)寛キリ; 左回転, 口縁部敷熟・油煙	磁砂	橙白-黄灰	
4	P3	CD22	土師器・皿	6.3	5.4	1.2	1/2	(内)外縁ナデ(底)寛キリ	磁砂	橙陶	
5	P4	CF35	土師器・碗	12.2	5.7	4.0	口1/2底1/1	(内)工具ナデ(外)オサエ・ナデ, 口縁部敷熟	磁砂 赤色粒	淡黄白-灰陶	
6	P4	CF35	青磁・碗	—	6.0	—	1/1	内外面施釉, 高台内面敷熟, 貫入, 輪は白陶	粗磁	灰(輪)緑灰	
番号	遺構	地区	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	形態・手法施	胎土	色調
T17	P5	CE33	土玉	22	23	—	103	1/1	ナデ	磁砂	黄灰
T18	P6	CF35	土錘	4.5	1.1	1.2	1.8	一部欠損	ナデ, 縦熟	磁砂	暗灰陶
番号	遺構	地区	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	特徴		
M16	P7	CE35	鉄釘・釘	5.2	1.5	1.2	16.2	—	断面方形		
番号	遺構	地区	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	石種	特徴	
S14	P8	CE33	石鍋	口径21.4	—	—	383.7	131/6	滑石	(内)横方向の研削痕(外)面取り加工(口)研削痕, 外面僅	
S15	P9	CE35	石鎌	20	0.9	0.4	0.6	一部欠損	ヤスカイ	先端及び一方の基部欠損	

図133 ピット出土遺物 (縮尺1/4・1/3・1/2・2/3)

第4節 中世後半の遺構・遺物

室町時代に対応する<4 a層>に属する遺構は、井戸4基・土坑2基・溝8条と柱穴である(図134)。

本時期には大形の溝による東西・南北の大区画が想定される。幅5m以上、深さ1.5mの大形溝による区画の中には、それらをL字状あるいはT字状の配置となる溝が確認される。これらは敷地を区切るものと考えられる。こうした溝は大区画を構成する溝に比べると幅1~2m、深さ0.3~0.5m程度と規模は小さい。これらの遺構の

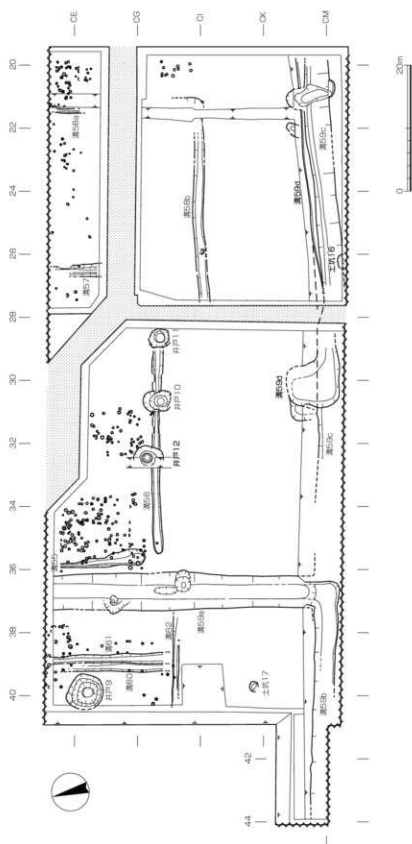


図134 室町時代遺構全体図 (縮尺1/600)

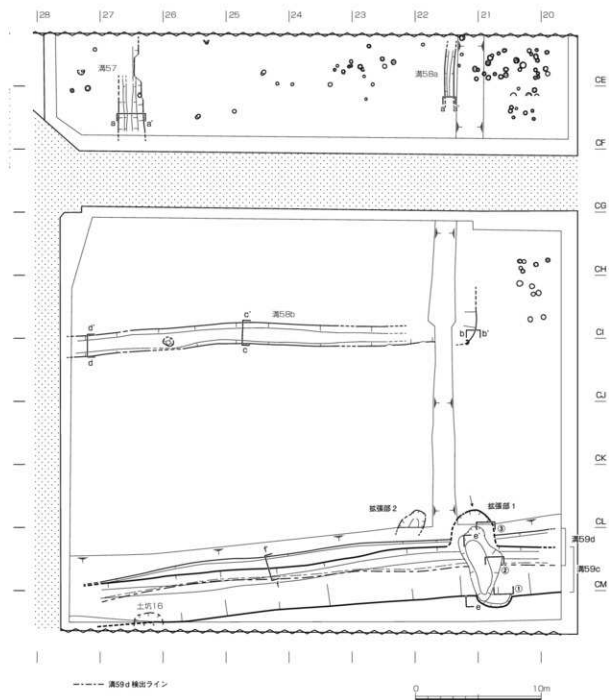


図135 室町時代遺構全体図-東半- (縮尺1/300)

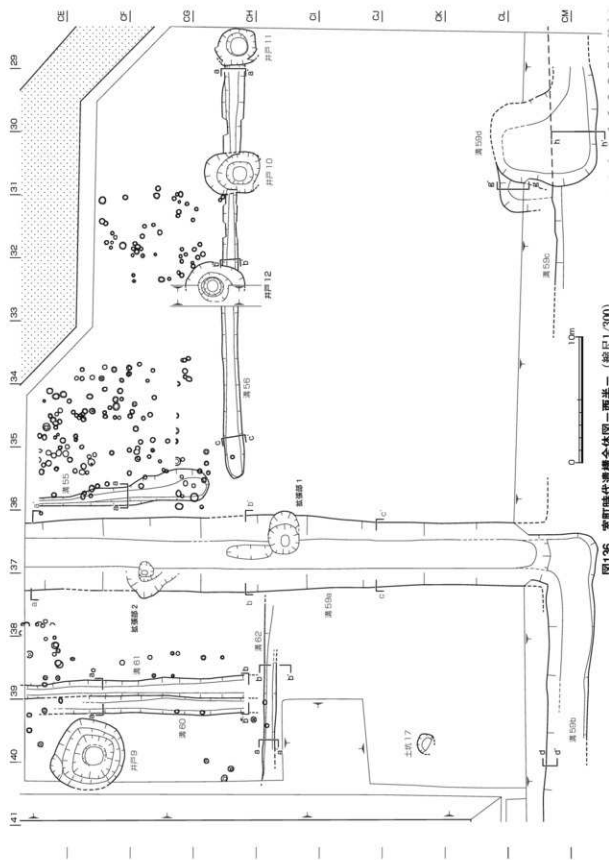


図136 壺町時代遺構全体図一西半一 (縮尺1/300)

時期は、14世紀と15～16世紀の二時期に大別される。井戸と柱穴群は北側に集中的に分布している。

柱穴については、前述しているが、<4 b 層>との分離が困難なものが含まれるが、その中で22～23ラインと37～40ラインでは、<4 a 層>検出の柱穴が約30基、それぞれ確認されている。これらは、井戸の北側に分布する。

14世紀代には井戸は確認されていないが、15世紀代には4基の井戸が作られている。

本地点は長期にわたって屋敷地として利用されたことが窺える。大区画で区切られた中の細分区画には、拡大傾向が認められる。
(岩崎)

a. 井戸

井戸9 (図136・137・138、図版30・44・46)

調査区北西端部、CE39・40区に位置する。周辺の遺構との位置関係は、東西に並び連続的に構築される井戸10～12の井戸中心軸ラインにあたるCHラインから北へ約5m、井戸12からは約38mの間隔をもつ。また、出土遺物から本井戸との同時性が指摘される溝61とは、検出上面において約2mの間隔を有す。周囲には多くの柱穴が確認されており、溝に区画された屋敷地内の井戸と理解される。

検出面は<4 b 層>に対応する。上面は標高0.8～0.95m、底面は同-1.18m、深さは2.06mを測る。平面形は、上面は隅丸方形で5.6m×5.35m、底面は円形あるいは隅丸方形で2m×2mである。全体に大形で深い形態が際立つ。掘り方はY字形である。本井戸は埋土の検討から掘り返しによる再構築が予想される。全体的特徴は大きく変わることはないが、新段階の底面は円形で直径が1.5m程度となる。掘り方は、底面から0.2～0.4m上部付近に段が確認されており、何らかの枠が設置された可能性も見て取れる。

埋土は十五層に分層したが、三群に大別される。土層の切り合い関係から、1群(1～4層)と2群(5～11層)は新段階の井戸の埋め土で、3群(12～15層)は古段階の埋め土と判断される。1群は井戸の埋め戻し最終埋土と流入土を含む一群である。明るい褐色あるいは黄色が強い砂質土層群で、2～4層には炭粒や土器片・礫・砂などが含まれる。1群と2群の境界にあたる4層には鉄分が多量に沈着するが、これは下層の堆積が粘性を高める状態にあることに由来する。2群は灰色で粘性が高い土層群である。その細分は色調や粘性の多少の変化によるものであり、各層の類似性は高い。包含物としては粘土ブロックや砂が含まれる程度である。3群は2群と類似しており、灰色のシルト～粘土で砂や礫と粘土ブロックを含む。

以上のように新旧の埋土が確認されるが、いずれも際だった特徴を認めがたく全体に共通性の高い埋土である。こうした点から、井戸廃棄にあたって特別な祭祀的行為を見いだすことは困難である。

出土遺物の量はコンテナ(28ℓ/箱)1/4箱弱である。備前焼・亀山焼などの中世陶器ほか、青磁や吉備系土師器碗などの中世土器片が含まれる。それらの時期は、鎌倉時代末(14世紀初頭～前半)を中心とするが、いずれも小～細片であり、意図的に入れられたというよりは埋め土中に含まれたものであると判断される。その他に注目される遺物として、長方形の石硯(図138-S16)と木製品3点(同-W22～24)があげられる。木製品の1点は山形にカットされた頭部の下に刻みが確認されており、塔婆の可能性が考えられる。曲物の底板には個緑部の釘穴のほかに、板面に対して垂直の穿孔が確認される。また角棒状の木製品には木釘で留められた痕跡が残るが、具体的機能特定することはできない。また、一部が被熱した円礫が1点出土している。

本井戸の所属時期は、検出面や出土土器類の年代観からは、鎌倉時代末の14世紀代の時期が想定されるが、諸特徴から時期が下る可能性を考えている。平面規模が大きく祭祀の痕跡が希薄であること、そして出土遺物が僅少で吉備系土師器碗などが意図的に納められていないなどの点は、前述した中世前半の井戸とは異なっており、後述する中世後半の井戸との共通性が高い。また、長方形の石硯の特徴は中世後半期のものと判断される。加えて後述する溝56との関係からも、本来は<4 a 層>に掘削面を有す室町時代、15世紀代の井戸と考えたい。

(山本)

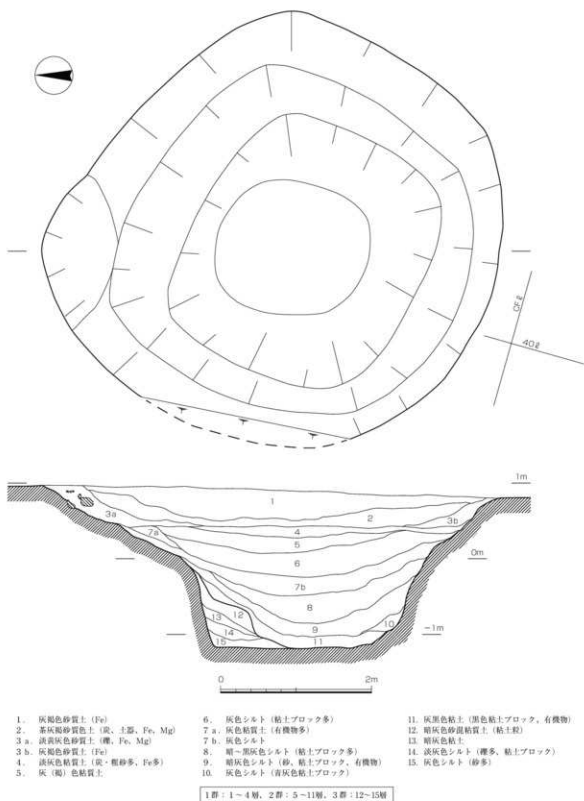
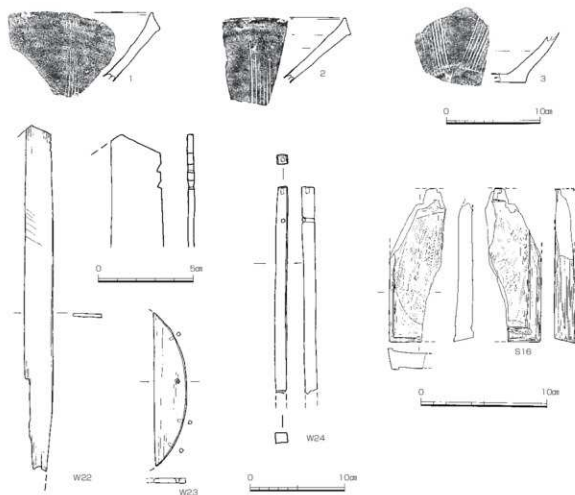


図137 井戸9 (縮尺1/50)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (→:1.6未満)	形態・手法集	粘土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	燻前焼・すり鉢	—	—	—	外面重ね焼痕、7条以上1線の跡目、内面下平磨減(使用痕)	細砂	層灰	
2	燻前焼・すり鉢	—	—	—	外面に重ね焼痕、5条1線の跡目、内面下平磨減(使用痕)	細砂	層灰焼・蒸焼—暗紫焼	
3	燻前焼・すり鉢	—	—	—	(内)外:横ナデ(底外)ナデ、8条1線の跡目	細砂	層紫焼	
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	器種	本取り	特徴	
W22	塔婆	36.9	3.0	0.4	スギ	追い椀目	上面は山形に加工、横縁に二段の切込目(長3.5cm・深さ2mm)、反対側は欠損、下端は尖る	
W23	曲物底板	14.3	3.4	0.35	スギ	板目	横縁に約0.3cmの釘穴3箇所、板面には約0.3cmの穿孔1箇所	
W24	加工木	22.0	1.3	1.1	スギ	割材	上面に約0.3cm・深さ0.5cmの釘穴、正面に断面方形(→20.4cm)の貫通穴1箇所で本釘が長さ約4cm残存	
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	石材	特徴
S16	磁	12.3	4.1	1.7	105.1	—	粉板岩	破面中央凹む、磨痕あり、表面も破面に加工、顔面は顔面

図138 井戸9出土遺物(縮尺1/4・1/3・1/2)

井戸10(図136・139・140、図版31)

調査区の中央部、CG30区で確認された。溝56の埋没後に掘削された。検出面は<4 a層>で、標高は1.1mである。底面は同一0.6mで、深さは1.7mを測る。平面形は南北軸が長い楕円形だが、底面は円形に近い。規模は上面が4.42m×3.28m、底面が1.16m×1.08mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は十九層に分層できるが、その特徴から五群にまとめられる。1群(1・2層)は淡灰色系の砂質土で類似性が高い。2群(3~8層)は灰褐色系の砂質土が主体である。鉄分の含有が各層でみられるが、3群との境である5・8層の下面は鉄分の沈着が顕著である。3群(9~11層)・4群(12~14層)は本井戸の特徴的な土層である。3群では9 a・9 b層が灰色系の粘質土で共通し、10層は淡灰白色粘土である。11層は有機物(木質)

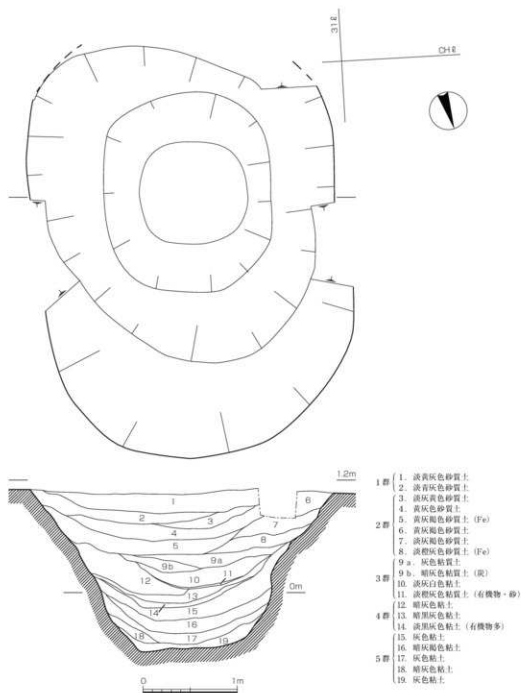


図139 井戸10 (縮尺1/40)

が細砂と混じる形で約1cmの厚さで堆積している。4群も3群と同じような堆積状況を示す。上部では暗灰色粘土(12層)と暗黒灰色粘土(13層)が堆積し、最下部は3cm前後の厚さで有機物(木質)を非常に多く含む層(14層)が確認される。3・4群にみられる堆積順序の共通性は、井戸を埋める行為の規則性とも考えられる。5群(15~19層)は灰色粘土が主体で、色調・含有される砂の質によって分層が可能である。

出土遺物はコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)1/2箱があり、備前焼が最も多く、播鉢(図140-2・3)・杯(同-1)・壺などがある。その他には青磁や亀山焼、吉備系土師器碗などもあるが、破片が小さく混入の可能性が高い。備



図140 井戸10出土遺物（縮尺1/4）

番号	種類・器種	法尺 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法	胎土	色調・ 内面・外面
		口径	底径	器高				
1	備前焼・杯	9.6	6.8	2.7	口内6割1/4	(表外)赤土、外面に垂ね焼痕・自然焼（灰白色）、内面黒点	微砂	暗茶褐色
2	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)灰土、9割1/4の罫目、内面磨成	微砂	暗灰褐色・灰
3	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)灰土、9割1/4の罫目、内面磨成、8割1/4の罫目、内面磨成	微砂	暗茶褐色・本褐色
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	特徴	本取り	特徴	
W25	加工瓶	21.3	6.7	1.3	スギ	罫目	両端欠失	

前焼の搦鉢には15世紀前葉のものが、壺も焼きしまったものが多い。同杯（図140-1）は16世紀代のものであり、本井戸の廃絶後の流入土に入ったものと判断した。そのほか加工瓶（同-W25）が出土している。

本井戸は出土遺物から15世紀前葉に廃絶したと考えられる。

井戸11（図136・141・142、図版32）

井戸10の東約10m、CG28区に位置する。溝56の埋没後に掘削されている。検出面は<4 a層>で、標高は1.0mである。底面の標高は-0.98mで、深さは1.98mである。上面はほとんどの部分が攪乱で失われているが、上面形は隅丸方形に復元できる。これに対し、標高0.1m付近以下は円形になっており、底面はほぼ正円形をなす。規模は上面残存部が3.32m×2.28m、底面が1.47m×1.32mである。断面形は逆台形を呈する。

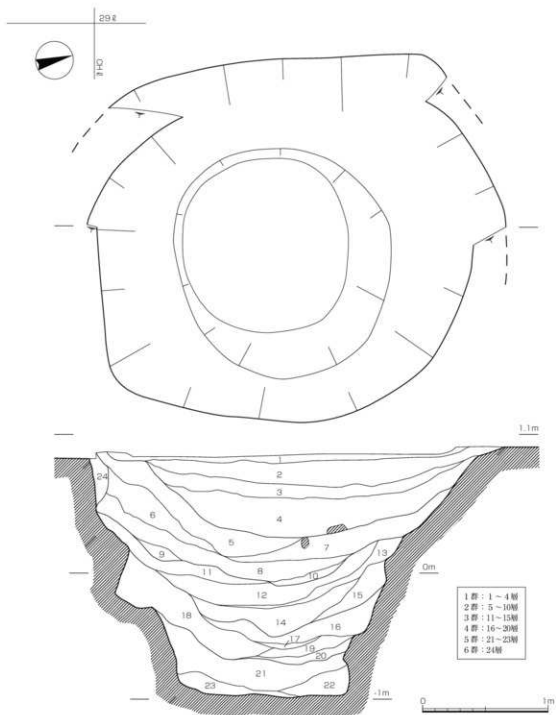
埋土は二十四層に分層される。これらは土質によって六群にまとめることができる。1群（1～4層）は灰色砂質土を中心とした1～3層と灰色粘土層である4層がある。各層とも顕著な含有物は認められない。2群（5～10層）は上部の5～8層と、3群との境の9・10層で様相が異なる。5層は黒色粘土ブロックを多く含み、6・7層はブロック状に粗砂を含む粘土であり、8層も粗砂を含む。対して9・10層は含有物をほとんど含まない粘土である。3群（11～15層）は灰褐色系の粘土層で、11・12層は含有物がほとんどみられないのに対し、13～15層は多少の砂を含む。4群（16～20層）も粘土層だが、粗砂を含む層（16・20層）と細砂を含む層（19層）、粗砂と細砂を含む層（18層）、砂の含有がみられない層（17層）に細分される。5群（21～23層）は茶灰褐色～黒灰色の粘土で、特に22層は粗砂の含有が顕著である。1～5群は埋め戻しの単位を示すが、その中でも含有物の種類・量にはばらつきがみられ、井戸10とは対照的である。6群とした24層は、その他の層とは堆積状況が異なる。何らかの構造物の可能性も考えられるが、現状ではよくわからない。

出土遺物には備前焼の壺・搦鉢、瓦などがある。コンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）1箱が出土した。備前焼の壺（図142-1）は内面に横ハケ、外面が縦ハケで、15世紀前半に取まるものであろう。吉備系土師器碗の破片も見られる。そのほか板状木製品（図142-W26）が出土している。罫線に釘穴4箇所が認められ、本釘で別個体と接合するのであろう。上面からの穿孔が3箇所認められるが、木製品の機能については不明である。

出土遺物から、本井戸の廃絶時期は15世紀前半とすることができる。

井戸12（図136・143～145、図版33・44）

調査区中央部、CG32区で確認された。井戸10の西側に位置し、溝56の埋没後に掘削されている。検出面は<4 a層>で、標高は1.25mである。底面の標高は-0.8mで、深さは2.05mを測る。上面は西半分が攪乱により



- | | | |
|---------------------------|----------------|--------------------|
| 1. 黄緑灰色砂質土 | 9. 白灰色粘土 | 18. 暗灰色粘土 (粗砂、細砂) |
| 2. 緑褐色砂質土 | 10. 暗灰色粘土 | 19. 黄灰色粘土 (粗砂) |
| 3. 暗緑灰色砂質土 | 11. 灰色粘土 | 20. 黄灰色粘土 (有機物、粗砂) |
| 4. 灰色粘土 | 12. 灰色粘土 | 21. 赤灰色粘土 |
| 5. 灰色粘土 (黒色粘土ブロック) | 13. 灰色粘土 (細砂) | 22. 暗灰色粘土 (粗砂) |
| 6. 灰色粘土 (粗砂ブロック) | 14. 黄灰色粘土 | 23. 黒灰色粘土 |
| 7. 灰色粘土
(粗砂・黄灰色粘土ブロック) | 15. 灰色粘土 | 24. 黄褐色砂質土 |
| 8. 灰色粘質土 (粗砂) | 16. 黄褐色粘土 (粗砂) | |
| | 17. 灰色粘土 | |

図141 井戸11 (縮尺1/30)

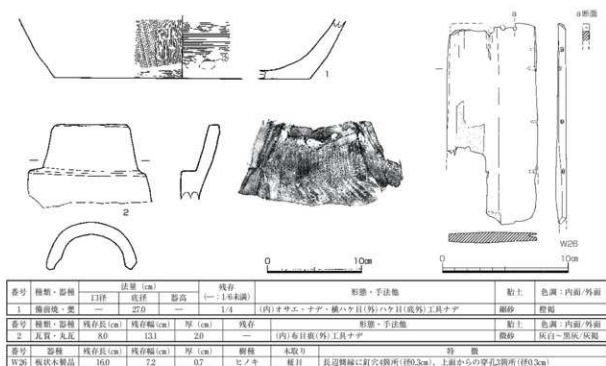


図142 井戸11出土遺物 (縮尺1/4・1/3)

失われているが、平面形は南北方向が長い楕円形に復元できる。底面はほぼ正円形である。上面の規模は長軸が3.53m、短軸は復元で2.8mである。底面は1.2m×1.1mである。断面形は逆台形だが、標高0m付近からは大きく外側に開く。

埋土は十七層に分けられる。土質や炭化物の含有状況によって三群に分けられる。1群(1～3層)は淡灰色～淡黄褐色の砂質土で、類似性が高い。2群(4～10層)は炭化物の含有量や土質によって細分される。埋め戻しの過程を明瞭に読み取ることができるため、ここでは下方からその状況を説明する。2・3群との境となる10層は炭層とも言えるような状況で、木質も確認される。その上部には炭化物がほとんど含まれない9層が堆積している。8層は炭化物をほとんど含まないのに対し、7a・7b層では炭化物が確認され、その上部には再び炭化物を含まない6層が堆積している。そして北側では6層を、中央部では7層を覆うように炭化物を多量に含んだ5層が確認される。5層には須恵器をはじめとした土器が多く含まれているのが特徴的である。そして炭化物が混入する砂質土である4層が堆積している。2群の検討からは埋め戻しの際に火を用いた行為が5・10層の二枚の炭層の存在から、少なくとも2度行われたことがわかり、その間の土層の堆積は規則的である。炭化物の有無の差はあるが、規則的な埋め戻し行為は井戸10と共通する要素である。3群(11～17層)は灰褐色～黄褐色系砂質土(11・12層)と灰色系の粘質土(13～17層)とがあり、色調や砂の含有状況によって細分した。

出土遺物は備前焼の播鉢・甕を中心に、瓦などがコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)2箱が出土した。その中には中世前半の土師器片や、亀山焼、青磁等輸入陶磁器も含まれるが、小・細片が多く、これらは混入と思われる。備前焼は堯・播鉢とも15世紀前葉から中葉の特徴を示す。播鉢の口縁部は井戸10よりも端部が上下に伸びており、後出するものである。堯には15世紀後葉～16世紀代に下るものもみられるが、16世紀代のものは廃絶後に流入したものであろう。

そのほか注目すべき遺物として滑石製石鍋(図145-S17)が挙げられる。また木器が多く出土しており、杓子(同-W31)、ホゾ状の突起を有する加工木(同-W32)、穿孔を有する蓋(同-W29)や曲物底板(同-W27・28)

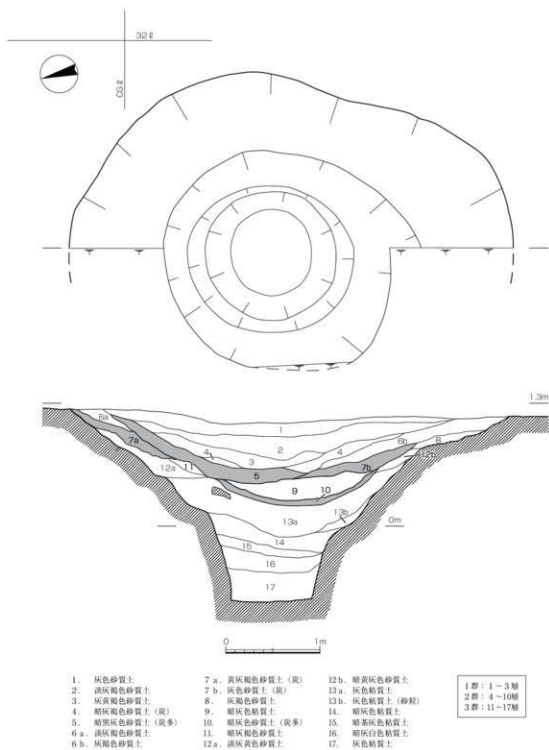
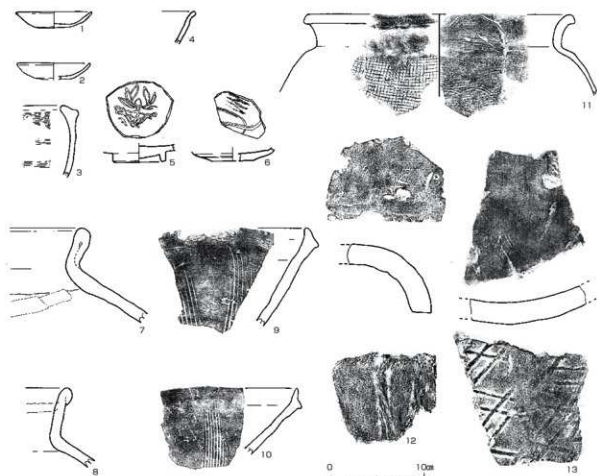


図143 井戸12 (縮尺1/40)



番号	種類・器種	法量 (cm)		残存 — (1/4未満)	形態・手法他	胎土	色調・内面/外面	
		口径	底径					
1	土師部・甕	8.2	1.7	4/1	(内) (外) 横ナデ (底外) オサエ、口縁部、灯明部	微砂	褐色・淡緑灰	
2	土師部・甕	7.8	1.4	4/2	(内) (外) 横ナデ (底外) オサエ	微砂	褐色・淡緑灰	
3	瓦質・甕	—	—	—	(内) 横ハナ横ナデ (外) 横ナデ、外面部	細砂	褐色・黒	
4	青磁・碗	—	—	—	内外面施釉	精製	灰(輪) 緑灰	
5	青磁・碗	—	5.6	—	1/1	内外面施釉。足込み蓮花文、外面波線1条、高台内面筋	精製	灰(輪) 淡緑灰
6	青磁・皿	—	4.4	—	1/3	内外面施釉。底部外面筋2条、貫入、足込みに輪点遺文・波線2文、外面波線1条	精製	灰(輪) 緑灰
7	備前焼・壺	—	—	—	(内) 工具ナデ (外) オサエ・横ナデ、口縁部および胴部に自然釉(灰白色)	微砂	褐色系	
8	備前焼・壺	—	—	—	(口) 横ナデ、口縁部及び胴部自然釉(灰白色)	微砂	灰褐色・茶褐色	
9	備前焼・すり鉢	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、脚目(表裏不明)、内面滑減、外面産ぬ境線	微砂	褐色系・茶褐色・暗茶褐色	
10	備前焼・すり鉢	—	—	—	(口) 横ナデ、9条1組の脚目、内面に産ぬ。外面に産ぬ境線	微砂	褐色系・茶褐色・暗茶褐色	
11	須恵器・壺	18.6	—	—	(器外) オサエ・ナデ・横ハナ(器内) 同心の筋・ナデ(器外) 格子目ナデキ、底、亀山焼	微砂	淡褐色・褐色系	

番号	種類・器種	残存長(cm)		厚 (cm)	残存	形態・手法他	胎土	色調・内面/外面
		—	—					
12	須恵器・丸瓦	9.9	8.7	2.1	—	(内) 布目敷(外) 平行タタキ後ナデ、軟質	微砂	黄白
13	須恵器・平瓦	13.5	12.0	2.3	—	(内) 格子目タタキ(外) 布目敷、軟質	細砂	黄灰/褐色

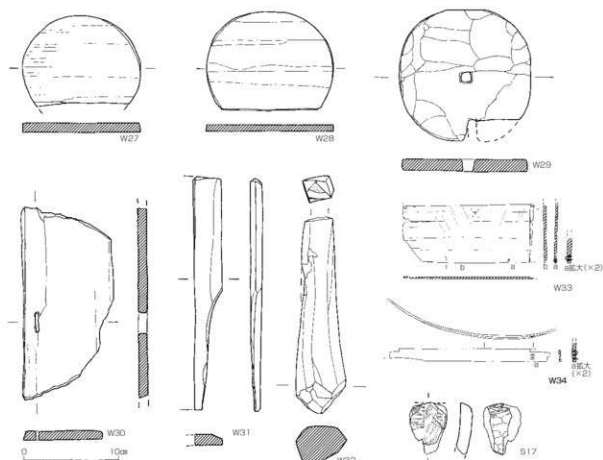
図144 井戸12出土遺物1 (縮尺1/4)

と竪 (同-W34) がある。縦じ穴付板 (同-W33) は2箇所に縦じ穴と、縦じ皮も1箇所で見つかる。こうした縦じ方は曲物側板にみられるものであるが、本製品にはケビキが見られないことから方形の箱状の製品が想定される。また、表面の浅い傷や右側に切断痕跡が認められ、まな板等に再利用した可能性が考えられる。

本井戸の廃絶時期は、出土遺物から15世紀中葉前後とすることができる。

(南)

調査の記録



番号	部種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	素材	本取り	特徴	
W27	曲物底板	92	12.5	0.9	スギ	板目	側面に面取り加工。釘穴なし	
W28	曲物底板	104	13.4	0.8	スギ	板目	釘穴なし	
W29	蓋	139	14.0	1.5	スギ	板目	中央に穿孔(一辺約1.5cm)、下辺に長方形の埋れ込み(幅約1cm・奥行2.5cm)、表面炭化	
W30	加工板	304	9.5	1.2	スギ	板目	中央に長方形の穿孔、表面に無数の傷、全面炭化	
W31	杓子	24.8	2.9	1.2	スギ	板目	上半は片刃状	
W32	加工木	30.8	5.3	3.0	コナラ属コナラ類	手割	1/2芯材を使用。先端は断面三角形に加工。上端に柄の痕跡	
W33	縦七穴付板	6.1	13.9	0.3	スギ	板目	2箇所に縦七穴(口箇所は縦七穴残存)、右端に切斷痕跡・左下はカット、表面に浅い傷	
W34	曲物蓋	1.2	1.7	0.13-0.2	ヒノキ	板目	ケビキなし、下縁左端をカット、厚さも薄い。縦七穴3段(間隔0.5cm)に縦穴残存	
番号	部種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	石種	特徴
S17	石蓋	5.4	3.6	1.3	39.4	—	磨石	内面研磨、外面は面取り、口縁部片

図145 井戸12出土遺物2 (縮尺1/4)

b. 土坑

室町時代に対応する<4 a層>に属するものは2基である。土坑の配置をみると、溝の脇に位置するもの1基と、溝との間達が窺えないものが1基である。

土坑16 (図135・146)

CH26区において調査区南端に位置する。南半部は調査区外にのびる。<6層>上面で検出されたが、上部は後世の溝で破壊されており、本来の掘削面はさらに上層であると考えられる。上面は標高0.8m、底面は同0.22m、深さは0.58mを測る。平面形はやや丸みをもつ隅丸方形である。上面の長辺は2.3mで、短辺は0.86mを残すのみである。底面は小さく、長辺で0.75m、短辺で0.28mが残る。掘り方は上部が大きく開き、段を有す。中央部は断面位置が土坑の中央部からずれているため明瞭ではないが、碗状に落ち込む。

埋土は全体に粘性を有すが、下半がより強い。各層間の差は大きくないが、下半では砂の包含率がやや高く、ラミナ状を見せる。3層では円礫が1点確認された。

所属時期は、底部系キリの土師器皿片が出土しており、その特徴から室町時代に属する可能性が高い。

土坑17 (図136・147)

CJ39区に位置する。検出面は<4 a層>で、標高は上面が0.99m、底面が0.8m、深さは0.19mである。南西側が攪乱により失われているが、平面形は上面・底面ともにほぼ円形に復元できる。規模は残存部で、上面が1.59m×1.0m、底面が1.04m×0.6mを測る。

断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色～暗灰色の砂質土で、2層は1層よりもやや粘性がある。出土遺物には吉備系土師器椀や土師器の鍋などがあるが、いずれも小片で混入と思われる。

本遺構の時期は検出面から室町時代と考えられる。(南)

c. 溝

室町時代に対応する<4 a層>検出の溝は8条あり、東西・南北方向に敷地を大きく区切る大形の溝(溝59)と、その敷地内をさらに細分する位置にある溝(溝55～58・60～62)とに分けられる。これらの溝の埋没時期は14世紀と15～16世紀の二時期に求められる。前者は溝55・56の2条のみで、両者の配置はL字状をなす。後者には細分する溝の数が増え、それらの配置も一様でなく、敷地の区切り方が変化していることが窺える。こうした溝の方向は鹿田座標には合致する。

溝55 (図148)

調査区北西、36ラインに沿って南北方向に走行する。北が東に10度傾く。北側は調査区外に伸び、南側へは浅くなり、CGライン南1mで取束する。検出面は<4 a層>で、標高は1.3mである。底面は同1.05mで、深さは0.25mを測る。溝の幅は北側で0.8m、南側で2.5mを測るが、南側では形状が崩れた状態と考えられ、本来の幅は1.5m程に復元される。

断面形は皿状である。埋土は灰色砂質土である。出土

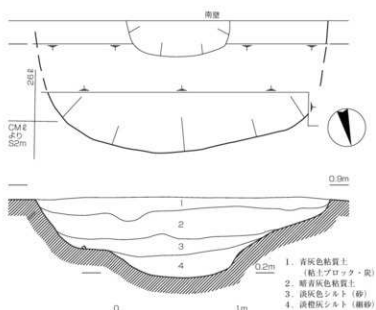


図146 土坑16 (縮尺1/30)

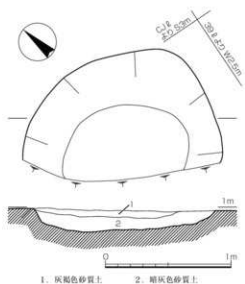


図147 土坑17 (縮尺1/30)

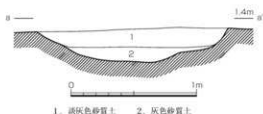


図148 溝55断面 (縮尺1/30)

遺物は、12号ポリ袋1／5袋である。吉備系土師器・瓦器の細片で占められる。その中には瓦質銅片が含まれる。

溝の埋没時期は検出面と出土遺物から、室町時代前半、14世紀後半～末と考えられる。

溝56 (図136・149)

調査区中央、CGラインの南3mをCHラインに沿って東西方向に走行する。北が西に75度傾いた方向である。29ラインから西に33mの長さを検出し、36ラインの東側で収束する。検出面は<4 a層>で、標高は1.2mを測る。底面は西端が同0.8m、東端が同0.85mで、深さは0.4mである。溝の幅は1.2～1.55m、断面形は逆台形を呈する。

埋土は砂質土を主体とする。出土遺物量はコンテナ2／3箱 (28 $\frac{1}{2}$ 箱)があり、吉備系土師器・瓦器の小・細片が多く含まれるが、いずれも埋土に伴う混入遺物と判断される。

本溝は井戸10～12に切られており、検出面と切りあい関係から、溝の埋没時期は室町時代前半、14世紀後半～末と考えられる。

溝57 (図135・150)

調査区北側で26ラインの西2mの位置を南北方向に走行する。方向は北が東に15度傾く。長さ約5mを検出した。北半は攪乱によって一部破壊されているが、調査区外へ延びることが確認される。南端も攪乱で破壊され、それを超えて確認できない。検出面は<4 b層>で、標高は約1mである。底面は同0.68mで、深さ0.4m前後である。溝の幅は2.0mである。断面形状は皿状を呈する。埋土はいずれも灰色系の粘質土である。

出土遺物量はコンテナ1／3箱 (28 $\frac{1}{2}$ 箱)があり、大半が吉備系土師器・瓦器の小・細片で占められるが、その中には備前焼の杯、瓦片が含まれる。備前焼の杯(図150-1)は井戸10出土のものに類似し、15世紀後半に属すると考えられる。

本溝は中世前半の面で検出しているが、出土遺物から<4 a層>に対応するものと考えられ、室町時代後半、15世紀後半～末に比定される。

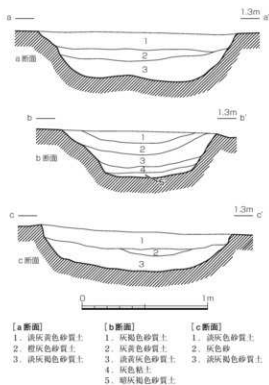
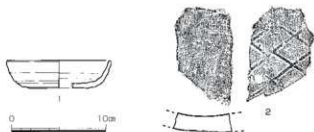
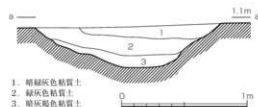


図149 溝56断面 (縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	備前焼・杯	110	76	29	1/5	(底外)赤キリ、内面自然釉(緑灰)、外面垂文焼痕	微砂	暗赤灰/赤灰-暗灰泥
番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	残存	形態・手法施	胎土	色調
2	黒色瓦・平瓦	100	68	1.9	—	(内)格子目タタキ(外)春日直、軟質	細砂	灰白

図150 溝57断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

溝58 (図135・151)

<4 a層>で検出した。調査区北端からCEライン南2mまでで検出した南北方向の溝と、CIラインを東西方向に走行し、21ラインで北側に屈曲する溝は、南北方向のラインがほぼ一致しており、一連のものと判断される。両溝の間は攪乱によって分断されているため、CFライン以北を溝58 a、東西方向の溝を溝58 bとして、以下に報告する。

溝58 aは長さ約5mを検出した。北端は調査区外へと続き、南端は攪乱によって破壊される。検出面の標高は1.25m、底面は同1.0m前後で、深さ0.3mである。溝の幅0.5m前後で、断面形は碗状を呈する。埋土は灰褐色あるいは灰白色の砂質土である。

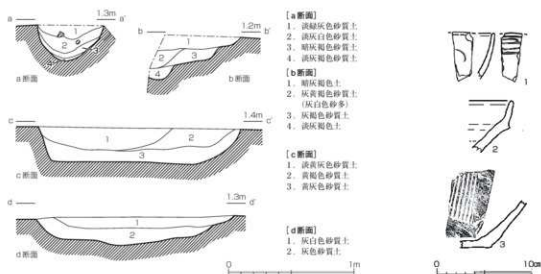
溝58 bの検出面は東西方向では、標高1.2~1.32m、底面は西側で同0.98m、東側で同1.08mである。幅1.6m、深さ0.3mで、断面形は皿状を呈する。屈曲部では標高は1.16m、底面は同0.82mであり、底面はやや低い。また断面形は碗状を呈し、この点は溝58 aと類似性が見られる。埋土は灰色系の砂質土を主体とする。

出土遺物は全体で吉備系土師器碗等の小片20片のみであるが、備前焼や青磁のほか火鉢片を含む。

溝58 aと溝58 bの南北軸を比較すると、溝58 aの位置は21ラインの西2mであるのに対して、溝58 bでは、攪乱によりその方向が明確でないが、21ラインの西1mとなる可能性が高い。この溝58 bのラインはやや確実性が乏しい点は否めないが、溝58 aとはずれが生じている。このため両溝は、直接的に接続するのは難しいが、埋土と底面レベルは近似することから、同じ機能を持つ溝であり、鉤手状に敷地を区画する溝と評価される。

検出面と出土遺物から、本溝の時期は室町時代、15世紀代と考えられる。

(岩崎)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—:1/6未満)	形態・手法	胎土	色調/内面/外面
		口径	底径	器高				
1	青磁・碗	—	—	—	—	内外面施釉、底無き文	胎土	灰白(釉)緑灰
2	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、口縁端部に重ね焼痕	細砂	赤灰褐
3	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)(外)横ナデ、罫目	微砂	紫灰/赤灰褐

図151 溝58断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

溝59 (図135・136・152~165、図版33・34・42・44・45)

溝59は37ラインを南北方向に走行する溝と、CMラインに沿って東西方向に走行する溝によって構成される。東西方向の溝は、後世の溝が上部を大きく破壊しているため、検出できたのは36ライン以西と、32ライン以東である。32~36ライン間については検出できていないが、上部の破壊の大きさを考えると、本来は一連の溝であっ

た可能性が高い。

以下、南北方向の溝を溝59 a、東西方向の36ライン以西をb、32ライン以东をcと便宜的に呼び分ける。溝59 aとbとは接続することが確認されている。また溝59 cでは下層に溝が重複しており、上層を溝59 c、下層を溝59 dとする。

溝59 a：(図136・152～154、図版33・34) 溝59 aの軸方向は北が東に15度傾く。検出面は<4 a層>である。調査区北半では検出面の標高は1.45m、底面は同0.08m、幅6.0mである。南半では検出面は同1.0m、底面は同-0.2mで、検出面が下がる。そのため溝の幅は5.0mであるが、本来は6 m前後に復元される。断面形は逆台形を呈し、深さは1.2～1.55mである。溝59 aの南端は溝59 bと接続するが、調査区南壁には認められず、溝59 b以南へは延びないことが確認されている。

埋土は十六～二十層に分けられ、土質などから大きく三群にまとめられる。1群(a断面：1～10層、b断面：1～14層、c断面：1～10層)は灰色～灰白色砂質土が上方に、その下に黄灰褐色～青灰色を主体とする粘質土が堆積する。2群(a断面：11～13・17層、b断面：15層、c断面：11・13層)は暗青灰色あるいは暗灰色系の粘質土である。3群(a断面：14～16・18層、b断面：16～20層、c断面：12・14～16層)は暗灰色～黒灰色粘土を基調とした層である。2群の下面ラインから、掘り返しが行われたと考えられる。

本溝の斜面部には、一部で土坑状のくぼみ2箇所が確認された。その形状は本溝から外側に張り出しており、底面が深い。これを「拡張部」とする。

こうした拡張部は、溝の一部に緩斜面をつくったものであり、また溝の底より低いくぼみを持つ。その機能を考えるには材料が少ないが、流れの中で少し水が溜まるような何らかの作業場かもしれない。

拡張部1(図153、図版33)は溝の東肩部の中央に位置する(CH36区)。溝の掘削後に、その斜面～底面にかけて検出した。上面は標高1.01m、底面は同-0.66mである。同位置の溝の底面は-0.4mであり、拡張部1が約0.2m低い。溝の東側の上端ラインがやや膨らむ。平面形は長軸3.4m、短軸2.3mの東西に長い楕円形を呈する。東端から西へ1mのところは段になっており、下位は長軸0.9m、短軸0.66mの楕円形である。底面が碗状にくぼみ、深さは1.67mである。埋土は灰色粘質土を主体とし、溝と共通する。

遺構確認のために設けたサブトレンチ内で、ほぼ垂直に打ち込まれた状態で木器(W35)を検出した。上部が毀損するが、上端の高さは少なくとも標高0.28mまでが確認されている。下端は同-0.49mまで達している。長さは少なくとも84cm以上である。残存部上端から55.5cmまでの部分が加工され平坦面を形成している。それよりも下は加工により、先端を鋭く尖らせて杭状をなす。その平坦面には墨書が確認された。文字は「衆生皆共成仏道夫意趣者為香夢童子第四…施主」の21字を判読することができる。墨書の内容から供養碑との指摘がなされており、筆致から室町時代頃との所見が得られている¹¹⁾。この供養碑は、位置関係から溝の上端ラインに近く、また拡張部1の中心にも近い位置であることから拡張部に伴う可能性が考えられる。

出土遺物は備前焼の壺・播鉢などがコンテナ(28L/箱)で1/3箱があり、中世土師器の小・細片が多く含まれる。

拡張部2(図154)は拡張部1の北約10mの位置で、溝の西側斜面に位置する。上面は標高1.26m、底面は同-0.13mである。同位置の溝の底面は同0.17mで、底面よりも0.3m程深い。深さは1.39mである。溝の西側肩のラインより、西へ1m程張り出す。平面形は東西2.2m、南北2.8mの不整形を呈する。底面は0.89m×0.9mの楕円形状態で、碗状にくぼむ。

埋土は暗灰色粘土層である。拡張部2の出土遺物はポリ袋(12号)1/2袋で、なかでは肥前陶磁器が目立ち、中国漳州窯の染付が含まれる。

溝59 b：(図136・155) CLライン南2m～3mの間では、標高0.9mで北側の肩部を検出した。標高0mまでの斜面を確認し、これより以南は、標高0mまで削平されている。底面は同0～-0.1mで、深さは0.9～1.0mが

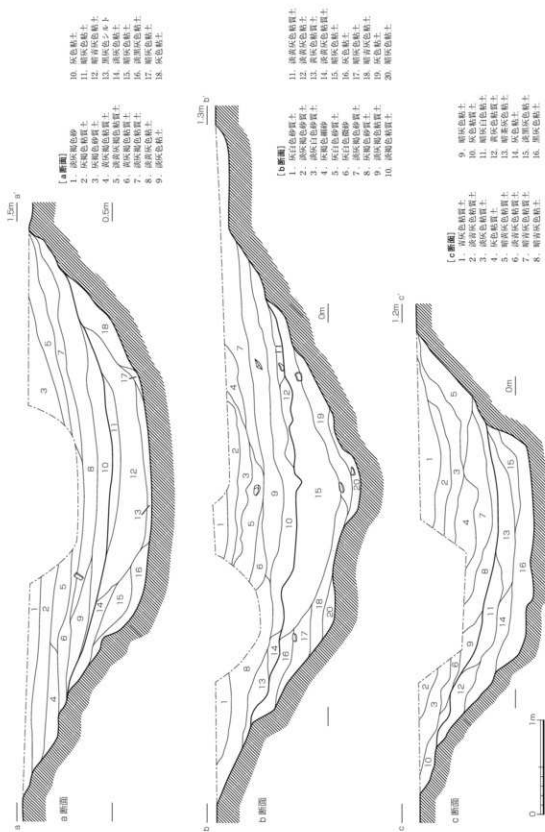


図152 溝59 a断面 (縮尺1/40)

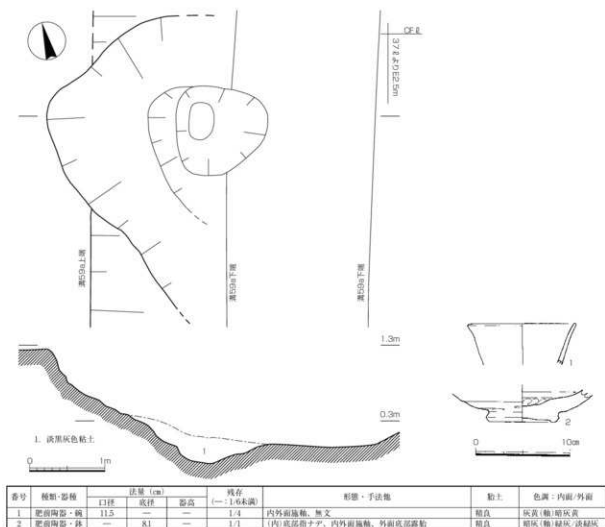


図154 溝59a 拡張部2・出土遺物 (縮尺1/50・1/4)

残る。36ライン付近で東側よりも西が10cmほど下がる。断面形はわずかに残った部分から逆台形と考えられる。

埋土は灰褐色砂質土～灰色系粘質土が認められる。出土遺物は少ないが、木簡1点(図164-W36)が注目される。

溝59aとの接続部は、溝59aは底面が標高-0.2mであり、溝59bでは標高0mと高く、北側が0.2m低い。

溝59c：(図135・156・157、図版34-3) 本溝は、上部の削平を逃れた南側では<4a層>で検出し、標高は1.0～0.8mである。しかし大半は標高0～-0.2m以下で検出された。底面の標高は東側で-0.3m、西側で-0.1mであり、深さは残存部で約1.1mである。軸方向は北が西に80度傾くものである。断面形はすり鉢状をなす。溝の幅は3.5mが残り、本来の幅は5m以上に復元される。埋土は褐色を基調とする粘質土である。

溝59cと溝59bとの間については、破壊が標高0～-0.2mまで及んでおり、溝の消失の可能性を前述しているが、ここで示したように、溝59cの底面レベルは、西へ向けて高くなる傾向を示す。

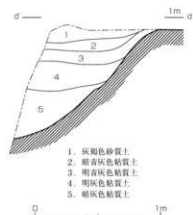


図155 溝59b断面 (縮尺1/30)

溝59cの下位には、21ライン～31ラインの間に下層溝（溝59d）が重複する。

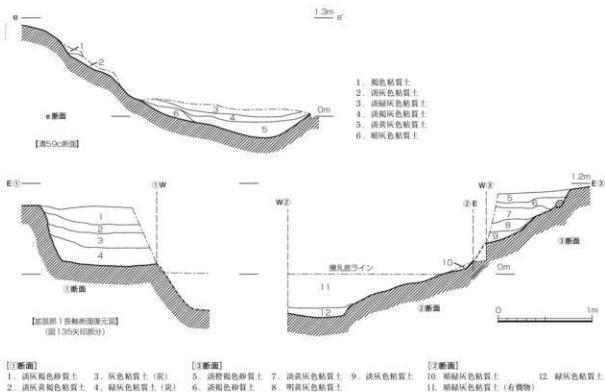
また溝59cでは拡張部を確認した。21ライン付近に位置する（図135）。溝に直交する方向で、長楕円形の土坑状遺構が溝に重複する。調査時には溝の上面で南北それぞれに2つの土坑状の遺構として、また溝59cの底面で、長楕円形の土坑として記録した。その後、レベルや出土遺物の検討により、これらは同一遺構として溝59cにとりつくものと判断した。図156に示した拡張部1長軸断面復元図は、作図にあたって①～③地点の東西断面を用いたものである。

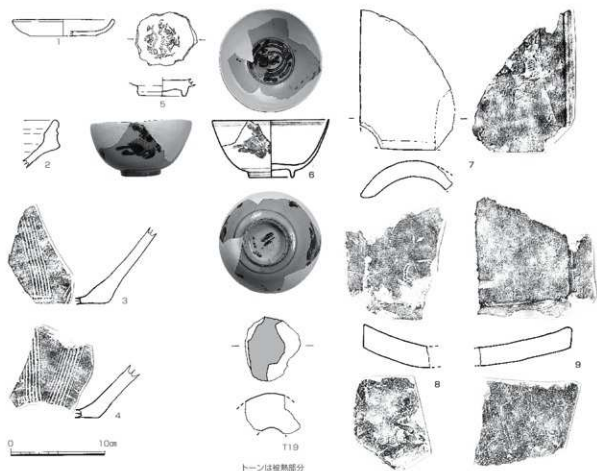
拡張部の上面は<4a層>で検出し、標高は北側で1.1m、南側で0.92m、底面の標高-0.56mである。北側はすり鉢状に落ち込み、南側では箱形に切り込み、標高0.1mでテラス面を有する。下半は逆台形状を呈し、深さは1.5mである。

埋土は1・5・6層は灰褐色あるいは橙褐色砂質土、2・4層と7・9層は黄灰色あるいは灰色系の粘質土、10～12層は緑灰色粘質土である。

出土遺物量はコンテナ（28ℓ/箱）1箱である。備前焼の播鉢や壺、壺などが最も多く、瓦の出土も目立つ。ふいご羽片1点（図157-T19）も確認される。注目されるのは明代景徳鎮の台付椀（同-6）で、内外面と高台内に染付がある。16世紀末～17世紀のものである。備前焼の播鉢（同-2）は15世紀中葉のものであり、壺の調整は内外面がナデである。

拡張部2は拡張部1の西5mに位置する。検出面は<4a層>で、標高は1.06m、底面は同0.47m、深さは0.59mである。拡張部1の北側突出部と平面形や堆積状況が類似しており、同様の機能が窺える。出土遺物はなかった。溝59cにとりつくものか、下層の溝59dにとりつくものかについては、南端が攪乱により破壊されているため、確認できない。





番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←1/6未満)	形態・手法施	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・皿	10.8	7.0	1.8	1/4	(内)外縁ナデ(底外)赤キリ；左回転、外面底面に塗	細砂	橙白～黒地
2	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(口)横ナデ、外面赤ね焼肌	細砂	赤地/赤地～黒灰
3	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)外縁ナデ(底外)ナデ、6条1組の脚目	細砂 礫	赤灰地/橙灰地
4	備前焼・すり鉢	—	—	—	—	(内)外縁ナデ(底外)ナデ、8条1組の脚目、或部外面に白色自然釉	細砂 礫	赤地
5	青磁・碗	—	5.4	—	3/4	内外面施釉、高台露胎、見込みに草花文刷印	粗織	灰(輪)緑灰
6	中国磁器・碗	—	4.7	—	1/4	染付、全輪、龍文、見込み盛り上がる(器中心)、高台内露、景徳鎮	粗織	白(輪)青白

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	残存	形態・手法施	胎土	色調：内面/外面
7	瓦貫・丸瓦	12.0	8.9	1.7	—	(内)布目直・ナデ(外)ナデ	細砂	灰白～黒灰/黒灰
8	照窓貫・平瓦	9.6	7.4	2.3	—	(内)格子目叩き(外)布目直、軟質	細砂	灰白
9	土師器・平瓦	11.0	10.0	2.0	—	(内)ハケ目(外)布目直・ナデ、軟質、両面塗	細砂	橙灰～黒地

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	形態・手法施	胎土	色調
T19	ふいご口部	—	—	—	121.8	—	ナデ、胎土にワラ含む、外面焼熱	細砂	赤地～黒灰

図157 溝59c 拡張部出土遺物 (縮尺1/4)

溝59d：(図135・136・158) 溝59dは溝59cの下面において、拡張部から西へ90mの位置にあたる30ラインで、その端部が北へ屈曲して取東する。屈曲部は南北4m、東西8mの方形を呈し、西側に古い段階の掘り方が重複する。新段階の掘り方は調査中に崩落し、記録ができていない部分があるため、ここでは古段階の断面を参考とし、図158に断面を掲載した。屈曲部は<4 a 層>で検出し、標高は1.05m、底面は同-0.55m、深さ1.6mである。断面形は逆台形を呈する。屈曲部では東西幅8mを測る。それ以外のCLライン以南の溝は大きく破壊されており、検出面の標高は0～0.1m、底面は標高-0.5mを測る。深さ0.5mである。溝の幅は1.3～2.5mが残る。

埋土はg断面で十三層に分けているが、淡青灰色あるいは灰色系の砂質土層が主体の上層(1～8層)と、灰

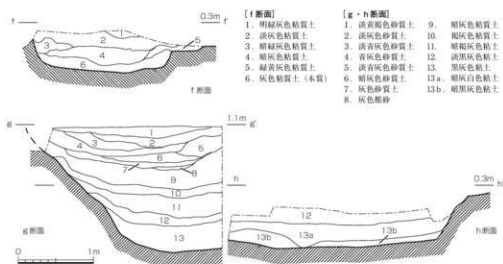


図158 溝59d断面(縮尺1/50)

色粘質土が主体の中層(9~11層)、黒灰色粘土を基調とする下層(12・13層)に大別される。中層・下層の状況は、f断面と類似する。

出土遺物には、15世紀代の備前焼が認められる。

溝59出土遺物(図159~165、図版42・44~47)

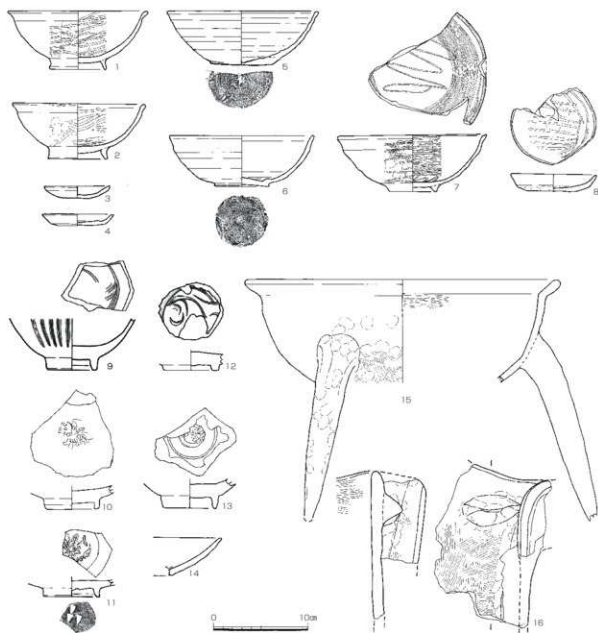
出土遺物は、拡張部以外について以下にまとめる。土器・陶磁器がコンテナ(28区)にして合計で15箱が出土した。地点ごとの内訳は溝59aで11箱、溝59bでは1/3箱、溝59cで3箱、溝59dで1箱である。14世紀後半~17世紀初頭の土器・陶磁器類、瓦を含む。そのほかに木製品も多く出土した。出土遺物の時期幅は、溝59a・b・cで共通しており、溝59dでは、14世紀後半~15世紀代に限定される。溝59dは古い時期に埋没したと考えられる。

青磁碗・皿(図159-9・14-16)は14世紀代のものがあり、本溝の掘削時期を示すものであろう。吉備系土師器碗(同-1・2)・須恵器碗(同-5・6)・瓦器碗(同-7)は本遺構下部の池状遺構に伴うものと考えられる。備前焼では、すり鉢のうち、口縁端部が長く伸びるもの(図160-28~30)は15世紀のもので、口縁が肥厚するもの(同-33・34)は16世紀末~17世紀初頭に属する。

陶磁器類では、瀬戸美濃(図161-52~55)の鉢・皿・天目碗が出土しており、16世紀末のものである。中国製磁器も注目される遺物であり、景德鎮窯の碗(同-56)・皿(同-58)、漳州窯の碗(同-57)は16世紀末~17世紀初頭に属する。国産陶磁器も多く出土しており、その大半は肥前陶磁器である。肥前陶器には碗・皿・鉢の各種が見られ、鉢(同-46)は17世紀初頭のものである。磁器も同様に鉢(図162-68~70)・蓋(同-67)等があり、その時期は16世紀末~17世紀初めである。また台付灯明具には信楽焼(同-65)と陶器(同-64)の2点が出土した。いずれも受け部の緑が打ち欠かれた可能性が考えられる。

瓦類では須恵質の平瓦(図163-75~77)と、瓦質の瓦各種(同-78~86)が出土している。瓦質の軒丸瓦(同-79)には左巻き巴文が施される。

木製品では、箸(図164-W37~42)・杓子(同-W48)・橋杓(同-W49)・折敷(同-W51)等の多くの日用品のほかに、溝59bの底で出土した木筒1点(同-W36、図版45)が注目される。W36は、墨はほとんど残っていないが、その痕跡を拾い、「×正四年十一月十三日××金阿全間一首者也」の17字が読み取れる。「□正四年」に合致する元号としては「寛正四年(1463年)」・「永正四年(1507年)」・「天正四年(1576年)」があるが、出土



満59a:1・2・5・7~11・13~16, 満59b:3, 満59c:4・6, 満59d:12

番号	種類・器種	径長 (cm)			口径 (→1.6未満)	形状・手法	胎土	色調・内面/外面
		口径	径長	底径				
1	土師器・碗	14.8	6.0	6.2	1.1(→1.6未満)	(内)オサエ・ナデ後筒ミガキ(外)オサエ・ナデ・筒ミガキ, 内外面襷	微砂	黄白
2	土師器・碗	14.1	6.4	6.9	2/3	(内)(外)オサエ・ナデ・筒ミガキ, 筒底, 内外面襷	微砂	黄白
3	土師器・皿	6.9	2.7	1.4	1.12, 3.8(1/2)	(内)(外)横ナデ(底外)筒キリ・ナデ, 赤み	微砂	橙灰・橙灰
4	土師器・皿	7.6	5.8	1.3	5/6	(内)(外)横ナデ(底外)筒キリ・ナデ・板目肌, 口縁部に赤ね襷肌, 底部に整状	微砂	黄灰
5	土師器・碗	16.2	6.7	5.7	2/3	(内)(外)横ナデ(底外)赤キリ, 口縁部赤ね襷肌	微砂	灰→黒
6	土師器・碗	15.3	5.8	5.5	1.1(1.6未満)	(内)(外)横ナデ(底外)赤キリ, 口縁部赤ね襷肌	微砂	灰→黒灰
7	瓦器・碗	13.8	5.1	6.0	1.1(1.6未満)	(口)縁部に波線(内)筒ミガキ(外)オサエ・筒ミガキ(底内)縹文, 輪軸型	微砂	黄→灰→黒
8	瓦器・皿	9.1	7.9	1.9	2/3	(内)(外)横ナデ(底外)オサエ・ナデ, 縹文	微砂	灰白→黒→灰→黒
9	青磁・碗	—	5.2	—	1/3	内外面施釉 高台内露胎, 外面蓮華文, 内面蓮華文, 底部から高台體白色	粗粒	灰→黄白(輪)緑灰
10	青磁・碗	—	5.5	—	1/3	内外面施釉 高台内露胎, 見込みに花文	粗粒	灰(輪)緑灰
11	青磁・碗	—	6.0	—	1/4	内外面施釉 高台内露胎, 見込みに花文, 高台内露胎み3露胎	粗粒	灰(輪)緑灰
12	青磁・碗	—	6.0	—	1/4	内外面施釉 高台露胎, 粗い貫入, 見込みに蓮華文	粗粒	黄白(輪)緑灰
13	青磁・碗	—	5.6	—	2/3	内外面施釉 高台内露胎, 輪軸型, 見込みに花文	粗粒	灰(輪)緑灰
14	青磁・皿	—	—	—	—	(底外)赤キリ, 内外面施釉 底部露胎, 見込みに目録, 内面面彩い摺肌	粗粒	黄白(輪)緑灰
15	土師器・瀝	32.6	—	25.7	1/3	(内)ハケ目・ナデ(外)オサエ・ハケ目, 外面襷	微砂	黄白→黄白→緑灰
16	土師器・壺	—	—	—	—	(内)(外)ハケ目・ナデ, 外面襷	微砂	橙→橙灰→緑灰

図159 満59出土遺物1 (縮尺1/4)

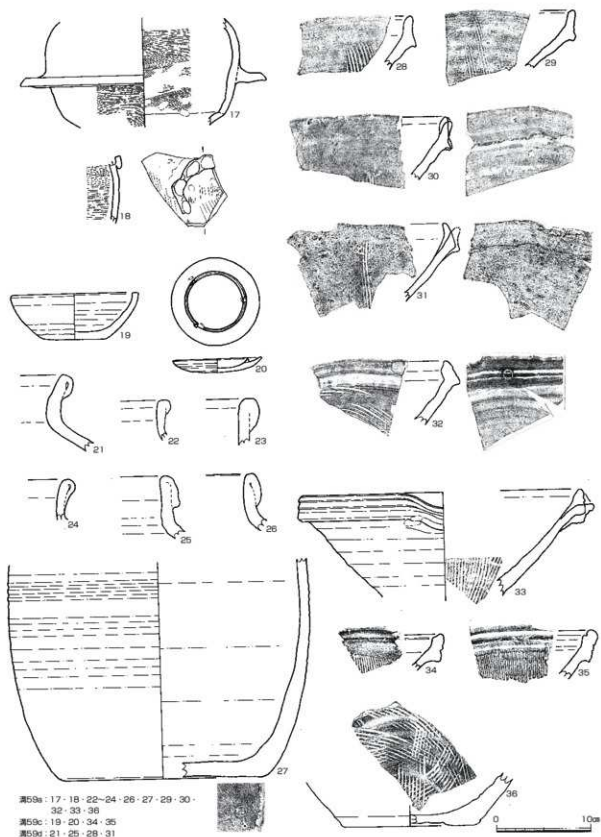


図160 溝59出土遺物2 (縮尺1/4)

溝59出土遺物2 (図160) の観察表

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (—: 1/6未満)	形態・手法他	胎土	色調・内面・外面
		口径	底径	器高				
17	瓦器・土釜	—	—	—	1/3	(内) オサエ・ハケ目(外) ハケ目、外面上半部落・下半部(焼熱)	磁砂	灰～暗灰
18	瓦器・火鉢	—	—	—	—	(内) ハケ目(外) ハケ目・ナデ・オサエ	磁砂	黒灰
19	埴輪焼・灯明皿	13.6	6.5	4.9	3/4	(内) 横ナデ(外) 籠ケズリ、内外面に赤色化粧土、外面火跡、焼成不肖	磁砂	赤褐
20	埴輪焼・灯明皿	9.4	4.8	2.0	1/1	(内) 横ナデ(外) 籠ケズリ、内面自然釉	磁砂	赤褐・赤灰褐
21	埴輪焼・要	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、外面灰白色自然釉	磁砂	暗赤褐
22	埴輪焼・要	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、自然釉	磁砂	暗赤褐・赤灰褐
23	埴輪焼・要	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、自然釉	磁砂	暗赤灰褐
24	埴輪焼・要	—	—	—	—	(口) 横ナデ、器底に自然釉(白)	磁砂	暗赤褐
25	埴輪焼・要	—	—	—	—	(口) 横ナデ、外面自然釉(緑灰色)	磁砂	紫褐
26	埴輪焼・要	—	—	—	—	(口) 横ナデ、外面に自然釉(白～紫)	磁砂	暗赤灰
27	埴輪焼・要	—	22.0	—	1/5	(内) 横ナデ(外) 上具ナデ・凹縁(底外) ナデ・窓印、外面自然釉(白～緑灰)	磁砂	暗灰～暗赤褐
28	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、9条1線の跡目、外面に重ね焼痕	磁砂	暗・橙～暗赤褐
29	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(口) 横ナデ (内) 横ナデ・9条1線の跡目 (外) 横ナデ (口縁部に重ね焼痕・自然釉)	磁砂	赤褐
30	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、7条1線の跡目、口縁外面光沢、口縁部重ね焼き痕、片口跡	磁砂	暗赤褐
31	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ、8条1線の跡目、外面に重ね焼痕、片口跡	磁砂	暗赤灰褐・紫褐～暗灰褐
32	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ (口縁部に胎印(○)・自然釉・重ね焼痕、片口跡	磁砂	暗紫褐
33	埴輪焼・すり鉢	30.0	—	—	1/5	(内) (外) 横ナデ、9条1線の跡目、口縁部に重ね焼痕、片口跡	磁砂	赤褐～暗赤褐
34	埴輪焼・すり鉢	—	—	—	—	(内) (外) 横ナデ(口)、15条1線の跡目、焼成不肖	磁砂	赤
35	陶瓦器・すり鉢	—	—	—	—	(内) 横ナデ(外) 籠ケズリ、8条1線の跡目、中央軟質、明石産	陶砂多	橙
36	埴輪焼・すり鉢	—	14.6	—	1/4	(内) (外) 横ナデ、8条1線の跡目、底部窪付、内面滑焼	磁砂	暗赤灰褐・暗赤褐

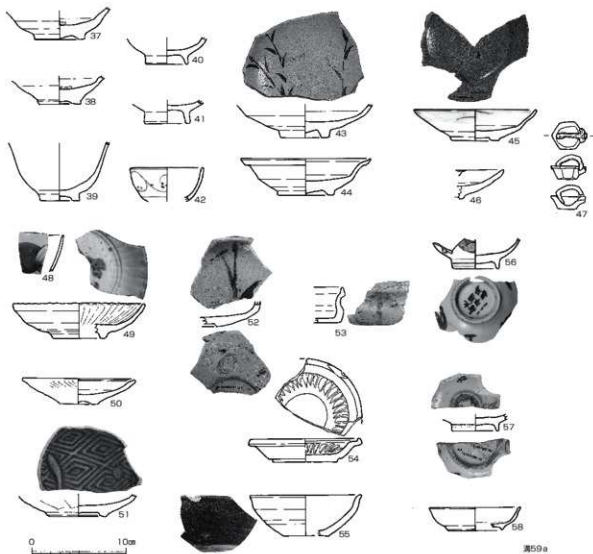
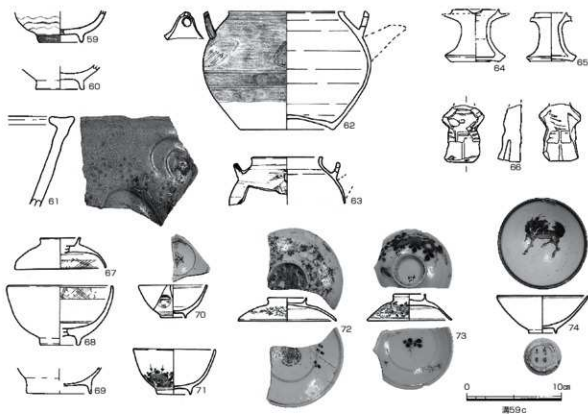
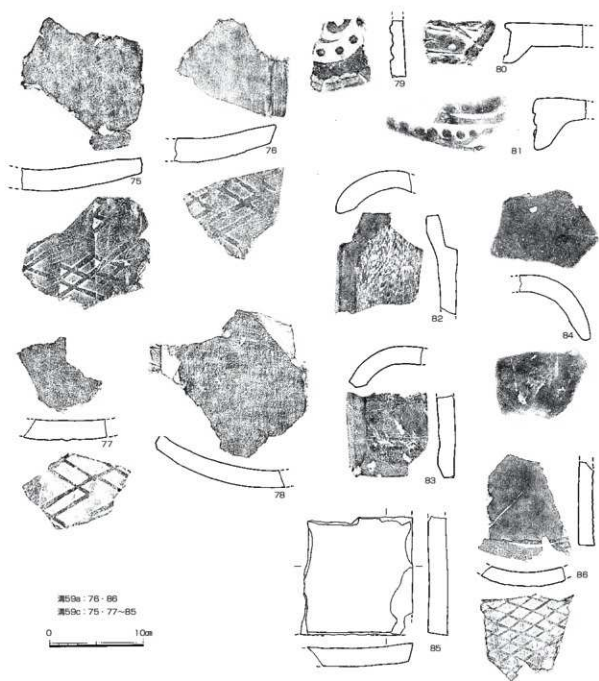


図161 溝59出土遺物3 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)		残存 — (1/6未満)	形態・手法	胎土	色調：内面/外面	
		口径	底径					
59	煎茶陶器・碗	—	—	1/1	内面施釉、砂目、高台砂付着	焼良	灰白(輪)灰白—緑灰	
60	煎茶陶器・碗	—	4.7	1/1	内外面施釉、高台露筋、砂目、高台砂付着	焼良	灰白(輪)緑灰—緑灰	
61	煎茶陶器・碗	—	4.2	1/2	高台管付に糸ナリ、砂目、内外面施釉	焼良	淡黄黒(輪)淡黄灰	
62	煎茶陶器・碗	—	4.6	1/1	高台全輪、貫入あり、内野山空	焼良	灰白(輪)緑灰	
63	煎茶陶器・碗	—	4.9	1/6	全輪、内面施釉	焼良	灰白(輪)黄	
64	煎茶陶器・碗	7.8	—	1/2	陶筋染付、内外面施釉・ムラがある、外面施文	焼良	灰白(輪)青白	
65	煎茶陶器・碗	—	5.1	1/1	総管付、内外面施釉、筋十目	焼良	灰白(輪)淡黄灰	
66	煎茶陶器・碗	13.8	6.0	3/1 (-)底1/1	内外面施釉、底筋から高台露筋、砂目、高台砂付着	焼良	緑黄灰(輪)暗黄灰	
67	煎茶陶器・碗	13	5.1	3/3	総管付、内外面施釉、外面下平露筋、貫入あり	焼良	暗黄灰(輪)暗緑灰	
68	陶器・水差し	—	—	—	内外面施釉、外面底部露筋、筋十目、片口縁	焼良	灰白(輪)黄黒	
69	陶器・水差し	29	1.6	2.6	1/1	ミニチュア、内面及び把手施釉	焼良	灰白(輪)黄—緑
70	煎茶陶器・碗	—	—	—	染付、内外面施釉、口縁底部露筋	焼破	白(輪)透明	
71	煎茶陶器・鉢	14	5.4	3.7	□(-)底1/3	初期伊万里染付、菊花型打ち、内外面施釉、高台内露筋	焼破	灰白(輪)青白
72	煎茶陶器・鉢	11.9	4.1	2.7	□(-)底1/1	緑滑肌、刷毛ヘラ筋、口縁から内面施釉、砂目、高台に砂付着	焼破	灰(輪)緑灰
73	煎茶陶器・碗	—	6.4	—	3/4	(外)灰筋「生」が1/1よりムラ内青筋輪・巻雲文、型打ち(右)内面、高台管付輪跡多	焼破	灰白(輪)緑灰(輪)灰白
74	瀬戸瓦器・鉢	—	—	—	全輪、輪の厚みにムラ、鉄筋、志野焼	焼良	淡黄白(輪)灰白	
75	瀬戸瓦器・鉢	—	—	—	全輪、輪の厚みにムラ、鉄筋、志野焼	焼良	淡黄白(輪)灰白	
76	瀬戸瓦器・鉢	11.6	6.8	2.5	□(-)底1/2	巻筋、菊花型押し、内外面施釉、玄黄焼	焼良	淡黄灰(輪)淡緑灰—白
77	瀬戸瓦器・天目碗	11.8	4.9	4.2	□(-)底1/4	天目輪(鉄輪)、口縁外反	焼良	灰白(底部)茶黒(輪)栗黒
78	中国製磁器・碗	—	4.9	1/1	蓮子輪、全輪、染付、高台内露筋「大明成化年製」、透漆修刷、景徳鎮	焼破	白(輪)透明	
79	中国製磁器・碗	—	4.9	1/2	染付(藍色系)、全輪、高台砂付着、滑り空	焼破	白(輪)白	
80	中国製磁器・皿	9.7	3.6	2.4	底1/4	染付、全輪、足込みに施文、薄手、高台断面シャープ、景徳鎮	焼破	白(輪)青白
81	煎茶陶器・鉢	—	4.7	1/2	全輪、白上刷毛目文様、高台砂付着	焼良	緑黄灰(輪)黄	
82	煎茶陶器・鉢	—	5.2	1/1	全輪、黒い貫入、高台砂付着、内野山空	焼良	灰白(輪)黄—緑	
83	陶器・鉢	—	—	—	水鉢、内外面施釉、貫入あり、型押し文、関西以東産	焼良	灰白(輪)青白	
84	陶器・土瓶	120	100	12.5	2/3	内外面施釉、外面下部口縁底部露筋、外面に「ヤシ」筋多、内外面露	焼良	灰白(輪)黄黒
85	信楽焼・土瓶	7.4	—	1/1	外面施釉、薄手	焼良	黄灰(輪)透明	
86	陶器・付付灯明具	5.0	5.2	5.5	1/1	(底)外糸ナリ、内外面施釉、底面露筋、貫入、磨面または関西系	焼良	灰(輪)青灰
87	信楽焼・付付灯明具	3.4	4.6	5.1	1/1	(内)外「タケ」ナリ、内外面施釉、底部外面露筋、貫入あり	焼良	灰白(輪)淡緑灰
88	陶器・人形	長30	幅22	厚10	断面欠損	表面に光沢(全輪)、底面に穿孔(径3.0cm深さ1.2cm)	焼良	灰白
89	煎茶陶器・盥	9.6	4.2	3.3	1/4	青筋染付、内外面施釉	焼破	灰白(輪)青白—淡緑
90	煎茶陶器・鉢	5.6	2.1	6.3	1/3	青筋染付、高台内露筋	焼破	灰白(輪)青白—緑灰
91	煎茶陶器・鉢	—	6.8	—	1/2	全輪、高台から高台	焼破	灰白(輪)黄—緑
92	煎茶陶器・鉢	—	2.7	—	2/3	染付、全輪	焼破	白(輪)透明
93	煎茶陶器小?・鉢	8.7	3.6	4.9	2/3	染付、全輪、高台砂付着	焼破	白(輪)青白
94	煎茶陶器・盥	10.4	—	2.4	1/3	染付、全輪・ムラがある	焼破	白(輪)青灰
95	鉢器・盥	9.0	—	2.8	1/3	染付、内外面施釉、筋十目	焼破	灰白(輪)青白
96	鉢器・盥	9.7	2.9	5.0	1/1	内外面施釉、手掻き文、高台内露筋「萬曆年製」、筋十目に光沢(関西系)	焼破	灰白(輪)白

図162 満59出土遺物4 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	残存	形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
75	須恵質・平瓦	11	136	2.4	—	(内)格子目印き(外)布目織、軟質	微砂	表灰
76	須恵質・平瓦	90	100	2.5	—	(内)格子目印き(外)布目織・ナデ、外面に格子目印きの粘土質	微砂	表裏灰
77	須恵質・平瓦	8	11	2.1	—	(内)格子目印き(外)布目織	微砂	灰
78	瓦質・平瓦	158	137	1.9	—	(内)工具ナデ(外)布目織	微砂	灰
79	瓦質・軒丸瓦	6	53	1.6	—	(内)押さえ・ナデ、巴文、軟質	微砂	灰
80	瓦質・軒平瓦	8.3	7	4.3~2.3	—	(内)工具ナデ(外)布目織、唐草文	微砂	釉灰~灰
81	瓦質・軒平瓦	6.2	138	1.8	—	磨滅、整理し文	微砂	灰~暗灰
82	瓦質・丸瓦	11	8	2	—	(内)襷目印き(外)工具ナデ、軟質	微砂	灰
83	瓦質・平瓦	9	92	1.9	—	(内)工具ナデ(外)襷目印き・工具ナデ、軟質	微砂	灰藍/灰
84	瓦質・丸瓦	8.5	7.6	1.8	—	(内)襷目印き(外)布目織、全体的に著しく磨滅	微砂	灰~暗灰
85	瓦質・平瓦	12.5	11.2	2	—	(内)(外)工具ナデ	微砂	黒灰
86	瓦質・平瓦	9.1	9.1	1.5	—	(内)ハナ目・格子目印き(外)工具ナデ	微砂	黒灰

図163 溝59出土遺物5 (縮尺1/4)

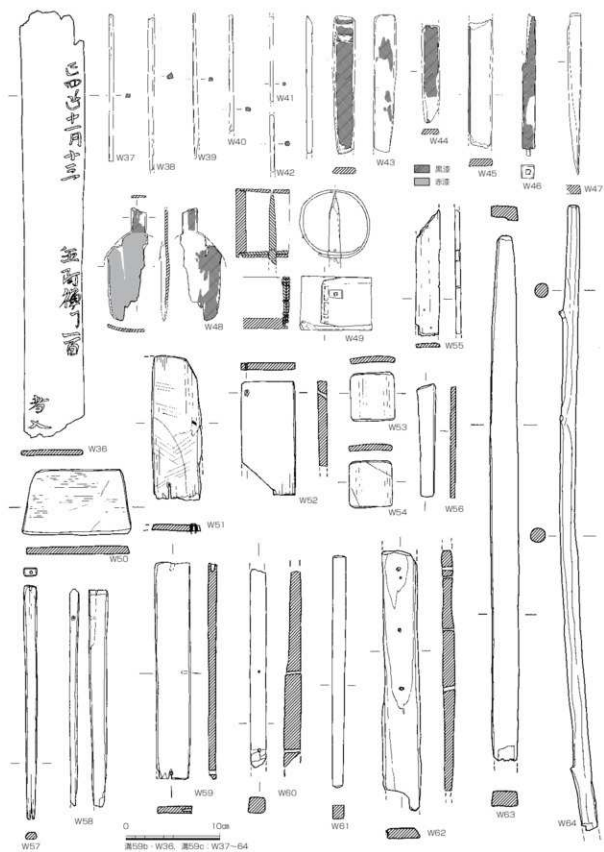


図164 溝59出土遺物6 (縮尺1/4)

溝59出土遺物6 (図164) の観察表

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	樹種	本取り	特 徴
W36	木箱	24.2	5.7	0.7	スギ	—	17字の墨書が残存〔×正四年十一月十三日〇〇金剛阿門一首。 者也。〕上・下端とも欠損
W37	箸	6.1	0.5	0.5	スギ	削りだし	丸箸、両端欠損
W38	箸	12.4	0.5	0.4	スギ	割材	角箸、上端欠損
W39	箸	16.2	0.7	0.6	スギ	割材	角箸小、両端欠損
W40	箸	15.6	0.5	0.4	スギ	割材	角箸
W41	箸	15.5	0.5	0.4	スギ	割材	角箸、上端欠損
W42	箸	9.1	0.4	0.35	スギ	割材	両端欠損
W43	漆塗り加工木	14.6	2.4	0.6	ヒノキ	造い椀目	全面に漆塗布。上部に漆が確認されない凹状部あり(1cm幅)。上・下端に縦線状の溝、材の組合せ部の可能性。上端以外欠損
W44	漆塗り加工板	10.4	1.9	0.6	ヒノキ	板目	表裏に漆塗布
W45	漆塗り加工木	13.6	2.5	0.75	スギ	造い椀目	片方縦線に漆塗布
W46	漆塗り加工木	15.0	1.4	1.4	ヒノキ	割材	下端に駒と側面に挟り1箇所、4面漆塗りで駒・挟り部にも僅かに残存
W47	加工木	17.0	1.5	0.9	ヤシ属	造い椀目	片面炭化し黒色
W48	杓子	12.0	4.0	0.3	タリ	椀目	全体に黒色漆塗布の後に杓子の裏部分に赤色漆塗布。赤色漆の細毛目明確。全面欠損
W49	割板	5.7	7.6	8.0	ヒノキ	板目	曲物部はぼ定符、本体に差込まれた柄の先端が残存。曲物部と柄は釘で固定(曲物内外側に釘穴あり)
	スギ				椀目		
	スギ				割材		
W50	加工木	6.9	11.4	0.8	イチイガシ	板目	片面に横方向の溝
W51	折敷板	15.4	5.4	0.8	ヒノキ	板目	縦7度1箇所、下方に穿孔1箇所(径0.3cm)、片面に不定方向の傷。転用可能な板か
W52	加工木	12.1	5.7	0.8	スギ	造い椀目	斜位に開けられた釘穴1箇所(径0.3cm)
W53	板材	4.9	4.7	0.7	ヒノキ	板目	やや湾曲。外面に無数の傷
W54	板材	5.0	4.8	0.8	ヒノキ	板目	W53とは同一個体で組み合い、縁となる可能性あり
W55	加工板	13.5	2.6	0.5	スギ	椀目	縦線に穿孔(径0.2cm)と挟り(長さ0.5cm、深さ0.2cm)
W56	板材	12.0	1.6	0.7	ヒノキ	造い椀目	両端炭化
W57	加工木	24.9	1.4	1.1	スギ	割材	上端に径0.3cm・深さ0.5cmの穴1箇所
W58	加工木	23.1	1.6-2.0	0.8	スギ	板目	側面上方に径0.3cmの穴1箇所
W59	加工木	22.8	3.7	0.75	アカマツ	板目	上下両端と側縁1箇所の計3箇所に方形の釘穴
W60	加工木	21.1	1.8	1.8	アシナロ	割材	面の中央と下方に径0.3cmの釘穴2箇所、両端欠損
W61	加工木	24.5	1.4	1.4	スギ	割材	断面方形
W62	加工木	27.5	4.1	1.1	アカマツ	板目	径0.3cmの方形釘穴が上下に等間隔に3箇所、最上部の釘穴のFに径0.2cmの小釘穴1箇所
W63	加工木	55.5	3.0	1.5	スギ	板目	上端に向けて細く加工
W64	加工木	66.1	1.6	1.4	ヒノキ	丸木	下端欠損

レペルや溝の掘削時期を考えると、最も古い1463年である可能性が高いものと考えている。

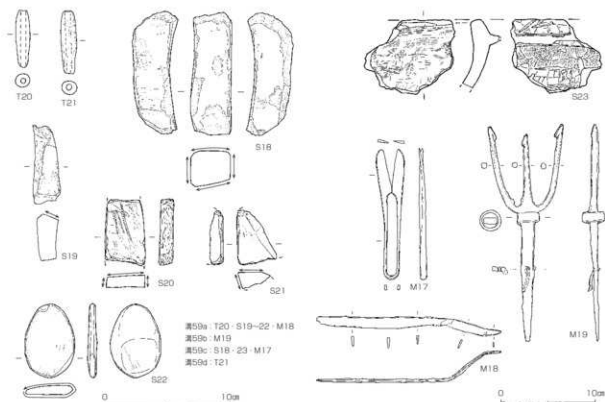
漆塗り加工木(同-W43~46)は、いずれにも黒漆を一面あるいは複数面に塗布する。塗布のされない箇所は接合面と考えられる。同一個体の可能性があり、箱のような製品の部材を組み合わせた後に、漆を塗布したものであろう。杓子(図164-W48)は全体に黒漆で仕上げられているが、内面には赤漆を塗布する。そのほかに、釘穴等を有する加工された材(同-W59・60・62)があり、何らかの部材であったものと考えられるが、全形や用途は判断しがたい。

石器と鉄器には、砥石(図165-S18~22)、滑石製石鍋(同-S23)、鉄製鋏(同-M17)、鉄製ヤス(同-M19)が出土している。また動物遺存体には、ウシ・ウマ・イネネコ・イスが同定されている。ウシは13点と点数が多く、大半は腕、足の部位である。

本溝の時期は、出土遺物から14世紀後半~17世紀初頭である。〈4 a 層〉は14世紀中頃に形成されており、その時期にさかのぼることは十分に考えられる。溝の終焉については、16世紀末~17世紀初頭に多くの遺物が認められ、その時期に埋没したものであろう。溝59全体では、備前焼は14世紀後半から16世紀初頭と、16世紀末~17世紀代の二つの時期にまとめられ、その間が欠落している¹³⁾。(岩崎・南)

註

- 1) 久野修義・山本悦世 2000『鹿田遺跡』『木簡研究』第22号
- 2) 註1に同じ
- 3) 桑田実氏の御教示による



番号	部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	形状・手法	粘土	色調
T20	土鏃	4.5	1.15	1.1	6.0	1/1	ナデ、孔径0.35cm		灰砂
T21	土鏃	5.0	1.2	1.1	8.5	1/1	ナデ、孔径0.4cm		灰砂 淡黄白～黒灰
番号	部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	石材	特徴	
S18	礫石	9.5	3.2	2.8	139.3	1/1	流紋岩	4面使用、角柱状、3面磨滅して凹む、1面は粗い砥面、一部に僅	
S19	礫石	5.7	3.8	1.6	26.8	1/1	砂岩	1面使用	
S20	礫石	5.2	3.2	1.0	31.0	上下欠損	流紋岩	上下部欠損、砥面3面、他の1面にも磨痕残存	
S21	礫石	4.3	3.1	1.3	16.1	1/2	流紋岩	小型、破損後も使用	
S22	礫石	5.8	4.0	0.7	21.9	1/1	砂岩	扁平な円盤素材、両平面と側面使用	
S23	石鏃	7.7	9.2	1.2～1.9	234.0	1/1～	流石	(内)磨滅・孔径・磨痕残存・通行痕 (外)面取り加工痕	
番号	部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴		
M17	鎌	13.8	3.0	0.7	21.6	1/1	握り鉄、刃部全磨滅と0.07cm		
M18	刀子	30.4	1.1	0.3	16.9	1/1	刃部屈曲、刃部と柄の境に段を持つ		
M19	ヤス(鏃)	22.8	7.9	0.6	104.3	1/1	2支、先端に返しがつく、目釘・金輪残存		

図165 溝59出土遺物7 (縮尺1/3・1/4)

溝60・61 (図136・166)

調査区北西部、CD-CG38・39区において、<4 b層>上面で検出された。39ラインを境に西側に溝60、東側に溝61が、同ラインに沿って南北に走る。軸方向は北が東に15度傾く。両溝の先後関係は、重複部分の多くが側溝で消失したため平面的には不明瞭であったが、調査区北壁断面の状況から、西側の溝60が東側の溝61に先行すると判断される。また、断面観察から、両溝の本来の掘削面は<4 a層>であり、同層対応時期に属すると考えられる。

両溝の北端は調査区外に延びるが、南端はCHライン付近で溝62と接して姿を消す。残存長はいずれも18m程度である。埋土についても際立つ差は見いだせない。

以上のように、両溝はその位置関係や埋土の状態から、機能面も含めて連続的に形成された溝と評価される。室町時代の屋敷地を区画する溝と考えられる。両溝の詳細を以下に述べる。

溝60: 検出高は標高1～0.8mであるが、断面観察からは同1.2mまで上昇する部分が確認されている。底面は、a断面から南端に向けて、標高0.84mから0.5mに下降する。深さは0.3m程度であるが、残存状況が悪い部分で

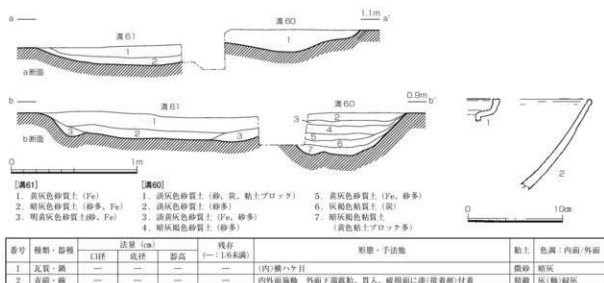


図166 溝60・61断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

は0.15m程度を測る。幅は0.8m～1.1mが残存する。

埋土は、北側 (a 断面) では単一層であるが、南側 (b 断面) では六層に細分される。前者 (1層) では、灰色あるいは淡褐色の砂質土で一部に粘土ブロックや炭を含む。後者では、上層の2～5層は前者と同様に砂質土で砂を多く包含する特徴を示すが、下層の6～7層は粘性を高めた粘質土で砂を含まない。6層では炭化物、7層では粘土ブロックが確認され上層との違いをみせる。底面の下降に伴って、南側では下部に粘土層が堆積したと考えられる。

出土遺物は小～細片で25片のみである。吉備系土師器碗、土師器皿・鍋が含まれ、比較的残りの良い碗も含まれるが、溝61との関係性の高さや先後関係からも、同溝と同様に室町時代、15世紀頃と考えられる。

溝61: 上面は標高0.9～0.8mを測るが、北壁断面では同1～1.2mまで上がる可能性がある。底面は北側で同0.75m、南側では同0.6mとなり、南に向かって傾斜する。深さは0.2m前後、幅は1.9～1.6mが復元される。

埋土は、灰色砂質土で下半は砂を含む。特に2層では多くラミナ状をなす。北端部ではやや褐色を強めるが、いずれも類似性が極めて高い土層である。

出土遺物量はコンテナ (28リットル/箱) 1/3箱程度である。吉備系土師器碗、土師器皿・鍋を中心に同壺、瓦器、須恵器、瓦質鍋、輸入陶磁器などを含む。主体をなすのは14世紀初頭前後のものであるが、いずれも小～細片であり混入遺物と考えられる。その中で、注目されるのが青磁の碗である (図166-2)。井戸9では本遺物と同一個体の可能性が考えられる破片が出土している。小片ではあるが、遺構の廃棄時の同時性を示すことが窺われる。

本溝の時期は、本来の掘削面が<4層>と判断される点や井戸9との同時性から15世紀代の可能性が考えられる。

溝62 (図136・167)

調査区西端部、38ライン付近以西において、CHラインを東西方向に走る溝である。軸方向は北が西に75度傾く。39ライン以西については、攪乱によって南側を破壊される。本溝の北側ラインの位置は、平安時代後期に属する溝32の同ラインにはほぼ一致する。また、溝60・61に対しては、本溝が両溝上に位置することが平面調査において確認されているが、同時性を否定するものではない。

また、埋土の観察から2条の流路痕跡が認められた。特に溝60・61より東側では比較的明瞭にその痕跡を窺うことができる (b 断面)。ただし、攪乱によって南側流路についてはその多くが消失している。

調査の記録

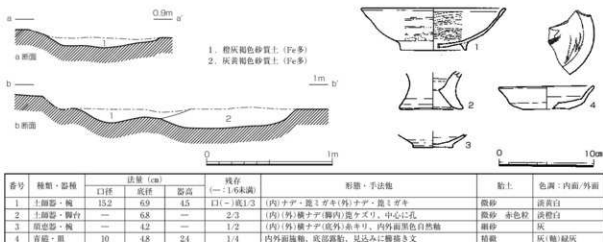


図167 溝62断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

検出面は<4 b層>で、標高0.85~0.9mである。ただし、層序の検討から<4 a層>に対応する溝と判断された。底面は東側で同0.67m (b断面)、西側では同0.65m (a断面)を測る。深さは0.3~0.25m、掘り方断面形は皿状を呈する。溝の幅は約2.4mであるが、下層に残る2条の流路では、いずれも1.2m前後の幅が復元される。

埋土は二分したが、全体に灰褐色系の砂質土をベースに鉄分の沈着以外に汚れの少ない層として類似性が高い。1層が新段階の溝、2層が古段階の溝に対応する。

出土遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ /箱) 約1/2箱である。吉備系土師器碗と土師器杯・皿を中心に、土師器鍋・壺・脚台、須恵器碗・甕・すり鉢、輸入陶磁器などを含む。鎌倉時代 (13世紀前半~後半) の遺物が主体をなすが、いずれも小~細片であり、埋土に伴う混入遺物と判断される。その中には溝32の時期である平安時代後期に遡る遺物も少量含まれている。同溝との位置関係から、直接的関係は確認できないが、それに関連した遺物が混入したことも予想される。

本溝と、前述した溝60・61とは、その配置に加えて、形態の特徴や埋土の状態においても共通性は高く、南北溝と東西溝の関係として結びつく可能性が想定される。切り合い部における底面レベルの差についても、5cm内外の差であり、連結を考える上で許容範囲といえよう。本溝の新・古段階の溝が溝60・61に対応する可能性を考えたい。

以上の状況から、本溝の時期は室町時代、15世紀を中心とした時期が想定されるが、下限については16世紀まで可能性を残す。

(山本)

第5節 近世の遺構・遺物

江戸時代に対応する<3層>では、土坑14基、墓1基、溝3条を検出した (図168)。

a. 土坑

土坑18 (図169・170)

C121~22区に位置する。西側には土坑19・20が位置する。南端は掘乱によって失われている。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.28mである。底面の標高は0.57mで、深さは0.71mである。平面形は上面・底面ともに円形である。規模は上面が径1.89m程、底面が1.22×1.12mを測る。断面形は碗状である。

埋土は九層に分層されるが、砂質土が主体の1・2層と、粘質土と粗砂層が互層状に堆積する3~9層に大別

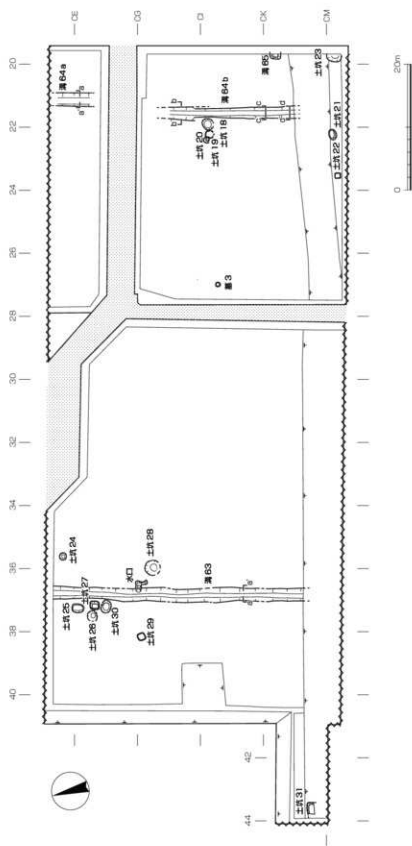


図168 江戸時代遺構全体図 (縮尺1/600)

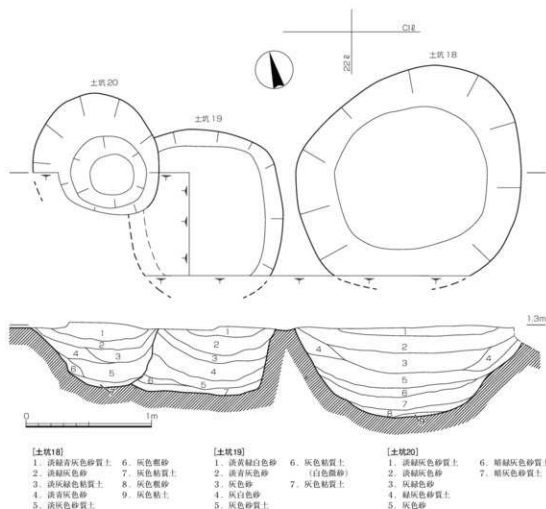


図169 土坑18～20 (縮尺1/30)



図170 土坑18出土遺物 (縮尺1/4)

される。6層からは土器が出土している。

遺物は13号ポリ袋1/4袋が出土しており、土師器・陶磁器の小細片が含まれる。図170～T22は備前焼の薬研車であり、全体の1/4が残存している。

本遺構は検出面と出土遺物から江戸時代、17世紀前半のものであると考えられる。

土坑19 (図169、図版35)

C122区に位置する。北西角を土坑20に切られている。南西部の約半分を攪乱により欠くが、平面形は隅丸方形に復元される。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.28m、底面の標高は0.75mで、深さは0.53mである。断面形は箱形である。上面は残存部で最大1.16m、底面は同様に1.02mを測る。

埋土は七層に分けられ、2～6層は鉄分の沈着が顕著である。1層は淡黄緑白色砂、2～5層は灰色系の砂質土、6・7層は灰色系の粘質土である。出土遺物は見られなかった。

土坑19は検出面から江戸時代と考えられる。

土坑20 (図169、図版35)

CM122区に位置する。<3層>で検出し、標高1.28mである。上面の南半を欠くが、平面形は上面が楕円形に復元でき、底面は正円形を呈する。底面の標高は0.82m、深さは0.46mである。規模は上面の長軸が1.12m、残存部で短軸が1.0mで、底面は径0.32mである。断面形は椀状である。

埋土は七層に分けられる。砂質土が主体であり、下方にいくにつれて色調は暗くなる。3層に土器片を含む。

本土坑の時期は検出面から江戸時代と考えられる。

土坑21 (図171、図版35)

CM22区に位置する。検出面は<4 a層>で、標高は1.24m、底面の標高は最深部で0.36m、深さは0.88mを測る。平面形は東西方向に長い楕円形で、上面の規模は1.69m×1.22m、底面の規模は1.2m×0.67mである。断面形は逆台形だが、南側は段がある。

埋土は四層に分けられる。すべて粘質土で、1層は鉄分・マンガン含有が顕著である。2層は礫を含みその大きさにより細分した。3・4層は特に粘性が強い。

出土遺物は13号ポリ袋1/3袋があり、いずれも小細片であった。<4 a層>で検出したが、断面形状が他の<3層>検出土坑と類似性が高く、同層対応と判断した。

本遺構の時期は江戸時代であると考えられる。

土坑22 (図172、図版35)

CM23区に位置する。検出面は<3層>で、標高は1.39m、底面の標高は0.4m、深さは0.99mである。ほとんどの部分で掘り方の上面が失われているが、わずかな残存部からは平面形が方形であったことが窺われる。底面の形態も方形である。規模は上面が0.93m×0.91m(残存部)、底面が0.75m×0.7mを測る。断面形は箱形で、上面に向かってわずかに開く。

埋土は五層に分けられる。すべて粘質土あるいは粘土である。4・5層は色調が類似するが、4層が橙褐色粘質土ブロックを多く含むのに対し、5層はこれが少ない。

出土遺物には瓦があるが、他は出土していない。

本遺構の時期は検出面と出土遺物から江戸時代と考えられる。

土坑23 (図173)

調査区の東南角、CM19区に位置し、東側約半分は調査区外となる。検出面は<3層>で、標高は1.27m、底面は同0.18m、深さは1.09mである。平面形は上面・底面ともに南北に長い楕円形に復元できる。規模は上面の長軸が2.38m、短軸が残存部で0.94m、底面の長軸は1.12m、短軸は残存部で0.4mを測る。断面形は椀状

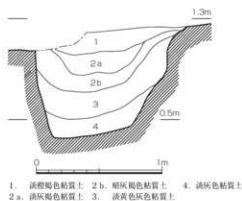
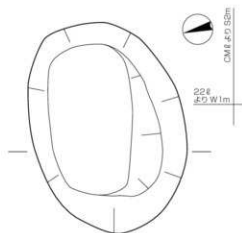


図171 土坑21 (縮尺1/30)

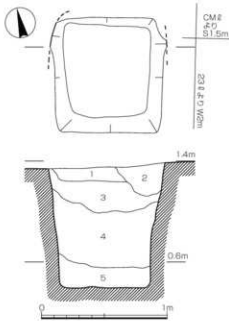


図172 土坑22 (縮尺1/30)

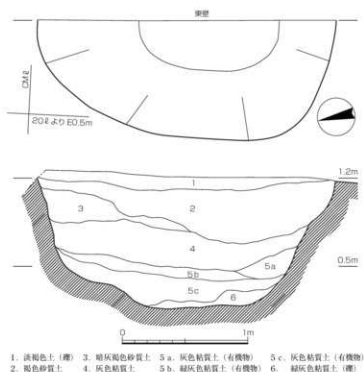


図173 土坑23 (縮尺1/30)

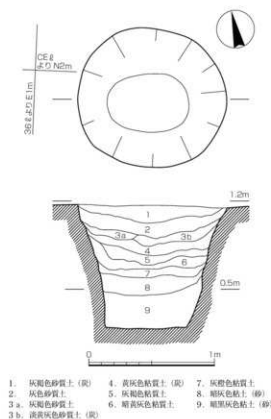


図174 土坑24 (縮尺1/30)

で、底面は長軸の中ほどで低い段をなす。

埋土は6層に分けられる。1～3層は褐色系の砂質土で、1層の下半には細礫が多く含まれる。4～6層は粘質土である。4層からは遺物が出土している。5層は有機物・糞の入り方で細分した。6層は底面で小礫が多く確認された。

時期を決められる出土遺物はなかったが、検出面から本遺構の時期は江戸時代と考えられる。

土坑24 (図174、図版35)

CD35区で確認された。検出面は<3層>で、標高は上面が1.17m、底面が0.18m、深さは0.99mである。平面形は上面が円形で、底面は東西に長い楕円形である。規模は上面が1.19m×1.11m、底面が0.65m×0.46mである。断面形は逆台形である。

埋土は九層に分けられ、土質や含有物によって四群にまとめることできる。1群(1～3層)は灰色系の砂質土で、1・3層は炭化物を含む。2群(4・5層)は粘質土で、4層は炭化物や土器片を含む。3群(6・7層)は粘質土で、下面には鉄分の著しい沈着が確認される。4群(8・9層)は暗灰色系の粘土で、8層には細砂、9層には細砂・粗砂が含まれる。これらは埋め戻しの単位を示していると思われる。

出土遺物は少なく、ポリ袋(12号)に1/4袋ほどで、いずれも小片である。

本遺構の時期は検出面から江戸時代と考えられる。

土坑25 (図175、図版35)

CD・CE37区に位置し、溝59に重複する。検出面は<4a層>で、標高は1.38m、底面は同0.81m、深さは0.57mである。平面形は南北に長い楕円形で、上面の規模は残存部で1.9m×1.4m、底面は1.52×0.82mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は、1・2層は明灰褐色砂質土が主体で、3層は暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

本遺構は<4a層>検出であるが、溝との切り合い関係から、<3層>帰属と判断した。時期は江戸時代と考えられる。

土坑26 (図176)

CE37区に位置する。西側は調査区外にあたる。検出面は<3層>で、標高は1.24m、底面は同0.68m、深さは0.56mを測る。平面形は上面・底面ともに円形である。規模は上面が残存部で1.53m×1.4m、底面が0.78m×0.68mである。断面形は碗状である。

埋土は五層に分けられる。1・2層は類似する砂質土であるが、色調は2層の方が暗い。また3~5層は褐色系の粘質土で、4層には炭化物を含む。遺物は出土していない。

本遺構は検出面から江戸時代と考えられる。

土坑27 (図177、図版36)

CE37区に位置し、溝59aに重複する。検出面は<4 a層>で、標高1.36m、底面は同0.76mである。平面形は隅丸方形だが、底面は南北方向に長くなっている。規模は上面が1.49m×1.49m、底面が1.0m×0.7mである。断面形は箱形と判断される。

埋土は1・2層は砂質土、3層は粘質土で堆積状況が異なる。遺物は小片がわずかに出土したのみである。

本遺構は<4 a層>検出であるが、溝との切り合い関係から<3層>属と判断し、時期は江戸時代と考えられる。

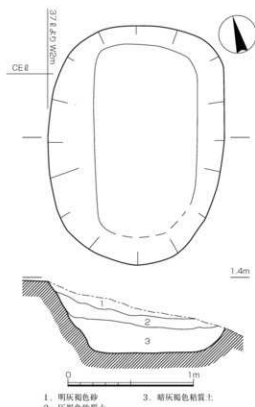


図175 土坑25 (縮尺1/30)

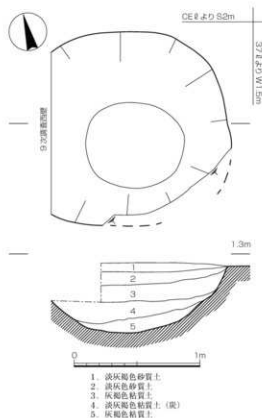


図176 土坑26 (縮尺1/30)

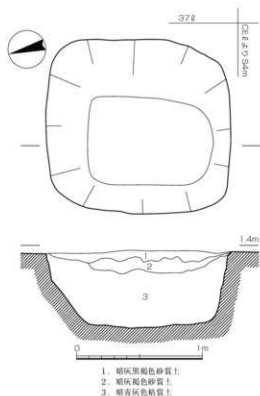


図177 土坑27 (縮尺1/30)

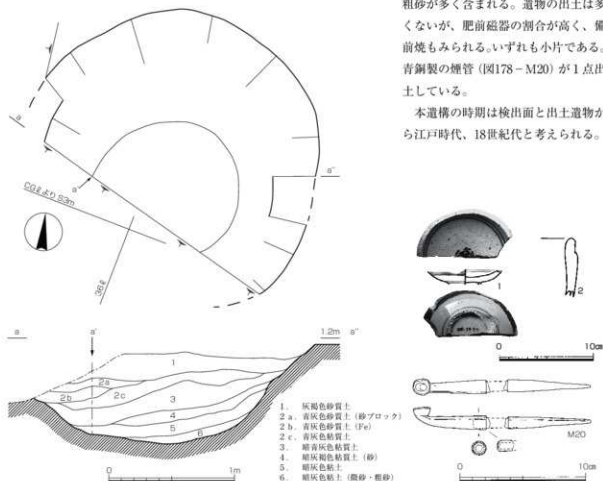
土坑28 (図178、図版36・46)

CG35・36区に位置する。攪乱によって西側から南側が失われている。検出面は<3層>で、標高は1.06m、底面は同0.35m、深さは0.71mである。平面形は円形で、規模は上面が径2.43m、底面が径1.12mを測る。断面形は碗状である。

埋土は土質・含有物から四群にまとめられる。1群(1層)は灰褐色砂質土で含有物は少ない。2群(2層)は青灰色を呈し、粗砂ブロックを多く含む2a層、鉄分の沈着が目立つ2b層、粘性のある2c層に細分できる。3群(3・4層)は粘質土で、4層は微砂の含有が顕著である。4群(5・6層)は暗灰色粘土で、6層は微砂・

粗砂が多く含まれる。遺物の出土は多くないが、肥前磁器の割合が高く、備前焼もみられる。いずれも小片である。青銅製の煙管(図178-M20)が1点出土している。

本遺構の時期は検出面と出土遺物から江戸時代、18世紀代と考えられる。



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (←:1.6未満)	形態・手法	胎土	色調・内面・外面	
		口径	底径	器高					
1	肥前磁器・碗	—	3.4	—	1/3	染付、内外面施釉、手掻き五年花文	磁土	白(施)透明	
2	備前焼・壺?	—	—	—	—	(1) 横ナデ(内)ハケ目(外)横ナデ・沈線3本	磁砂	暗黒/暗灰褐色	
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴		
M20	煙管	5.8	1.1	1.1	8.3	1/1	火眼と葎首の境目・葎首と吸口を隔てる際の混合直線、葎首・吸口に鎌字残存、吸口端部凹む。葎字の材質は不明(竹か)	青銅	
	煙管	6.6	0.9	0.9	4.3	1/1			

図178 土坑28・出土遺物 (縮尺1/30・1/4・1/3)

土坑29 (図179、図版36)

CG38区で確認された。<3層>で検出し、標高は上面が1.15m、底面は同0.48m、深さは0.67mを測る。平面形は方形で、規模は上面が1.2m×1.18m、底面が0.98m×0.91mである。断面形は箱形である。

埋土は5層に分層される。2～5層は類似した土層だが、炭化物やブロックの入り方により分けることができる。遺物は備前焼や陶磁器などがポリ袋(12号)で1/3袋出土しており、いずれも小破片である。

本遺構の時期は検出面から、江戸時代と考えられる。

土坑30 (図180)

CE・CF37区に位置する。<3層>で検出した。検出面の標高は1.09m、底面は同0.47m、深さは0.52mである。平面形は上面・底面ともに楕円形である。規模は上面の長軸2.04m、短軸が残存部で1.45m、底面の長軸は1.18m、短軸は0.98mを測る。断面形は椀状で、西側は段を有する。

埋土は5層のみが粘質土で、他はすべて砂質土である。全体に含有物は少ないが、3層には白色微砂と鉄分の沈着が顕著にみられる。出土遺物には肥前磁器や瓦があるが、小片である。

本遺構の時期は検出面と遺物から江戸時代、18世紀前後と考えられる。

土坑31 (図181、図版36)

CL43区に位置する。<3層>で検出し、標高は上面が0.8m、底面が0.53m、深さ0.27mである。北東の1/4のみが残存する。平面形は東西軸が長方形と判断される。規模は残存部で、上面が1.89m×1.17m、底面が1.59m×0.9mを測る。断面形は皿状である。

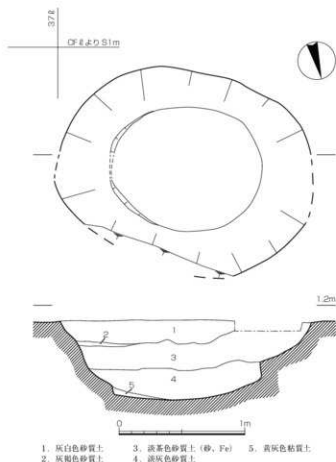


図180 土坑30 (縮尺1/30)

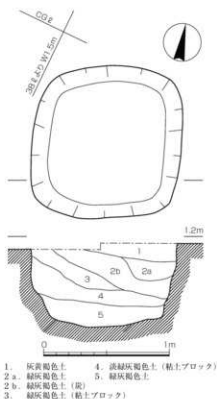


図179 土坑29 (縮尺1/30)

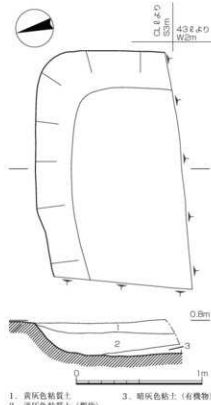


図181 土坑31 (縮尺1/30)

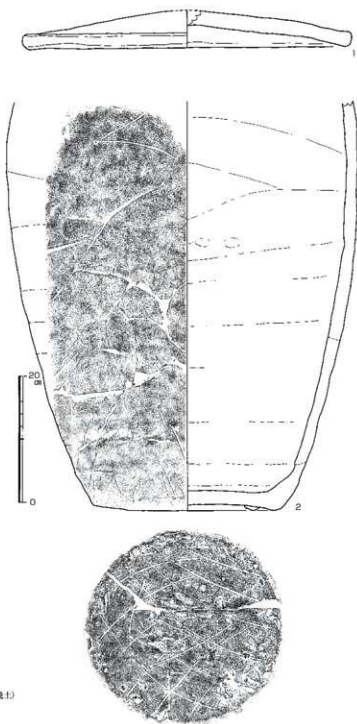
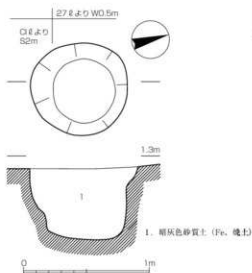
埋土は1層が黄灰色粘質土、2・3層は灰色系の粘質土～粘土で、2層には粗砂、3層には有機物が含まれる。遺物は中世の土器小細片30点ほどがあり、瓦質の火鉢片などが出土した。本遺構は検出面と遺物から江戸時代と考えられる。

b. 墓

墓3 (図182、図版42)

調査区中央東寄り、C127区に位置する。造成土除去時に墓上部にあたったことで検出した。断面観察などから掘削面は<3層>に対応すると思われる。標高は1.22m、底面は同0.63m、深さは0.59mである。掘り込みは上面・底面とも正円形に近く、規模は上面0.77m×0.73m、底面0.51m×0.49mを測る。断面形は箱形である。

出土した甕(図182-2)は口縁部を欠くが、前述したような出土状況から、本来打ち欠いたものか、削平による欠損か



番号	種類・形種	法量 (cm)		残存 (—1.16未満)	形態・手法施	胎土	色調:内面/外面
		口径	口径				
1	筒前焼・甕	52.4	—	6.0	5/6	厚さ2.4cmの筒状。甕前焼の残き台(甕道具)の胎土、内面にまね焼き痕(直径約14cm/7箇所)	細砂 橙赤～赤赤灰・赤灰～灰
2	筒前焼・甕	—	30.5	—	1/1	外面自然釉。好部に笠印、(底外)鹿蹄き網目文・Z形編刺(笠印)・墨書	細砂 赤灰/赤灰～灰白(瓦)粒施

図182 墓3出土遺物 (縮尺1/30、1/6)

は不明である。蓋については土坑から出土したものではない。周辺部で見つかったものであるが、大きさが甕と合致していることから、造成土除去時に離れたもので、甕に伴うものと判断した。蓋は焼き台を転用したものである。甕には肩部と底部外面に線刻が多く、底部外面には墨書が認められるが、判読はできなかった。

本遺構の時期は甕の形態から江戸時代、17世紀前半と考えられる。

(南)

c. 溝

江戸時代に対応する<3層>では溝3条を検出した。南北方向の溝2条(溝63・64)と東西方向の溝1条(溝65)である。前者の南端については、CLライン以南が削平され消失している。この位置には東西方向の溝が存在することは確認されているが、造成土除去時に削平されている。この東西方向の溝と、37ラインの南北方向の溝の位置は、前代から踏襲されており、大区画をなす溝である。

溝63 (図183・184、図版42・46)

調査区西側37ラインを南北方向に走る。軸方向は北が東に15度傾く。<3層>上面で検出し、標高は北端で1.45m、南端で1.5mである。底面は北側で同0.8mを測り、南側で同0.5mへと下降する。溝の深さは0.65m、幅は2m前後である。断面形は逆台形を呈する。埋土は青灰色粘土ブロックが混在する青灰色あるいは灰褐色の砂質土(1・2層)、灰褐色系の砂質土(3・4層)と灰色あるいは淡緑灰色の粘質土(5・6層)とに二分され、掘り方の形状から、掘り返しの可能性が考えられる。

本溝には東側の肩に水口を1箇所を確認した。検出面は標高1.25mである。緩やかな傾斜をもって、溝の底面へと続く。この地点の溝の底面は標高0.7mであり、水口の位置で特にくぼみをもつ状況は見られない。平面形は東西長1.8m、幅0.9mの楕円形を呈し、その東端から南に1m程の水路がつく。水口の埋土は灰褐色あるいは青灰色の砂質土(1・2層)と、青灰ないし緑灰色を呈する砂層(3~5層)とに大別される、下半の砂が厚く堆積しており、水の流れが窺える。

溝63の出土遺物量は、コンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)2箱で、その内訳は吉備系土師器碗・皿・鍋等の小細片2/3箱、備前焼1/2箱、陶磁器類1/2箱、瓦1/3箱である。備前焼の甕(図184-1)は17世紀初頭、水屋甕(同-

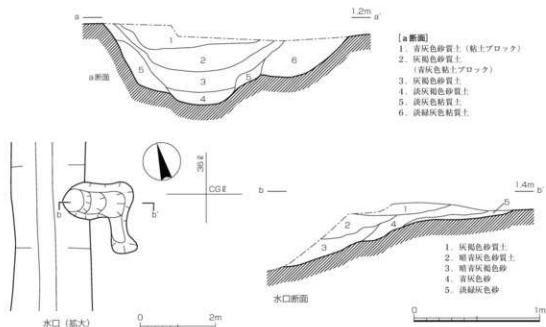


図183 溝63 (縮尺1/30・1/100)

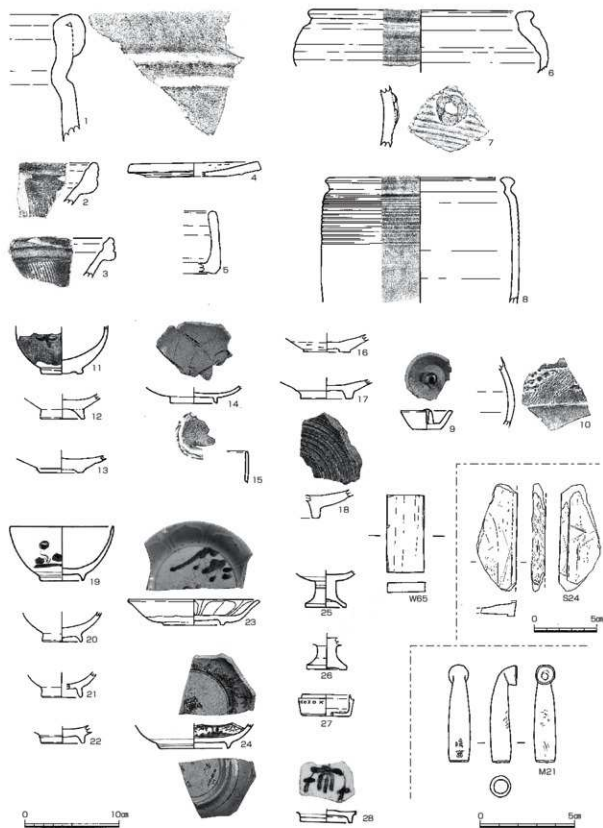


図184 溝63出土遺物 (縮尺1/4・1/3・1/2)

溝63出土遺物 (図184) 観察表

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 (一:1/6未満)	形態・手法集	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高				
1	焼曲碗・葉	—	—	—	(内) (外) 横ナデ, 口縁部白熱焼 (灰白色)	磁砂	暗褐色/灰褐色	
2	焼曲碗・すり鉢	—	—	—	(内) (外) 横ナデ, 口縁部茶ね焼	磁砂	暗褐色/暗灰褐色~暗灰	
3	焼曲碗・すり鉢	—	—	—	(内) (外) 横ナデ, 口縁部茶ね焼	磁砂	灰褐色	
4	焼曲碗・蓋	141	—	11~15	(内) 横ナデ (外) 長ナデ	磁砂	暗褐色/紫灰褐色	
5	焼曲碗・厚鉢	—	—	66	(内) (外) 横ナデ (成) 長ナデ	磁砂	暗褐色/緑灰	
6	焼曲碗・水屋茶	24.0	—	—	(内) (外) 横ナデ, 口縁部茶ね焼	磁砂	暗灰白/茶褐色	
7	焼曲碗・水屋茶	—	—	—	(内) 横ナデ (外) 凹底, 輪状口	磁砂	茶褐色/赤褐色	
8	焼曲碗・水屋茶	30.0	—	—	(外) キキ目, 口縁内面から外面にかけて赤色化粧土	磁砂	淡茶褐色/赤褐色	
9	土師貫・灯明具	5.4	3.0	2.0	灯芯部先端に椀付着	磁砂	褐色	
10	瓦質・鉢	—	—	—	(内) ナデ (外) 横ナデ, 燈輝土	埴土	黒灰/茶	
11	肥前陶器・碗	—	4.6	—	内外面施釉 (灰釉) 高台露胎, 鉄絵	埴土	灰白(釉)灰白	
12	肥前陶器・碗	—	4.7	—	全釉 (灰釉), 壺付砂付着	埴土	灰白(釉)淡緑灰	
13	肥前陶器・碗	—	4.6	—	内外面施釉, 髹土と茶色点状化粧, 貫入あり, 内面露胎, 壺付砂付着	埴土	灰白(釉)緑灰	
14	肥前陶器・碗	—	—	—	京焼風, 高台露胎, 高台内に刷印「清水」, 内面露胎	埴土	茶色絞 黄白(釉) 灰	
15	肥前陶器・碗	—	—	—	京焼風, 内外面施釉, 貫入あり, 内野山窯	埴土	茶色絞 黄白(釉) 灰	
16	肥前陶器・鉢	—	5.0	—	内外面施釉	埴土	茶褐色(釉)灰褐	
17	肥前陶器・鉢	—	5.4	—	内外面施釉, 髹土下層から高台露胎	埴土	茶褐色(釉)灰褐	
18	肥前陶器・鉢	—	—	—	内外面施釉	埴土	茶褐色(釉)緑	
19	肥前陶器・鉢	11.0	4.5	5.8	壺付, 全釉	磁砂	白(釉)茶青白	
20	肥前陶器・鉢	—	4.2	—	手刷化粧, 全釉, 見込みの輪縁を敷り, 見込みと壺付砂付着	磁砂	白(釉)白/淡緑	
21	肥前陶器・鉢	—	4.3	—	高台露胎に砂付着, 全釉, 輪にムラ(生けり), 割附伊子窯	磁砂	白(釉)青白	
22	肥前陶器・鉢	—	4.6	—	壺付, 内外面施釉, 壺付砂付着	磁砂	灰白(釉)淡青白半透明	
23	肥前陶器・鉢	14.0	6.4	2.7	壺付, 壺打ち (内) 赤目肌, 全釉, 壺付砂付着	磁砂	白(釉)淡青白	
24	肥前陶器・鉢	—	7.4	—	壺付, 全釉, 見込みにコンキヤ印(五右衛門), 高台内に施	磁砂	白(釉)灰白	
25	肥前陶器・仏龕器	—	4.3	—	内外面施釉 髹土露胎, 貫入あり	磁砂	灰白(釉)青白	
26	肥前陶器・仏龕器	—	4.2	—	内外面施釉, 下層から露胎	磁砂	灰白(釉)灰白	
27	肥前陶器・仏龕器	5.2	3.0	2.3	全子倉, 内外面施釉	磁砂	白(釉)淡青白	
28	中国磁器・碗	—	5.5	—	全釉, 壺付・文様不明, 壺付砂付着, 涼州窯	磁砂	白(釉)青白	

番号	器種	残存径 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	縦横	本取り	特徴
W65	木札	8.2	4.0	1.0	スズ	掘り越目	長方形加工

番号	器種	残存径 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	材質	特徴
S24	壺	8.4	3.2	0.4~1.1	35.8	—	船形窓	両面露胎, 片面は中央凹む

番号	器種	残存径 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	特徴
M21	壺	5.1	1.1	1.1	12.5	1/1	壺首部分, 管内に「藤」の木質残存(竹か), 黒(青)色

溝64 (図185・186, 図版43・44・47)

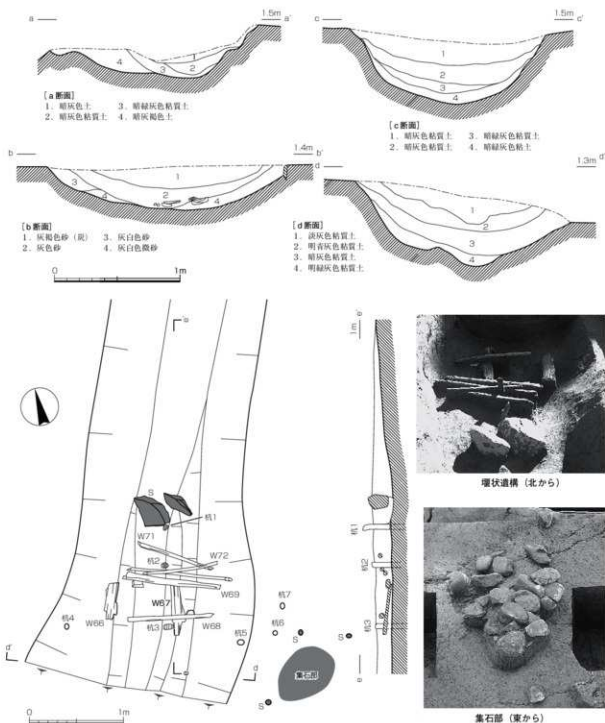
調査区東側の21ライン付近を南北方向に走る。<3層>で検出した。この溝はCFライン以北では21ラインの西1mに、CGライン以南では21ラインの西2mを走り、位置関係には1mのずれがある。そのため連続した溝とするには疑問が生じるが、いずれも北が東に15度傾く方向が一致し、後述するように、溝の形状、埋土の類似性の高さから、両者は一連の機能を有するものと考え、北側を溝64a、南側を同bとした。また調査区南壁において、溝64bが確認できず、CMライン以南に延びないことは確実である。

溝64aは、検出面の標高1.45m、底面は同1.03mを測る。調査区北端から長さ5mを検出した。断面形は皿状で、深さ0.42mが残る。埋土は暗灰色粘質土を主体とする。出土遺物には、吉備系土師器椀(図186-1)、土師器皿(同-2)、須恵器鉢(同-3)、砥石(同-S25)が含まれる。土師器類は13世紀前半に属するもので、本溝の下位に位置する古い時代の遺構に由来するものと考えられる。

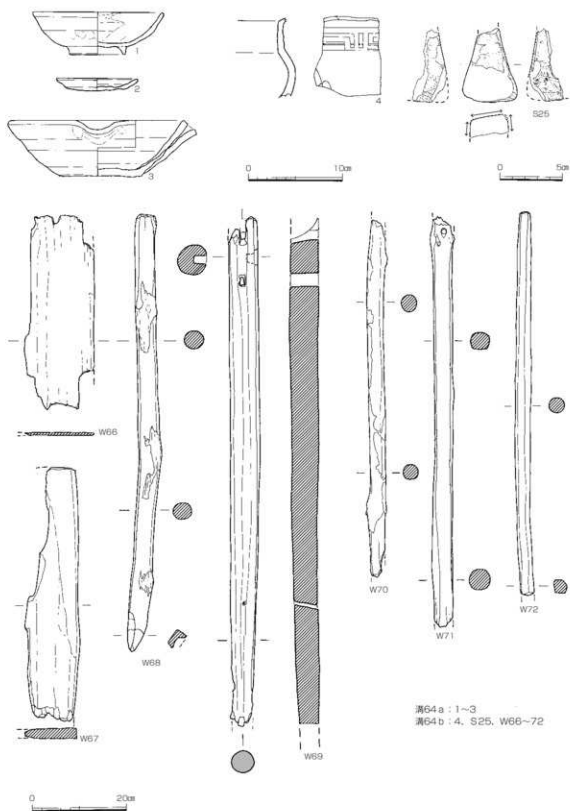
溝64bはCHラインから南に長さ20mを検出した。検出面の標高は1.3m、底面は北端で0.95m、南端で0.5mである。深さは0.35mである。断面の形状は皿状である。埋土は、北端からCKライン付近までは灰褐色~灰色の砂が主体である。

塚状遺構 (図185): 溝64b南端から北に5mの溝内には、割石・木材により構成される構造物が設置されている。その北端には、溝の流路の中央に割石が面を揃えて配置される。割石は30cm×40cmと20cm×30cmの大小2点で、その間隔は20cm程であり、隙間を有する。溝の南端から北1mの位置で、中央流路の両側に幅15cm、長さ50cmの板材(図186-W66・67)が90cm間隔で配置される。板材の上面は標高0.7mを測る。板材上に、横木5点

調査の記録



が、流れに対して直角方向に配置される。これらの木材と割石を留める位置に、杭1～3が打ち込まれる。杭1は割石の南側に位置し、杭2と1とは40cm、杭2と3とは60cmの間隔で並ぶ。杭の上部が毀損するが、最も残りが良い杭1の上端は、横木よりも15cm程高い。横木は長さ0.75～0.9m、径5cm程の丸木材4点(同-W68・70～72)と長さ1m、幅6cm程の板材(同-W69)である。板材にはほぞ穴があり、転用材である。横木は杭1と2の間に1点、杭2と3の間に4点が認められる。横木の上面は標高0.75mで、溝の底面との間に5cmほどの空間があ



溝64a : 1~3
溝64b : 4, S25, W66~72

図186 溝64出土遺物 (縮尺1/4・1/3・1/8)

溝64出土遺物 (図186) 観察表

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存 率(%)	形態・手法	胎土	色調・内面/外面
		口径	底径	器高				
1	土師器・甕	14.2	6.0	4.4	1/1	(内)工具ナナ(外)オサエ・ナデ	細砂 硬	黄白
2	土師器・甕	8.5	6.7	10~1.6	1/1	(内)工具ナナ(外)奥キリ(左)口縁・板目面、粘土の継ぎ目明顯	細砂 赤色粒	淡黄白
3	原色器・鉢	19.0	8.7	5.5~6.2	1/5~6/10	(内)工具ナナ(外)赤キリ、口縁部赤ね埃混	細砂 硬	灰
4	土師器・甕	—	—	—	—	白粉面施施、削り貫入、気泡多い、墨裡1文	—	—
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存 部位	右打 —	特徴
S25	灰土	5.8	4.3	1.0	部2	—	流紋岩(柱状、下端面に層行痕)	—
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量	本取の 部位	特徴	
W66	板瓦	41.1	14.0	0.6~0.8	5.7g	板目	片面は片割面に同化	
W67	板瓦	54.0	11.7	11.0	アカマツ	板目	一部同化	
W68	瓦	92.4	4.2	3.5	アカマツ	丸本	部分的に剥皮残存、先施加工	
W69	部材	107.5	6.1	6.5	アカマツ	半割	上部に駒穴(駒所)貫通・長方形・1×1.6cm、裏面に穴(駒所)未貫通・長方形・1.2×1.6cm、下平(内孔)開所(貫通)・(約0.5cm)	
W70	瓦	75.3	3.4	3.7	アカマツ	丸本	両面欠損、両端欠損	
W71	瓦	86.7	4.5	4.5	アカマツ	丸本	両端欠損	
W72	瓦	81.0	3.3	2.8~3.3	アカマツ	丸本	先端鋭い、下端欠損	

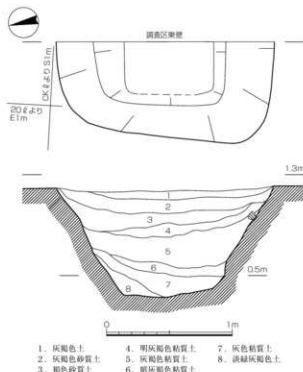


図187 溝65 (縮尺1/30)

る。また杭3の東西両側の斜面上部には杭4・5が対となる位置で確認された。杭4・5をつなぐラインは溝に直交し、構造物の南端にあたる。この杭の機能については、間に板を用いて堰とした可能性が考えられる。溝の形状については、構造物の約15m北から割石まで傾斜が急であるのに対し、割石以南は平坦で、緩やかな流れが窺える。また流路が狭まり、断面形状も段をなす。平面的には構造物が見られる部分は影らみを持つ形状をなしている。さらに埋土が粘質土であることから、この場所でも水を調整しつつ、溜める空間が作りだされていたものと考えられる。また構造物の東側では、径10~20cmの円礫の分布が認められ、上面を揃えて置いた集石部(写真下)が確認されるなど、石敷きの空間が想定される。出土遺物がほとんど見られず、耕作地の中で作業場とすることに矛盾しない状況といえる。

本溝の時期は、検出面から江戸時代と考えられる。

溝65 (図187、図版36)

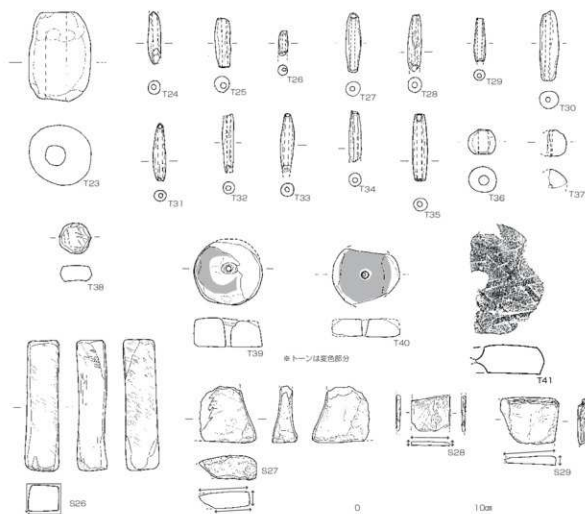
調査区東端のCK19区に位置し、東側は第14次調査地点に続く。調査時には土坑として記録したが、第14次調査によって、本遺構がため池遺構へと続く溝の西端部にあたることが判明した。検出はく3層>で、上面の標高は1.2m、底面の標高は0.34m、深さは0.86mである。溝の幅は1.75mで、断面形は逆台形である。埋土は8層に分けられる。1~3層は砂質土だが、4~6層は褐色系の粘質土、7・8層は灰色系の粘質土である。断面形状や堆積状況は第14次調査と共通する。出土遺物には備前焼の甕などがわずかにあるが、いずれも小片である。

本遺構の時期は江戸時代であり、第14次調査成果から17世紀前半と考えられる。

(岩崎)

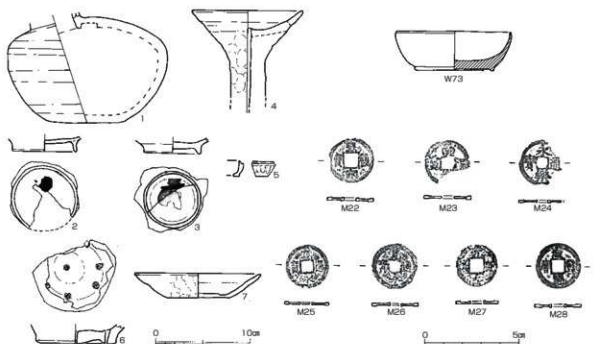
第6節 包含層ほかの出土遺物

包含層出土の遺物量は、全体でコンテナ(28L/箱)26箱を数える。その中で注目される遺物あるいは性格が不明な遺物をあげておきたい(図188・189、図版43・44・46・47)。



番号	層位	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	形態・手法	胎土	色調	
T23	傾洗	土鉢	7.1	4.9	4.8	1782	1/1	押さえ・ナデ、孔径1.4cm	微砂	赤色粒	淡橙白
T24	5層	土鉢	4.2	1.0	1.1	5.0	両端欠損	ナデ、孔径0.45cm	微砂		橙灰
T25	4層	土鉢	3.9	1.2	1.3	6.1	1/1	ナデ、孔径0.3-0.4cm	微砂		暗灰
T26	5層	土鉢	2.0	0.7	0.8	5.1	1/2	ナデ、孔径0.3cm	微砂		橙白
T27	4層	土鉢	4.7	1.1	1.1	5.5	1/1	ナデ、孔径0.3-0.4cm	微砂		橙白~灰白
T28	4層	土鉢	4.5	1.1	1.2	5.0	一端欠損	ナデ、孔径0.4cm	微砂		橙
T29	4層	土鉢	3.5	0.9	0.9	2.2	一端欠損	ナデ、孔径0.3cm	微砂		橙灰~暗橙灰
T30	4層	土鉢	5.6	1.5	11.8	11.8	1/1	ナデ、孔径0.3cm	微砂		暗灰~灰黒
T31	3層	土鉢	4.6	1	0.9	3.4	1/1	ナデ、孔径0.35cm	微砂		赤黒
T32	3層	土鉢	4.6	0.9	0.9	3.0	両端欠損	ナデ、孔径0.3-0.4cm	微砂		赤黒
T33	3層	土鉢	4.6	1	1.1	4.1	一部欠損	ナデ、孔径0.35cm	微砂		橙白
T34	3層	土鉢	4.1	1	1.1	3.7	一端欠損	ナデ、孔径0.4cm	微砂		赤黒
T35	3層	土鉢	5.9	1.1	1.0	6.5	1/1	ナデ、孔径0.4cm	微砂		淡橙白~灰
T36	4 b層	土玉	1.9	2.2	2	8.2	1/1	ナデ、孔径0.7cm	微砂		赤黒
T37	3層	土玉	2.1	—	—	3.1	1/4	中心に穿孔(径0.2cm)	微砂		淡橙白
T38	4 a層	おぼしき	2.4	2.5	1.2	11.1	1/2	周縁を打欠く、損患部片転用	微砂		暗灰/灰
T39	4 b層	紡錘車	5	5.4	2.3	62.5	1/1	ナデ、上面着色(黄緑?)、中心に穿孔(径0.9cm~0.4cm)	微砂	赤色粒	橙白
T40	4 a層	紡錘車	5.4	4	1.4	34.4	1/3	ナデ、上面着色(黄緑?)、中心に穿孔(径0.6cm~0.3cm)	微砂		橙白
T41	4層	紡錘車	8.8	4.5	2.2	158.7	3/4	孔片を打欠く状態、両面に円孔(径1.3cm/0.8cm、径1.5cm/0.8cm)	微砂		灰白
S26	包含層	硯石	10.3	2.7	2.4	103.7	1/1	流紋岩	背面4面使用、前面凹面		特徴
S27	4 b層	硯石	4.4	4.3	1.9	40.5	—	流紋岩	前面凹面		
S28	4層	硯石	2.7	3.0	0.3	5.3	—	流紋岩	3面使用		
S29	2層	硯石	3.6	4.6	0.7	16.7	—	流紋岩	3面使用		

図188 包含層出土遺物1 (縮尺1/3)



番号	層位	種類・器種	法線 (cm)		残存 (—:1/6未満)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面	
			口径	底径					
1	銅造	須恵器・平飯	—	80×85	—	1/1	(底外)オサエ・ナデ、自然釉(緑灰色)	磁砂	灰
2	4 b層	土師器・瓶	—	6.8	—	1/1	(内)ナデ、高台内墨書、内面焼熟	磁砂	緑灰胎・淡黄白
3	4 b層	土師器・瓶	—	6.0	—	1/1	高台内墨書	磁砂	黄白
4	5層	土師器・脚台付灯明具	11.6	—	—	1/2	中心に穿孔(孔径0.8cm)、瓶内面から脚台及び燭指部に筆	磁砂	黄白
5	4 b層	白磁・合子	—	—	—	1/6	内外面施釉、口縁受け部及び底部露胎	磁砂	灰白(釉)・淡緑灰
6	4層	土師器・鉢	—	8.5	—	2/3	(内)(外)横ナデ(底)内面に焼成前穿孔(方形、一辺0.4cm)	磁砂	淡黄白
7	4 a層	土師器・皿	13.1	6.5	2.6	1/1	(内)(外)丁寧なナデ、内盤状底面、内面厚・変色(焼熟)	磁砂	緑灰胎・暗灰胎

番号	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存	特徴
M22	4 a層	銅銭	2.4	2.4	0.12	2.0	1/1	京宋通貨、穴1.073cm
M23	4層	銅銭	2.3	2.4	0.16	2.3	2/3	明道元貨、穴1.0765cm
M24	4層	銅銭	2.4	2.2	0.11	1.1	2/3	永樂通貨、穴1.0757cm
M25	造成上	銅銭	2.3	2.3	0.12	1.8	1/1	寛永通貨、穴1.0760cm
M26	横丸	銅銭	2.4	2.4	0.17	2.9	1/1	寛永通貨、穴1.0758cm
M27	横丸	銅銭	2.2	2.2	0.15	1.7	1/1	寛永通貨、文字は跡のため不明 穴1.0723cm
M28	4層	銅銭	2.4	2.4	0.1	2.8	1/1	元豊通貨、穴1.0765cm

番号	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器幅	本取り	特徴
W73	造成上	漆塗り椀	12.3	8.4	4.2	タリ	芯持ち丸木	全面に黒色漆、口縁端部と体部に赤漆残存。芯持ちを柄取り、椀厚漆部

図189 包含層出土遺物2 (縮尺1/4・1/2)

図188-1は飛鳥時代の須恵器平飯である。調査区中央部北端の御溝から頸部以上を欠損した状態で、単独で出土した。時間的にはく7層>に対応する可能性が考えられる。同-2・3は13世紀代(鎌倉時代)の可能性が高い吉備系土師器碗の高台である。高台内に墨書が確認される。文字の判読はできないが、同時期における墨書土器の多さを示す資料である。同-4・5は<5層>と<4 b層>から出土した土師器脚台付き燈明具と白磁合子である。前者には中心に径0.8cmの穿孔が走り、内面とあわせて煤が付着する。燭台的な機能が考えられる。後者は、数多く出土する白磁・青磁片の中で極めて少ない器種である。小片ではあるが注意しておきたい。同-6は<4層>から出土した穿孔付き土師器である。中世のなかで捉えられる。器種は鉢としたが不明確である。同-7は<4 a層>出土の土師器皿であり、同層の時期を示す。

その他に、土製品・金属器・石器・木製品があげられる。出土層は<3~5層>が中心であるが、一部造成土内を含む。土製品は土鍾13点(図188-T23-35)、土玉2点(同-36・37)、おはじき状製品1点(同-38)、紡錘車状製品3点(同-39-41)をあげた。その内、おはじき状製品は須恵器を、そして紡錘車状製品の1点は(T

41) は須恵器の瓦を加工している。<4 a層>出土である。石器は砥石4点(同-S26~29)で、その内3点は<4層>以下からの出土である。1点(同-S29)は近世層の<2層>から出土しているが、砥石の所属時期は遡る可能性もあり掲載した。金属器は銅銭7点である(図189-M22~28)。漆塗り碗1点(同-W73)は、造成土から出土した。大正~昭和期の堆積層からの出土であるが、郷原漆器として注目される資料である。クリの芯持ち材を挽いて成形したもので、蓋付きの碗になるものであろう。郷原漆器は江戸時代に盛んに製作され、昭和初期まで流通した普段使いの食器である。

(山本・岩崎)

第4章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第9次調査墓1出土人骨同定

高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

(1) はじめに

岡山市所在の鹿田遺跡第9次調査において人骨が出土し、出土人骨は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターにて保管されていた。その後、鹿田遺跡第9次調査の報告書を刊行するにあたり、人骨の分析について土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに依頼があった。出土人骨は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムへと搬入され、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨の年齢表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1～6歳）、小児（6～12歳）、若年（12～19歳）、成年（20～39歳）、熟年（40～59歳）、老年（60歳～）とする。

(2) 出土人骨の残存部位

人骨は墓1から出土した。墓2からも骨が出土しているが、保存状態が悪く、人骨と思われる破片しか残存していなかった。

墓1から出土した人骨は成人骨一体分で、部位を特定できたのは脳頭蓋と上顎骨の一部、そして歯牙のみであった。脳頭蓋については保存状態が悪かったため、それ以上の特定はできなかった。上顎骨は左側の小臼歯から大臼歯にかけての歯槽骨の一部である。残存歯牙は以下の通りであるが、歯種を特定できなかったエナメル質の破片が数点残存している。歯牙の咬耗度について、橋原（1957）の分類に基づくと、1°c～2°bである。

∕	M ¹	P ²	P ¹	∕	∕	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²
M ₁	M ₁	P ₂	∕	∕	∕	∕	I ₁	∕	C	∕	∕	M ₁	M ₂

・遊離歯、∕欠損

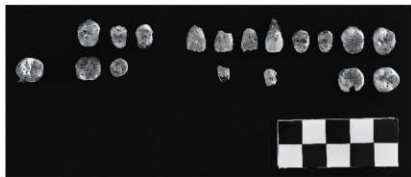


図1 墓1出土人骨の歯牙

(3) 出土人骨の性別と年齢

性別判定に有効な部位が残存していないため、性別は不明である。年齢については、歯牙の咬耗度（橋原、1957）から熟年と推定される。

(4) おわりに

以上、鹿田遺跡第9次調査出土の人骨の鑑定結果について記載した。出土した人骨は、性別は不明であるが、年齢は熟年と推定された。保存状態が悪かったため、出土人骨の形質の詳細を把握することができなかった。今後の資料の増加と研究の進展が期待される。

謝 辞

本報告をおこなうにあたり、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの山本悦世教授、岩崎志保助教、南健太郎助教に、資料の報告の機会とご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）日本民族・文化の生成2。九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集。六興出版。
棚原博（1957）日本人歯牙の咬痕に関する研究。熊本医学会雑誌。31：607-656

2. 鹿田遺跡第9・11次調査出土木製品樹種同定報告

能城修一（森林総合研究所木材特性研究領域）

(1) はじめに

岡山大学構内（鹿田地区）第9次・11次調査で出土した中世から現代の木製品類108点の樹種を報告する。

(2) 方法

樹種同定用のプレパラート標本は、木製品類から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-1482～1591の番号を付して標本番号とした。プレパラート標本は森林総合研究所に保管されている。

(3) 結果

資料108点中には針葉樹7分類群と広葉樹8分類群が認められた（表1）。以下には木材解剖学的な記載を記し、顕微鏡写真を提示して、同定の根拠を示す。

1) イチョウ *Ginkgo biloba* L. イチョウ科 図1:1a-1c（枝・幹材、OKUF-1589）

仮道管のみから構成される木材で、仮道管の径は変動が著しく、早材と晩材の区別は不明瞭である。ときに異型細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に2個。

2) モミ属 *Abies* マツ科 図1:2b-2c（枝・幹材、OKUF-1538）

垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量が多い。放射組織は柔細胞のみからなり、単壁孔が著しく、垂直壁は結節状となる。分野壁孔は小型のヒノキ型～スギ型で1分野に2～3個。

3) ツガ属 *Tsuga* マツ科 図1:3c（枝・幹材、OKUF-1498）

垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量が多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、柔細胞には単壁孔が著しく、垂直壁は結節状となる。分野壁孔はごく小型のスギ型で1分野に2～3個。

4) アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 図1:4a-4c（枝・幹材、OKUF-1536）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量が多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の水平壁には重鋸歯がある。分野壁孔はごく大型の意状で、1分野に普通1個。

5) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1:5a-5c（枝・幹材、OKUF-1501）

垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量が少ない。樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に2個。

6) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図2:6a-6c（枝・幹材、OKUF-1492）

垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量がやや多い。樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスギ型で孔口が水平にちかく開き、1分野に2個。

7) アスナロ *Thuja dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図2:7b-7c（枝・幹材、OKUF-1585）

垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量がやや多い。樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のスギ型で1分野に2～3個。

- 8) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図2:8a-8c (枝・幹材, OKUF-1555)
 やや小型で丸い道管が単独あるいは2~4個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互壁は階段状。放射組織は同性で3細胞幅。
- 9) イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 図2:9a-9b (枝・幹材, OKUF-1591)
 ごく小型でやや角張った孤立道管がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は確認できない。木部柔組織は接線状で、しばしば菱形結晶が連なる。放射組織は上下端の1~5列が直立する異性で2細胞幅。
- 10) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l. バラ科 図2:10a-10c (枝・幹材, OKUF-1573)
 小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して斜めに連なる傾向をみせながら散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1~2列が直立する異性で4細胞幅。
- 11) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図2:11a-11c (枝・幹材, OKUF-1510)
 大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材ではやや急に小型化した薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。
- 12) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図3:12a-12c (枝・幹材, OKUF-1586)
 やや小型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一か10段ほどの階段状。放射組織は同性で単列の小型のもの、幅が20細胞以上、高さが1.5mmほどに達する大型のものとなる。
- 13) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図3:13a-13c (枝・幹材, OKUF-1488)
 大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに3列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列の小型のもの大型で複合状のものとなる。
- 14) イチイガシ? *Quercus gilva* Blume? ブナ科 図3:14a-14c (枝・幹材, OKUF-1553)
 最大道管径が210 μ mほどの大型で丸い厚壁の孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材ではやや急に小型化した薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。
- 15) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 図3:15a-15c (枝・幹材, OKUF-1581)
 やや小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。木部組織は雲紋状を呈する。放射組織は同性で3細胞幅。

(4) 考察

岡山大学構内(鹿田地区)鹿田遺跡第9次・11次調査で出土した木製品類108点は、中世から近代まで7時期に区分されて、それぞれの時期ごとの点数は少ない(表2)。全体を通してみると、ヒノキとスギが曲物や箸、柄杓、板、その他製品と、中世から近世まで多用されていた。その他では、アカマツが近世の板や杭に多く、クリが室町時代から近世の杭と加工材に多い。その他の樹種は3点以下であり、樹種選択は検討できない。この中でイチヨウは中世に日本にもたらされたとしており(Hori & Hori 1997)、縄文時代とされる1点をのぞき、これまで戦国時代~現代の資料が8点、江戸とその周辺で確認されている。明治時代の資料によると、イチヨウは彫刻材や漆器木地、碁盤、将棋盤、黒板、まな板などに使われていたとされる(農商務省山林局、1912)。出土資料は棒状の製品であり、用途は不明であった。

引用文献

- Hori, S. & Hori, T. 1997. A cultural history of Ginkgo biloba in Japan and the generic name Ginkgo. "Ginkgo Biloba — A Global Treasure" (Hori, T., Ridge, R. W., Tulecke, W., Del Tredici, P., Trémouillaux-Guiller, J. & Tobe, H., eds.), 385–411. Springer-Verlag, Tokyo.
- 伊東隆夫・山田昌久編. 2012. 木の考古学: 出土木製品用材データベース. 449pp. 海書社, 大津.
- 農商省山林局. 1912. 木材の工業的利用. 1308pp. 大日本山林会, 東京.

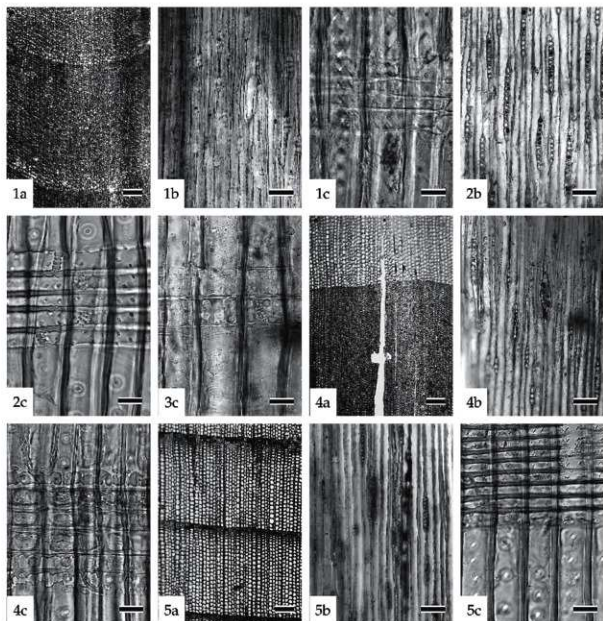


図1 岡山大学構内(鹿田地区)第9次・11次調査出土木製品類の顕微鏡写真1

1a-1c: イチヨウ(枝・幹材, OKUF-1589)、2b-2c: モミ属(枝・幹材, OKUF-1538)、3c: ツガ属(枝・幹材, OKUF-1498)、4a-4c: アカマツ(枝・幹材, OKUF-1536)、5a-5c: ヒノキ(枝・幹材, OKUF-1501)。a: 横断面(スケール=200 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=25 μ m)。

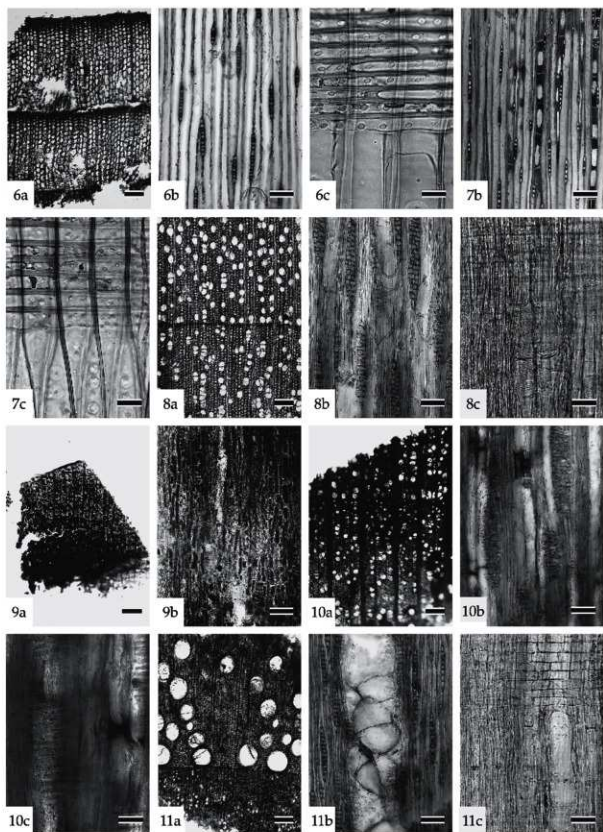


図2 岡山大学構内(鹿田地区)第9次・11次調査出土木製品類の顕微鏡写真2

6a-6c: スギ(枝・幹材, OKUF-1492), 7b-7c: アスナロ(枝・幹材, OKUF-1585), 8a-8c: モクレン属(枝・幹材, OKUF-1555), 9a-9b: イスノキ(枝・幹材, OKUF-1591), 10a-10c: サクラ属(広義)(枝・幹材, OKUF-1573), 11a-11c: クリ(枝・幹材, OKUF-1510). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=25(7c), 50 μ m).

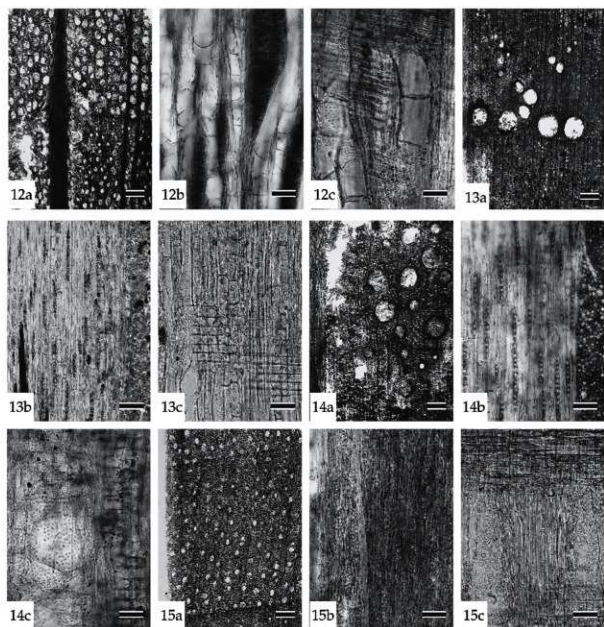


図3 岡山大学構内(鹿田地区)第9次・11次調査出土木製品類の顕微鏡写真3

12a-12c: ブナ属(枝・幹材, OKUF-1586)、13a-13c: コナラ属コナラ節(枝・幹材, OKUF-1488)、14a-14c: イチイガシ? (枝・幹材, OKUF-1553)、15a-15c: カエデ属(枝・幹材, OKUF-1581)。a: 横断面(スケール=200 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=50 μ m)。

表1 樹種一覧

標本	No	回番号	Fl.	樹種名	SR	製品名	本取り	遺構	本文中掲載番号	時代
OKUF-	1482			スギ	S	杓子	板目	井戸12	W31	中世後半
OKUF-	1483			スギ	S	加工木	板目	井戸12	—	中世後半
OKUF-	1484			スギ	S	加工板	板目	井戸12	W30	中世後半
OKUF-	1485			スギ	S	加工木	板目	井戸12	—	中世後半
OKUF-	1486			スギ	S	縦穴付板	板目	井戸12	W33	中世後半
OKUF-	1487			ヒノキ	S	曲物 扇	板目	井戸12	W34	中世後半
OKUF-	1488	3	13a-13c	コナラ属コナラ部	S	加工木	千瀬	井戸12	W32	中世後半
OKUF-	1489		*	スギ	S	曲物 側板	板目	井戸12	—	中世後半
OKUF-	1490			スギ	S	曲物 底板	板目	井戸12	W27	中世後半
OKUF-	1491			スギ	S	曲物 底板	板目	井戸12	—	中世後半
OKUF-	1492	2	6a-6c	スギ	S	曲物 底板	板目	井戸12	W28	中世後半
OKUF-	1493			スギ	S	蓋	板目	井戸12	W29	中世後半
OKUF-	1494			ヒノキ	S	板状木製品	板目	井戸11	W26	中世後半
OKUF-	1495			マツ属樹膠管束華属	S	井戸枠材	芯持ち面取り	井戸11	—	中世後半
OKUF-	1496			クリ	S	加工木	丸木	井戸11	—	中世後半
OKUF-	1497			スギ	S	加工板	板目	井戸10	W25	中世後半
OKUF-	1498	1	3c	ツグ属	S	曲物 側板?	板目	井戸7	—	中世前半(鎌倉)
OKUF-	1499			スギ	S	蓋	側材	井戸7	W12	中世前半(鎌倉)
OKUF-	1500			スギ	S	曲物 側板?	板目	井戸7	—	中世前半(鎌倉)
OKUF-	1501	1	5a-5c	ヒノキ	S	先端加工木製品	側材	井戸7	W13	中世前半(鎌倉)
OKUF-	1502			ヒノキ	S	曲物 底板	板目	井戸6	W11①	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1503			ヒノキ	S	曲物 側板	板目	井戸6	W11④	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1504			ヒノキ	S	曲物 側板	板目	井戸6	W11③	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1505			ヒノキ	S	曲物 扇	板目	井戸6	W11⑤	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1506			ヒノキ	S	曲物 扇	板目	井戸6	—	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1507			×	—	曲物 扇	板目	井戸6	W11③	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1508			ヒノキ	S	曲物 扇	板目	井戸6	—	中世前半(平安末-鎌倉)
OKUF-	1509			スギ	S	曲物 底板	板目	井戸9	W23	中世後半
OKUF-	1510	2	11a-11c	クリ	S	加工木	丸木	井戸9	—	中世後半
OKUF-	1511			スギ	S	嚢帯	追い板目	井戸9	W22	中世後半
OKUF-	1512			スギ	S	加工木	側材	井戸9	W24	中世後半
OKUF-	1513			ヒノキ	S	曲物 底板	板目	井戸1	W1	中世
OKUF-	1514			コナラ属アカガシ華属	S	木鏝	芯持ち丸木	井戸3	W10	中世前半(平安末)
OKUF-	1515			スギ	S	加工板	板目	溝63	—	近世
OKUF-	1516			クリ	S	角材	側材	溝63	—	近世
OKUF-	1517			スギ	S	木札	追い板目	溝63	W65	近世
OKUF-	1518			アカマツ	S	加工板	側材	溝63	—	近世
OKUF-	1519			ヒノキ	S	板材	板目	溝59a	W53	中世後半-近世初
OKUF-	1520			ヒノキ	S	板材	板目	溝59a	W54	中世後半-近世初
OKUF-	1521			スギ	S	加工木	側材	溝59a	W57	中世後半-近世初
OKUF-	1522			ヒノキ	S	板材	追い板目	溝59a	W56	中世後半-近世初
OKUF-	1523			スギ	S	加工板	板目	溝59a	W55	中世後半-近世初
OKUF-	1524			マツ属	S	板材	丸木	溝59a	—	中世後半-近世初
OKUF-	1525			クリ	S	杭	みかん割り	溝59a	—	中世後半-近世初
OKUF-	1526			モミ属	S	角材	側材	溝64	—	近世
OKUF-	1527			スギ	S	板材	板目	溝64	W66	近世
OKUF-	1528			アカマツ	S	板材	板目	溝64	W67	近世
OKUF-	1529			アカマツ	S	部材	千瀬	溝64	W69	近世
OKUF-	1530			アカマツ	S	杭	丸木	溝64	W72	近世
OKUF-	1531			アカマツ	S	杭	丸木	溝64	W71	近世
OKUF-	1532			アカマツ	S	杭?	丸木	溝64	W70	近世
OKUF-	1533			アカマツ	S	杭	丸木	溝64	W68	近世
OKUF-	1534			ヒノキ	S	同敷 底板	板目	溝59c	W51	中世後半-近世初
OKUF-	1535			ヒノキ	S	漆塗り加工板	板目	溝59c	W44	中世後半-近世初

自然科学的分析

標本	No	図番号	Ph	標名	SR	製品名	木取り	遺構	本文中掲載番号	時代
OKUP-	1536	1	4a-4c	アカマツ	S	加工木	板目	溝59c	W59	中世後半～近世初
OKUP-	1537			アカマツ	S	杭	割材	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1538	1	2b-2c	ヒノキ	S	加工木	追いつけ目	溝59c	W47	中世後半～近世初
OKUP-	1539			ヒノキ	S	漆塗り加工木	割材	溝59c	W46	中世後半～近世初
OKUP-	1540			ヒノキ	S	漆塗り加工木	追いつけ目	溝59c	W43	中世後半～近世初
OKUP-	1541			スギ	S	漆塗り加工木	追いつけ目	溝59c	W45	中世後半～近世初
OKUP-	1542			アスナロ	S	加工木	割材	溝59c	W60	中世後半～近世初
OKUP-	1543			ヒノキ	S	加工木	割材	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1544			スギ	S	加工木	板目	溝59c	W58	中世後半～近世初
OKUP-	1545			スギ	S	加工木	板目	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1546			スギ	S	加工木	追いつけ目	溝59c	W52	中世後半～近世初
OKUP-	1547			アカマツ	S	加工木	板目	溝59c	W62	中世後半～近世初
OKUP-	1548			スギ	S	漆	閉りだし	溝59c	W37	中世後半～近世初
OKUP-	1549			スギ	S	漆	割材	溝59c	W38	中世後半～近世初
OKUP-	1550			スギ	S	漆	割材	溝59c	W39	中世後半～近世初
OKUP-	1551			スギ	S	漆	割材	溝59c	W40	中世後半～近世初
OKUP-	1552			スギ	S	漆	割材	溝59c	W41	中世後半～近世初
OKUP-	1553	3	14a-14c	イチイガシ?	S	加工木	板目	溝59c	W50	中世後半～近世初
OKUP-	1554			アカマツ	S	炭板?	追いつけ目	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1555	2	8a-8c	モクレン属	S	加工木	板目	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1556			ヒノキ	S	納約 割板	板目	溝59c	W49	中世後半～近世初
OKUP-	1557			スギ	S	納約 炭板	板目	溝59c	W49	中世後半～近世初
OKUP-	1558			スギ	S	納約 板	割材	溝59c	W49	中世後半～近世初
OKUP-	1559			スギ	S	加工木?	板目	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1560			アカマツ	S	加工木	板目	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1561			クリ	S	杓子	板目	溝59c	W48	中世後半～近世初
OKUP-	1562			ヒノキ	S	加工木	丸木	溝59c	W64	中世後半～近世初
OKUP-	1563			スギ	S	加工木	板目	溝59c	W63	中世後半～近世初
OKUP-	1564			スギ	S	加工木	割材	溝59c	W61	中世後半～近世初
OKUP-	1565			スギ	S	漆	割材	溝59c	W42	中世後半～近世初
OKUP-	1566			クリ	S	杭A	丸木	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1567			クリ	S	杭D	丸木	溝59c	—	中世後半～近世初
OKUP-	1568			スギ	S	板材	板目	溝47	W18	中世前半(鎌倉後手)
OKUP-	1569	*		ヒノキ	S	板材	割材	溝47	W17	中世前半(鎌倉後手)
OKUP-	1570			スギ	S	杭	板目	溝47	W19	中世前半(鎌倉後手)
OKUP-	1571			ヒノキ	S	角柱状本製品	割材	池状遺構	W4	中世前半(平安後期)
OKUP-	1572			ヒノキ	S	角柱状本製品	割材	池状遺構	W3	中世前半(平安後期)
OKUP-	1573	2	10a-10b	サクラ属(広義)	S	突起付角柱状本製品	割材	池状遺構	W3	中世前半(平安後期)
OKUP-	1574			スギ	S	板材	板目	池状遺構	W9	中世前半(平安後期)
OKUP-	1575			スギ	S	板材	板目	池状遺構	—	中世前半(平安後期)
OKUP-	1577			スギ	S	加工板	板目	池状遺構	—	中世前半(平安後期)
OKUP-	1578			モミ属	S	板材	板目	池状遺構	W8	中世前半(平安後期)
OKUP-	1579			アカマツ	S	角柱状本製品	丸木	池状遺構	W6	中世前半(平安後期)
OKUP-	1580			ヒノキ	S	加工板	板目	池状遺構	W7	中世前半(平安後期)
OKUP-	1581	3	13a-15c	カエデ属	S	加工木	丸木	溝59b	—	中世後半～近世初
OKUP-	1582			スギ	S	板材	板目	溝61	—	中世後半
OKUP-	1583			スギ	S	板状本製品	板目	溝49	W20	中世前半(鎌倉後手)
OKUP-	1584			アカマツ	S	筒状本製品	丸木	溝50	W21	中世前半(鎌倉後手)
OKUP-	1585	2	7b-7c	アスナロ	S	下駄 本体	追いつけ目	造成上	—	近世～近代
OKUP-	1586	3	12a-12c	ブナ属	S	下駄 面	ブナ樹皮	造成上	—	近世～近代
OKUP-	1587			クリ	S	漆塗り板	不明	造成上	—	近世～近代
OKUP-	1588			クリ	S	漆塗り板	芯持ち丸木	造成上	W73	近世～近代
OKUP-	1589	1	1a-1c	イチヨウ	S	把手状	芯持ち丸木	造成上	—	近世～近代
OKUP-	1590			サクラ属(広義)	S	把手付本製品	閉りだし	造成上	—	近世～近代
OKUP-	1591	2	9a-9c	イスノキ	S	把手付本製品	丸木閉りだし	造成上	—	近世～近代

表2 岡山大学構内(鹿田遺跡)第9・11次調査出土木製品類の樹種

樹種	中世前半 (平安後期)		中世後半 (平安末~鎌倉)		中世後半 (室町)		中世後半 (室町)		中世後半~近世初期 (室町~江戸初)		近世 (江戸)		近世~近代		総計	
	他 家 品	加 工 材	曲 物	曲 物	曲 物	加 工 材	加 工 材	加 工 材	加 工 材	加 工 材	加 工 材	他 家 品	加 工 材	加 工 材		下 駄 品
イチヨウ		1											1		1	1
モミ属														1		3
ツグ属																1
アカマツ		1				1										14
マツ属楡属管束属																1
マツ																1
マツ																1
スギ		3	1	6	1	1	1	1	1	1	3	3	2			24
ヒノキ		2	2	1	1	1	1	5	1	2	1	2	8	1	2	43
アスナロ																2
モクレン属																1
イスノキ																1
サクラ属(広義)																1
クワ		1														1
ブナ属																2
コナラ属コナラ節																1
コナラ属コナラ節																1
イチイガシ?																1
コナラ属アカガシ亜属																1
カエデ属																1
	1	1	7	1	8	1	1	2	2	6	1	3	1	1	9	1
																108

3. 鹿田遺跡第9・11次調査出土木簡樹種同定報告（池状遺構・溝59）

助元興寺文化財研究所

(1) 分析資料および分析内容

池状遺構（W2）・溝59 a（W35）・溝59 b（W36）出土木簡…樹種同定

(2) 使用機器

- ・生物顕微鏡（株オリンパス BX50）
（モリブデン管球使用、管電圧45kv、大気圧条件下）

(3) 方法および結果

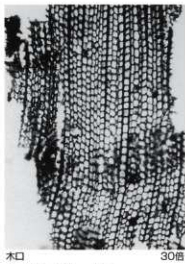
1) 樹種同定

① 方法

主に破断面から、メスを用いて微量の本質を採取し、試料とした。カミソリの刃で鑑定に必要な木口面（横断面）、柀目面（放射断面）、板目面（接線断面）の3方向の切片を作製し、生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。

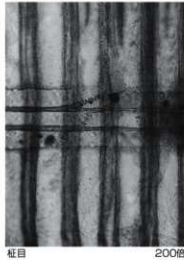
② 結果

- ・池状遺構出土木簡（W2） モミ（図1-1）
針葉樹で、樹脂細胞がなく、放射組織の隔壁にモミに特徴的な数珠状末端壁が確認される。
- ・溝59 a 出土木簡（W35） タカノツメ（図1-2）
環孔材で、孔圏部は道管がまばらである。孔圏外は小道管が散在、放射方向に複合、集団で存在している。放射組織は同性と異性Ⅲ型で幅は1～3列である。
- ・溝59 b 出土木簡（W36） スギ（図1-3）
針葉樹で、早材から晩材の移行は急である。樹脂細胞がみられる。分野壁孔はスギ型で一分野に2個存在する。



木口 30倍

1. 木簡 (W2) モミ



柁目 200倍



板目 50倍



木口 30倍

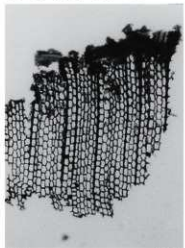
2. 木簡 (W35) タカノツメ



柁目 100倍



板目 50倍



木口 30倍

3. 木簡 (W36) スギ



柁目 200倍



板目 50倍

図1 鹿田遺跡第9・11次調査出土木簡の顕微鏡写真

4. 鹿田遺跡第9次調査溝45出土編組製品樹種同定報告

藤吉田生物研究所

(1) 試料

試料は岡山県鹿田遺跡から出土した編組類1点(報告図I19-W16)である。

(2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹1種、タケ類1種、樹皮1種)を表1と顕微鏡写真を図2に示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) 針葉樹(遺物No1B)(図2 No1B)

木口と柀目は採取出来なかった。板目では放射組織はすべて単列であった。

2) 環孔材(遺物No1D)(図2 No1D)

環孔材である。乾燥による収縮の為、同定に必要な組織の確認出来ないものが多かった。木口では円形の道管(〜80 μ m)が年輪にそって孔圈部を形成している。柀目では道管は穿孔等の有無は確認出来なかった。放射組織は異性である。板目では放射組織は1〜2細胞列、高さ〜500 μ mである。

3) イネ科タケ亜科(Subfam. Bambusoideae)(遺物No1A)(図2 No1A)

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

4) 樹皮(遺物No1C)(図2 No1C)

木口は採取出来なかった。柀目では篩細胞、じん皮繊維、途切れ途切れの放射組織がある。柔細胞ストランドは黒いすじとして見られる。板目では放射組織は単列である。

◆参考文献◆

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I〜V」京都大学木質科学研究所(1990)
 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑本編I・II」保育社(1979)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-F11

表1 岡山県鹿田遺跡出土木製品樹種同定表

No	樹種	部位	
1	A	イネ科タケ亜科	板材
	B	針葉樹	柀材
	C	樹皮	柀材
	D	環孔材	柀材



図1 サンプリング箇所

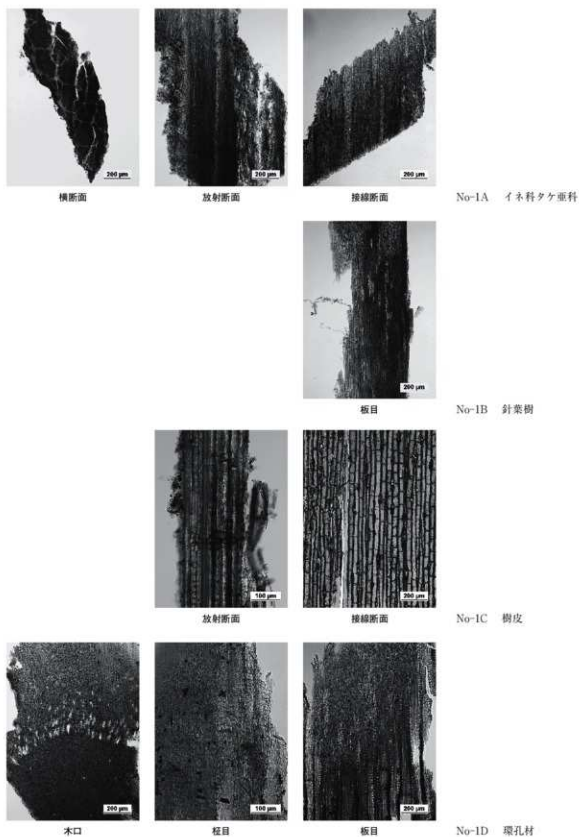


図2 顕微鏡写真

5. 鹿田遺跡第9次調査墓1出土漆塗り椀分析

鹿元興寺文化財研究所

(1) 分析資料および分析内容

漆塗り椀 (報告図108-W15) …樹種同定・膜面分析・顔料分析

(2) 使用機器

- ・生物顕微鏡 (株オリンパス BX50)
- ・金属顕微鏡 (株オリンパス製 BH2-UMA)
- ・エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (XRF) (セイコーインスツルメンツ製SEA5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。

(モリブデン管球使用、管電圧45kv・50kv、大気圧条件下)

(3) 方法および結果

1) 樹種同定

- ① 方法 主に破断面から、メスを用いて微量の木質を採取し、試料とした。カミソリの刃で鑑定に必要な木口面 (横断面)、柁目面 (放射断面)、板目面 (接線断面) の3方向の切片を作製し、生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。
- ② 結果 不明 木胎がないため樹種同定を行うことができなかった。

2) 膜面分析及び顔料分析

- ① 方法 漆塗り椀の黒色部分と赤色部分 (図1-a-①・②) から、ごく微量の塗膜を採取し樹脂包埋後、膜断面が平滑になり光が透過するまで研磨を行った。スライドガラス上に固定して永久プレパラートを作製し、金属顕微鏡 (暗視野) と生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。次に、漆に混入した顔料を調べるため、漆塗り椀の赤色部分 (図1-a、②) をXRFで元素分析を行い顔料を同定した。
- ② 結果 膜面観察の結果と顔料分析の結果を表1に表した。

表1 塗膜断面および顔料分析の結果

分析資料	下地	塗膜構造	使用顔料
漆塗り椀	不明	黒色部分 (50 μ mの褐色系漆層)	なし
		赤色部分 (50 μ mの褐色系漆層, 60 μ mの朱漆層)	水銀朱

漆塗り椀

- a. 黒色部分 黒色塗膜は、約50 μ m以下の褐色系の透明な漆層であった。油煙や松煙は入っていないかった (図1-b)
 - b. 赤色部分 XRFで、主に水銀 (Hg) が検出された (図2)。塗り構造は、50 μ m以下の褐色系の漆層の上に、粗い粒子もあり径が揃わない水銀朱を入れた約60 μ mの朱漆層が観察された (図1-c)。
- 以上より、漆塗り椀は黒い地塗りに朱漆で彩色したものである。

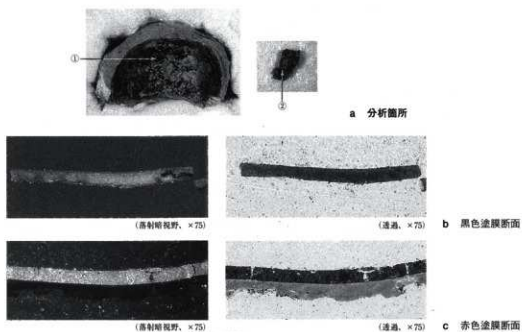


図1 漆塗り椀塗膜断面

[測定条件]

測定装置	SEAS20
測定時間 (秒)	180
分析時間 (秒)	132
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	28
コメント	2001-1210岡山大学 鹿田遺跡第9次調査 No 2 漆塗り椀赤色部

[試料像]



視野: [X, Y] 6.25, 4.67 (mm)

[スペクトル]

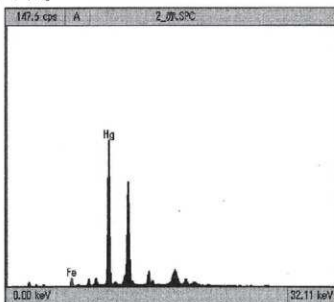


図2 漆塗り椀赤色部分のXRFスペクトル

6. 鹿田遺跡第9次調査墓2出土漆製品塗膜構造分析

御吉田生物研究所

(1) はじめに

岡山市に所在する、岡山大学鹿田遺跡第9次調査で出土した漆製品1点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

(2) 調査資料

調査した資料は、表1に示す漆製品1点である。

表1 調査資料

No.	品名	概 要
1	漆膜	土の上に赤色の漆膜が残存している。

(3) 調査方法

表1の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(4) 断面観察

塗膜断面の観察結果を、表2と以下の文章に示す。

表2 漆器の断面観察結果表

No.	器種	部位	図	塗 膜 構 造 (下層から)			
				下 地		塗 層 構 造	顔 料
				膠着剤	混和材		
1	漆膜	?	1	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱

塗膜構造：下層から、下地、漆層が観察された。

下地：柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。

漆層：下地の上に、黄褐色を呈する透明漆1層、その上に赤色漆層が重なっていた。

顔料：赤色漆層には、粒子の大きさがさまざままで透明度の高い朱粒子が見られた。

(5) 摘要

岡山大学鹿田遺跡第9次調査で出土した漆製品の塗膜構造調査を行った。土の上に漆膜が残っている状況で、素地は遺存していなかった。椀などの漆器の一部であった可能性が高い。

断面を観察したところ、炭粉渋下地の上に透明漆1層、その上に朱漆1層が重なっている様子が認められた。朱漆層の朱粒子は粒子の大きさがさまざままで、粒径の大きなもの(約20 μ m)は特に透明度が高い。

図1 塗膜断面 50 μ m図2 漆製品とり上げ状況
(旭蔵文化財調査研究センター撮影)

7. 鹿田遺跡出土石鍋の分析

白石 純 (岡山理科大学)

1. はじめに

鹿田遺跡から出土している石鍋7点の成分分析を行った。なお、分析した石鍋は、表1に示している試料である。

2. 分析方法と試料

分析は蛍光X線分析法で行い、試料の成分(元素)量を測定し、その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した成分(元素)は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 の10成分である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A (エスアイアイ・ナノテクノロジー社製)を使用した。

測定条件：X線照射径25mm、電流50~200mA、電圧50kV/15kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：10成分の定量値は地質調査所の標準試料JA-1 (安山岩)、JG-1a (花崗岩)、JB-1a (玄武岩)、の3個を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後(研磨機)、乾燥した試料を乳鉢(タングステンカーバイド製)で粉末(100~200メッシュ)にしたものを加圧成形機で約 10^7 の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

3. 分析結果

蛍光X線分析法とX線回折法により分析した。その結果、試料番号7以外は、蛍光X線の分析値がほぼ同じで、 SiO_2 が平均で66.378%、 Al_2O_3 が平均で3.475%含まれていた。しかし、試料番号7には SiO_2 が34.252%、 Al_2O_3 が24.262%含まれ、明らかに試料番号1~6の石鍋とは異なっていた。次にX線回折法で分析したところ、図1に示しているように試料番号1~6は滑石で、7は緑泥石であった。

4. まとめ

以上の各分析結果をまとめると以下ようになる。

石鍋の分析では、滑石と緑泥石の両方の石材があった。なお滑石には不純物が含まれていることが多く、純粋な滑石では存在せず、暗緑色の一部には緑泥石や蛇紋石が大部分であるものもある。

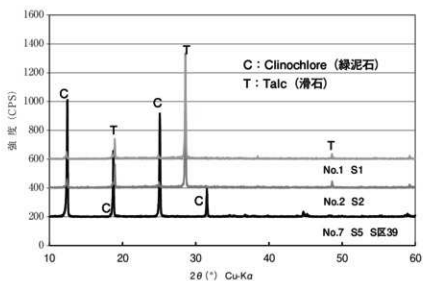


図1 鹿田遺跡出土石鍋のX線回折図

表1 石鍋の分析結果

試料番号	調査地点	出土遺構	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	出典
1	第1次調査	溝70	67.770	0.004	2.632	6.2800	0.084	22.709	0.012	0.241	0.032	0.052	文献1 - [H296 - S49]
2	第2次調査	包合割	66.346	0.034	3.32	7.5190	0.078	22.345	0.012	0.000	0.025	0.045	文献1 - [H270 - S8]
3	第9次調査	井戸12	67.670	0.015	2.905	6.5230	0.089	22.411	0.006	0.000	0.024	0.047	文献3 - [H145 - S17]
4	第9次調査	池状遺構	64.584	0.022	4.381	8.1900	0.137	22.405	0.003	0.000	0.005	0.041	文献3 - [H54 - S3]
5	第9次調査	ビット8	65.963	0.027	3.779	7.3630	0.137	22.504	0.000	0.000	0.000	0.046	文献3 - [H133 - S14]
6	第11次調査	溝59	66.378	0.012	3.835	6.0800	0.089	23.226	0.009	0.000	0.030	0.041	文献3 - [H178 - S23]
7	第5次調査	包合割	34.252	1.758	24.262	16.5740	0.220	22.363	0.229	0.097	0.010	0.023	文献2 - [H127 - S1]

文献1 吉留秀敏・山本悦世編 1988 『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊

文献2 松本武彦編 1993 『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊

文献3 山本悦世編 2017 『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊

8. 鹿田遺跡第9・11次調査出土種子と種子圧痕

本節では、鹿田遺跡第9・11次調査出土の種子および種子圧痕の同定結果について報告する。

1. 種子

(1) 分析の資料と方法

中世前半の井戸4・5・7について、土壌を持ち帰りフローテーション法(0.5mmメッシュ)を行い種子の検出を行った。種子の抽出、洗浄後に選別を行い、写真撮影と同定作業を行った。

(2) 結果

32科65種を確認した(表1、図1・2)。遺構ごとにみると、井戸4からは8科11種、井戸5からは3科3種、井戸7からは30科57種であった。井戸4・7から検出された種子の構成は、科のレベルにおいて似通っているが、井戸5とは明確に異なる構成を示す。遺構での報告にあるように、井戸4・7と井戸5は、井戸の廃棄のあり方が異なっており、特に前者では廃棄にともなう儀礼的行為が想定されている。今回確認できた種子の構成差もこうした差異に起因する可能性があるかもしれない。

2. 種子圧痕

(1) 分析の資料と方法

本分析では、鹿田遺跡第9・11次調査から出土した土器すべてを再現した上で、何らかの圧痕のあった資料79点を対象とし、レプリカ法(丑野・田川1991)を用いて111点の圧痕レプリカを採取した。

圧痕レプリカ作成方法の具体的な手順は以下の通りである。①圧痕をもつ土器の選定、②圧痕部の洗浄、③土器の全体写真と実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影、④離型材(パラロイドB72 5%アセトン溶液)を圧痕部とその周辺に塗布、⑤シリコーン・ゴム(ニッシン・JMシリコンまたはモメンティブ・シリコーンTSE350)を圧痕部に充填、⑥乾燥後、シリコーン・ゴムを土器から離脱、⑦圧痕レプリカをオスミウムによって蒸着後、走査型電子顕微鏡(日立製S-4800¹⁾)を用いて表面観察・撮影、⑧圧痕レプリカの大きさを0.01mm単位で計測、⑨植物の同定である。

(2) 結果

同定できた圧痕レプリカは16点であり、6科9種を確認した(表2、図3～6)。弥生時代では、ヤマモモと考えられる圧痕を確認した。平安時代後期ではイネ科を4種確認した。鎌倉時代では5科6種を確認し、約63%がイネ科であった。

本分析における種子および種子圧痕の同定は沖陽子(岡山大学大学院環境生命科学研究科)が行い、それを基に山口雄治(本センター)が資料をまとめた。文章は、協議の上山口が執筆し、全体を両者が調整したものである。(山口雄治・沖陽子)

註

(1) 機器の利用に当たっては、岡山大学医学部共同実験室の協力を得た。

参考文献

- 丑野 敏・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 文化財科学会
 中山至夫・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会

表1 検出種子一覧

科	種	第14	第15	第17	写真番号
アカサ	アカサ	●		●	1
アカネ	アカネダラ	●		●	2
アカビ	アカビ			●	3
イネ	アキノエノコロダチ			●	4
	アキメヒシバ			●	5
	イネ	●			6
	イネ科?			●	7
	エノコロダチ			●	8
	オヒシバ	●			9
	キンエノコロ			●	10
	スズメノヒエ			●	11
	ナルコヒエ			●	12
	ムフオンダチ			●	13
ウコギ	ウコギ			●	14
ウリ	籠草メロン	●		●	15
	スズメウリ			●	16
	ヒョウタン			●	17
ウルシ	ヤマウルシ			●	18
エゴノキ	エゴノキ			●	19
カタバミ	カタバミ			●	20
カハノキ	イヌシヤ			●	21
カヤツリグサ	アゼナルコスゲ			●	22
	イヌタロダチ	●			23
	カヤツリグサ			●	24
	カンゴレンイ			●	25
	ゴウソ			●	26
	マツバ			●	27
キタ	ゴボウ			●	28
	クササブリク			●	29
	ヒシヤギ			●	30
キンボウゲ	キウネノボタン	●		●	31
クワ	カシノキ			●	32
	カナムダラ			●	33
	ヤマダラ			●	34
サトウ	サトウ?			●	35
スイカズラ	ニワトコ	●		●	36
セリ	セリ			●	37
ナデ	イヌナデ			●	38
	オオイヌナデ	●		●	39
	オダクサ			●	40
	オオエナデ	●			41
	シロバナオダクサ	●			42
	ツルツバ			●	43
	ボントクナデ			●	44
	ヤチギナデ			●	45
ツツクワジ	オオツツクワジ		●		46
ツバキ	ツバキ		●		47
フユタチ	マルバフユタチ			●	48
トウダイグサ	アキメギシ			●	49
	エノキダチ			●	50
ナス	センナリホオズキ			●	51
ナデシコ	ミドリハコベ			●	52
ヒノキ	ヒノキ			●	53
ヒルムシロ	ヒルムシロ			●	54
ブドウ	エビヅル			●	55
	ヤマブドウ			●	56
	オムシ			●	57
マタタビ	マタタビ			●	58
	オオギ			●	59
	マメ	マメ科?		●	60
	ヤマアズキ		●		61
ミカン	カラシアジサイ			●	62
	キハダ			●	63
ミズキ	ヤマボウシ			●	64
モクノキ	クロダモク			●	65

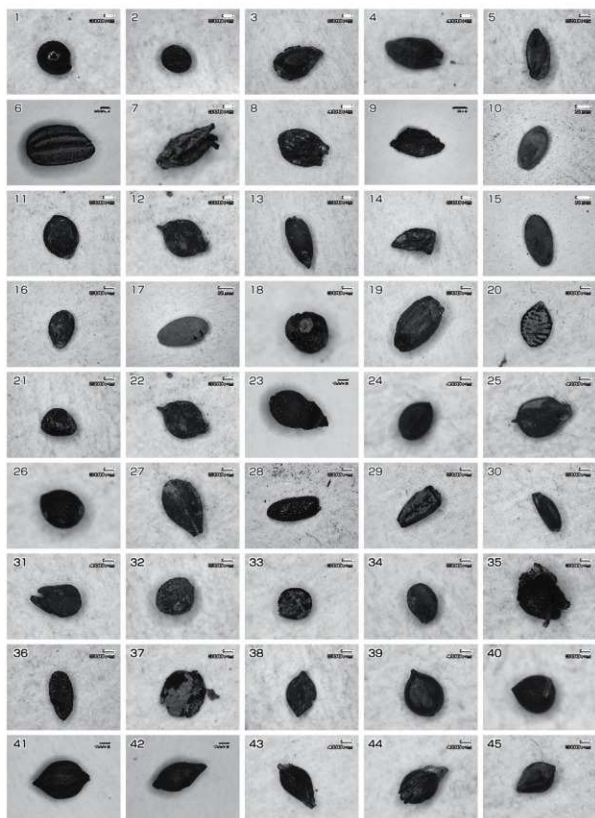


図1 出土種子 1

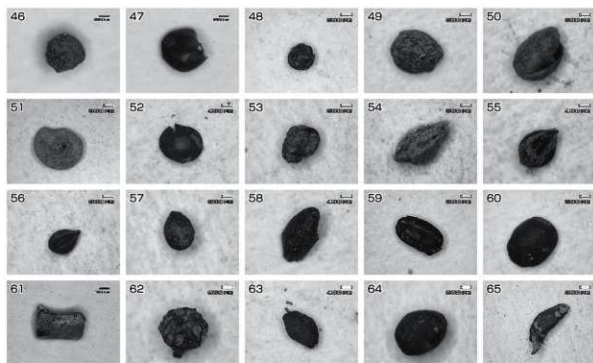


図2 出土種子2

表2 種子圧痕同定結果一覧

No.	遺構	報告No.	時期	器種	圧痕付着部	科	種	長さ (mm)	幅 (mm)
1	畦畔	国28-3	弥生時代後期	鉢	底面	ヤマモモ	ヤマモモ?	4.96	4.19
2	池状遺構	国51-8	平安時代後期	土師器・碗	外面	イネ	キシエノコロ	1.5	1.02
3	池状遺構	(未)	平安時代後期	土師器・碗	外面	イネ	イネ	5.51	2.85
4	溝24	(未)	平安時代後期	土師器・杯	内面	イネ	エノコログサ	6.52	3.13
5	溝32	国64-22	平安時代後期	土師器・碗	外面	イネ	メヒシバ	7.6	2.7
6	土坑8	国88-21	鎌倉時代初	土師器・碗	内面	ウコギ	タラノキ	2.74	1.81
7	土坑8	国90-51	鎌倉時代初	土師器・碗	内面	キンボウゲ	キツネノゴタン	2.77	2.16
8	土坑8	国91-95	鎌倉時代初	土師器・碗	内面	イネ	イネ	4.47	2.31
9	土坑8	国91-95	鎌倉時代初	土師器・碗	内面	イネ	イネ	6.56	3.73
10	土坑8	国92-119	鎌倉時代初	土師器・碗	外面	イネ	メヒシバ	3.08	1.07
11	土坑8	国96-215	鎌倉時代初	土師器・皿	内面	イネ	イネ	6.17	4.01
12	土坑8	国94-156	鎌倉時代初	土師器・碗	外面	イネ	メヒシバ	5.12	1.5
13	土坑8	(未)	鎌倉時代初	土師器・碗	内面	イネ	イネ	6.11	3.62
14	溝28	(未)	平安時代末	土師器・碗	内面	オヤツリグサ	イヌクログワイ	5.55	3.65
15	溝43	国116-4	鎌倉時代	土師器・杯	内面	イネ	イネ	3.64	3.33
16	溝49	国126-10	鎌倉時代	土師器・皿	内面	キタ	チカサバロウ	6.38	2.25

※報告No.の(未)は未掲載を示す

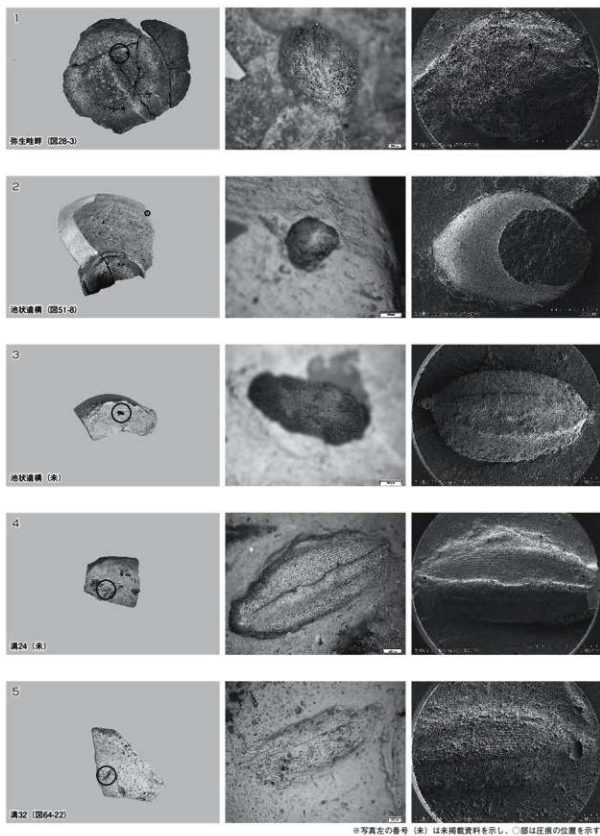


図3 土器圧痕写真1

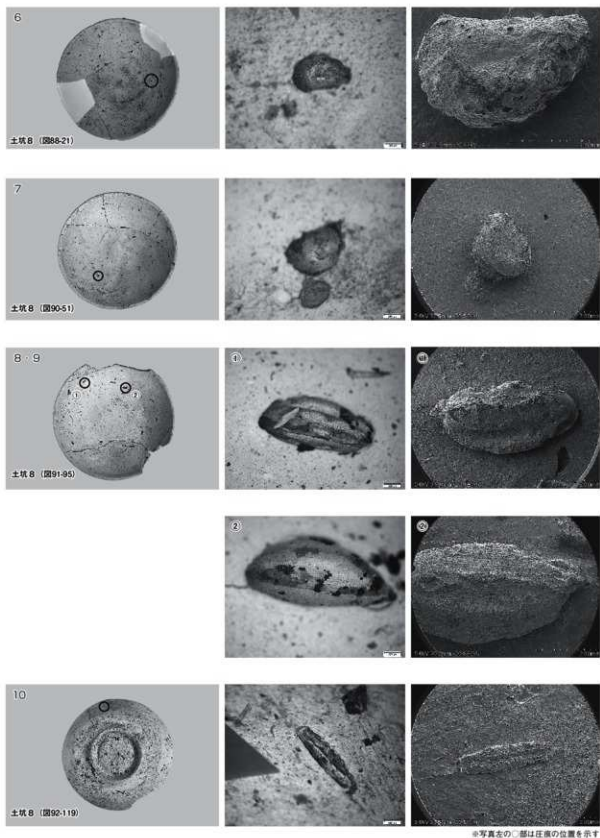
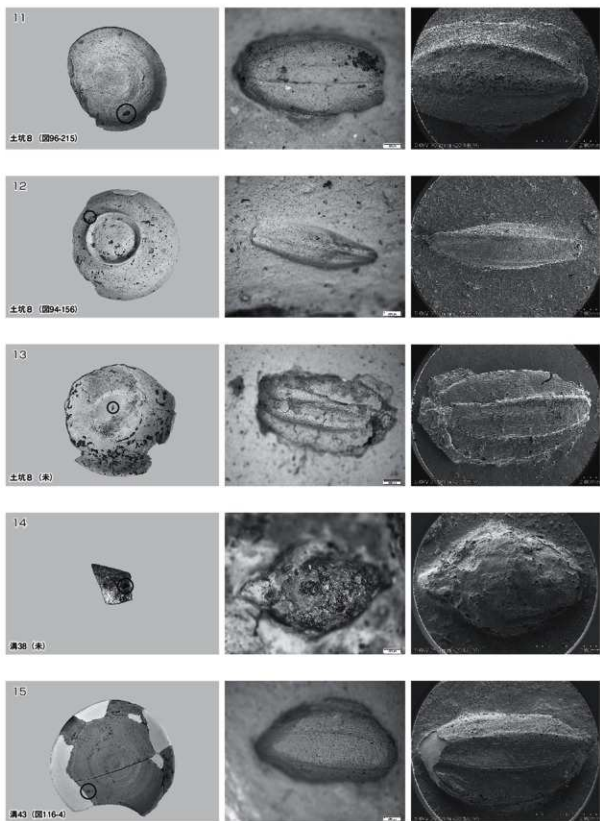


図4 土器圧痕写真2



◎写真左の番号 (未) は未雨敷資料を示し、○部は圧痕の位置を示す

図5 土器圧痕写真3

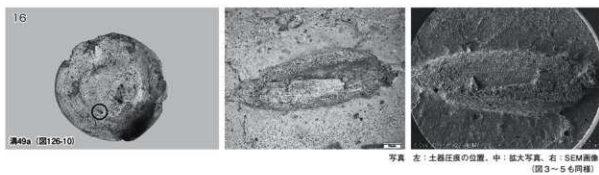


図6 土器片痕写真4

9. 鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体

江川達也（岡山理科大学）

本調査では中世前半～中世後半に属する哺乳綱が出土した（表1・2）。以下に動物分類に従い出土資料の説明を行う。

1 ネコ目

イス *Canis lupus familiaris*

中世中頃・中世後半の層から肩甲骨、上腕骨、尺骨が1点ずつ出土した（表2整理番号No32・50・51、図1）。

イエネコ *Felis catus*

溝59c（中世後半～近世）から上腕骨が1点出土した（表2整理番号No75、図1）。

鹿田遺跡第14次調査においても中世後半の5層下より、左脛骨の完形が出土している〔立石他 2014〕。

2 ウマ目

ウマ *Equus caballus*

中世前半・中世後半～近世の遺構からウマは5点出土した（表2整理番号No29・35・39・45・52、図2）。下顎第3後臼歯、臼歯破片、脛骨、距骨、中足骨が1点ずつ出土し、最小個体数は1である。

3 ウシ目

ニホンジカ *Cervus nippon*

中世前半の遺構からニホンジカは16点出土した（表2整理番号No2～11・18～22・25、図2）。前頭骨1点、側頭骨1点、腰椎1点、肩甲骨1点、中手骨2点（ダブっている）、寛骨2点（ダブっている）、腸骨1点、大腿骨2点（ダブっている）、脛骨1点、踵骨1点、中足骨3点（ダブる部分は存在しない）が出土している。ダブリがみられた中手骨、寛骨、大腿骨より最少個体数は2である。

ウシ *Bos taurus*

ウシは22点出土した（表2整理番号No1・27・28・30・34・37・38・42・44・47・54～56・58・59・61～64・66・68・76、図1・3）。鹿田9・11次調査から出土した動物遺存体として残されている資料では最も数が多い種である。

上顎臼歯2点、下顎骨1点、下顎臼歯2点（下顎第3後臼歯2点がダブっている）、上腕骨2点（ダブる部分は存在しない）、尺骨1点、桡骨4点（右桡骨2点がダブっている）、中手骨2点（ダブリの確認は困難）、大腿骨1点、脛骨3点（ダブリの確認は困難）、距骨1点、中足骨3点（ダブリの確認は困難）が出土している。ダブリがみられた下顎臼歯、桡骨より最少個体数は2である。

4 その他

骨質から哺乳綱であることは推定したが、目の同定が困難である遺存体は25点出土した。そのうち、部位同定ができた遺存体は、臼歯1点、肋骨4点、上腕骨1点である。部分同定ができた遺存体は、骨幹部12点である。

謝辞

岡山理科大学生物地球学部富岡直人教授には比較標本の提供と同定・御教示・御指導を頂いた。記して感謝致します。

引用文献

立石和也・富岡直人 2014「3. 鹿田遺跡第14次調査出土動物遺存体」鹿田遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊（岡山大学理蔵文化財調査研究センター）

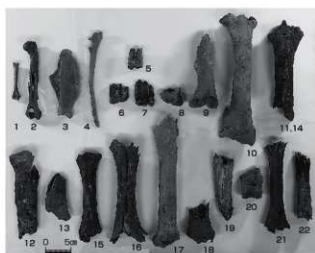


図1 イエネコ・イヌ・イヌ属・ウシ

1: イエネコ (上腕骨R⑦) 2~4: イヌ (2: 上腕骨L⑫, 3: 肩甲骨R⑩, 4: 尺骨R⑩) 5~22: ウシ (5: 上顎第2後臼歯L①, 6・7: 下顎第3後臼歯L⑫・⑬, 8: 上腕骨R⑩, 9: 上腕骨L⑫, 10・11: 桡骨R⑭・⑮, 12・13: 桡骨L⑮・⑯, 14: 尺骨R⑮, 15: 中手骨R⑰, 16: 大跗骨R⑱, 17・18: 脛骨R⑳・㉑, 19: 脛骨L㉒, 20: 距骨L㉓, 21: 中足骨R㉔, 22: 中足骨L㉕)

※○番号は表2の整理番号を示す。



図2 ウマ・ニホンジカ

1~4: ウマ (1: 下顎第3後臼歯R⑤, 2: 臼歯⑨, 3: 脛骨R⑩, 4: 中足骨R⑫) 5~20: ニホンジカ (5: 前頭骨L①, 6: 側頭骨R②, 7: 腰椎③, 8: 肩甲骨R④, 9・10: 中手骨L⑯・⑰, 11・12: 寛骨L⑦・⑧, 13: 腸骨R⑨, 14・15: 大跗骨R⑱・⑲, 16: 脛骨R⑳, 17: 踵骨R⑳, 18: 中足骨R㉑, 19: 中足骨L㉒, 20: 中足骨㉓)

※○番号は表2の整理番号を示す。



図3 ウシ (下顎骨R⑫)

※○番号は表2の整理番号を示す。

表1 鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体種名表

大分類		小分類				学名	
門	上綱・綱	亜綱・亜区・目	科	亜科・属	種・亜種		
脊椎動物門 CHORDATA	哺乳綱		目科属種不明			Mammalia order indet.	
			ネコ目	イヌ科	イヌ属	イヌ	<i>Canis lupus familiaris</i>
				ネコ科	ネコ属	ネコ	<i>Felis catus</i>
			ウマ目	ウマ科	ウマ属	ウマ	<i>Equus caballus</i>
			ウシ目	シカ科	シカ属	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウシ科	ウシ属	ウシ		<i>Bos taurus</i>			

表2 鹿田第9・11次調査出土動物遺存体属性表

整理番号	遺構名	時代・時期	大分類	小分類	部位名	LEM	難係	部分	成長度	破損	風化	色調	計測値
1	池状遺構	中世前半	哺乳類	ウシ	下顎第2後臼歯	L	—	歯冠部	小歯連結	なし	sv	Br	—
2	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	大腸骨	R	—	完形一部欠損	d.p.:uf	なし?	sv	Br	—
3	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	—	完形一部欠損	d:f.p:uf	なし?	sv	Br	—
4	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	—	近位端+骨幹部	? :f	なし?	sv	Br	—
5	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	R	—	近位端	? :	なし?	sv	Br	—
6	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	? :	—	骨幹部+遠位端	d:f	なし?	sv	Br	—
7	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	寛骨	L	—	完形一部欠損	uf	なし?	sv	Br	—
8	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	寛骨	L	—	脛骨部欠損	uf	なし?	sv	Br	—
9	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	—	完形一部欠損	f	なし?	sv	Br	—
10	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	大腸骨	R	—	骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
11	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	前頭骨	L	♂	角突起	冠狀隆起:窟	切斷痕有	sv	Br	—
12	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	肋骨	L	—	近位端+骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
13	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	肋骨	L	—	近位端+骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
14	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	肋骨	L	—	近位端+骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
15	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	肋骨	L	—	近位端+骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
16	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	肋骨	L	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
17	池状遺構	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
18	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨	R	—	完形一部欠損	p:f	なし?	sv	Br	—
19	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	腰骨	M	—	椎+椎体	? :	なし?	sv	Br	—
20	池状遺構	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	L	—	近位端+骨幹部	d:uf	なし?	sv	Br	—
21	溝22	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	L	—	近位端+骨幹部	? :	? :	—	Br	—
22	井戸2	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	頸椎骨	R	—	四肢関節	? :	なし?	sv	Br	—
23	井戸2	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
24	井戸2	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
25	井戸3	中世前半	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	L	—	近位端+骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
26	井戸10	中世後半	哺乳類	ウシorウマ	肩甲骨	R	—	骨幹部+遠位端	? :	sp	sv	Br	—
27	井戸10	中世後半	哺乳類	ウシ	脛骨	L	—	骨幹部+遠位端	d:f	切斷痕有	sv	Br	—
28	土坑8	中世前半	哺乳類	ウシ	上顎臼歯	R	—	歯冠部	小歯連結	なし?	—	N	—
29	土坑8	中世前半	哺乳類	ウマ	臼歯	? :	—	歯冠部破片	小歯連結	なし?	—	Br	—
30	溝59c:基1	中世後半	哺乳類	ウシ	中手骨	R	—	近位端+骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
31	溝43	中世前半	哺乳類	日不明	臼歯	? :	—	歯冠部破片	? :	なし?	sv	Br	—
32	溝45	中世前半	哺乳類	イヌ	上腕骨	L	—	完形	d.p.:f	なし?	sv	Br	GL:159.53mm
33	溝47	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
34	溝49	中世前半	哺乳類	ウシ	脛骨	L	—	完形一部欠損	? :	なし?	—	Br	—
35	溝49	中世前半	哺乳類	ウマ	脛骨	L	—	近位端+骨幹部	p:f	なし?	sv	Br	—
36	溝50	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
37	溝50	中世前半	哺乳類	ウシ	下顎第3後臼歯	L	—	歯冠部	小歯連結	なし	sv	Br	—
38	溝50	中世前半	哺乳類	ウシ	下顎第3後臼歯	L	—	歯冠部	エナメル質残	なし	sv	Br	—
39	溝50	中世前半	哺乳類	ウマ	脛骨	R	—	骨幹部	? :	切斷痕有	sv	Br	—
40	溝50	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
41	溝50	中世前半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
42	溝50	中世前半	哺乳類	ウシ	下顎骨	R	—	完形	MS出土	なし?	sv	Br	—
43	溝49	中世前半	哺乳類	ウシ?	大腸骨	? :	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
44	溝49	中世前半	哺乳類	ウシ	脛骨	L	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
45	溝60	中世後半	哺乳類	ウマ	下顎第3後臼歯	R	—	歯冠部	小歯連結	なし	sv	Br	—
46	溝59d	中世後半	哺乳類	ウシorウマ	肩甲骨	R	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
47	溝59d	中世後半	哺乳類	ウシ	脛骨	R	—	完形	d.p.:f	なし?	sv	Br	—
48	溝59b	中世後半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
49	溝59b	中世後半	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	部分不明	? :	? :	sv	Br	—
50	溝59c	中世後半～近世初	哺乳類	イヌ	肩甲骨	R	—	完形一部欠損	p:f	なし?	sv	Br	—
51	溝59c	中世後半～近世初	哺乳類	イヌ	尺骨	R	—	完形一部欠損	p:f	なし?	sv	Br	—
52	溝59c	中世後半～近世初	哺乳類	ウマ	中足骨	R	—	近位端+骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
53	溝59c	中世後半～近世初	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	部分不明	? :	? :	sv	Br	—
54	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	中足骨	R	—	完形一部欠損	d:f	なし?	sv	Br	—
55	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	脛骨	L	—	骨幹部	? :	? :	sv	Br	—
56	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	脛骨	L	—	近位端+骨幹部	P:f	なし?	sv	Br	—
57	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	部分不明	? :	なし?	sv	Br	—
58	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	大腸骨	R	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
59	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	中足骨	? :	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
60	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	日不明	部位不明	? :	—	骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—
61	溝59a	中世後半～近世初	哺乳類	ウシ	脛骨	R	—	近位端+骨幹部	? :	なし?	sv	Br	—

整理番号	遺構名	時代・時期	大分類	小分類	部位名	LEM	難語	部分	成長度	破損	風化	色調	計測値
62	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	尺骨	R	—	骨幹部	?	なし?	viv	Br	—
63	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	中手骨	?	—	骨幹部	?	なし?	viv	Br	—
64	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	脛骨	R	—	骨幹部+遠位端	p:f	なし?	viv	Br	—
65	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	骨幹部	?	なし?	viv	Br	—
66	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	上腕骨	R	—	骨幹部+遠位端	d:f	なし?	viv	Br	—
67	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	部分不明	?	?	viv	Br	—
68	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	中足骨	L	—	骨幹部	?	?	viv	Br	—
69	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	上腕骨	?	—	骨幹部	?	?	viv	Br	—
70	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	骨幹部	?	?	viv	Br	—
71	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	部分不明	?	?	viv	Br	—
72	溝59a	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	部分不明	?	?	viv	Br	—
73	溝59c	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシorウマ	大腿骨	?	—	骨幹部	?	なし?	viv	Br	—
74	溝59c	中世後半～近世初	哺乳綱	目不明	部位不明	?	—	骨幹部	?	?	viv	Br	—
75	溝59c	中世後半～近世初	哺乳綱	イエネコ	上腕骨	R	—	完形一部欠損	dp:f	なし?	viv	Br	—
76	溝59c	中世後半～近世初	哺乳綱	ウシ	上腕骨	L	—	骨幹部	?	なし?	viv	Br	—

※遺構名で「溝59: 趾」は同溝の趾骨を示す。

第5章 考 察

1. 中世における石鍋の流通構造－岡山県下における検討から－

はじめに

中世における物資のひろがりをもたらすことは、流通圏や流通経路を考えるにとどまらず、各地域社会の性格や歴史的意義に迫るためにも欠かすことができない。とりわけ瀬戸内海は中世における物流の大動脈であり、東アジア的な視点からみても重要な地域であると言えるだろう。海運を利用して様々な物資が東から西へ、あるいは西から東へと運ばれ、沿岸部を中心として活発な経済活動が行われたことは想像に難くない。

このような経済活動を示す遺物の一つに石鍋がある。中世の石鍋は大多数が滑石を用いたもので、なかでも長崎県西海市ホケット石鍋製作所跡をはじめとした西彼杵半島西側沿岸部は一大生産地として著名である（正林他編1980、東2003・2008、松尾2016など）。ホケット石鍋製作所跡においては石材の獲得方法が具体的に明らかにされ、製作工程も示されている（下川1973、正林他編1980）。滑石製石鍋の生産地はこの他にも福岡県粕屋郡篠栗町（吉村他2003）、福岡県大牟田市（森田1983）、山口県宇部市（乗安編1987）で確認されているが、西彼杵半島の生産規模は他を圧倒しており、各地で出土している滑石製石鍋の故地はほとんどが西彼杵半島であると考えられている（木戸1993、鈴木2006）。製品の出土遺跡としては中世の貿易港でもあった福岡県福岡市博多や集落遺跡として著名な広島県福山市草戸千軒町遺跡が注目される。草戸千軒町遺跡では2,171点もの石鍋が出土しており、集積地、そして消費地であったと考えられている（鈴木1998）。ただ草戸千軒町遺跡のようにおびただしい数の石鍋が出土した遺跡は全国的に見ても限られており、瀬戸内海沿岸の多くの遺跡では5点未満の出土が多い。

そのような中において、岡山市北区鹿田町に位置する鹿田遺跡（図1）ではこれまで4点の出土が報告されていたが、ここに第9・11次調査で出土した4点（本書掲載）が加えられ、出土数は計8点となった。第1次調査出土の石鍋には利用痕跡や転用加工の痕跡が確認されることがすでに指摘されており（吉留他編1988、保田1988）、それ以降に出土した資料には擦り切り痕跡が確認されている（松木他編1993）。鹿田遺跡では、全国4箇所に設置された藤原氏の殿下渡領の一つである「鹿田庄」に関連する遺構・遺物が多数確認されており、区画溝をともなう屋敷地の構造とその変遷が明らかにされている（山本2007・2014など）。岡山県下では鹿田遺跡の他にも10点前後のまとまった量の石鍋が出土した遺跡がある。広域流通品と考えられている石鍋の流通構造について検討することは、中世社会における鹿田遺跡の位置付けを考える上でも重要であろう。

1. 本論の目的と課題 －石鍋の搬入・消費形態－

石鍋、特に滑石製石鍋は現在のところ石材の原産地が限られており、鹿田遺跡の位置する岡山県下の製品は搬入されたものと理解されている。どのような経路で搬入された



図1 中世の石鍋製作所・主な出土遺跡と鹿田遺跡の位置

のかは石材の産地と流通形態の検討が必要だが、保有遺跡の評価を行う上ではどのような状態で搬入されたのかが重要になる。このようなことを問題にするのは、本地域で出土している石鍋はすべてが破片であることに理由がある。破片での出土の場合、その要因は二つが考えられる。一つは完形品で入手されたものが割れて廃棄された場合であり、一般的に考古遺物はほとんどがこのような状態であると考えられる。もう一つは入手時から破片であった場合である。弥生時代を中心に盛行する破鏡はこの典型であり、破片であっても再加工されて機能する遺物も存在する。石鍋に使用される滑石は、石材の特性から温石としての利用も盛んで、破片が再利用されたものも多くみられる。奄美大島では破片の状態での搬入も指摘されており(池田2003)、当地域でも搬入形態、つまり完形品でもたらされたのか、破片でもたらされたかの検討が必要である。

また上記の課題に関連して、石鍋が実際に使用されたのかどうかという点も検討が必要である。草戸千軒町遺跡では未使用品に着目した検討から集積地としての性格が指摘され、石鍋流通の中継地としての機能が考えられてきた(木戸1993)。しかし出土資料の半数に煤やタール状物質の付着が確認され、他の資料にも何らかの使用痕がみられることから、物資の集積地とともに消費地としての性格もあつたことが示唆されている(鈴木1998)。このような使用痕の検討は草戸千軒町遺跡と同様に岡山県下の資料についても検討する必要があり、それに基づいて遺跡の評価を考えていかなければならない。

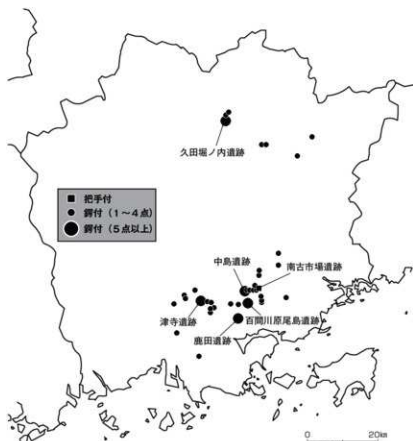


図2 岡山県下における石鍋・滑石製品(中世)の出土遺跡

このような視点から本論では岡山県下での石鍋の出土状況を整理することからはじめる。管見の限り岡山県下では95点の出土が確認できる(図2)。これらの資料のうち1遺跡で5点以上が出土した遺跡を中心に破片の残存状況、使用痕についての検討を行う。これらの検討から当地域における石鍋の流通構造を検討し、鹿田遺跡などの石鍋出土遺跡について評価していく。

2. 岡山県下における石鍋の流通状況

石鍋は形状から大きく把手付と鈿付に分けることができ、木戸雅寿や森田勉らによって型式分類や編年が提示されている(木戸1982・1993、森田1983、鈴木1998)。そこでは把手付から鈿付への時期的な変化が考えられており、前者は11～12世紀前半、後者は12世紀後半～14世紀前半ごろに流通するとされている(鈴木1998・2006)。このような形態変化は分布の変化にも如実に結びついていることが指摘されている。把手付は博多・大宰府といった限られた都市が中心で、さらに琉球列島でのまとまった出土がみられるが、東方への広がりは極めて限定的である。一方、鈿付は瀬戸内以東への流通が活発化し、琉球列島への広がりはほとんど途絶える(木戸1993、新里2002・2008、鈴木2006)。

ここで岡山県下における石鍋の流通状況をみてみよう(図2)。これまでの指摘に符合するように把手付のものはほとんど出土していない。しかし注目される資料として岡山市中区南古市場遺跡出土品を挙げることができる(扇崎編2012、図3)。口径1.5cm、底径1.6cm、器高1.3cmの小形品である。ミニチュア品と考えられるが、岡山県下では唯一の把手付石鍋として重要である。これに対して鈿付は出土数が急増し、出土遺跡も大きく広がる。胴部～底部の破片も形態的な特徴から多くは鈿付と考えられる。温石として利用されたと考えられるものも多い。分布は瀬戸内海側に集中しており、5点以上のまとまった出土が鹿田遺跡(8点:吉留他編1988、松本他編1993、本書)、岡山市北区津寺遺跡(13点:正岡他編1994・1997)、岡山市中区百間川原尾鳥遺跡(12点:平井他編1984)、岡山市中区中島遺跡(11点:高田他編2009・河田編2011)でみられる。他の遺跡では1～3点の出土であり、上記の遺跡間に散在している状況を呈している。一方、内陸部では苫田郡鏡野町久田堀ノ内遺跡(弘田他編2005)で5点が出土している。近隣の同夏栗遺跡(中野他編2005)でも2点が出土しており、内陸部における流通を考える上で注意すべきである。

5点以上が出土している上記の5遺跡では、石鍋の型式に差異が認められる。鹿田遺跡では口縁部が内湾する資料が確認されている(図4-15・16)。このような特徴は各氏によって鈿付の中でも最古段階に位置づけられている(木戸1982・1993、森田1983、鈴木1998)。百間川原尾鳥遺跡や津寺遺跡でも口縁部が内湾する個体が出土している(図4-2・4・26)。後者の2遺跡では口縁部が直線的に広がるものもみられる(図4-1・3・18・23)、内湾するものよりも新しく位置づけられている。鈿の断面形が台形状を呈する百間川原尾鳥遺跡出土資料の方が古く位置づけられるとも考えられるが、いずれにしても両遺跡では鈿付石鍋が最古段階以降継続して搬入されていたことがわかる。鹿田遺跡でも今後同様な傾向を示す資料が得られる可能性もある。一方、久田堀ノ内遺跡と中島遺跡では明確に最古段階に位置づけられる資料は確認されていない。久田堀ノ内遺跡では口縁部がやや内湾する資料がみられるが(図5-14)、鈿の突出が弱く、最古段階に位置づけられるかは検討が必要である。中島遺跡は口縁部が直線的に広がる形態を呈するものがほとんどで、鈿がみられない個体も存在する(図5-1～6)。鈿がみられないものは最も後出するものであり、鹿田遺跡などで出している資料群との型式学的な距離が認められる。このような状況は搬入時期の差を表していると考えられる。鈿付の最古段階である口縁部が内湾する資料群の流通時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられており、鹿田遺跡、百間川原尾鳥遺跡、津寺遺跡ではすでにこの時期において石鍋を受容して



図3 把手付石鍋のミニチュア品
(南古市場遺跡、縮尺1/1)

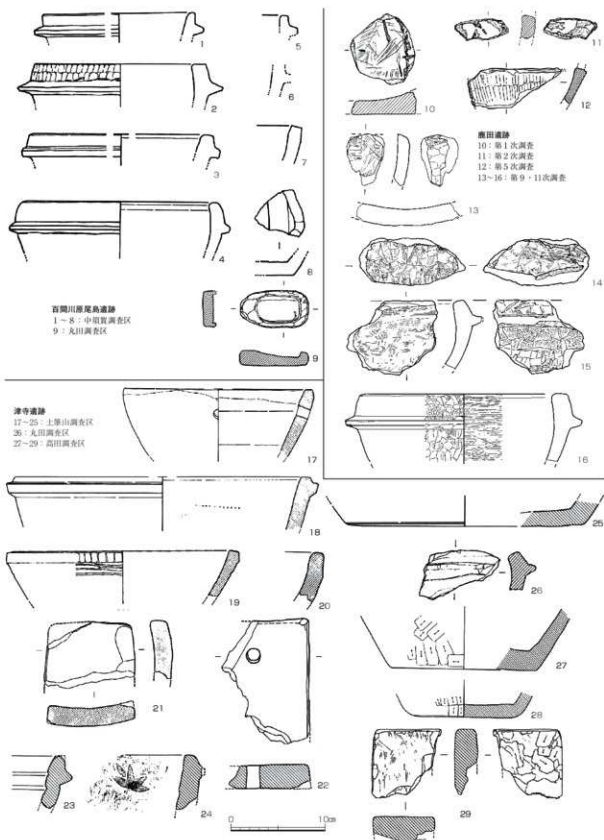


図4 岡山県下の石鎧・滑石製品(中世)①(鹿田遺跡、百間川原尾島遺跡、津寺遺跡)(縮尺1/4)

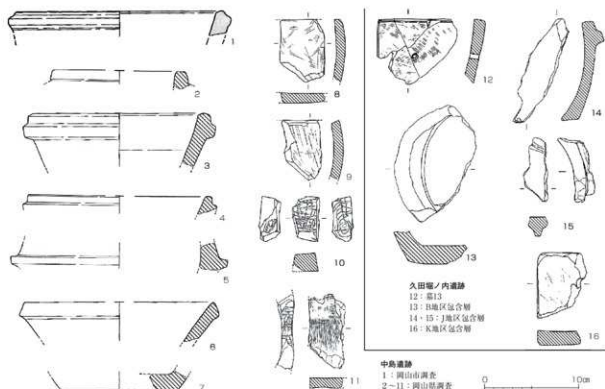


図5 岡山県下の石鍋・滑石製品（中世）②（中島遺跡・久田堀ノ内遺跡）（縮尺1/4）

いたと考えられる。一方、中島遺跡出土資料は最も新しい筥のないものが含まれており、口縁部が内湾する資料も欠いていることから、鹿田遺跡などとは異なり14世紀代以降に石鍋を受容するようになったものと考えられる。

ここで石鍋の石材についても触れておきたい。鹿田遺跡第5次調査出土資料は、蛍光X線分析の結果、滑石ではなく緑泥石化した角閃岩であることが確認された（図4-12）。このことは石鍋に滑石以外の石材が使用されることがあったことを物語っており、夏栗遺跡では頁岩や蛇紋岩とされているものもある（中野他編2005）。さらに津寺遺跡では表面が暗緑色を呈するものが出土しており（図4-18）、外面に石鍋特有の鑿で削られた角閃跡を確認することができなかった（図6）。本資料は滑石特有の光沢や滑らかな表面状態がみられないことから、滑石以外の石材（非滑石）である可能性が考えられる。これらの石材については今後蛍光X線分析を中心とした石材の同定作業が必要であり、滑石製石鍋とは製作地を異にする可能性も含めて検討が必要である。

このように岡山県下においては、満遍なく分布しているのではなく、特定の遺跡にまとまった量の石鍋が集積しているという状況を見出すことができる。このような状況は流通形



図6 非滑石製の可能性のある石鍋（津寺遺跡：図4-18）

態を考える上で重要である。

3. 石鍋の搬入形態

次に石鍋がどのような状態で搬入されていたのかを
残存状況から検討していこう。完形品が出土して
いないことは既に述べたが、破片の状態をみること
で搬入形態、つまり完形でもたらされたものか、破
片でもたらされたものかを考えていく。

鹿田遺跡で出土したものは破片の大きさにばらつ
きがあるが、口縁部～鋳が残存している資料が2点
ある。これらは割れ口に磨滅がほとんど認められな
いため、破片となってから短期間のうちに廃棄され
たと考えられるだろう(図7-①～③)。一方で鋳の
部分は細かな欠損が多くみられるが、この部分は割
れ口とは状態が異なっており、使用時に生じたもの
と考えられる(図7-④)。これらのことから「石
鍋が完形でもたらされ、一定期間の使用後に割れて、
短期間のうちに廃棄された」というライフヒストリ
ーを考えることができるだろう。

一方で、擦切によって沈線状の溝を刻んでから折
り取られた破片も出土している(図8左)。内外面が

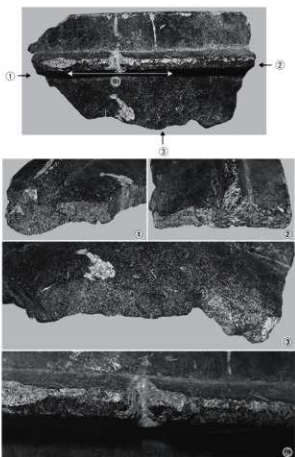


図7 石鍋の破断面(鹿田遺跡第9・11次:図4-16)

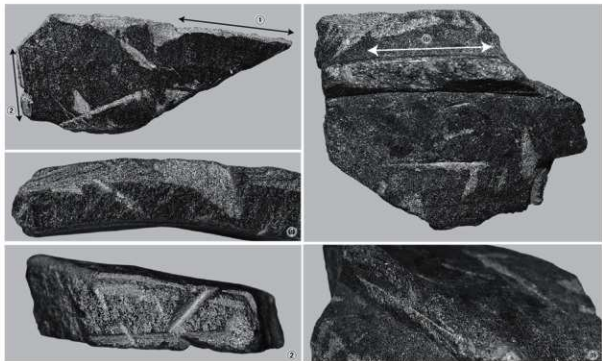


図8 擦切の痕跡(左:鹿田遺跡第5次 図4-12, 右:鹿田遺跡第9・11次 図4-15)

らの擦切後、完全に切断する前に折り取られている。これは意図的な分割が行われていたことを示しており、そこからは破片での流通や用途が存在したことを示している。問題はどこで破片の状態になったかである。つまり搬出の段階からすでに破片の状態であったのか、それとも当地にもたらされた後に破片となったのかという点である。鹿田遺跡では罫に擦切によると考えられる擦痕が認められる資料が出土している(図8右)。これにより罫は欠損してしまっているが、滑石が軟質であることを考えてもこのような割れ方が製作中や使用中に生じたとは考えにくい。入手後の加工と判断してよからう。このように考えるとこの破片は分割途中のものと考えられ、当遺跡においてそのような作業がおこなわれた可能性がある。津寺遺跡では罫が削り落とされた跡(図9上)や擦切状の痕跡(図9下)も確認されており、罫を取り除いた平坦な状態で使用される場合もあったようである。草戸千軒町遺跡でも罫の痕跡を残す資料が確認されており(鈴木1998)、当地域でも分割行為が行われていたと考えられる。このように岡山県下への石鍋の流通は、基本的に完形品であったと考えられ、鹿田遺跡や津寺遺跡のように集積のみられる場所ではこれを分割して破片として使用する、またはさらにそこから破片が周辺にもたらされる場合もあったと思われる。

これに対し、温石として利用されたと考えられる資料の中には方形を基調とした一群が存在する。これらについては表面に石鍋特有の連続的な外面の調整痕がみられず、ほぼ湾曲のないものもみられる(図4-22・29など)。罫付の石鍋のうち瀬戸内地域以来に拡散するのは底部に向けて径が小さくなる形態であることから、ある程度の大きさの破片を確保するとなると、湾曲率の高いものしかとれないと考えられる。このことは石鍋とは別に板状の滑石製品として搬入された可能性を考えておく必要があることを示している。このようなことがあるため、温石や穿孔が施された製品を石鍋の転用とするかどうかはさらに慎重な検討が必要であろう。

4. 使用痕の検討

ここでは煤の残存状況に着目し、煮炊き具として使用されたのかどうかについて検討する。まず底部については、津寺遺跡や岡山市北区川入遺跡出土資料において明瞭な煤の付着が確認された。特に川入遺跡出土資料は煤の付着が分厚く、胴部外面も同様の状態である(図10上)。また鹿田遺跡では胴部外面や罫に煤の付着がみられる資料があり(図7)、百間川米田遺跡出土資料は外面全体が煤に覆われている



図9 罫の除去と擦切状の加工痕
(津寺遺跡 上:図4-19、下:図4-24)



図10 外面の煤付着状況
(上:川入遺跡、下:百間川米田遺跡)

(図10下)。これらのことから当地域では石鍋は基本的には実用に供されたものと考えることができる。まとまった量の集積がみられる場合も、集積地としての性格と共に、消費地であったことも考えておかなければならない。このような状況は草戸千軒町遺跡でも指摘されており(鈴木1998)、瀬戸内海沿岸ではこのような状況が一般的であったと考えられる。

5. 石鍋の流通構造

以上のように石鍋の岡山県下での分布状況、搬入形態、使用痕を検討してきたが、これらの検討結果から石鍋の流通構造について考えてみよう。このような視点からの研究はすでに他地域でなされている。特に鈎付のものについてみると、瀬戸内海沿岸では商業・手工業・流通といった経済活動が盛んな場で多く出土することが指摘されている(鈴木1998・2006、甲斐2001)。岡山県下の様相を明らかにするうえで、集落構造の変遷が明らかにされている鹿田遺跡は注目される。鹿田遺跡については、当地域の他遺跡に先駆けて12世紀後半に集村化の傾向がみられ、これ以降大形の屋敷地区画が出現することから、一般的な農民層の屋敷地とは区別される存在であったことが指摘されている(山本2007)。また橋田正徳は鹿田遺跡を居館1-1類に分類される集落形成後、居館1-2類の居館へと移行するものと捉えており、移行にともなっては荘園領主からの荘官の派遣が背景にあったことを指摘している(橋田2013)。鹿田遺跡での鈎付最古段階の資料の出土は、石鍋が瀬戸内地域以東に広がる初期の段階において、すでに石鍋がもたらされ、使用されていたことを示している。鈎付石鍋の流通は12世紀後半からと考えられており、上記のような鹿田遺跡の様相が変化する時期におよそ符合していることは興味深い。瀬戸内海以東での石鍋流通開始期には、地域内の階層的な上位層が介在していたことを示していると思われる。津寺遺跡や百間川原尾島遺跡もやはり集村化から屋敷地の成立へとといった様相を呈している(正岡他1994、岡本1996)。両遺跡では後出型式の石鍋も出土していることから、引き続き石鍋を受容し続けたものと思われる。一方、中島遺跡では口縁部が外方に向かって直線的に開くタイプが多く、流通時期は14世紀代に下るものである。中島遺跡は「平地城館」であり、方形館には領域支配の象徴的な性格が含まれていると考えられている(鳥崎2009)。石鍋の流通主体については宋商人から荘園公領制に依拠する国内交易集団へ、そして鎌倉後期の北条得宗家に結びつく勢力へとといった変化過程が提起されている(鈴木2006)。また長崎県における検討では中世山城や居館跡の分布と重なることから在地領主の介入も想定されている(松尾2016)。岡山県下の状況からすると、鈎付石鍋を初期段階から受容していた遺跡は、その後も継続的な集積地として機能していたと考えられ、そのような流通構造に在地的な性格を有する領域支配に関与する人々が組み入れられていくという構図を読み取ることができる。

また流通構造を考える上では分割行為についても触れておかなければならない。鹿田遺跡では口縁部が内湾する個体に擦切の痕跡が見出されたことから、石鍋流通の初期段階においてすでに分割がおこなわれていた可能性が考えられる。完形で搬入されたものを分割するという行為からは、破片で使用することに何らかの意義があったと考えられるだろう。破片の用途は断定できないが、滑石を保有すること自体に意義があったことも考えておかなければならない。当然温石のような機能も持ち合わせていたと想定されるが、分割された破片は破断面がまったく磨滅しないまま廃棄されているものもある。このことから分割された場所で破片が使用されるような状況だけでなく、破片の状態になった後、極めて短期間の間に廃棄されるという場合があったと考えられる。鹿田遺跡から破片がさらに他集落へと搬出された可能性もあり、このような拡散形態を流通構造に組み込む必要がある。特に1-2点の破片しか出土しない場合には、それだけを直接的に入手したとは考え難いことから、このような石鍋ではない滑石製品としての流通形態も存在したと思われる。

以上のことをまとめると、岡山県下における鈎付石鍋の流通については、①階層的な上位層が住まう場所への拡散、②そこで分割されたものが周辺の集落へ拡散、という構造を描き出すことができる。このような状況は少なくとも12世紀後半から13世紀前半にはみられ、鈎付石鍋拡散の初期段階ですでに滑石自体になんらかの意義を見

出していた可能性がある。近年は長崎県西彼半島の滑石製石鍋生産が宋商人の影響により開始され、都が置かれた京都でも希少品としての扱いを受けていたことが指摘されている（鈴木2006）。地方における滑石製石鍋とその破片の流通については、このような背景が影響を与えていたことも考えられるだろう。14世紀になると在地色の強い城館にも多くの石鍋が流通するようになり、石鍋の使用者層がそれ以前よりも多様化したものと考えられる。鹿田遺跡のような階層的上位者層の介在なしに石鍋を入手していたことも考えられ、流通構造は大きく変化したものと思われる。この時期には鹿田遺跡で大型溝で区画された閉鎖的空間の創出が認められ、広域的な土地開発を背景とした、流通の促進が生じていた可能性が指摘されている（山本2014）。石鍋の流通構造の変化にもこのような地域動態が反映されていることも考えられるだろう。

以上、岡山県下の石鍋についての検討から、流通構造についてまとめた。これまでの石鍋の流通論では列島を取り巻く政治状況が強く作用していたことが指摘されてきたが、荘園や城館などを含む地域的な集落の展開の中にもその流通構造の転換を促す要素が存在していたものと思われる。今回の検討は石鍋の集積が顕著な遺跡を取り上げたものだったが、その他の遺跡の資料を含めた検討をおこない、流通構造をより立体的に復元していくことが必要になる。また生産地についても蛍光X線分析や製作技法の面からあらためて問い直していかなければならない。今後はこのような視点から中世における物流の具体像を明らかにし、歴史的な評価につなげていきたい。（南健太郎）

本稿を草するにあたって以下の方々から多くの助言をいただきました。記して感謝いたします。

柴田亮、白石純、新里亮人、鈴木茂之、山本祝世

参考文献

- 池田幸史 2003「穿孔を有する滑石製石鍋破片について」『小浜フワガタ遺跡群』名瀬市文化財調査4 名瀬市教育委員会
 福岡 由編 2011『南古市場遺跡』岡山市教育委員会
 岡本寛久 1996『中世の村落』『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 岡山県教育委員会
 甲斐昭光 2001『兵庫県出土の中世滑石製品』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号
 河田健司編 2011『中島遺跡』岡山市教育委員会
 橋田正徳 2013『中世前期における居館の展開－考古学による「在地領主」論の検証作業－』『古文化談義』第69集 九州古文化研究会
 本戸雅寿 1982『草戸千軒町遺跡出土の石鍋』『草戸千軒』No.112
 本戸雅寿 1993『石鍋の生産と流通について』『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会
 島崎 東 2009『岡山県下の中世平地城館について』『中島遺跡 宮南遺跡 因長遺跡 天神河原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告221 岡山県教育委員会
 下川達雄 1973『滑石製石鍋考』『長崎県立美術館研究紀要』第2号 長崎県立美術館
 正林 渡他編 1980『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』大瀬戸町文化財調査報告第1集 大瀬戸町教育委員会
 新里亮人 2002『滑石製石鍋の基礎的研究－付 九州・沖縄における滑石製石鍋出土遺跡集－』『先史地球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から』 熊本大学文学部
 新里亮人 2008『琉球列島出土の滑石製石鍋とその意義』『日琉交易の黎明』 森活社
 鈴木康之 1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告2 広島県歴史博物館
 鈴木康之 2006『滑石製石鍋の流通と消費』『鎌倉時代の考古学』 高志書院
 高田恭一郎他編 2000『中島遺跡・宮南遺跡・因長遺跡・天神河原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告221 岡山県教育委員会
 兼安和二編 1987『下請川南遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告書第104集 宇部市土地開発公社・山口県教育委員会
 東 貴之 2003『滑石製石鍋製作所について』『西海考古』5 西海考古同人会
 東 貴之 2008『滑石製石鍋製作所について②』『調査報告』1 長崎石鍋記録会
 平井泰男他編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県文化財保護協会
 弘田和司他編 2005『久田瀬・内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192 岡山県教育委員会
 正岡勝夫他編 1994『津寺遺跡』山陽自動車道建設に伴う発掘調査9 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 岡山県教育委員会
 正岡勝夫他編 1997『津寺遺跡4』山陽自動車道建設に伴う発掘調査14 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会
 松木彦彦他編 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 松尾秀昭 2016『滑石製石鍋の生産・流通－中世西海地域の特産品－』『石が語る西海の歴史』 アルファベータブックス

考察

- 森田 勉 1983「滑石製容器－特に石罎を中心として－」『佛教藝術』148 毎日新聞社
- 吉村靖徳・黒瀬茂文 2003「福岡県鎌栗南蔵院の滑石製石罎製作跡」『古文化誌叢』第50集(中) 九州古文化研究会
- 保田義治 1988「石罎について」『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移－鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世 2014「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の桑里間連遺構」『桑里制・古代都市研究』第30号 桑里制・古代都市研究会
- 古賀秀敏他編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター

図版出典

- 図1・2 筆者作成
- 図3 扇崎編2011
- 図4 1～9：平井他編1984、10・11：古賀他編1988、12：松本他編1993、13～16：本書、17～26：正岡他編1994、27～29：正岡他編1997
- 図5 1：河田編2011、2～11：高田他編2009、12～16：弘田他編2005
- 図6～10は所蔵機関の許可を得て筆者撮影・掲載。所蔵機関は以下の通り
- 図6・9・10 岡山県古代古墳文化財センター
- 図7・8 岡山大学理蔵文化財調査研究センター

2. 鹿田遺跡における弥生時代～古墳時代初頭の水田関連遺構

はじめに

鹿田遺跡第9・11・14次調査地点は鹿田遺跡の南東部に位置し、各調査地点は東西方向に並ぶ。全体で東西約150m、南北約50mの範囲を占める。同地域に広がる弥生時代後期～古墳時代初頭の水田関連遺構は、鹿田遺跡が所在する岡山平野の旭川下流域において最南端の位置にあたる。こうした条件下の水田遺構は、当時の地形復元の手がかりとなると同時に、臨海部の小規模集落の生業を考える上でも重要であり、ここで、その概要をまとめることとする。第9・11次調査地点の東側に接する第14次調査地点の成果については、正式報告（岩崎他2014）後の検討から、一部修正も加えて、ここで改めて評価したい。

(1) 水田の特徴

検出された遺構は畦畔と溝、そして周囲に溝をもつ円形状の高まりである。それらの上部にはく7層><6層>の堆積が確認される。特に、中世前半期にあたる<6層>の形成に伴う影響を受けてく8層>の一部削平が進行したため、水田の特徴を比較的良好にとどめるのはく9層>上で検出された遺構群となっている。よって、弥生時代後期～古墳時代初頭にあたる同段階を中心に、一部く8層>への変化を加えながら説明することとする。

a. 水田区画の復元－畦畔と溝－

畦畔と溝の位置から水田の区画を復元してみよう（図1）。両遺構を、以下の三方向にまとめて特徴を述べよう。

【東西方向ライン】 東西方向の畦畔あるいは溝のラインとして2列が抽出される。北側のラインを構成するのは第11次調査溝1（以下、S11-溝1と記す場合あり¹⁾。他も同様）である。一方、南側ラインはS14-溝1からS11-溝2および両溝に沿って検出されたS14-高まり3とS11-畦畔1c・同3とで構成される。

<9層>では、北ラインのS11-溝1aは、CEラインからS11-畦畔1aの北端を抜けて東側の第14次調査地点に入り、同調査区の北壁を17ライン付近まで走る。そして、調査区外の北東に向かうことが確認される²⁾。長さは50m以上である。また、南ラインのS11-溝2は、溝の西端が位置する26ライン付近からやや方向を南に振りつつ西に向かい、第12次調査地点の東西溝に続く可能性が高い（山本2001）。その結果、長さは140m以上におよぶことが予想される。この南側と北側ラインの間隔は、本調査地点において30～35mである。

【北東－南西方向と南北方向ライン】 前述した南側と北側の2条の溝間を、南北方向あるいは北東から南西方向に区切る畦畔3列が確認される。東からS11-畦畔1a・1b、S9-畦畔6・7、S11-畦畔11・12のラインである。畦畔1以外は畦畔脇に溝を伴う。畦畔の間隔は、東側が43m前後、西側は43～55mを測る。これら畦畔はく9層>の高まりで形成されるが、S11-畦畔1a・1bではく8層>が合体した状態を見せる。また、S11-畦畔1cと同-溝2、そしてS11-畦畔8cと同-溝16の位置関係は、畦畔と溝が平行するにもかかわらず、両者間に若干の間隔が形成されている。これは、本来は畦畔に接するものであったものが、溝の埋没後、畦畔の一部が加工され幅を狭めたと理解される。こうした点から、畦畔の多くは一部で加工されつつく8層>段階に継続すると考えられる。

【北西－南東方向ライン】 北側と南側の両ライン間を北西から南東方向に区切る2列の溝・畦畔ラインが確認される。東側では、<9層>のS14-溝3とく8層>の同-溝2であり³⁾、西側では、S9-溝8a、そしてS9・11-畦畔8～10とそれに伴う溝のラインである。S14-溝3は、第14次調査地点の北西コーナー部分でS11-溝1aに取り付く可能性が高い。また、その南東端はS14-溝1と結合するかどうかは確認できないが、東西ラインを形成するS11-溝1とS14-溝1をつなぐ位置にあることは明らかである。S14-高まり2は、S14-

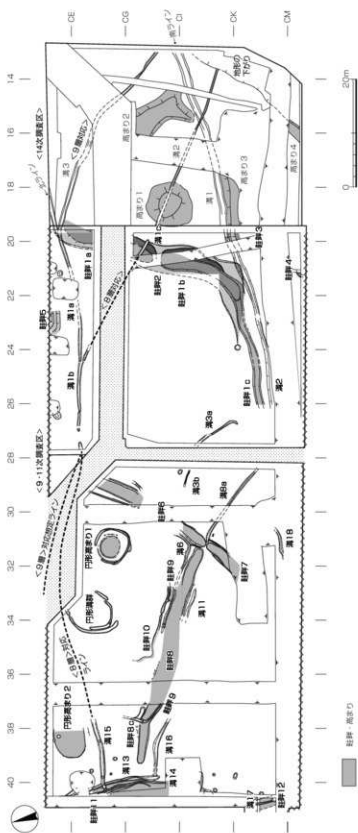


図1 弥生時代後期～古墳時代初期の水田間遺構 (縮尺1/700)

溝3に係わる畦畔を構成した可能性も考えられるが、位置がやや離れすぎている点や他の畦畔に比べて大規模で不整形な点には畦畔としての機能に疑問が残る。同溝は<8層>段階には埋没している。それに対して、同層に対応するのがS14-溝2である。同溝はS14-溝3に平行している。S14-溝1・高まり1上を通過してS11-溝1cへと向かい、同じく<8層>検出のS11-溝1bにつながる方向を示す。こうした状況から、<9層>から<8層>にかけて、S14-溝3が西側に13～15m移動して同-溝2が形成されたと考えてよさそう。

【水田面の規模】 以上、三方向の区画ラインを説明したが、それぞれが独立しているわけではない。南北方向のS11-畦畔1はCKライン付近で西側に屈曲して南側の東西ラインを形成する。また、S9-畦畔6・7と同-畦畔8・溝8は直交しており、その結合部では水口が確認される。

こうした<9層>対応の畦畔や溝のラインから抽出される水田は、高さ0.15～0.2m・幅2～5mの規模を有する畦畔1a・bや同6～8の大畦畔によって、大きく区切られた南北3面・東西3～4面の配置が復元される。一筆の大きさは、残存状況が良好な西側の二面では、南北30～35mと東西45～50mの数値に収まる。東側の一面については、地形が高くなる第14次調査地点で三角形の形状をなしており、その内部に「高まり部」が広い割合を占めていることから、本来水田面として機能していたかどうかについてはやや疑問を残す。

さらに、この大区画の水田内は細分されていた可能性が、一部の遺構から想定される。具体的にはS9-溝3・18そしてS11-畦畔4・5がその候補となろう。これらは、近接する大区画ラインから7～10m程度の距離を保った位置に検出されている。畦畔の規模は幅0.5～1m程度であり、大畦畔とは明瞭に区別される。こうして区切られた水田の中で、S11-畦畔1とS9-畦畔6、S11-溝1と同-溝2、そしてS9-溝8で区切られる水田面は、東西約40m・南北30m前後の長さから約1,200m²の面積が求められる。その内側に位置するS9-溝3で細分すると南北幅は約10m間隔で三面の分割が予想される。また、溝3の南端が若干屈曲している点を積極的に評価すると、東西方向では20m間隔で二分割の可能性も考えられる。その結果、細分された水田一筆の面積は200m²程度が予想される。

b. 地形と円形高まりの配置

本地点の地形は、<8層>～<9層>の両層とも、北側～東側が高く南側～西側が低い傾向をもつ。水田面の高さは、<8層>では前者は標高0.8～1m、後者は標高0.5～0.6m、そして<9層>では同0.7～0.9mと同0.5m前後を測る。特に西側での傾斜が強い。水田形成に際して上面が加工された結果ではあるが、地形に沿っていることも確かであろう。

こうした地形は溝の傾斜からも確認される。第14次調査地点では、いずれの溝も傾斜が極めて緩い。それに対して、第11次調査地点では、西あるいは南に向けて強い傾斜を有する場合が多い。例えば、S11-溝1bでは、13ラインから24ラインまでが標高0.68から0.63mの低下に対して、27ラインでは同0.47mまで下降する。S11-溝2でも、第14次調査区内では標高0.45m前後であるが、第11次調査地点では同0.42mから同0.34mまで下降しており、第9・11次地点における西側への傾斜の強さを示す。また、調査区西端に位置するS11-溝13・14では、南側への傾斜が明瞭に確認される。こうした状態は、比較的高くて安定した地形が広がる第14次調査地点と、西側あるいは南側に向けて土地が下降する第9・11次調査地点という地形の違いを反映したものとして理解される。

こうした地形のなかで円形高まりの位置をみてみよう。同遺構は、溝のみの痕跡（S9-円形溝群）も含めると4箇所を確認される。第9・11次調査地点に3箇所、第14次調査地点に1箇所である。前者の配置は北側の微高地から南側に向けて地形が下降する位置にあたる。後者の高まりは、S11-畦畔1とS14-溝1・3で囲まれた三角形の水田プラン内にあることに注目すると、地形的には比較的高くて安定的な地点ではあるが、こうした不整形の水田区割りから、やや起伏を有する状態が予想される。このように、円形高まりは、高い地形から下降する地形の変換部あるいは起伏をもつ位置に形成されたとして理解される。本遺構の性格を考える上では、そうした地形の影響も考慮する必要があるであろう。

(2) 百間川原尾島遺跡水田との共通性

鹿田遺跡が立地する旭川下流域において、弥生時代後期の水田遺構が広く調査されているのが岡山市百間川遺跡群である。その中には、本地点の水田と共通する要素が数多く認められる。百間川原尾島遺跡では、40～30m程度の大畦畔区画が小畦畔によって幅5～10mの水田に細分され、平均的に60m前後、広い場合は400mに及ぶ水田一筆の面積が確認されており、前述した本地点の水田規模等の形態はその特徴の中に包括される。また、円形高まりについては、同遺跡の水田に伴う「島状高まり」に共通性が求められる。同遺跡では、円形・不整形など複数の形態と土手状の形態が報告されている。それらの立地は微高地縁辺あるいは微高地上であり、機能については確定的ではないが、円形あるいは不整形のものに対しては水田形成に際しての掘削残存部と解釈される場合のほか、土手状のものは畦畔機能が想定されている（高畑1984、柳瀬1996）。この土手状の高まりは、その規模から本地点で確認される大畦畔に対応すると考えられる。また、その立地や形状に共通する部分が多く、同様の性格と考えて差し支えないであろう。

以上のように、本地点の水田は、本地域に広がっていた当時の水田形態の特徴を備えたものであるといえよう。

(3) 鹿田遺跡の集落と水田

本調査地点で水田の広がりや確認されたことから、鹿田遺跡の弥生集落は居住域と水田域で構成されることが判明した。同集落の始まりは弥生時代中期後半に遡る。後期には集落範囲を拡大し、古墳時代初頭に終焉を迎える。その中で、第9・11次調査地点で検出された水田の時期は後期～古墳時代初頭であり、まさに集落が拡大し継続する時期に対応する。集落開始期である中期後半の水田については、現状では確認できていないが、本地点の周辺部で検出される可能性は十分に予想される。今後の発掘調査成果を待ちたい。

居住域と水田の位置関係はどうであろうか。弥生時代後期の居住域は第1次～2次調査地点に求められる。水田を形成する本地点、同地点が示す居住域から南に100m前後の場所にあっており、集落と水田の位置関係は北に居住域、海に向かう微高地の南側縁辺が水田域となる。それに対して、古墳時代初頭には活動域は本地点の南側に位置する第12次調査地点に広がる（山本2001）ことから、水田の位置は集落の縁辺から集落内へと変化する。こうしたことから改めて鹿田遺跡の敷地内での地形を見直すと、本地点に形成された水田は、微高地間に広がる南北幅60m～70m程度の緩やかな窪地状の場所が選択されていたと考えられる。

鹿田遺跡に展開する弥生集落は小規模な集落である。その中で、本地点の水田の存在は、これまで報告されている土器製塩などの手工業生産だけでなく（大久保1988、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2016）、稲作も含めた総合的な生産活動が行われていた状況を指し示している。当時の集落における生産活動を考える上で貴重な資料といえよう。（山本悦世）

注

- (1) 第9次調査と第11次調査の遺構は通し番号で報告している。
- (2) 岩崎他（2014）では記載されていないが、北壁面の8層がそれにあたと判断される。
- (3) 岩崎他（2014）では、溝2と近接して走る溝5～7について、同一面で同時期に形成されたと想定していたが、その後の検討から、同溝群は上層であるく7層へ属する可能性が高いと判断することとなった。そのため、同位置におけるく8層>対応の溝は溝2のみと、ここで訂正する。

参考文献

- 岩崎志保他 2014「鹿田遺跡8」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29巻
 大久保徹也 1988「鹿田遺跡の製塩土器」『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3巻
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2016「弥生ムラの構造」『吉備の弥生時代』吉備出版
 高畑知功 1984「水田遺構」『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財調査発掘調査報告56
 柳瀬昭彦 1996「弥生水田の展開」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財調査発掘調査報告106
 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次報告」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』

3. 鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造

はじめに

第9・11次調査地点（以下、本地点と記す）では、平安時代後期～江戸時代初頭の遺構群を調査した。その遺構群からは、溝に囲まれた屋敷地や耕作地などを包括する集落の状況を復元することができる。屋敷地の位置を示す井戸や柱穴群、その屋敷地を区切る溝、耕作地の存在を想定させる小溝群などに注目して、本地点が位置する鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造について、時間を追ってまとめようとする。同地域には第14次調査地点や第18次調査B地点などの既報告があり、それらの成果の一部も合わせて同地域の状況を再評価したい。

(1) 平安時代後期

本地点の<5層>と<6層>に対応する。<6層>は11世紀に位置づけられる集落再開期の形成土であり、それに連続するのが<5層>である。両層を合わせて本時期の状況をまとめよう（図1）。

a. 中世集落成立期の屋敷地分布

鹿田遺跡では、平安時代前期の遺構群が10世紀には西側の鹿田遺跡（県立岡山病院地点）へと移動することが判明している（岡山県古代吉備文化財センター2007）。その後、集落は11世紀に岡大鹿田キャンパスの敷地内に回帰し、井戸を有する屋敷地が複数の地点に確認される。その一つが、第14次調査地点・第18次調査B地点であり、同道跡の南東部域に位置する。前者では<6層><5層>に対応する井戸が四基、後者では一基の井戸が報告され、さらに、南側に位置する第3次調査地点にもその可能性が広がる。このように、本遺跡の南東部に屋敷地が集中する点が本時期の特徴である（図2）。

一方、本地点は第14次調査地点の西側に接する位置にあたるが、本時期に属する確実な井戸は確認されていない。井戸と屋敷地の配置に関連性を求めると、本地点は屋敷地外にあたると理解される。両地点間には、地形に高低差が想定されており、比較的高くて安定した微高地部に屋敷地が展開する状態が確認される。

b. 屋敷地区画の出現

屋敷地内にあたる第14次調査地点と屋敷地外とされる本地点との境界部に、第11次調査溝22（以下、S11-溝22と記す場合あり。他も同様）とS11-溝24が南北方向に走る。その位置関係から、両溝は東側に配される屋敷地の西端を区切る溝と理解される。

<6層>に対応する溝22は、同層の時期から11世紀代に機能したと判断される。同溝の軸方向はN25°Eを示しており、鹿田構内座標軸よりも南北軸が東に傾く。北端は第14次調査地点に向かうが、同調査では確認されていない。この問題は、溝の位置が両調査地点の境界線に合致してしまったためと判断される。同溝の南端はS11-溝24に吸収される。本屋敷地周辺では<6層>検出の溝は極めて乏しく、<5層>の溝を含めても本溝と軸方向が有機的関連性を有す溝は確認できない。こうした状況は、本時期における敷地の区画が西側の低地と東側の屋敷地の境を区切るに留まるものであった可能性を示している。ただし、後世の破壊の影響も否定できないため、判断を保留せざるを得ない部分が残るが、確実な区画位置を鹿田構内座標20ライン（以下鹿田構内座標は略す）付近に求めることはできない。

<5層>に伴うS11-溝24は、同層の形成時期や同-溝22との重複関係から12世紀前半頃に始まり、出土遺物が示す12世紀中葉～後半に埋没したと考えられる。南北軸方向はN5°Eで真北に近い数値を示す点は、鹿田座標軸とも前段階のS11-溝22の方向とも異なっており、本時期に限定される点で注目される。ただし、20ライン付近を走る溝の位置は踏襲されている。

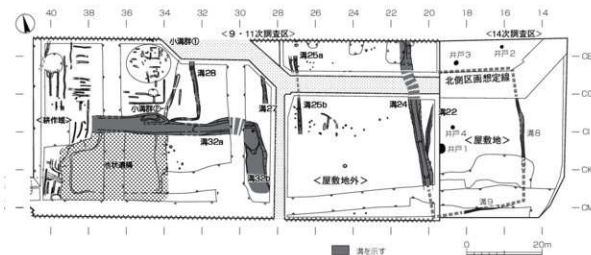


図1 平安時代後期の遺構配置 (縮尺1/1000)

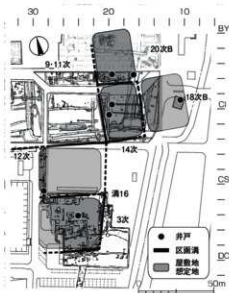


図2 鹿田遺跡南部における平安時代後期の屋敷地域 (縮尺1/2500)

S11-溝24に平行する溝は、東側の15ライン付近を走るS14-溝8である(図1)。同溝も同一方向軸を有している。両溝の間隔は中心間で26~27mを測り、約1/4町を示す。一方、両溝に直交する東西方向の溝は、第14次調査区南端を走るS14-溝9でありN95°E方向を示す。これら3条の溝はコの字状に敷地を区切り、屋敷地の東・西・南のラインを構成する。問題は北側の区画ラインである。本層では確認できないが、屋敷地の南端ライン(S14-溝9)から北へ約36m(約1/3町)に位置するS14-溝12が候補にあがる(図3)。同溝は次代に対応すると報告した溝である。ただし、その中で唯一、軸方向が本時期の溝に近い。それに加えて、前述したS11-溝22と同-溝24に認められる区画溝の位置的踏襲性を積極的に評価すると、本時期における屋敷地の北端ラインが同溝に踏襲された可能性は高いと判断される。同ラインを北側区画想定線とすると、屋敷地の区画は東西26~27m(約1/4町)、南北36m(約1/3町)の南北に長い形状が復元される(図1)。

こうした屋敷地の区画溝は、本地点から周囲に向けて広がりをみせる。S14-溝9は、本地点の南西側に位置する第12次調査地点の溝に、S11-溝24は、北側の第20次調査B地点の溝に直線的に向かうことが予想される(図2)(山本2000・2011)。また、南側の第3次調査地点においては、溝24の位置に近い20ライン上に溝16が報告されている。同溝の軸方向は鹿田構内座標に合致しているため、同溝と直接つながる可能性は低い。第3次調査地点における屋敷地の広がりを確認することができる。

S11-溝24は幅2.5m前後の規模を有し、出土物も比較的多く大形品を一定量含む。屋敷地を構成する他の2条の溝が小規模で遺物はほとんど出土しないことを勘案すると、同溝が区画溝の中心的存在であることは明らかである。こうした状況は、同溝が配されたラインの重要性を示すものであろう。

c. 屋敷地の配置(図1・2)

区画溝を伴う屋敷地の配置を井戸の分布から確認しよう。第14次調査地点では、北側区画想定線を挟んで南側

に井戸1・4、北側に井戸2・3が位置する(図1)。時期は、<6層>対応の井戸1・2が11世紀後半、<5層>対応とされる井戸3・4が12世紀前半～中葉とされる¹⁾。こうした井戸の配置と連続性から、南・北の両場所に屋敷地の存在が想定される。さらに、第18次調査B地点では、S14-溝8の東約25mの地点に11世紀代の井戸1が位置しており(光本2013)、第14次調査地点の東側にもう一つの屋敷地を考えることができる。南側では、第3次調査の成果から20ラインの西側に、1/3町単位で区画された屋敷地2箇所が南北に位置することが、井戸の配置からも確認されている(山本2007・2015)。このように、第14次調査地点周辺では、少なくとも南北に4列、東西に3列の屋敷地が並び、各屋敷地は1/4町～1/3町で区画されていた状況が復元される。これが鹿田遺跡南東部における土地区画と屋敷地の集中状況である。

d. 屋敷地外の状況

屋敷地外と判断される本地点では溝・池状遺構・小溝群が検出される。小溝は耕作痕とされており、本地点内の南西城に位置する池状遺構の北～西側に耕作域の広がりを確認することができる。同群の時期の特定は難しいが、屋敷地の時期に重複すると考えて支障はないであろう。

何らかの区画に係わる溝について、S11-溝24との平行関係を注目すると、N5～10°Eの方向を示すS9・11-溝25・27・28・32bがあげられる。そのなかで溝28は同溝以西に広がる小溝群分布域の東端を画しており、耕作域の区分に係わる溝と評価される。溝24が示す屋敷地西端ラインとの間隔は約55mである。1/2町に近い数値であり、1町を二分割する区割り、屋敷地の東西幅1/4町と合わせて注目される。溝28はCHライン付近で西側に屈曲する。同ラインは池状遺構の北端ラインに近く溝32aに踏襲される。同位置は北側の微高地が南に下降する肩部であり、溝32bも東側の微高地が西側に向けて下降する場所にあつている。こうした地形の変換点が土地区画にあたって意識されたことは十分に考えられる。

小溝群の軸方向は鹿田座標軸に合致しており、共通するのは小溝群2-①である(図1)。同溝はS9-溝28と共通した逆L字の形状を有しており、同溝を踏襲して耕作地を区切る溝と理解される。耕作地内でも小溝群の軸方向の違いからいくつかの耕作単位を示す区画を抽出することができる。また、小溝群1域では柱穴が集中しており(図1)、耕作以外に何らかの小規模な構造物があつた可能性もあろう。

e. 集落構造の復元

本遺跡の南東部では、<6層>から<5層>段階へと、屋敷地の四方を区切る溝が整備されている。1町単位と真北軸が意識された<5層>段階の土地区画は、1/4町×1/3町幅の比較的狭い敷地内に井戸1基を有する一単位の屋敷地が東西南北に配される集落景観を生み出したと考えられる。また、屋敷地間を区切る溝の多くは幅1m未満の小規模な傾向が指摘される。耕作域は屋敷地の間に位置しており、土地の高低差が依然として解消していない環境の中で比較的低い場所が区切られた状態を示している。

(2) 平安時代末～鎌倉時代

本地点の<4b層>に対応する。同層は前段階の地面を削平して形成された層である。その時期は前段階の溝が埋没した12世紀後半に位置づけられる。この土地形成を経て、本地点は耕作地から屋敷地へと大きく変化する。そして本時期(12世紀後半～14世紀前半)において、屋敷地の区画溝は二度にわたって再編される。両時期に分けて、その遺構配置から集落構造を復元してみよう(図3)。

a. 区画溝の再編と区画の変化

溝の軸方向は、真北に近い方向から鹿田構内座標に合致する方向へと変化する。土地区画の主要ラインを構成する溝は、東西方向ではCEライン付近を走るS14-溝11からS11-溝39に続くライン(以下、ライン①とする)と、CL～CMライン間を走るS14-溝16からS11-溝49に続くライン(以下、ライン②とする)、そして南北方向では15～17ラインにあたるS14-溝10と同-溝15(以下、ライン③とする)、そして30ライン付近を走るS9-溝

46～48（以下、ライン④とする）があげられる。S14-溝12からS11-溝38は、ライン①に含まれ、S14-溝11等の前段階に位置付けられる（図3）。いずれの溝からも遺物が出土しており、埋没時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と鎌倉時代末に大別される。

①平安時代末～鎌倉時代初頭

本時期に埋没する溝は、北側の東西ライン①にあたるS11-溝38・39とS14-溝11・12、そして南北ライン③にあたるS14-溝10である。前者のS11-溝39とS14-溝11のみは埋没後、その位置が踏襲されていない。つまり、ライン①が機能した時期は12世紀後半の本時期に限定されることとなる。それに対して、後者の溝は本時期に埋没後、S14-溝15へとそのラインは踏襲され、他のラインと同様に次代に継承する。

ライン①と③は敷地の東西・南北の各一辺を区切っているが、南側と西側の敷地区画ラインにあたる溝が確認されない点が問題となる。南北ライン③を構成するS14-溝10は、北側に向けては第20次調査B地点の溝（山本2008）へと続く方向を示す（図5）が、南端部は東西ライン②を構成する後世の溝に吸収され、同ライン以南には確認されない（図3）。また、東西ライン①を構成するS14-溝11からS11-溝39、そしてS14-溝12からS11-溝38は、いずれもS14-溝10とT字状に連結し西側に向けて走る可能性が高いが²⁰、南北ライン④以西には全く検出されない。つまり、いずれの溝もライン②およびライン④より先には延びていない。屋敷地を区画するラインの西端あるいは南端が収束し、それに直交する溝が存在しないとは考えにくい。ライン③では、溝10の埋没に続いて鎌倉時代末に埋没するS14-溝15が同溝上部に一部重複した状態で構築されていることも勘案すると、同じく鎌倉時代末に埋没するライン②④の下部に本時期に対応する溝を想定することは可能であろう。

ここで想定したライン間の距離は、南北幅がライン①と②の間で36～37m（約1/3町）、東西幅はライン③と④の間で63～68mを測る。これらにより区画される敷地は東西に長い状態が復元される。また、ライン②を構成する溝は本地点に留まらず東西に延びており、またライン③・④を構成する溝についても、それぞれ北側の調査地点へ続くことが確認される。一方、ライン②の南側は、前代に屋敷地が配される範囲であったが、本時期の区画溝を確認することはできない。つまり、<4層>形成期においてライン②以南から区画溝は姿を消し、本時期以降、ライン②は鹿田遺跡における屋敷地配置の南端を区切る重要なラインを構成することとなる。

なお、S9-溝45は位置的に敷地の区画ラインに対応する可能性も残るが、断面形は不安定で本時期の主要な溝とはやや異なる特徴を示すことから、現状では主要なラインとは区別しておく。S11-溝43については地形の凹み部分の影響が排除できないため区画溝とは考えにくい。

【その他の溝】

ライン③の東側に位置するS14-溝13・14は同-溝10と同方向を示すことから、同溝と関連する可能性が指摘されている（岩崎2014）。溝の中心間距離は、溝10と溝13で約6m、溝13と溝14では25mである。本時期の井戸は同溝10以東で明確でない点も勘案すると、屋敷地外の溝で道の側溝の機能も考えられる。

②鎌倉時代

前代から位置が踏襲されるのはライン②～④である。その内、南北ライン③と④を構成するS14-溝15とS9-溝48は鎌倉時代末に埋没し、両ラインは消失する。一方、東西ライン②は、同ラインを構成するS11-溝49が同時期に埋没するが、S11-溝59cに位置が踏襲されて次代へと継承する。また、S14-溝16は、その位置を保つ。こうした溝が機能していた時期は、前代の溝の埋没期以後と捉えられることから、概ね12世紀後半～14世紀前半、鎌倉時代にあたる。

区画ラインを構成する溝の接続関係などを整理すると、前代との共通性に加えて相違点も抽出される。北側の第20次調査B地点から延びるS14-溝15（南北ライン③）とS9-溝46～48（同④）はS14-溝16とS11-溝49（東西ライン②）にそれぞれ取り付く可能性が高いが、前代と同様にライン②以南へは延びていない。この南北ライン③と④の間隔は東西ライン②との結合部で64m、そして北側のCDラインでは70mへと広がる。こうした溝

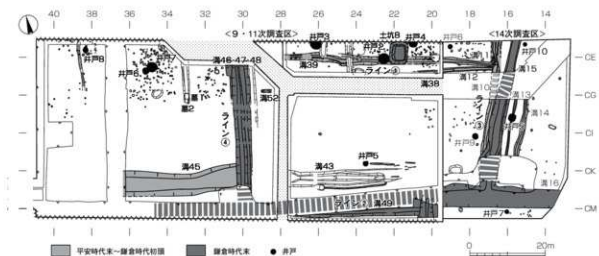


図3 平安時代末～鎌倉時代の遺構配置 (縮尺1/1000)

の位置関係や敷地の東西幅は前代と共通している。一方、区画溝の規模や区画の南北幅には変化が認められる。前代のライン①を構成したS11-溝39の幅は最大2.5mで深さは0.6m程度であるのに対して、本時期のライン構成溝は幅3～5m・深さ0.8～1.3mを測り、規模の拡大が顕著である。また、敷地区画についてもライン①の消失によって南北幅が大きく拡大している可能性が高い。

本時期の土地区画について参考となるのが、第6次・7次調査地点の成果である(図5)。同地点で報告された東西方向のS7-溝20～22(BUライン)と本地点の東西ライン②を構成するS14-溝16・S11-溝49(CL-CMライン)との間隔は90～100m、南北方向のS6-溝14(70ライン付近)と本地点南北ライン③であるS14-溝15(16～17ライン)との間隔は北端部で約280mを測る。また、第6次・7次調査地点の屋敷地の東側と西側を区切る南北溝S6-溝14とS7-溝20～22の間隔は約70m(約2/3町)である。こうした数値と本地点の成果から幅約70m程度の東西区画が想定される。第6次調査地点は鹿田遺跡の中央西端に、そして本地点はその東端付近に位置していることから、本遺跡の東西約280mの敷地が約70m幅で区切られ、4区画が形成されていたと理解される(図5)。その結果、南北幅約100m弱という1町に近い規模で、東西70m前後の区画をもつ敷地が東西に並ぶ状態が復元される。

b. 敷地内の井戸の配置と屋敷地

①平安時代末(図3)

ライン①～④に区切られた敷地内の様子を井戸の配置から確認してみよう。ライン①にあたるS11-溝38・39が機能していた本時期に伴う井戸はS11-井戸3・8である。井戸の分布は、本地点の中央部を南北に区切るライン④以东では東西ライン①の北側、そして同ライン以西ではCGライン以北に限定される。溝と井戸の関係は、出土遺物や遺構の重複からS11-溝38の時期に対応するのがS11-井戸8、同溝39にはS11-井戸3が対応すると思われる。ライン③と同④に挟まれた空間とライン④以西の空間にそれぞれ井戸一基と多数の柱穴が分布する状態となり、両場所に屋敷地の存在が復元される。地形が北に向かって高まる場所に対応する。一方、ライン③以东では明確な井戸は確認されない。S14-溝13・14の評価を勘案すると、同範囲は集落外の可能性も求められる。ライン①あるいはCGライン以南については、柱穴は極めて少ないので、時期は不明であるがS14-井戸9とS9-井戸5が同区画内に含まれるという状態を呈している。遺構の残存状態の問題や不確定要素の多さを考えると、同敷地の利用形態についてはその評価を保留しておきたい。

こうした屋敷地の新たな配置は、前代の第14次調査地点～第3次調査地点に広がる屋敷地分布から大きく変化

した状態を示している。特にライン②以南における屋敷地域の消失は象徴的である。本時期の土地形成が、本道跡における耕作地と屋敷地の再編という大規模なものであったことが改めて確認されよう。

③鎌倉時代 (図3)

溝以外の主要な遺構は井戸と墓そして祭祀土坑 (S11-土坑8) があげられる。本時期に機能した区画ラインは②~④であり、鎌倉時代末に埋没する溝の配置に対応する。

出土遺物および遺構の重複関係から井戸の推移を考えると、ライン③と④の間ではS11-井戸4から同井戸2へ、そしてライン④以西ではS9-井戸6から同井戸7へと続く。実年代では、13世紀前半~中葉と考えられることから約25~30年程度の間隔となろう。前者は前代のS11-井戸3と、そして後者は前代の同井戸8と、同一の屋敷地内に位置しており、その継続性が強く示される。S11-土坑8は前者の屋敷地に、そして墓2基は後者の屋敷地に含まれる。ライン①は消失しているが、こうした調査地点北側への遺構の偏在配置は前代から変化していない。南北幅の拡大を進めた土地区画であるが、本地点の範囲内では際立つ変化は認めがたい。

④時期不明の井戸

以上の評価の中で注意が必要なのが時期不明の井戸の存在である。S11-井戸5とS14-井戸5~7・9・10の6基があげられる。S14-井戸6はその位置がS11-井戸2~4と同じ屋敷地内に含まれるため、屋敷地配置の理解を変えるものではない。その他の井戸については、ライン②や③の溝を挟んで20~30m間隔で点在しており、屋敷地の配置も考えさせるが、いずれも出土遺物が僅少であり、周辺の遺構が極めて希薄である点は屋敷地配置にやや疑問が生じる。S11-井戸5の周囲には耕作痕と思われる小溝も検出されるなど、前述した屋敷地の井戸とは異なる様相が指摘される。こうした状況に対する解釈としては、本時期の最終段階に属する井戸として、屋敷地の西への拡大を示すという理解も可能であるが、屋敷地の井戸とは異なる機能も視野にいれ、その判断は今後の課題としておきたい。

(山本悦世)

(3) 室町時代

<4 a 層>に対応する。同層の形成時期は14世紀中頃である。

a. 大区画の出現 (図4)

本時期の区画ラインは前代の南北ライン③④が消失して、それぞれ東へ10m、西へ36m移動した位置に新たに形成されたライン⑤ (S14-溝17)、ライン⑥ (S9-溝59a) と、前代から踏襲されたライン②で構成される。

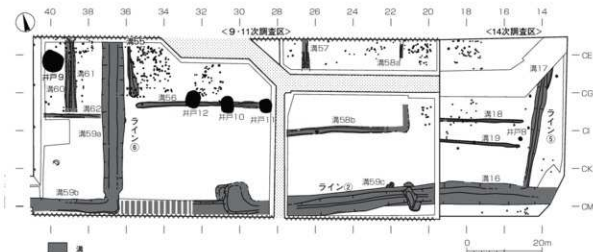


図4 室町時代の遺構配置 (縮尺1/1000)

東西ライン②はS11-溝49が埋没し、その上部にS11-溝59cとして位置が踏襲される。またS14-溝16は同ライン②にその位置を保つ。ライン⑤のS14-溝17はライン②よりも南に延びないことが確定である³⁾。ライン⑥のS9-溝59aも、ライン②の溝59b・cにT字状にとりつき、これより以南へは延びないと想定される。ライン⑤と同⑥の間はライン②との接続部で溝の中心間109m（1町）を測り、前代のライン③④間（約70m）から拡大する。

北端の区画ラインについては、前項でライン②の北90~100m付近に東西方向のラインが想定されている。このラインを構成するS7-溝20~22は、本時期には同溝上に位置する溝23に踏襲されており、本時期に同ラインが継続されていたと想定される。その結果、東西が一町、南北が約100mという、ほぼ一町四方の大区画が出現していた可能性が高い（図5）。こうした大区画を区切る溝は、幅5m程度、深さ1.5mといった大規模な形状である。

ライン②にあたる溝59b・cは、この大区画の東・西側にも延びている。ライン⑥の西100m付近では南北方向に方向を変えたS7-溝23が位置する⁴⁾。さらに西側約100mの位置は、鹿田遺跡の西端にあたり、鹿田遺跡の中に一町四方に近い大区画が東西に3区画並ぶ状況が復元される（図5）。

b. 大区画内の細分と構造（図4）

ライン⑤と⑥の間、及びライン⑥以西の大区画内には、東西方向（S9-溝56、S11-溝58b・62、S14-溝18・19）と、南北方向（S9-溝55、S11-溝57・58a・60・61）の溝が認められ、大区画内を細分する（図4）。溝はいずれも幅1~2m、深さ0.3~0.5mの小規模なものである。埋没時期は14世紀後半、15世紀後半の二時期が認められ、この二時期に何らかの変更が窺える。

こうした溝により区切られた敷地には屋敷の存在が考えられる。ライン⑤と⑥の間では14世紀後半の井戸は現在のところ見つかっていないが、S9-溝55・56により西端と南端を区切ったL字状の区画が認められる。内部には時期ははっきりしないものの柱穴群があり、ここに屋敷地を想定することができよう。区画の東端に同時期の溝は認められないが、26ラインに位置するS11-溝57が区切りとなる可能性が考えられる。同溝は南端が失われ、直接他の溝との接続関係はわからないが、溝の継続性を積極的に考えると、この敷地は東西幅50mほどに復元される。

15世紀後半の溝はS11-溝57・58・60~62、S14-溝18・19である。ライン⑤と⑥の間では、21ラインとC1ラインに位置する鉤手状の溝58により東端と南端が区切られた敷地が認められ、その東西幅は溝59aと溝58の中心間で76~77mである。前代の区画から東と南に拡大していることが窺える。この中には井戸三基が連続して作られ

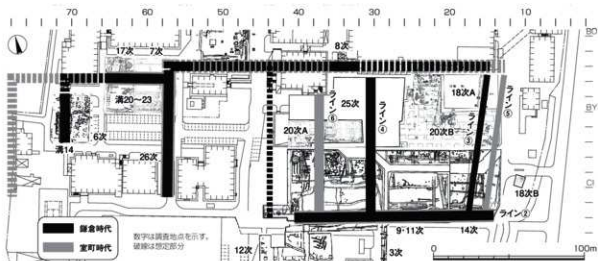


図5 鹿田遺跡南東部における鎌倉～室町時代の区画溝配置概念図（縮尺1/2500）

ており、長期にわたって屋敷地として利用されたのであろう。また、ライン⑥の西隣の区画では溝60・61と溝62に東端と南端を区切られる敷地に井戸一基があり、ここにも屋敷地の存在が窺える。そのほかに21ラインからライン⑤の間に位置するS14-井戸8の形状・規模は、前述の井戸とは異なっており、屋敷地の性格が異なる可能性がある。

また大区画内ではこうした屋敷地以外の空間も確認される。14世紀代にはS9-溝55と、ライン⑥をなすS9-溝59aとの間には幅1mの空間がある。15世紀代には、S11-溝61とライン⑥をなす溝59aとの間に幅5mの空間が認められる。またS14-溝18・19はその形状から道の側溝の可能性が考えられ、その間隔は幅5mである。このように1mあるいは5mと規模の大小はあるが、こうした空間には通路やその他の機能が考えられる。

このように大区画内には、屋敷地とそれ以外の空間（通路等）の存在が窺える。またライン⑤と⑥の間では、14世紀後半には東西幅50mと想定される敷地が、15世紀には東と南に拡大して東西幅約76mになり、規模が均一なものではなく、大小の差異ができています。

こうした屋敷地は、15世紀末～16世紀初めまでに、井戸や溝が埋まり、その痕跡は姿を消す。その後、17世紀には本地点は耕作地として利用される。（岩崎志保）

おわりに

平安時代後期の土地形成を経て鹿田遺跡に形成された中世集落が、その後、平安時代末（12世中葉～後半）と鎌倉時代末（14世紀前半）の二時期に、屋敷地の再編を伴う大規模な土地改変によって土地区画や集落構造を変えていく状況を前述した。改めてまとめると、平安時代後期には、小規模な溝によって東西1/4町・南北1/3町程度に区切られた屋敷地区画^④が配置され、その区画間に耕作域が含まれる。その後、平安時代末の土地改変では、集落南東部における従来の屋敷地の配置は一新される。近代に至る東西ラインが設定され、それ以南の屋敷地は姿を消す。敷地の区画は東西2/3町・南北1/3町の時期を経て、南北はほぼ1町へと拡大する。その結果、大規模な溝によって画された東西2/3町・南北約1町程度の土地区画が、鹿田遺跡の敷地内において東西に4区画が並ぶこととなる。さらに、鎌倉時代末の土地改変を経て、室町時代には東西・南北がほぼ1町四方の大区画に至り、敷地は東西3区画へと再編される。この段階には、大区画内部の構造は、大小の屋敷地や通路そしてその他の機能を取り込む構造へと姿を変える。以上が、鹿田遺跡南東部における集落の土地区画やその構造の推移である。

鎌倉時代末に実施された土地改変は岡山平野広域に行われた可能性は既に指摘している（山本2015）が、その際に、本地点のライン③がそのまま踏襲されている点は注目される。つまり、広域を対象とした土地改変においても同ラインが何らかの基準を成した可能性が考えられ、当地域内での本集落の影響力を窺わせる。

以上、本地点では単一の屋敷地から複数の屋敷地を取り込む広がりへ、そしてさらに、屋敷地や通路など多様な機能をもつ空間を取り囲む大区画へと変化していく様相を復元することができる。また、東西方向を強く意識した大区画の配置は、広域流通物資の増加が指摘される鎌倉時代に進行しており、同時期における人や物資の動線の存在を含め、社会的変化をそこに見ることが出来る。

ここでは、鹿田遺跡の南東部という限定された資料の検討に留まっている。こうした状況がどこまで広がりを見せるのか、溝の軸方向が一時的に真北を示す要因、あるいは大規模な土地改変の契機など、多くの課題が山積している。今後、関連資料との比較検討から、岡山平野における中世社会の動向の中で本遺跡の性格を位置づけていきたい。（山本悦世）

註

- (1) 第14次調査報告書では、井戸3・4について〈6層〉検出遺構として報告した。今回、土層の時期を検討した結果、井戸3・4は〈5層〉

- に対応するものと修正する。
- (2) 第14次調査報告書では、溝10と11・12を別遺構として報告したが、本地点において、溝39出土遺物や他遺構との切りあいを検討し、溝11・12の時期を遡らせることとした。その結果、溝10と11、溝10と12とが同時期の可能性が高くなり、これらが接続するものと修正する。
- (3) 第14次調査報告書では、溝17の埋没時期を出土遺物から15世紀後半とし、またライン②で溝17と接続する東西溝については畿乱のため確認できていなかった。本地点において、ライン②の溝59cの状況が明らかになり、時期を検討した結果、溝59cと溝17とが一連の溝として機能したものと考えたい。
- (4) 現在の鹿田遺跡の西端は、明治期の行政区画では因幡と東古松との境界にあたる。その位置は、S7-溝23の西約100mであり、ここに大区画の南北ラインが想定される。
- (5) 平安時代の土地区画については、南北1/3町程度の区分については既に指摘している（山本2007・2015）。

参考文献

- 岡山県古代古備文化財センター 2007『鹿田遺跡』岡山県発掘調査報告207
- 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊
- 山本悦世 2015『鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の桑里関連遺構』『桑里制・古代都市研究』30 桑里制・古代都市研究会
- 鹿田遺跡に関する文献
- 第3次調査：山本悦世他編 1990『鹿田遺跡II』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第4冊
- 第6次調査：松本武彦・山本悦世編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第11冊
- 第7次調査：山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊
- 第12次調査：山本悦世 2000『鹿田遺跡第12次調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』
- 第14次調査：岩崎志保編 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第29冊
- 第18次調査：光本頼他編 2013『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第28冊
- ：山本悦世 2008『鹿田遺跡第18次調査』『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- 第20次調査：山本悦世 2011『鹿田遺跡第20次調査』『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- 第25次調査：岩崎志保 2015『鹿田遺跡第25次調査』『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2014』

4. 鹿田遺跡第11次調査土坑8の中世土器について

はじめに

鹿田遺跡第11次調査土坑8から出土した中世土器群は、出土点数の多さに加えて主要遺物の残存率の高さや出土状況から、一括性が高く一時期の土器様相を示す資料である。また、そうした意味で、岡山県瀬戸内市助三畑遺跡井戸4の一括資料と共通した要素が強い。ここでは、土坑8出土遺物の特徴をまとめた上で、時間的に近似する両遺構の吉備系土器器椀と土器器杯・皿について法量の比較を行い、両者の関係あるいは時間的な特徴を探ることとする。

(1) 土坑8の遺物出土状況

土坑8の出土遺物は、平面規模4.8m×5.8m、深さ約1.1~1.05mの土坑において炭を伴って廃棄されたものである。多数の完形品を含んでおり、儀礼に伴う一括性の極めて高い資料と評価される。総出土量はコンテナ(28% /箱)18箱にのぼるが、その中で吉備系土器器椀は12箱、土器器杯は2箱、同皿は2箱を数える。この三器種で全体の約90%弱を占める。さらに、個体の33%以上の残存率を保つ資料は、同椀では12箱中9箱、杯・皿は各2箱中1.5箱、100~70%を残す個体数は、椀では約250点中170点、杯は約30点中29点、皿は約80点中45点である。その他で残存率の高い器種に脚台が加わるが、それ以外は20%に満たない破片であり、器種間の差は歴然としている。椀・杯・皿が、本土坑埋没時に意識的に投入された土器であることは明白であり、その同時性も極めて高いと理解される。

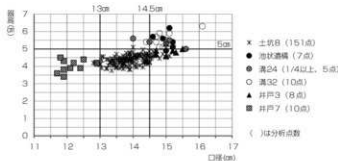


図1 吉備系土器器椀の口径・器高分布
—鹿田遺跡第9・11次調査地点—

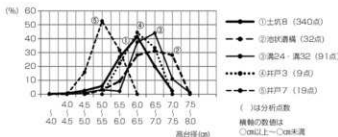


図2 吉備系土器器椀の器高程度数分布率
—鹿田遺跡第9・11次調査地点—

(2) 土坑8出土土器の法量分布

椀・杯・皿について、口径・器高・器台径に注目しよう。取り扱う資料は、本遺構の時期とは異なる混入品や特別な形態を除き、全体の1/2以上が残存し、計測にあたって数値の復元が不要なものに限定した。ここでは、本地点で調査された他の遺構との比較によって土器の属性変化を確認しておこう。

a. 吉備系土器器椀 (図1・2)

分析点数は151点である。口径値は12.8~15.1cm、器高値は3.8~5.1cmの範囲に分布する。その数値幅は口径で2.3cm・器高では1.3cmを示す。その中で集中域は口径値13~14.6cm・器高値3.8~4.9cmに求められる(図1)。その場合の数値幅は口径で1.6cm・器高は1.1cmとなる。

器台径については、口径の分析資料に器台径のみの資料を加えた340点について分析した。5mm単位でその度数分布を抽出した結果、5~7.5cm未満の数値分布域内で集中域は5.5~

7cm未満、そしてピークは6~6.5cm未満に求められる(図2)。

鹿田遺跡第9・11次調査地点における他の遺構から出土した椀の状況を見ると、口径は土坑8の集中域を挟んで、14.5cm以上と13cm未満に分布が分かれる(図1)。口径14.5cm以上の範囲には池状遺構・溝24・溝32・井戸3の資料が分布する。また、器高約5cmを境に、それ以上に井戸3以外の遺構が、それ以下に同井戸が収まる。井戸3以外は古い時期の要素である磨磨きを残す椀が出土している。こうした状況から、土器椀の磨磨きが消失する井戸3の段階には器高が低下し、続いて口径の縮小が進行して土坑8に至る動きを改めて確認することができる。一方、口径13cm以下では、井戸7が口径値11.6~13cm・器高値約3.4~4.5cmの範囲を示しており、土坑8から、器高が若干低下する中で、特に口径の縮小化が進行した状態を確認することができる。

つまり、土坑8の椀は、吉備系土師器椀の器形変化の中で器高が5cm以下まで低下した後、口径の縮小が進行して14.5cm以下に至った段階を代表する資料と評価される。

次に、高台径について他の遺構と比較してみよう(図2)。土坑8以外の遺構の資料点数は図中に示したが、各遺構間の点数差が大きいため、図では出土点数を比率に置き換えて表わしている。この5mm単位の度数分布比率をみると、池状遺構の集中域は6~7.5cm未満で、その中ではピークを形成せず分散の状態を示しているが、7~7.5cm未満の大ぶりの分布域に一定数が存在する点が特徴である(図2-②)。溝24・32の集中域は6~7cm未満で共通しており、池状遺構より小形に振れる(同-③)。器高が低下する井戸3は、5.5~7cm未満の集中域を示すが、ピークは6~6.5cm未満へと縮小傾向を示す(同-④)。土坑8は井戸3と度数分布状況はおおむね共通するが、大きい数値域(6.5~7cm未満)の比率は低く、小さい数値域(5.5~6cm未満)の比率が高い(同-①)。井戸7は4.5~6cm未満の数値分布域の中でピークは5~5.5cm未満であり、小形への傾斜がさらに顕著となる。

以上のように、本地点では高台の小形化が時間的推移と連動して進行する状態が看取される。

b. 土師器杯・皿(図3)

土坑8の杯の分析資料は23点である。口径値は12.4~14.3cm、器高値は2.3~3.7cmに収まる。その中で口径は14cm以下が大半を占める。他の遺構では、この口径14cm付近を境に法量分布域が異なる。池状遺構などの古い時期の遺構は、それ以上の口径値で器高値は概ね約3cm以上の範囲に、そして、それ以下の範囲には、土坑8の他に井戸7と溝24の一部が含まれる。土坑8では器高値は2.5cmまで下方に振れた状態を呈する。

土坑8の皿の分析資料は55点である。口径値は7.2~9.3cm、器高値は1~1.7cmに収まる。その中で集中域は口径値7.2~8cm・器高値1.2~1.7cmであり、口径8cm以上では分散的な分布を示す。他の遺構の分布は、口径8cmを境に、それ以上の範囲に池状遺構などの古い時期の遺構が、そして、それ以下に土坑8の集中域と重複する範囲に井戸3・7が含まれる。

鹿田遺跡の皿の変化については、径の縮小・軽量化ならびに粗放化が指摘され、口径8cmが境となる資料が提示されている(松木1993)。本地点の土坑8の段階に、杯・皿の小形化と杯の若干の器高低下が進行していることは、そうした分析と整合的といえよう。

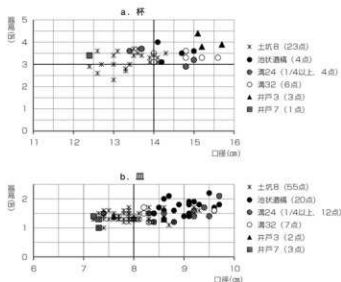


図3 土師器杯・皿の法量分布
—鹿田遺跡第9・11次調査地点—

(3) 土坑8と助三畑遺跡井戸4との比較

本地点の土坑8と助三畑遺跡井戸4との法量比較を5mm幅の度数分布¹⁾を利用しながら行いたい。

a. 吉備系土器器腕 (図4・5)

土坑8と助三畑遺跡井戸4 (以下、井戸4と略す) との法量分布 (口径・器高) はほとんど重複する (図4)。ただし、詳細な比較からは多少の相違点を抽出することができる (図5)。

口径度数分布をみると、両者の分布域は12.5~15.5cm未満で集中域も13cm~14.5cm未満でほぼ一致する。その中で、ピーク域は土坑8が13.5~14cm未満で次の領域が14~14.5cm未満であるのに対して、井戸4は13.5~14cm未満がピークで次は13~13.5cm未満が示すように、土坑8の方が大きい数値に傾斜する (図5 a)。高台径の度数分布からも、土坑8は、4.5~7.5cm未満を示す井戸4の分布域に重複するが、その集中域は5.5~7cm未満でピーク域は6~6.5cm未満であるのに対して、井戸4では5~7cm未満の集中域と5.5~6cm未満のピーク域が示すように、土坑8のほうが一回り大きい数値域に偏りをみせる (同b)。

一方、器高では様子が異なる。器高度数分布をみると、その数値域は、土坑8ではほとんどが3.5~5cm未満であり、ピークは4~4.5cm未満となるが、井戸4は4~5.5cm未満の分布域で、ピークは4.5~5cm未満に求められる。つまり、両者の間には5mmの差があり、土坑8のほうが器高が低い傾向を読みとることができる (同c)。

以上のように、両遺構間では口径・高台径については共通した法量分布域の中で、土坑8がやや大きい数値域に偏るのに対して、器高では、明らかに同土坑が低い数値域を有する点が注意される。つまり、土坑8の腕は器高が低くて径がやや大きい腕、井戸4は器高が高くて径がやや小さい腕という器形の違いを抽出することができる。これは、腕形態の時間的推移を示す径の小形化と器高の低下という両要素が、両者にそれぞれ分かれた状態を示すこととなる。助三畑遺跡井戸4の報告においても、下層出土遺物のほうの口径が大きいという指摘がなされているが、それにも関連する問題であろう。

口径の数値に現れるこうした矛盾の背景に、資料点数の多きゆえに生じる口径の振幅の大きさが影響していることは十分に予想される。口径で1.5~2cmに及ぶ数値幅を考えると、ここで問題となる口径差は誤差の範囲と



図4 鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4出土中世土器法量分布

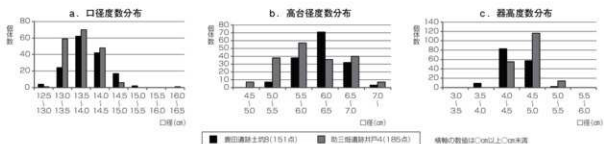


図5 鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4の吉備系土器器腕法量比較

言えるかもしれない。そのように考えると、法量分布域で重複する両遺構間の口径・高台径差に時間的差を見出すことは困難であると判断される。一括性が極めて高い資料のこうした状態は、一時期の生産活動あるいは土器様相を理解する上で注意が必要であることを物語っている。

一方、器高差については、その法量分布域およびピーク域にも数値域の差を見せることから、口径と同様の誤差というよりは、形態の時間的変化と合致した動きと捉えても良いのではなかろうか。

b. 杯・皿 (図4・6)

杯は両遺跡とも出土数が少ない。法量分布域は土坑8では口径値12.4~14.3cm・器高値2.3~3.7cmに対して井戸4は口径値13~14.6cm・器高値2.6~3.4cmである(図4)。両遺構の器高値の範囲は重複するが、口径については数値域に多少の差が認められる。口径度数分布をみると、土坑8では12~14.5cm未満の範囲でピークが13~14cm未満であるのに対して、井戸4ではそれぞれ13~15cm未満と14~14.5cm未満となり、土坑8の方が小形の数値域を構成する傾向が認められる(図6a)。

皿においても、器高1~1.9cmの分布域はほとんど重複するが、口径度数分布から、土坑8では7~8.5cm未満の範囲でピークが7.5~8cm未満に求められるのに対して、井戸4ではそれぞれ7.5~9cm未満と8~8.5cm未満を示しており、杯と同様に土坑8の方が小形の数値域に分布の比重が高い(図6b)。

以上のように杯・皿ともに土坑8が井戸4よりも小形の傾向を有する点は、両遺構の違いとして抽出することができる。腕の径で確認されたピーク域の違いとはやや異なる様相である。

c. 鹿田遺跡第11次調査土坑8と助三畑遺跡井戸4との関係

前項で両遺構の腕・杯・皿の法量分布を比較検討し、両者間の相違点を指摘した。ここで問題になるのは両遺構の時間的関係である。その手がかりとなるべき腕の口径差は、前述したように非常に大きな振幅をもつ両土器群において、その誤差内に包括されてしまう可能性が高いため、両遺構の時期が重複することを確認するに留まる。

ここで注目されるのが、杯・皿の口径値の違いである。土坑8の方が小形の傾向が強い点を積極的に評価すると、両遺構間に多少の時期差を想定することができるのではなかろうか。また、腕の器高が低い傾向もそれを後押しする要素となろう。したがって、ここでは鹿田遺跡第11次調査地点土坑8の資料は助三畑遺跡井戸4の資料に続く時期を考慮しておきたい。そこには、腕の径にばらつきを有する中で、器高の若干の低下と杯と皿における口径の縮小が進む段階が想定される。また、腕・杯・皿の法量分布を器種間の法量比較という視点で見た場合、井戸4ではこれら三器種の法量が明瞭に分離されるのに対して、土坑8では腕と杯の境界が不明瞭な状態が認められる(図4)。こうした状況にも、両者の時間的変化を見出すことができるのかもしれない。

(4) 腕の法量差からみた土器生産状況と今後の課題

ここで、改めて腕の口径について、そのばらつきの大きさや両遺構間での口径値の逆転状況について考えてみよう。

鹿田遺跡の本地点では、中世土器編年の構成要素である腕の口径・器高・高台径の縮小、そして杯・皿の口径の縮小という属性変化の動きに矛盾は認められない。それに対して、時期が近似する助三畑遺跡井戸4と本地点

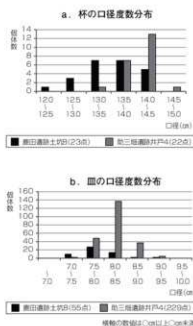


図6 鹿田遺跡土坑8と助三畑遺跡井戸4の土器器杯・皿法量比較

の土坑8との間では、特に椀の径に関して齟齬が生じている。こうした状況の背景には生産地間における土器製作基準の違いが考えられよう。椀の口径分布幅が一時期の土器群において1.5～2cmの大きな振れ幅を有する点も、同時期の土器生産の具体的姿を探る上で注目する必要がある。当時の小規模な土器生産体制を考えると、両遺構のように100点を超える土器の入手に際しては、複数の生産地からの供給が想定される。この振れ幅の大きさには、入手先の生産地の多さが反映されていると同時に、近隣でも生産に際しての法量基準がかなり緩慢であった可能性を読み取ることができるのではなかろうか。

一方で、一定の規制を示す要素も抽出される。例えば、鹿田遺跡から東に16km離れた助三畑遺跡の井戸4出土土器の生産地は、鹿田遺跡で出土する土器の生産地とはかなり離れて異なっていたことは確かであるにも関わらず、両遺構における椀の径は大枠で重複する分布を示す。さらに、鹿田遺跡で確認される編年的に矛盾のない土器変化の動きからは、近隣の生産地における共通した基準の存在を窺うこともできる。吉備系土器器種の分布圏という広がりの中で、一定の地域ごとに共通した基準を有しつつ、緩やかな規制のもとでの生産活動が予想される。

器高の低下から口径の縮小へと進行する両遺構の時期に確認されるこうした状況が、どのような意味をもつのか。古い時期に属する吉備系土器器種の資料では、こうした大量の廃棄例が管見の限りでは確認されていない。通常は数点～10点数の出土数であり、その振れ幅は口径1cm内外の場合が多い。点数が増加した場合の本例の状況も念頭に置き、編年あるいは本時期の状況についても改めて再考していきたい。(山本悦世・大久保雅子)

注

- (1) 助三畑遺跡井戸4の出土遺物の法量については、報告された内容と比較するため掲載された観察表の数値を利用した。また、同報告では法量分析に際して1mm単位で検討されているが、ここでは計測誤差を勘案して5mm単位にまとめて取り扱う。

参考文献

- 馬場昌一・福田正雄・白石 純 2014「岡山県助三畑遺跡井戸4出土遺物の様相－養和元(1181)年銘類鏡が伴う遺物の実態－」『古文化談叢』第71集 九州古文化研究会
 松本武彦 1993「鹿田遺跡における中世土師質小皿の検討」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第6冊

第6章 結 語

本報告の調査地点は鹿田遺跡の南東部に位置する。同域では、1990年に第3次発掘調査報告書を、2013年・2014年に第18次B地点と第14次調査地点の発掘調査報告書を刊行している。これら3箇所は狭小な調査地点を含み、分散的位置関係にある。その中で、4,000mを超える本調査地点の調査は、これらの報告成果をつなぎ合わせて同域の状態を総合的に検証することを可能とした。特に、第14次調査地点は本調査地点の東側に接しており、本調査との関係を踏まえた再検討から既報告の理解をより一層深めることができた。

時期ごとの成果は本報告の冒頭あるいは第5章2・3でまとめている。ここで詳しくは繰り返さないが、本文中で十分にふれられなかった遺構・遺物について注目されるものを加えて、総合的な調査成果と今後の課題を述べる。

本地点での土地利用に関する成果は以下の二点にまとめられる。一点は、弥生時代後期～古墳時代の集落に対応する水田を確認できた点である。本遺跡は弥生時代の小規模な臨海集落であり、最も海に近い立地を示す。水田の存在は、そうした環境における集落での生産活動の実態を示しており、旭川西岸に展開する集落関係を理解する上で、ひとつの手がかりとなろう。

もう一点は中世における集落構造の問題である。平安時代後期～室町時代において、屋敷地が耕作地を取り込むように拡大してその構造を変化させていく中世村落の変化を、区画溝の再編からたどると同時に、二期となる時期を絞り込むことができた。その時期は、平安時代後期、平安時代末～鎌倉時代初頭そして鎌倉時代末の可能性が高い。特に、鎌倉時代以降の状況は、鹿田遺跡ではこれまで資料がやや乏しい傾向にあったため、その部分を穴埋めすることとなった。出土遺物で注目されるのは、石罫や輸入陶磁器そして砥石や瓦器・須恵器などを含む遠隔地からの流通品の多さであり、本集落における盛んな経済活動を物語る。複雑な構造で入念に仕上げられた木棺墓には輸入陶磁器や漆椀が埋納されており、豊かな財力をもつ人物の存在を窺わせる。また、儀礼的行為を顕著にのこすのが土坑8である。同土坑には大量の椀・杯・皿と脚台が廃棄されており、その中には墨書土器や種子圧痕土器が少なからず含まれる。墨書土器では雨に関連する文字も認められる。こうした状態の土坑は鹿田遺跡の調査で初めて確認されたものであり、鎌倉時代初頭頃の屋敷地再編期に形成されている点に何らかの意味があるかもしれない。さらに、室町時代に向けて、異なる機能を有す空間をとり囲む大区画が東西に並ぶ景観を生み出していく様相を具体的に復元できたのも重要な成果である。

また、多数の植物圧痕土器が中世土器を中心に確認された。圧痕形成は土器製作時に生じるものであり、その中には土器製作の過程を復元する手がかりも含まれるであろう。手工業生産を示す資料が本調査地点周辺に多い点も特徴である。例えば、卵環状のものを含む焼土塊の多さや輪の羽口の可能性があるものが出土している状況は、東側の第18次調査B地点でも確認される。時期は古代に遡るが、堯と杯蓋が溶解し付着した状態で出土した須恵器片は特筆に値する。また、屋敷地が拡大する以前に利用された池状遺構からは多数の鹿の骨片や被熱土製品も出土しており、何らかの加工作業を窺うことができるかもしれない。こうした遺物の出土状態から、本地点周辺に古代～中世の手工業生産の場が広がっていた可能性も、積極的に検討していく必要がある。

以上、注目される遺構・遺物を羅列したが、いずれも十分な分析・検討はこれからである。こうした資料は、藤原摂関家殿下渡領である鹿田庄あるいは中世村落の具体像を考える上で重要である。それらをもとに、集落内の具体的な空間利用状況や各時期における鹿田遺跡の性格を周辺地域の中で評価する必要がある。本地点の北側～南東側では未報告の調査地点が広い範囲で残っている。残された課題は多いが、今後の研究を進めることで具体的な鹿田遺跡の実態を描き出していきたい。

(山本悦世)

遺構一覽表

a. 井戸・土坑・墓・池状遺構

報告番号	横断面高 (m)		深さ m	上面 (残存額) <準完築>		底面 (残存額) <準完築>		断面形	時期
	上面	下面		形状	規模 m	形状	規模 m		
井戸1	0.7	-0.53	1.23	円形	3×(2.2)<2.6>	円形	0.5×0.48	Y字形	平安後朝or室町時代
井戸2	1-1.1	-0.08	1.18	楕円形	2.3×(2.3)<2.7>	円形	直径1.2	逆台形	鎌倉時代前半
井戸3	1.15	-0.37	1.52	楕円形	3.05×2.85	楕円形	1.6×1.3	逆台形	平安時代末
井戸4	1-1.15	-0.35	1.5	円形	2.2×(1.3)<1.9-2>	円形	1.2×(0.85)<1.1>	逆台形	平安時代末～鎌倉時代前半
井戸5	0.95-0.98	-0.25	1.15-1.2	円形	1.35×(1.1)<1.35>	円形	直径0.6	Y字形-逆台形	平安時代末～鎌倉時代
井戸6	1.3	-0.33	1.63	円形	1.8×1.75	円形	1×0.95	逆台形	鎌倉時代前半
井戸7	1.25-1.3	-0.9	2.15	円形	2.75×2.55	円形	0.8×0.83	Y字形	鎌倉時代中頃
井戸8	1	-0.1	1.1	楕円形	1.75×1.4	楕円形	直径0.35	Y字形	平安時代末
井戸9	0.8-0.95	-1.18	2.06	隅丸方形	5.6×5.35	円形or隅丸方形	2×2	Y字形	室町時代前半
井戸10	1.1	-0.6	1.7	楕円形	4.42×3.28	円形	1.16×1.08	逆台形	室町時代前半
井戸11	1	-0.98	1.98	隅丸方形	3.32×2.88	円形	1.47×1.32	逆台形	室町時代前半
井戸12	1.25	-0.8	2.05	楕円形	3.53×<2.8>	円形	1.2×1.1	逆台形	室町時代後半
土坑1	0.62-0.78	0.46	0.32	楕円形	0.77×0.67	円形	0.36×0.3	逆台形	養生時代後期
土坑2	0.65	0.38	0.27	長楕円形	1.34×1.1	長楕円形	0.7×0.47	十字鉢	養生時代後期
土坑3	0.62-0.65	0.35	0.3	円形	1.05×1	円形	直径0.8	箱形	養生時代後期
土坑4	0.65	0.37	0.28	楕円形	0.95×0.75	楕円形	0.62×0.42	逆台形	養生時代後期
土坑5	0.65-0.83	0.5	0.33-0.16	円形	1.03×(0.9)	円形	0.6×0.57	箱形	平安時代後期
土坑6	0.7	0.38	0.32	楕円形	(1.35)×1.77	楕円形	(1)×1.15	楕状	平安時代後期
土坑7	0.64-0.7	0.37-0.4	0.3	楕円形	2.75×(1.45)<約1.7>	楕円形	2.3×(1.25)<1.35>	逆台形	平安時代後半
土坑8	1.23	0.14-0.2	1.05-1.1	隅丸方形	5.8×4.8	隅丸方形	3.85×2.5	逆台形	鎌倉時代前期
土坑9	1-1.24	0.18-0.92	0.24-0.32	<楕円形>	(1.3×1.7)<2.5×1.2>	<楕円形>	(0.8×1.5)	二段	鎌倉時代中頃
土坑10	1.1	0.84	0.26	円形or楕円形	1.58×(0.4)	円形or?	0.5×(0.4)	二段、楕状	鎌倉時代後半
土坑11	1.18-1.2	0.4	0.8	隅丸方形	(3.15×1.15)<3.5>	隅丸方形	2×(0.7)	逆台形	鎌倉時代後半
土坑12	0.85	0.66	0.19	隅丸方形	1.5×(1.3)<1.6>	隅丸方形	1.2×(1.12)	楕状	鎌倉時代
土坑13	1.15-1.29	0.97	0.28	円形	1.2×1.2	円形	直径0.85	楕状	鎌倉時代
土坑14	1.3	0.7	0.6	円形	(1.8×1.9)	円形	直径0.4	二段、楕状	鎌倉時代中頃
土坑15	1.1-1.15	0.75	0.4	楕円形	3.15×2.37	楕円形	2.25×1.5	楕状	鎌倉時代
土坑16	0.8	0.22	0.58	隅丸方形	2.3×(0.86)	隅丸方形	0.75×0.28	二段、楕状	室町時代
土坑17	0.99	0.8	0.19	円形	1.09×1.0	円形	1.04×0.6	楕状	室町時代
土坑18	1.28	0.57	0.71	円形	1.89×(1.09)	円形	1.22×1.12	楕状	江戸時代前半
土坑19	1.28	0.75	0.53	隅丸方形	(1.16)	隅丸方形	(1.02)×(1)	箱形	江戸時代
土坑20	1.28	0.82	0.46	楕円形	1.12×(1.0)	円形	直径0.32	楕状	江戸時代
土坑21	1.24	0.36	0.88	楕円形	1.69×1.22	楕円形	1.2×0.67	逆台形	江戸時代
土坑22	1.39	0.4	0.99	方形	0.95×(0.91)	方形	0.75×0.7	箱形	江戸時代
土坑23	1.27	0.18	1.09	楕円形	2.38×(0.94)	楕円形	1.12×(0.4)	楕状	江戸時代
土坑24	1.17	0.18	0.99	円形	1.19×1.1	楕円形	0.65×0.46	逆台形	江戸時代
土坑25	1.38	0.81	0.57	楕円形	(1.9×1.4)	楕円形	1.52×0.82	逆台形	江戸時代
土坑26	1.24	0.68	0.56	円形	1.53×(1.4)	円形	0.78×0.68	楕状	江戸時代
土坑27	1.36	0.76	0.6	方形	1.49×1.49	方形	1.0×0.7	楕状	江戸時代
土坑28	1.06	0.35	0.71	円形	直径2.45	円形	直径1.12	楕状	江戸時代
土坑29	1.15	0.48	0.67	方形	1.2×1.18	方形	0.98×0.91	箱形	江戸時代
土坑30	1.09	0.47	0.52	楕円形	2.04×(1.45)	楕円形	1.18×0.98	楕形、段	江戸時代
土坑31	0.8	0.53	0.27	方形	(1.89×1.17)	方形	(1.59×0.9)	楕状	江戸時代
墓1	1-1.03	0.8	0.2-0.23	隅丸方形	1.56×1.19	隅丸方形	1.35×1.02	箱形	鎌倉時代後半
墓2	1.08	0.93	0.17	隅丸方形or?	(0.84×0.45)	?	?	?	鎌倉時代後半
墓3	1.22	0.63	0.59	円形	0.77×0.73	円形	0.51×0.49	箱形	江戸時代
池状遺構	0.7-0.8	-0.1~-0.5	0.8-1.3	L字方形	21×28	L字方形	17×22	楕状	平安時代後期

b. 溝

遺構番号	上面高 m	底面高 m	深さ m	断面形	幅 m<測定値>	方向	時期
溝1 a	0.75-0.85	0.63	0.19	溝状	0.6	N75°・90E	弥生時代後期前半
溝1 b	E-0.8-W-0.71	E-0.63-W-0.47	E-0.17-W-0.23	溝状	0.6	<0.67>	弥生時代後期前半・古墳時代初期
溝1 c	0.92	0.78	0.14	溝状	0.6	N45E	弥生時代後期前半・古墳時代初期
溝2	0.63	E-0.42-W-0.34	E-0.23-W-0.31	溝状	0.8-1.0	N90W	弥生時代後期前半
溝3	0.56	0.47	0.09	溝状	0.35	N20°W(30°・N35°)	弥生時代後期前半
溝4	0.63-0.65	0.5	0.13-0.15	溝状	0.4	N80E	弥生時代後期前半
溝5	0.7	0.55	0.15	逆台形	0.3-0.4	N22E	弥生時代後期前半・古墳時代初期
溝6	E-0.7-W-0.6	E-0.44-W-0.31	E-0.26-W-0.2	U字形・逆台形	E:0.5-W:0.38	N30E・N90W	弥生時代後期前半
溝7	0.63	0.59	0.04	溝状	0.1	N35E	弥生時代後期前半
溝8 a	0.55-0.6	E-0.41-W-0.48	0.1-0.15	溝状	0.5-0.6	N80E	弥生時代後期前半
溝8 b	0.6	0.5	0.1	溝状	0.2	-	弥生時代後期前半
溝9	0.58	北:0.34-S-0.5	0.04-0.08	溝状	0.25-0.3	N35E	弥生時代後期前半
溝10	0.56	N-0.56-0.5	0.06	溝状	0.25-0.3	N35E	弥生時代後期前半
溝11	0.55-0.62	0.46	0.09-0.16	溝状	0.6	N35E	弥生時代後期前半
溝12 a	0.49	0.2	0.29	U字形	上面:0.65, 本体:0.4	N80E	弥生時代後期前半
溝12 b	0.6	0.47	0.13	溝状	上面:0.4, 本体:0.3	N45W	弥生時代後期前半
溝12 c	0.55	0.45	0.1	溝状	上面:1.6, 本体:0.7	N50W	弥生時代後期前半
溝13 a	0.49	0.4	0.09	溝状	0.8	N30W	弥生時代後期前半
溝13 b	N-0.38-S-0.23	N-0.29-S-0.05	0.07-0.12, 表面0.2	溝状	0.4-0.35, 南端:0.85	N10°・15E	弥生時代後期前半
溝14	N-0.38-S-0.25	N-0.28-S-0.15	0.14-0.09	溝状	0.33-0.38	N10°・15E	弥生時代後期前半
溝15	E-0.6-W-0.35	E-0.22-W-0	0.35-0.38	箱形	上面:0.8-0.85, 下面:0.57-0.6	N75°・90W	弥生時代後期前半・古墳時代初期
溝16	E-0.42-W-0.26	E-0.29-W-0.18	0.07-0.13	溝状	0.6	N65W	弥生時代後期前半
溝17	E-0.5-W-0.45	0.3	0.15-0.2	逆台形	0.35	N3E	弥生時代後期前半
溝18	0.27	0.15	0.12	溝状	0.55	N90E	弥生時代後期前半
溝19 (円形溝群1)	0.58-0.6	N-0.56, S-0.47-0.45	S-0.15-N-0.04	溝状	0.3-0.55	-	弥生時代後期前半
溝20 a (円形溝群1)	0.62-0.64	0.56	0.06	溝状	0.62-0.8	-	弥生時代後期前半
溝20 b (円形溝群1)	0.6	0.5	0.05	溝状	0.5	-	弥生時代後期前半
溝21 a (円形溝群1)	N-0.63-E-0.53	N-0.56-E-0.3	E-0.25-N-0.07	北平・溝状 南平:U字形	N:0.6-E:0.27	-	弥生時代後期前半
溝21 b (円形溝群1)	0.53	0.5	0.03	溝状	0.55-0.6	-	弥生時代後期前半
溝22	0.97-1.0	0.62-0.67	0.35	溝状	0.9-1.2	N25E	平安時代後期
溝23	0.8-0.9	0.58	0.3	溝状	1.25	N75W	平安時代後期
溝24	N:1.18-S:1	N:0.55-S:0.4	0.63-0.65	逆台形	N:3.1-S:2.3	N5E	平安時代後期
溝25 a	0.88	0.8	0.08	溝状	N:0.9-S:0.6	N10E	平安時代末・鎌倉時代初期
溝25 b	1	0.92	0.08	逆台形	0.45	N15E	平安時代末
溝26	0.95	0.87	0.08	溝状	N:0.5-S:0.4	N10E	平安時代末・鎌倉時代初期
溝27	0.96-1	0.77	0.2	溝状	1	N10E	平安時代末・鎌倉時代初期
溝28	N:0.8-0.88, W:0.63	N:0.62-W:0.5	0.3	溝状	N:1.2-W:0.63	N5E・N75W	平安時代後期
溝29	N:0.88-S:0.73	N:0.5-S:0.48	0.25-0.38	逆台形・二段	1.2<1.5>-0.75	N35E	平安時代後期・鎌倉時代初期
溝30	N:0.95-0.98, S:0.8-0.83	N:0.9-S:0.7-0.77	N:0.08, S:0.06-0.1	溝状	0.28-0.43	N25E	平安時代後期・鎌倉時代初期
溝31	N:0.85-S:0.8	N:0.8-S:0.73	0.07	溝状	0.25-0.5	N30E	平安時代後期・鎌倉時代初期
溝32 a	0.8-0.95	0.35-0.5	0.25-0.45	溝状	3-2.6	N75W	平安時代後期
溝32 b	0.8-0.95	0.5-0.6, 33L, 33R:0.35	0.15-0.3, 32L, 32R:0.5-0.6	溝状, 逆台形	3.2, 32L, 32R:1.38 (4.2)	N75°W・N8E	平安時代後期
溝33	0.8	0.47	0.33	溝状	0.8	N32E	平安時代後期・末
溝34	0.75	0.34	0.41	逆台形	1.3	N52°W	平安時代後期
溝35	0.7-0.75	0.4	0.35	逆台形	2.5-3.0	N15E	平安時代後期
溝36	0.7-0.8	0.43-0.45	0.3	逆台形	2.2-4	N10E	平安時代後期
溝37	0.77	0.63	0.14	溝状	1.5	-	平安時代後期
溝38	0.96, 1.25(一部)	E:0.82	0.43	溝状	-	N78°W	平安時代末
溝39	1-1.25	E:0.75-W:0.5	0.28-0.6	溝状・溝状	2.4-2.5	N75W	平安時代末・鎌倉時代初期
溝40	1.18	1	0.18	溝状	0.9	N70°W・N10E	鎌倉時代末
溝41	1.18-1.2	N:0.61-S:0.45	S:0.58-S:0.72	逆台形	1.45-1.6	N10E	鎌倉時代後半
溝42	1.12-1.25	N:0.9-S:0.8	S:0.45-0.3	溝状	1.3	N25E	鎌倉時代後半
溝43	0.95-1.05	0.5-0.7	0.2-0.5	逆台形・溝状	1-2, 上端3.9	N75W	鎌倉時代
溝44	1.0	0.91	0.14	溝状	0.45	N78°W	鎌倉時代
溝45	0.8-1.05	E:0-W:-0.15	0.9	逆台形	5-6.3<5-6>	N75°W	平安時代末
溝46	0.9	0.13	0.75	逆台形, 二段	1.85	N10E	鎌倉時代末
溝47	1.04-1.29	N:0.05-S:-0.1	1.25	逆台形, 二段	2.2-3<N:4.5-S:3.2>	N10E	鎌倉時代後半・末
溝48	1.1-1.25	N:0.4-0.49, S:0.55	N:0.8-S:0.55	逆台形	N:3.4, S:2.7	N10E	鎌倉時代後半・末
溝49	1-1.2	0.6	0.73-0.4	逆台形	(E:2.15-1.05) <3>	N78°W	鎌倉時代後半・末
溝50	0.9	-0.7	1.6	溝状	4.2 <4.4>	N30E	鎌倉時代末

遺構一覽表

遺構番号	上面高 m	底面高 m	深さ m	断面形	幅 m<測定値>	方向	時期
溝51	1.15	0.86-0.85	0.3	溝状	1.9 <2.1>	N10E	平安時代末~鎌倉時代前半
溝52	1.25-1.3	1.1	0.15	溝状	0.82	N75W	鎌倉時代
溝53	1-1.15	N-0.4-S-0.6	0.58-0.63	逆台形・楕円	1.7-1.6	N10E	鎌倉時代
溝54	0.86-0.90	N-0.74-S-0.67	0.25	溝状	0.7-0.5	N7E	鎌倉時代
溝55	1.3	1.05	0.25	溝状	N:0.8, S:2.5 <1.5>	N10E	室町時代前半
溝56	1.2	0.8-0.85	0.4	逆台形	1.50-1.2	N75W	室町時代前半
溝57	1.06	0.68	0.38	溝状	2	N15E	室町時代後半
溝58 a	1.25	0.98	0.3	溝状	0.5	N15E	室町時代
溝58 b	1.2-1.32	0.98-1.08	0.3	溝状	1.6	N75W	
溝59 a	1-1.45	N-0.08-S-0.2	1.2-1.55	逆台形	6.0-5.7	N15E	室町時代、江戸時代
溝59 b	0.9-1.0	0- -0.15	0.9-1	逆台形	-	N75W	
溝59 c	0.8-1	E:-0.3-W:-0.15	1.1	十字溝状	(3.5) <5>	-	
溝59 d	0-1.05	E:-0.35-W:-0.55	0.5-0.55, 1.06	逆台形・楕円	(1.3-2.5), 8	N80W	室町時代
溝60	N:1.2-1, S:0.8	N:0.9-0.75, S:0.5	0.3-0.15	溝状	1.1-0.8	N15E	室町時代
溝61	0.8-0.9	N-0.8, S-0.6	N:0.2, S:0.2-0.3	溝状	<1.9-1.6>	N15E	室町時代
溝62	0.85-0.9	0.65	0.3-0.25	溝状、逆台形	2.4 <1.2>	N15E	室町時代
溝63	1.45-1.5	N0.8-S-0.5	0.65	逆台形	2.05	N15E	江戸時代
溝64 a	1.45	1.03	0.2	溝状	1.7-1.6	N15E	江戸時代
溝64 b	1.3	N-0.95-S-0.5	0.35-0.5	溝状	1.9	N15E	江戸時代
溝65	1.2	0.31	0.86	逆台形	1.75	-	江戸時代
遺構番号	上面高 m	下面高 m	深さ m	断面形	幅 m<測定値>	長さ m	時期
小溝群 1-1	1.06	1.03	0.03	溝状	0.2	1.05	
小溝群 1-2	1.1	1.04	0.06	溝状	0.2	1.7	平安時代後期
小溝群 1-3	1.06	1.01	0.05	溝状	0.2	0.8	
小溝群 1-4	1.06	1	0.06	溝状	0.25	1.3	
小溝群 1-5	1.01	1	-	溝状	0.25	1.2	
小溝群 1-6	0.9-1.03	1	0.03	溝状	0.25	2.6(1.28+1.32)	
小溝群 1-7	-	0.85	-	溝状	0.2	0.9	
小溝群 1-8	-	-	-	溝状	0.2	0.7	
小溝群 1-9	1	0.98	0.02	溝状	0.25	0.7	
小溝群 1-10	1.03	0.95	0.08	溝状	0.2	3.7	
小溝群 1-11	0.99	0.96	0.03	溝状	0.2	1.5	
小溝群 1-12	1.11	1.01	0.1	溝状	0.12~0.23	1.5	
小溝群 1-13	-	-	-	溝状	0.16~0.2	0.64	
小溝群 1-14	0.98	0.93	0.05	溝状	0.3	2.26	
小溝群 2-1	E:W-0.8, S:0.8- N:0.93	W-0.76-E:0.72, N:0.87, S:0.73	W:0.04-E:0.08 SN:0.06-0.07	溝状	0.3-0.25	E:W:8.5(3.4+3.25 + 0.1), SN:6.5	
小溝群 2-2	0.79	0.74	0.05	溝状	0.4	1.65	
小溝群 2-3	0.8	0.73	0.07	溝状	0.4	1.65	
小溝群 2-4	E:0.8-W:0.78	E:0.77-W:0.74	0.03-0.04	溝状	E:0.25-W:0.4	0.68	
小溝群 2-5	0.8	0.73	0.07	溝状	0.35	1.16	
小溝群 2-6	0.8	0.73	0.07	溝状	0.2-0.3	3.6	
小溝群 3-1	0.86	0.77	0.09	溝状	0.2	4.3	
小溝群 3-2	0.92	0.86	0.06	溝状	0.2-0.4	7.1	
小溝群 3-3	0.86	0.75	0.11	溝状	0.45	2.9	
小溝群 3-4	0.78	0.7	0.08	溝状	0.4	3.8	
小溝群 3-5	0.65	0.6	0.05	溝状	0.36	1.3	
小溝群 3-6	0.7	0.66	0.04	溝状	0.1-0.2	2	
小溝群 3-7	0.7	0.68	0.02	溝状	0.2	2.2	
小溝群 3-8	0.79	0.7	0.09	溝状	0.28-0.48	5.24	
小溝群 3-9	0.7	0.63	0.07	溝状	0.3	2.5	
小溝群 3-10	0.75	0.67	0.08	溝状	0.4	4	
小溝群 4-1	0.76	0.73	0.03	溝状	0.2	2.7	
小溝群 4-2	0.7	0.63	0.07	溝状	0.4	9.1	
小溝群 4-3	0.73	0.56	0.17	溝状	0.35	6.5	
小溝群 4-4	0.73	0.66	0.08	溝状	0.4	3.9	
小溝群 4-5	0.63-0.6	0.55	0.05	溝状	0.2	1.9	
小溝群 4-6	0.65-0.63	0.55	0.1	溝状	0.3	1.9	
小溝群 4-7	0.8	0.65	0.15	溝状	0.35	9.9	
小溝群 4-8	0.8	0.65	0.15	溝状	0.25	2	
小溝群 4-9	0.7	0.65	0.05	溝状	0.2	5.4	
小溝群 4-10	0.68	0.62	0.06	溝状	0.2	6.5	
小溝群 5-1	0.66	0.63	0.03	溝状	0.3	3.1	
小溝群 5-2	0.65	0.57	0.08	溝状	0.4	1.5	
小溝群 5-3	0.65	0.6	0.05	溝状	0.4	3.2	
小溝群 5-4	0.66	0.61	0.05	溝状	0.3	1.5	
小溝群 5-5	0.67	0.62	0.05	溝状	0.4	3.2	
小溝群 5-6	0.73	0.63	0.1	溝状	0.5-0.4	6.7	
小溝群 5-7	0.71	0.62	0.09	溝状	0.3	1.4	
小溝群 5-8	0.69	0.64	0.05	溝状	0.4	1	

c. 畦畔

遺構番号	上面高 m	下面高 m	高さ m	幅 m <復元値>	方向	形成層
畦畔 1 a (古)	0.8	0.66	0.14	1.9, <25m前後>	NE-SW	<9層>
畦畔 1 b (古)	0.74-0.78	0.7-0.73	0.02-0.05	3-4	NE-SW	<9層>
畦畔 1 a	0.8-0.92	0.7-0.83	0.06-0.17	上面22, 下面28	NE-SW	<9層>
畦畔 1 b	0.85-0.9	0.72-0.78	0.07-0.18	上面2, 下面3	NE-SW	<9層>
畦畔 1 c	W:0.68-0.78	0.57-0.7	0.08-0.16	上面1, 下面1.4-1.45	EW	<9層>
畦畔 2	0.85-0.98	0.75-0.9	0.07-0.1	上面2-4.3, 下面4.4-4.5	NE-SW	<8層> ><9層>
畦畔 3	0.85-0.88	0.68	0.2	0.8以上	EW	<9層>
畦畔 4	0.63	E:0.6-W:0.53	E:0.03-W:0.1	上面0.1, 下面25	NE-SW	<9層>
畦畔 5	1.03	0.85-0.9	0.12-0.18	上面0.45, 下面1.3	EW	<8層>
畦畔 6 a	0.8	0.69-0.65	0.15	上面2.3, 下面2.9	NE-SW	<9層>
畦畔 6 b	0.74-0.8	E:0.6-0.63, W:0.7	0.1-0.2	上面1.6, 下面2.2	NE-SW	<9層>
畦畔 7	0.7	E:0.58, W:0.56	0.12-0.14	上面1.55, 下面1.7-1.8	NE-SW	<9層>
畦畔 8 a	0.8-0.7	N:0.6, S:0.55	N:0.2-S:0.25	上面1.6-1.75, 下面2	NW-SE	<9層>
畦畔 8 b	0.6	N:0.55, S:0.5	0.1-0.05	1.5	NW-SE	<9層>
畦畔 8 c	0.5	N:0.4-0.35, S:0.35	0.14-0.09	上面1.55, 下面1.85	NW-SE	<9層>
畦畔 9 a	0.6	0.48	0.12	上面0.45, 下面0.75	NW-SE	<9層>
畦畔 9 b	0.59	0.48	0.1	上面0.2, 下面0.4<0.3>	NW-SE	<9層>
畦畔10	E:0.6-W:0.52	E:0.55-W:0.5	E:0.05-W:0.02	上面0.15(E)-0.2(W), 下面0.3-0.4(E), 0.25(W)	NW-SE	<8層>
畦畔11 a	N:0.45-S:0.32	N:0.38-S:0.23	0.07-0.13	上面0.3-0.75(N), 下面0.6-0.9(N)	SN	<9層>
畦畔11 b	0.29	0.25	0.04	1	SN	<9層>
畦畔12 a	0.5	E:0.4-0.45	0.1-0.15	上面0.4, 下面0.6	SN	<9層>
畦畔12 b	0.45	W:0.42	0.03	上面1.1, 下面2	SN	<9層>
畦畔13	0.7-0.83	0.7-0.75	0.03-0.1	上面0.3-0.5, 下面0.5-0.7	EW, SN	<7層>
畦畔14	N:0.57-S:0.52	N:0.53-S:0.48	0.04	上面0.5-0.65, 下面0.6-1.0(一部); 上面2.4, 下面2.9	EW, SN	<7層>
畦畔15	0.5	0.4-0.42	0.08-0.1	上面0.3, 下面0.45	EW	<7層>
畦畔16	0.69	0.62	0.07	上面0.8, 下面1.2	SN	<7層>
円形高まり 1	0.85	0.58-0.63	0.25-0.27	上面径3.85, 下面径4.5	-	<9層>
円形高まり 2	0.57-0.59	0.5	0.07-0.09	上面径4.8, 下面径5.5	-	<9層>

